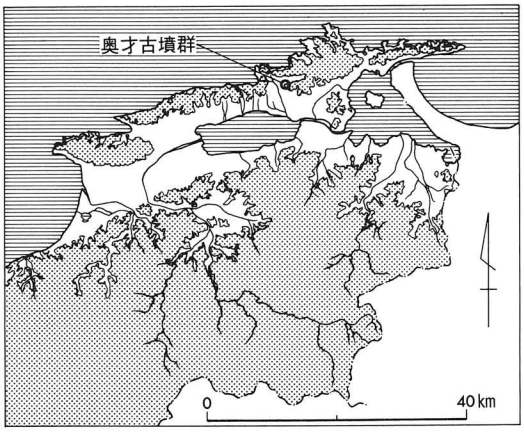
奥才古墳群

1985年3月

島根県　鹿島町教育委員会

おくさい

奥才古墳群

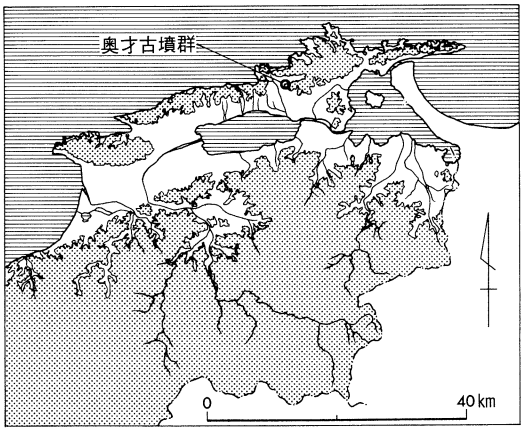


1985年3月

鹿島町教育委員会

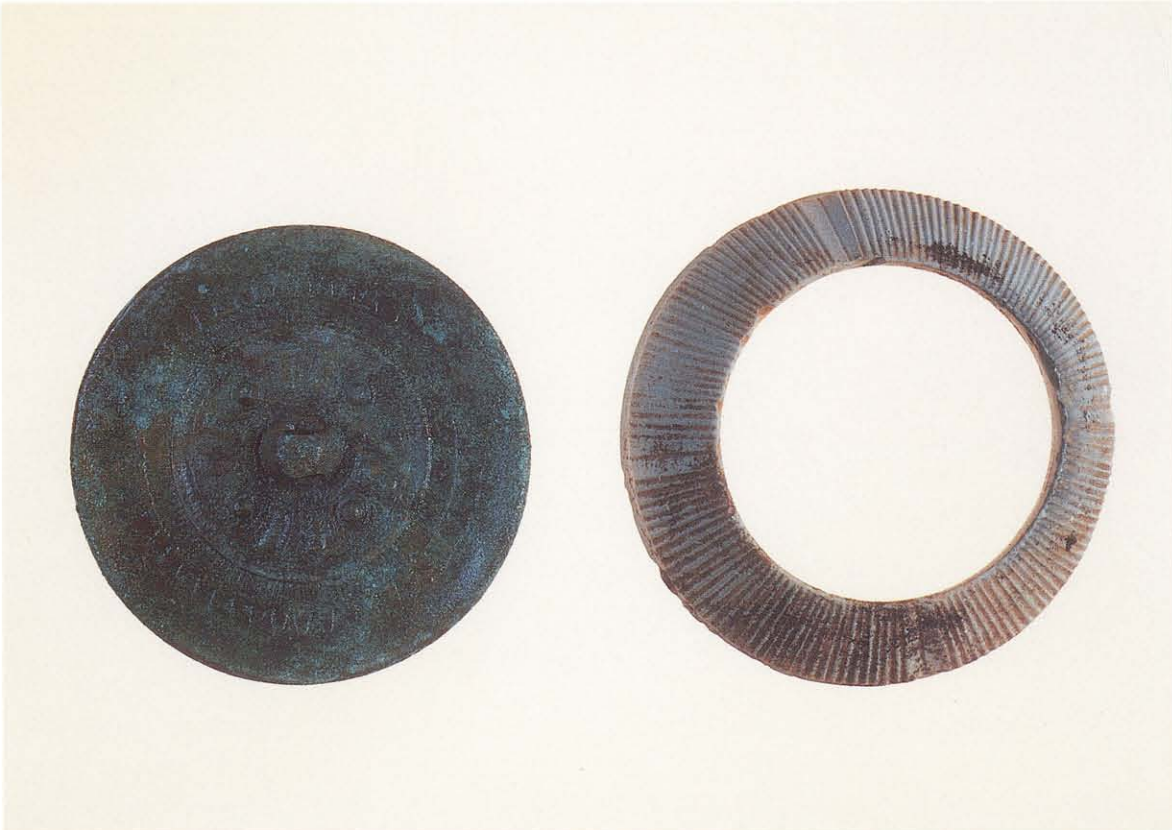
おく　さい

奥才古墳群



1985年 3 月

鹿島町教育委員会



巻頭図版　上；14号墳第１主体内行花文鏡・方格渦文鏡・紡錘車形石製品、下；34号墳捩文鏡・石釧

序

この報告書は、鹿島町が昭和56年度から58年度まで3箇年にわたって実施した奥才古墳群発掘調査の記録であります。

鹿島町には、宝庫といわれるほど数多くの文化財があります。縄文時代の史跡佐太講武貝塚、弥生時代の古浦砂丘遺跡をはじめとして、数多くの遺跡・古墳は、郷土の未来を考える上での指針となると同時に、町民の誇りとするところでもあります。

今回の発掘調査は、鹿島町土地開発公社が住宅団地を造成するに先立って実施しましたが、当初の予想を全く覆す大規模な古墳群であることなど重大な発見が相次ぎ、広く各界の注目を集めるところとなりました。こうした紆余曲折を経た調査も、ここに発掘調査報告書を刊行することによって、ようやく一段落の運びとなりました。奥才古墳群は、当鹿島町ばかりでなく、出雲地方の古代史を解き明かしていく上で、きわめて貴重な資料を提供したものといえましょう。調査にあたっては、調査指導者団の先生方の度重なるご指導をいただきましたが、住宅団地造成という事業の性格から、この遺跡を原形で保存することができなかったことは残念でありました。しかし、鹿島町土地開発公社のご理解を得、また関係者の尽力により一部を緑地として保存することができましたことは、ささやかながらも救われた感がいたします。

この報告書が各方面で活用され、多少とも文化財に対する理解が深まるならば、これにまさるよろこびはありません。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力を賜りました関係諸機関、各位に厚くお礼申し上げて、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和60年3月

鹿島町教育委員会

教育長　加　納　益　雄

例　　言

1．本書は、島根県八束郡鹿島町大字名分（みょうぶん）に所在する奥才古墳群の発掘調査報告書である。

2．調査は、大字名分地内にある丘陵上に計画された才ノ丘住宅団地造成にともない、鹿島町土地開発公社の委託を受けた鹿島町教育委員会が、島根県教育委員会の指導・協力のもとに行った。

3．奥才古墳群は、総数約50基の古墳群と考えられるが、このうち最終的に26基が発掘調査の対象となり、昭和56年８月から昭和58年８月まで、３箇年度にわたって発掘調査を実施した。

4．発掘調査にかかる経費は鹿島町土地開発公社が、調査後の整理および、報告書刊行の経費は鹿島町が負担した。

5．調査にあたっては、木村静夫氏など地元の方々をはじめ、関係諸機関の献身的な協力をいただいた。記して謝意を表したい。

6．調査実施にあたっては、国土座標を基準として10×10ｍを１単位とする方眼を設定した。よって挿図中の矢印は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。したがって、磁北より７°12′、真北より0°32′東の方向を示している。ただし、第134図のみは矢印は磁北を示している。

7．本書の編集・執筆は、調査員、調査補助員、事務局員が行い、文責は目次に記すとおりである。また、上記以外にも下記の方々にも原稿執筆を依頼し、ご寄稿いただいた。

（敬称略、順不同）

井上晃孝（鳥取大学医学部法医学教室助教授）

沢田正昭（奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長）

三島欣二（島根県立松江北高等学校教諭）

8．掲載図面の縮尺は、等高線図1/200、遺構図1/40、土層図1/100、出土土器1/3、玉、鉄器1/2を原則としているが、これに従えないものもあり、それについては、その都度縮尺を明記するようにした。

9．出土遺構・遺物の整理、実測、製図、写真撮影等は調査員、調査補助員が行い、X線写真については、財団法人元興寺文化財研究所、島根県立工業技術センター、島根医科大学医学部付属病院放射線科で撮影していただいたものである。

目　　次

第１章　調査に至る経緯 …… 曽田 …… 1

第２章　調査の経過 …… 2

　第１節　調 査 経 過 …… 三宅 …… 2

　第２節　調 査 体 制 …… 松本 …… 6

第３章　位置と歴史的環境 …… 赤沢 …… 8

第４章　調査の概要 …… 12

　第１節　支 群 構 成 …… 三宅 …… 12

　第２節　第 Ⅲ 支 群 …… 15

　　(1)　１号墳 …… 赤沢 …… 15

　　(2)　２号墳 …… 〃 …… 28

　　(3)　３号墳 …… 〃 …… 28

　　(4)　４号墳 …… 〃 …… 31

　　(5)　５号墳 …… 三宅 …… 34

　　(6)　６号墳 …… 〃 …… 39

　　(7)　７号墳 …… 広江 …… 40

　　(8)　28号墳 …… 赤沢 …… 41

　　(9)　８号墳 …… 広江 …… 42

　　(10)　９号墳 …… 道上・広江 …… 46

　　(11)　10号墳 …… 〃・〃 …… 47

　　(12)　竪穴住居状遺構 …… 三宅 …… 51

　　(13)　第Ⅲ支群出土遺物 …… 赤沢 …… 52

　第３節　第 Ⅳ 支 群 …… 59

　　(1)　11号墳 …… 広江 …… 59

　　(2)　29号墳 …… 赤沢 …… 62

　　(3)　階段状遺構 …… 〃 …… 64

　　(4)　30号墳 …… 三宅 …… 68

　　(5)　38号墳 …… 広江 …… 68

　　(6)　12号墳 …… 〃 …… 73

　　(7)　31号墳 …… 〃 …… 80

(8) 第Ⅳ支群出土遺物 …… 赤沢 …… 82
第4節 第Ⅴ支群 …… 87
(1) 39号墳とその周辺遺構 …… 三宅 …… 87
(2) 39号墳 …… 〃 …… 87
(3) 甕棺墓 …… 〃 …… 93
(4) 土壙1 …… 広江 …… 94
(5) 13号墳 …… 三宅 …… 97
(6) 炭化物土壙 …… 赤沢 ……105
(7) 14号墳 …… 三宅 ……106
(8) 石蓋土壙 …… 〃 ……124
(9) 33号墳 …… 〃 ……128
(10) 34号墳 …… 〃 ……130
(11) 35号墳 …… 広江 ……136
(12) 16号墳 …… 赤沢 ……140
(13) 15号墳 …… 〃 ……142
(14) 第Ⅴ支群出土遺物 …… 〃 ……143
第5節 第Ⅵ支群 …… 145
(1) 17号墳 …… 道上・赤沢 ……148
(2) 18号墳 …… 〃・〃 ……155
(3) 第Ⅵ支群出土遺物 …… 赤沢 ……158
第6節 第Ⅶ支群 …… 161
(1) 32号墳 …… 赤沢 ……162
(2) 43号墳 …… 〃 ……165
(3) 第Ⅶ支群出土遺物 …… 〃 ……165
第7節 第Ⅰ支群 …… 三宅 ……167
(1) 19号墳 …… 〃 ……168
第5章 小 結 …… 三宅・広江・赤沢 ……169
第6章 特別寄稿 ……181
第1節 出土人骨 …… 井上晃孝 ……181
第2節 出土鏡の非破壊分析 …… 沢田正昭 ……187
第3節 奥才古墳群の石材について …… 三島欣二 ……190

挿図目次

第１図　奥才古墳群とその周辺の遺跡 …… 8
第２図　佐太前遺跡出土遺物実測図 …… 9
第３図　志谷奥遺跡銅鐸・銅剣出土状況復元 …… 9
第４図　名分丸山古墳群測量図 …… 10
第５図　講武岩屋古墳実測図 …… 10
第６図　講武地区条里制地割図 …… 11
第７図　奥才古墳群配置図 …… 13
第８図　１・２号墳墳丘測量図 …… 14
第９図　１号墳土層図 …… 15
第10図　１号墳竪穴式石室実測図 …… 17・18
第11図　１号墳石室内遺物出土状態実測図 …… 19
第12図　１号墳埴輪出土状態実測図 …… 20
第13図　１号墳溝内遺物出土状態実測図 …… 21
第14図　１号墳石室内出土遺物実測図 …… 23
第15図　１号墳出土埴輪実測図(1) …… 24
第16図　１号墳出土埴輪実測図(2) …… 25
第17図　１号墳北側溝出土須恵器実測図 …… 26
第18図　３号墳墳丘測量図 …… 29
第19図　４・５号墳墳丘測量図 …… 30
第20図　４号墳土層図 …… 31
第21図　４号墳主体部実測図 …… 32
第22図　４号墳西溝底土壙実測図 …… 32
第23図　４号墳階段状遺構実測図 …… 33
第24図　５号墳第１主体実測図 …… 34
第25図　５号墳第１主体出土遺物実測図 …… 35
第26図　５号墳第２主体実測図 …… 35
第27図　５号墳階段状遺構実測図 …… 36
第28図　５・６号墳土層図 …… 37
第29図　６・７・28号墳墳丘測量図 …… 38

第30図　6号墳主体部実測図 …… 39
第31図　7号墳土層図 …… 39
第32図　7号墳主体部実測図 …… 40
第33図　28号墳土層図 …… 41
第34図　8号墳礫出土状態実測図 …… 42
第35図　8号墳墳丘測量図 …… 43
第36図　8号墳土層図 …… 43
第37図　9・10号墳墳丘測量図 …… 44
第38図　9・10号墳土層図 …… 45
第39図　9号墳斜面土師質土器出土状態実測図 …… 46
第40図　9号墳斜面出土遺物実測図 …… 47
第41図　10号墳古墓実測図 …… 48
第42図　10号墳古墓出土五輪塔実測図 …… 48
第43図　10号墳第1・第2主体実測図 …… 49
第44図　10号墳出土遺物実測図 …… 50
第45図　10号墳第3主体実測図 …… 50
第46図　竪穴住居状遺構実測図 …… 51
第47図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(1) …… 54
第48図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(2) …… 55
第49図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(3) …… 56
第50図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(4) …… 56
第51図　11・29号墳土層図 …… 59
第52図　11・29号墳墳丘測量図 …… 60
第53図　11号墳主体部実測図 …… 61
第54図　11号墳主体部出土遺物実測図 …… 62
第55図　29号墳第1主体実測図 …… 63
第56図　29号墳第2主体実測図 …… 64
第57図　11号墳北東階段状遺構実測図 …… 65
第58図　29号墳西階段状遺構実測図 …… 66
第59図　30・38・12号墳墳丘測量図 …… 67
第60図　30号墳主体部実測図 …… 68

第61図　30・38号墳溝実測図 …… 69
第62図　38号墳溝内遺物出土状態実測図 …… 70
第63図　38号墳溝内出土遺物実測図 …… 71
第64図　12・31号墳土層図 …… 72
第65図　12号墳第１主体実測図 …… 74
第66図　12号墳第２・第３主体実測図 …… 75
第67図　12号墳第３主体遺物出土状態実測図 …… 76
第68図　12号墳第１・第３主体出土遺物実測図 …… 77
第69図　12号墳土師器壺出土状態実測図 …… 78
第70図　12号墳１号壺実測図 …… 79
第71図　12号墳２号壺実測図 …… 80
第72図　31号墳墳丘測量図 …… 81
第73図　31号墳主体部実測図 …… 81
第74図　第Ⅳ支群出土遺物実測図(1) …… 83
第75図　第Ⅳ支群出土遺物実測図(2) …… 84
第76図　39号墳とその周辺遺構実測図 …… 87
第77図　39号墳第１・第２主体実測図 …… 88
第78図　39・13・14号墳墳丘測量図 …… 89・90
第79図　連結甕出土状態実測図 …… 92
第80図　連結甕実測図 …… 93
第81図　土壙１実測図 …… 94
第82図　土壙１出土遺物実測図 …… 94
第83図　39・13・14号墳土層図 …… 95・96
第84図　13号墳第１主体実測図 …… 99・100
第85図　13号墳第２主体実測図 …… 101・102
第86図　13号墳土師器壺出土状態実測図 …… 103
第87図　13号墳土師器壺実測図 …… 104
第88図　13号墳出土石器実測図 …… 105
第89図　炭化物土壙実測図 …… 105
第90図　14号墳礫出土状態実測図 …… 107・108
第91図　14号墳第１主体実測図 …… 111・112

第92図　14号墳第１主体遺物出土状態実測図 …… 113
第93図　14号墳第１主体石棺外出土遺物実測図(1) …… 114
第94図　14号墳第１主体石棺外出土遺物実測図(2) …… 116
第95図　14号墳第１主体石棺内出土遺物実測図 …… 118
第96図　14号墳第２主体実測図 …… 121・122
第97図　14号墳第２主体出土遺物実測図 …… 123
第98図　石蓋土壙実測図 …… 125
第99図　33・34・35号墳墳丘測量図 …… 126
第100図　33・34号墳土層図 …… 127
第101図　33号墳主体部実測図 …… 129
第102図　34号墳土師器および土師器内遺物出土状態実測図 …… 131・132
第103図　34号墳土師器壺実測図 …… 134
第104図　34号墳土師器壺内出土遺物実測図 …… 135
第105図　35号墳土層図 …… 136
第106図　35号墳主体部実測図 …… 137
第107図　15・16号墳調査前墳丘測量図 …… 138
第108図　16号墳調査終了時墳丘測量図 …… 139
第109図　16号墳土層図 …… 140
第110図　16号墳墳裾主体部実測図 …… 140
第111図　16号墳溝状遺構実測図 …… 141
第112図　16号墳土壙１実測図 …… 142
第113図　16号墳土壙２実測図 …… 142
第114図　第Ⅴ支群出土遺物実測図(1) …… 143
第115図　第Ⅴ支群出土遺物実測図(2) …… 144
第116図　第Ⅵ支群地形測量図 …… 146
第117図　17・18号墳墳丘測量図 …… 147
第118図　17号墳第１主体出土遺物実測図 …… 148
第119図　17号墳第１主体実測図 …… 149・150
第120図　17号墳第１主体石棺材加工痕拓影図 …… 151
第121図　17・18号墳土層図 …… 152
第122図　17号墳第２主体実測図 …… 153

第123図　17号墳第３主体実測図 …… 154
第124図　18号墳主体部実測図 …… 155
第125図　18号墳主体部出土臼玉実測図 …… 156
第126図　18号墳主体部出土臼玉法量分布図 …… 156
第127図　第Ⅵ支群出土遺物実測図(1) …… 159
第128図　第Ⅵ支群出土遺物実測図(2) …… 160
第129図　32・43号墳墳丘測量図 …… 161
第130図　32・43号墳土層図 …… 161
第131図　32号墳主体部実測図 …… 163
第132図　32号墳主体部出土遺物実測図 …… 163
第133図　32号墳石棺材加工痕拓影図 …… 164
第134図　第Ⅶ支群出土遺物実測図 …… 166
第135図　19号墳墳丘測量図 …… 168
第136図　19号墳土層図 …… 168
第137図　奥才13・14号墳蓋石比較図 …… 169
第138図　奥才古墳群墳丘・主体部相関図 …… 171
第139図　奥才古墳群主体部頭位一覧図 …… 172
第140図　17号墳第１主体部出土頭蓋骨図 …… 183
第141図　内行花文鏡のＸ線分析 …… 189

表　目　次

第１表　１号墳出土土器観察表 …… 27
第２表　第Ⅲ支群 遺構に伴わない遺物観察表(1) …… 57
第３表　第Ⅲ支群 遺構に伴わない遺物観察表(2) …… 58
第４表　第Ⅳ支群 遺構に伴わない遺物観察表(1) …… 85
第５表　第Ⅳ支群 遺構に伴わない遺物観察表(2) …… 86
第６表　18号墳出土臼玉計測表 …… 157
第７表　奥才古墳群遺構一覧表(1) …… 176
第８表　奥才古墳群遺構一覧表(2) …… 177
第９表　残存歯牙とその歯列 …… 184
第10表　性別・年齢別の身長 …… 185
第11表　発光分光分析による多元素同時測定 …… 186
第12表　内行花文鏡のＸ線分析 …… 188
第13表　Ｘ線強度比と回帰直線 …… 189
第14表　参考資料２面の組成とＸ線分析値 …… 189
第15表　１号墳石室石材一覧表 …… 190
第16表　箱式石棺石材一覧表(1) …… 190
第17表　箱式石棺石材一覧表(2) …… 191
第18表　主体部床面の円礫一覧表 …… 191
第19表　34号墳土師器壺中の礫質一覧表 …… 192

図版目次

巻頭ＰＬ．１　… 14号墳第１主体内行花文鏡・方格渦文鏡・紡錘車形石製品、34号墳捩文鏡・石釧

ＰＬ．１ …… 航空写真　奥才古墳群周辺

ＰＬ．２ …… １・２・３・４・５・６・７・８・28号墳遠景、１・２・３号墳近景

ＰＬ．３ …… １号墳全景、１号墳周溝内須恵器出土状態

ＰＬ．４ …… １号墳竪穴式石室、１号墳竪穴式石室内遺物出土状態

ＰＬ．５ …… １号墳竪穴式石室構築状態①、②、③

ＰＬ．６ …… ４・５・６・７・８・28号墳遠景調査前

４・５・６・７・８・９・10・28号墳遠景調査後

ＰＬ．７ …… ４号墳全景、４号墳主体部

ＰＬ．８ …… ５号墳第１・第２主体部、階段状遺構

ＰＬ．９ …… ６号墳墳丘土層断面、６号墳主体部

ＰＬ．10 …… 28号墳全景、７号墳主体部

ＰＬ．11 …… ９号墳全景、９号墳遺物出土状態

ＰＬ．12 …… 10号墳全景調査前、10号墳全景調査後

ＰＬ．13 …… 10号墳遺物出土状態五輪塔、10号墳古墓・第１主体部

ＰＬ．14 …… 10号墳古墓遺物出土状態鉄器・歯牙、10号墳第２主体部

ＰＬ．15 …… 10号墳第３主体部、竪穴住居状遺構

ＰＬ．16 …… 11・29・30・38号墳遠景調査前、11・29・30・38・12号墳遠景調査後

ＰＬ．17 …… 11号墳主体部、11号墳主体部遺物出土状態

ＰＬ．18 …… 11号墳主体部・階段状遺構、階段状遺構

ＰＬ．19 …… 11号墳・29号墳間周溝内土層断面、29号墳上階段状遺構

ＰＬ．20 …… 29号墳第１・第２主体部、29号墳第１主体部

ＰＬ．21 …… 30号墳全景調査後、30号墳全景

ＰＬ．22 …… 38号墳全景調査後、38号墳周溝内遺物出土状態

ＰＬ．23 …… 12号墳全景調査前、12号墳第１・第２・第３主体部

ＰＬ．24 …… 12号墳第１主体部、12号墳第１主体部礫除去後

ＰＬ．25 …… 12号墳第１主体部遺物出土状態（刀子）、12号墳第１主体部遺物出土状態（鎌）

12号墳第１主体部礫床断面

ＰＬ．26 …… 12号墳壺棺、12号墳第２・第３主体部

ＰＬ.27 …… 12号墳第３主体部、12号墳第３主体部遺物出土状態
ＰＬ.28 …… 31号墳全景調査後、31号墳主体部
ＰＬ.29 …… 13・14号墳遠景
ＰＬ.30 …… 39号墳全景、39号墳第１主体部
ＰＬ.31 …… 連結甕出土状態、連結甕
ＰＬ.32 …… 13号墳全景、13号墳第２主体部上石材出土状態
ＰＬ.33 …… 13号墳第１・第２主体部
ＰＬ.34 …… 13号墳第１・第２主体部
ＰＬ.35 …… 13号墳第１主体部、13号墳第２主体部
ＰＬ.36 …… 13号墳墳丘上遺物出土状態土師器
ＰＬ.37 …… 13号墳墳裾敲石等出土状態、13・14号墳間土壙
ＰＬ.38 …… 13・14・33・34・35号墳遠景調査後、14号墳全景調査前
ＰＬ.39 …… 14号墳第１・第２主体部、14号墳第１主体部
ＰＬ.40 …… 14号墳第１主体部、14号墳第１主体部遺物出土状態
ＰＬ.41 …… 14号墳第１主体部副室、14号墳第１主体部副室断面
ＰＬ.42 …… 14号墳第１主体部遺物出土状態素環頭大刀・鉄槍、剣
ＰＬ.43 …… 14号墳第２主体部
ＰＬ.44 …… 14号墳第２主体部遺物出土状態剣・鉄鏃、14号墳石蓋土壙
ＰＬ.45 …… 33・34・35号墳遠景調査前、33・34・35号墳調査後
ＰＬ.46 …… 33号墳主体部上面、33号墳主体部
ＰＬ.47 …… 34号墳土師器出土状態、34号墳土師器内礫出土状態
ＰＬ.48 …… 34号墳土師器内遺物出土状態鏡・石釧、34号墳土師器内遺物出土状態勾玉
ＰＬ.49 …… 35号墳主体部、16号墳全景
ＰＬ.50 …… 16号墳墳裾主体部、16号墳土壙１
ＰＬ.51 …… 17号墳全景調査前、17号墳全景調査後
ＰＬ.52 …… 17号墳全景、17号墳第１主体部
ＰＬ.53 …… 17号墳第１主体部、17号墳第１主体部石棺内人骨・刀子出土状態
ＰＬ.54 …… 17号墳第１主体部石材加工痕・第１主体部石材接合部
ＰＬ.55 …… 17号墳第２主体部墓標出土状態、17号墳第２主体部
ＰＬ.56 …… 17号墳第３主体部、18号墳全景調査前
ＰＬ.57 …… 18号墳全景調査後、18号墳主体部

ＰＬ.58 …… Ｆ区遺物出土状態須恵器・棗玉、Ｋ区全景
ＰＬ.59 …… 32号墳全景調査前、32号墳全景調査風景
ＰＬ.60 …… 32号墳全景調査後、32号墳主体部
ＰＬ.61 …… 32号墳主体部遺物出土状態鉄剣、32号墳墳丘上遺物出土状態須恵器
ＰＬ.62 …… 19号墳遠景、19号墳墳裾
ＰＬ.63 …… １号墳主体部出土遺物　刀・刀子・管玉
ＰＬ.64 …… １号墳主体部出土遺物　須恵器蓋杯
ＰＬ.65 …… １号墳出土遺物　埴輪
ＰＬ.66 …… １号墳出土遺物　埴輪・須恵器甕
ＰＬ.67 …… ５・７・９・10号墳出土遺物
ＰＬ.68 …… 38・11号墳出土遺物
ＰＬ.69 …… 12・39・32号墳出土遺物
ＰＬ.70 …… 12号墳出土土師器壷
ＰＬ.71 …… 13号墳出土土師器壺
ＰＬ.72 …… 14号墳第１主体部棺内出土遺物
ＰＬ.73 …… 14号墳第１・第２主体部出土遺物
ＰＬ.74 …… 14号墳第１主体部出土　剣、大刀、鉄槍（Ｘ線、細部）
ＰＬ.75 …… 34号墳出土土師器壺
ＰＬ.76 …… 34号墳出土遺物
ＰＬ.77 …… 17・18号墳、第Ⅵ支群出土遺物
ＰＬ.78 …… 第Ⅲ支群出土遺物
ＰＬ.79 …… 第Ⅳ支群出土遺物
ＰＬ.80 …… 第Ⅴ・Ⅵ支群出土遺物
ＰＬ.81 …… 第Ⅴ・Ⅶ支群出土遺物
ＰＬ.82 …… 14号墳第１主体部、17号墳第１主体部出土人骨

第１章　調査に至る経緯

鹿島町土地開発公社は、優良住宅用地の確保により地域の発展と町民の生活環境の向上をはかるために、鹿島町大字名分地内で住宅団地造成事業を計画し、島根県知事あてに開発協議書（昭和56年２月１日付）を提出した。当時、鹿島町文化財包蔵地台帳には、この造成予定区域内にいわゆる周知の埋蔵文化財の記載はなかった。しかし、３月19日の島根県土地利用調整会議を経て、同月24日付「土地利用調整会議にかかる開発事業と埋蔵文化財保護との調整について」で、島根県教育委員会から事前の遺跡分布調査実施の指示があった。

一方、数年来同町講武平野の遺跡調査を行って来た島根大学考古学研究会も注目するところとなり、３月30日、「佐太・講武地区における遺跡目録」を本町教育長に提出している。

そこで、鹿島町教育委員会は４月７日、県教委に依頼をして町土地開発公社の立会いのもとに遺跡分布調査を実施した。その結果、開発予定区域内に古墳４基と砦跡（後に古墳と判明）２箇所、区域外に古墳３基を発見し、町土地開発公社は遺跡発見通知書（４月13日付）を文化庁に提出した。

以後、関係者間で度々協議を重ね、５月７日に県教委の指導のもと、鹿島町・町土地開発公社・町教委の４者で取り扱いについての協議を行い、開発事業に先立って調査を実施することで合意に達した。次いで町土地開発公社は埋蔵文化財発掘通知書（５月14日付）を、町教委は埋蔵文化財発掘調査通知書（７月１日付）を文化庁に提出し、７月25日には、町と町土地開発公社の間で、調査費は事業者負担という埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

７月下旬には鹿島町文化財保護審議会の意見を聞き、８月４日の調査指導者の会では調査計画、調査方法について指導を受け、８月５日に調査員１名で発掘調査に着手した。

調査開始後も立木伐採が進むにつれて新たに古墳が発見されてきたが、最終的には開発予定区域内で古墳30基中26基及び横穴推定地等を、２箇年をかけて発掘調査するに至った。また、事業者町土地開発公社の理解を得て、２・３・15号墳の３基を現状保存、19号墳１基を一部保存している。

第2章　調査の経過

第1節　調査経過

本遺跡の調査は、1981年8月4日から1983年8月4日まで、丸2年をかけて実施した。

調査を実施するにあたって、調査対象地区全域に国土座標を基準とする10×10mを1単位とした方眼を設定した。方眼の設定は次の順序で行った。まず丘陵中央部の北辺に沿わせて、基準となる東西軸を設定し、その線上に、西から東方へ10m間隔で0・1・2……33と数字を付した。次に東西軸の0を基点として南に延びる南北軸を設定し、基点から南へ10m間隔でA・B・C……Zと付した。そして各地点から基準線に対し直角に軸線を下ろし、その交点をもってグリッドの呼称とした。

調査は伐採の終了した地域内の墳丘測量を縮尺100分の1で行い、その後、墳丘中央で十字に交差するように土層観察用畦を設定し、遺構の検出に努めた。

1981年度調査　この年の調査は道上康仁を担当者として、8月から'82年3月末まで実施した。9・10・17・18号墳の計4基を発掘した。9号墳からは主体部を検出し得なかったが、10号墳からは主体部3と古墓1、17号墳からは主体部2、18号墳からは土壙1を検出した。

1982年度調査　この年の調査は三宅博士を担当者として再開したが、再開にあたり鹿島町土地開発公社から、工事の関係上9月下旬までに工事対象地区内の全調査を完了してほしいとの要請があった。同地区内には20基以上の未調査の古墳があり、さらに横穴の存在も予測されたため、要請に応えるのはとうてい不可能と考えられたが、調査は4月12日から再開された。調査はまず工事再開の際に最初に消滅すると考えられる17号墳の精査を行い、新たに第3主体を検出した。

その後開発公社より13・14号墳から調査を行うよう要請があった。当初の計画では、第Ⅳ・第Ⅴ支群の削平で得られる土量によって谷間をうずめ、造成を行うことになっており、13・14号墳の調査結果如何では、造成計画の変更も想定された。両古墳は各支群の配置から見ても扇の要的位置を占めるものであり、その築造時期と内容は、本古墳群の形成等の鍵を握るものと目されていた。この調査は5月上旬から着手した。好天に恵まれたものの、墳丘頂部の土が乾燥のあまり亀裂が生じ、土色が全く観察できない状態となったため、墳頂部に塩化カルシウムと水を散布し、湿気を与えたうえで遺構を検出する方法をとった。結果、13号墳墳頂南西隅から古式土師器大壺1個体分を検出し、また中央とやや南寄りに箱式石棺2基が埋置されていることが判明した。

7月14日、開発公社から'82年度第Ⅰ期工事と'83年度第Ⅱ期工事の着工と入札が公表され、発掘

作業を急ぐ旨の要請があった。第Ⅰ期工事の造成地にあたる第Ⅲ支群の６号墳以東の６基、第Ⅳ支群の全６基、第Ⅴ支群の39号墳から35号墳までの６基、第Ⅵ支群の全２基の計22基を、'82年度内に完了するようにとの事であった。

13号墳墳頂部の調査と平行して行っていた13号墳北側テラスでは、平面「コ」の字状の溝で墓域を区画する39号墳を検出した。また、39号墳の東側では甕棺墓と考えられるもの１と、用途不明の土壙１を検出した。

これらの調査と平行して、７月下旬から約１ケ月に亘って33～35号墳の調査を行った。33号墳は狭長な二段掘土壙、36号墳もほぼ同様な規模の素掘り土壙であった。両墳の間にある34号墳では墳丘中央で土師器を埋納した土壙１を検出した。この土師器の取り上げは急を要したため、次のような方法で作業を行った。まず平面図にレベルを記入し、さらに土師器と土壙の立面図を現地で作成し、その後、亀裂の生じた土師器を和紙に梱包し、網をかけて天秤棒で釣り上げて移動し、室内で解体することとした。取り上げに急を要したのは、以下のような事情による。13・14号墳東側斜面で横穴の存在が予想されていたが、その調査時に出る多量の排土の捨場の適地が決まらなかった。当初、斜面下方の林が考えられたが、この地は未買収地であり共有地でもあるため早急に承諾が得られそうもなかった。そこで14号墳と33号墳との間に排土運搬用の大溝を切り、西側の谷に捨てる方法がとられることとなり、33～35号墳の調査終了が急がれたのである。

この間14号墳の調査も平行して実施した。ここでは表土除去時に指頭大の礫が散見されたので、この時点では、箱式木棺の床面に礫を敷きつめた主体部が樹根によって破壊されたものであろうと判断された。しかし、その出土状態に疎密性が認められたため、表土を除去しながら１点ずつ礫の平面分布と垂直分布を記録することとした。この方法によれば、主体部は破損していても埋納位置を推すことが可能になると考えたからである。そして９月15日、14号墳は13号墳と同様な箱式石棺２基が検出され、前述した礫は主体部上面掘り形をおおう形で散布されたものであることが知られるに至った。13号墳側に位置する第１主体部は非常に入念な造りで、棺外で鉄剣、素環頭大刀等、棺内で内行花文鏡、方格渦文鏡等が副葬されており、第２主体にも鉄剣、鉄鏃等が副葬されていた。また、両者とも礫床をもっていた。

第Ⅶ支群の32号墳の調査では溝１条と箱式石棺１基を検出した。

９月27日、室内へ持ち帰った34号墳の土師器壺の梱包を解体したところ、壺内には肩部あたりまで礫が詰めこまれており、その上面に石釧・捩文鏡・勾玉が納められていた。

14号墳および34号墳の調査の結果、各古墳は古墳時代前期後半から順次築造されていったものであろうと推測される資料を得、またその内容も前期大形古墳にみられる副葬品に劣らぬものであった。

10月７日町教育委員会で開催された調査指導の議場において、山本清（県文化財保護審議会委員）、門脇俊彦（松江市津田小学校教諭）、田中義昭（島根大学文学部助教授）各氏から、①これまで古墳といえば畿内においても地方においても、大規模なもののみが研究対象とされてきたきらいがあったが、今回の調査結果によって、古墳そのものの再考が必要となったこと、②地方のこのような実例によって古墳文化の実態がさらに明らかになるという点で、重要な意味をもつこと、③奥才古墳群の位置する講武平野では、最も古いものであろう、等の指導を得た。それに加えて、遺跡の取り扱いについては文化庁の指導も十分考慮した上で行うようにとの助言があった。

10月の調査によって、これまで山径によって主体部等そのほとんどが損われているものと考えられていた第Ⅳ支群は、38号墳を除いて、他の５基は主体部が残存していることが判明した。12号墳では主体部３を検出し、第１主体部北西隅から土師器壺、第３主体部から珠文鏡・管玉が出土した。11号墳では狭長な二段掘土壙中央に礫床構造の主体部１を、29号墳では礫床構造の土壙、素掘土壙各１を、30号墳では礫床構造の土壙１を、31号墳では二段掘土壙を検出した。さらに11・29号墳間の溝北端では階段状の遺構を検出した。なお38号墳では主体部は損われていたものの、墓域を区画する溝の南端で古式須恵器蓋杯１対、土師器高杯５が出土した。

10月９日、19号墳頂部に工事用遣方が設定されているのを確認したので工事関係者に糺したところ、古墳とは知らずに行ったもので、浄化装置場所はこの地しかないとのことであった。早速町教委・開発公社および業者が協議を行った結果、西側墳裾の一部について調査が必要と判断された。そして19日から26日の調査で、墓域を区画する浅い溝とみられる落ち込みを検出した。

翌27日から、作業員人数・重機等の確保が困難なため約２ヶ月近く遅れて、横穴の存在が予想されていた13・14号墳東側斜面の表土除去作業を開始する。しかし、表土に混じって石器・須恵器杯・古銭等を得たのみで、横穴の検出にはいたらなかった。

11月２日、文化庁河原純之調査官を現地に迎え、調査方法等の指導を得た。13・14号墳の取扱いについては、これまでの経緯から現状保存は困難であると考えられるので、十分な調査期間を確保するようとの助言であった。

11月下旬第Ⅳ支群調査完了、12月６日、13号墳墳丘断割りとともに、32・39・13・14号墳の各石棺を解体し梱包を行う。なお、13・14号墳の各石棺は、町内東小学校校庭に移築することがすでに決定していたため、その日の内に運搬を終了した。

12月10日、第Ⅳ・第Ⅴ支群で工事者側の削平作業始まる。

その後、調査の主力を第Ⅲ支群に移すこととし、８～10号墳の再査から実施した。６号墳では素掘土壙１、７号墳では礫床構造の土壙１を検出したが、８・28号墳では埋葬施設の検出はできなかった。８号墳南裾では竪穴式住居跡と思われる落ち込みが認められた。

1月上旬、数日の補足作業を行い、'82年度の発掘調査を終えることとした。開発公社からは、3月末まで工事対象地区内にある未調査の1～5号墳の発掘調査を実施するよう要請を受けたが、県教委からの調査員の派遣は本年度のみとされているため、残りの2ケ月半は発掘調査の報告書作成の基礎作業を行うこととした。

2月22日、未調査の5号墳墳頂部に重機が入る。開発公社および業者に厳重に注意する。

ところで、この間、開発公社と町教委は今後の調査日程等について再三協議を行った。問題は、第Ⅲ支群の盟主墳ともいえる2・3号墳の取り扱い、調査員の確保、調査費の捻出、調査期間の短縮等であった。特に2・3号墳はその位置が工事予定地の西隅にあることから、この部分について設計変更が行えるものならば、2・3号墳の現状保存ができ、かつ調査期間もかなり短縮できるのではないかと考え、町教委は開発公社と協議を重ねた。

3月14日、開発公社は当初調査指導の議場においても指導のあった2・3号墳の現状保存を条件に、1・4・5号墳の調査にかかわる調査員の派遣を県教委に要請した。

1983年度調査　2・3号墳の現状保存を高く評価した県教委から、宍道年弘等の派遣を得、4月12日から1・4・5号墳の調査を実施することとした。

第Ⅲ支群の最西端に位置する1号墳は、当初墳丘上面で石材が認められていたので、簡単な箱式石棺と想像されたが、調査の結果、小規模な竪穴式石室が検出された。石室の上面北縁には円筒埴輪が配され、石室内には須恵器蓋杯・玉類・直刀が副葬されていた。また、2号墳の南隅に接する溝中央には須恵器甕が据えられていた。

4・5号墳は第Ⅲ支群のほぼ中央に位置し、4号墳は中央で土壙1を、5号墳では礫床をともなう狭長な二段掘り土壙1、不整形な土壙1を検出した。また、両古墳を区画する溝の北端では、下方に向かう階段状遺構を検出した。これらの調査は5月28日終了した。

15・16号墳破壊にともなう調査　工事対象地内の調査を終了して間もない6月16日、15・16号墳に重機が侵入していることが発見された。当初の工事計画によれば、16号墳墳頂部に給水塔が設置されることになっていた。これについては、'81年度の段階で、墳裾外に外すよう設計変更を開発公社に要請し、位置等が具体的になれば、町教委と協議の上実施する旨の了解が得られていた。にもかかわらず、協議等諸手続を行わないまま重機によって破壊が強行されたため、急遽町教委・開発公社・県教委と協議の結果、県教委及び文化庁へ始末書・顚末書を提出し、その後新ためて発掘通知書を提出して発掘調査を実施することとなった。

調査は7月15日から8月4日にかけて実施し、16号墳の精査から着手したが、重機によって著しい撹乱を受けており、墳頂部では埋葬施設の確認はできなかったが、西側墳裾において土壙1を検出した。

第2節　調査体制

調査は、1981年度から'83年度まで3箇年度にわたって実施した。各年度の関係者は、下記の通りである。

1981年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員）、賀川光夫（別府大学教授）、池田満雄（島根県埋蔵文化財調査員）、門脇俊彦（同）、横山純夫（同）、朝山芳圀（鹿島町文化財保護審議会委員）、勝部　昭（文化課埋蔵文化財係係長）、卜部吉博（文化課主事）、川原和人（同）、松本岩雄（同）、片寄義春（同）

事務局　矢野義雄（鹿島町教育委員会教育長）、門田正幸（同教育次長）、曽田　稔（同社会教育主事）

調査員　道上康仁（鹿島町教育委員会嘱託）、杉原清一（島根県埋蔵文化財調査員）

調査補助員　青山　巌、栗焼憲児（別府大学学生）、土居和幸（同）、前島秀張（同）、藤村真佐子（島根大学学生）

1982年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根大学法文学部助教授）、池田満雄（島根県埋蔵文化財調査員）、門脇俊彦（同）、横山純夫（同）、朝山芳圀（鹿島町文化財保護審議会委員）、勝部　昭（文化課埋蔵文化財係係長）、石井　悠（同）、卜部吉博（文化課主事）

事務局　矢野義雄（鹿島町教育委員会教育長）、門田正幸（同教育次長）、曽田　稔（同社会教育主事）

調査員　三宅博士（県立八雲立つ風土記の丘資料館職員）、広江耕史（同）、赤沢秀則（鹿島町教育委員会嘱託）

調査補助員　青山　巌、藤村真佐子、岩田　靖、福間克美、橋本修治、上川晃弘、原　俊二（国学院大学学生）、山本幸美（鹿島町土地開発公社）

遺物整理　福井美和子

調査協力　柳浦俊一、松江北高等学校考古学部、園山和男、丹羽野裕

1983年度

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、池田満雄（島根県埋蔵文化財調査員）、門脇俊彦（同）、横山純夫（同）、朝山芳圀（鹿島町文化財保護審議会委員）、勝部　昭（文化課埋蔵文化財係係長）、石井　悠

（同）、松本岩雄（文化課主事）

事　務　局　矢野義雄（鹿島町教育委員会教育長）、井上　穣（同教育次長）、曽田　稔（同社会教育主事）

調　査　員　宍道年弘（文化課主事(兼)）、富田修治（同）、三宅博士（県立八雲立つ風土記の丘資料館職員）、赤沢秀則（鹿島町教育委員会嘱託）

調査補助員　山本幸美（鹿島町土地開発公社）

遺 物 整 理　松本美和子

調 査 協 力　広江耕史（県立八雲立つ風土記の丘資料館職員）、中浜久喜

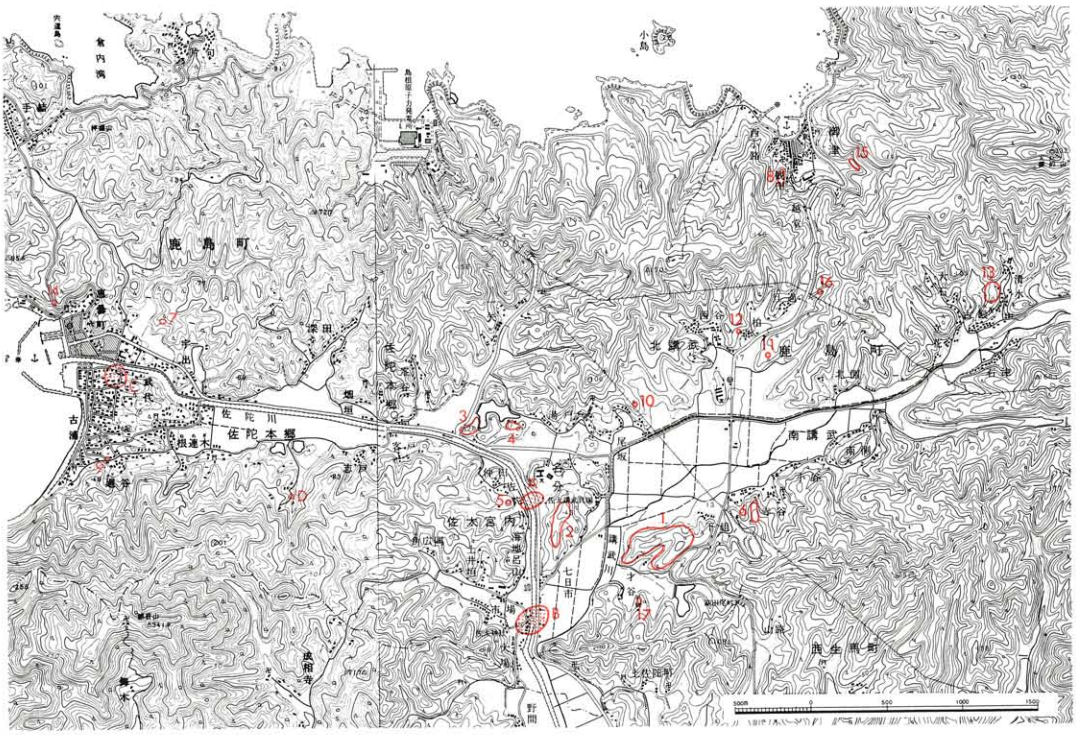
なお、発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言を賜わった。ここに深甚の謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

穴沢呀光、石野博信、泉森皎、今尾文昭、岡崎雄二郎、岡田博、小田富士雄、落合めぐむ、河原純之、黒崎直、小林謙一、真田廣幸、白石太一郎、宍道正年、菅谷文則、杉山晋作、椙山林継、鈴政泰子、瀬戸谷皓、田中琢、寺村光晴、中藤隆次、中原斉、西田守夫、西山要一、根鈴輝雄、花谷浩、土生田純之、東森市良、櫃本誠一、前島己基、間壁葭子、三木文雄、水野正好、村上泰樹、村上勇、室賀照子、本村豪章、森下哲哉、山本三郎、和田晴吾、渡辺貞幸、渡辺昇

第３章　位置と歴史的環境

奥才古墳群は、松江市を北西に約10㎞の八束郡鹿島町大字名分（みょうぶん）の丘陵上に位置している。遺跡の地番は大字名分字奥才1,460番地他で、調査前の地目は山林であった。東西約500ｍ、南北約300ｍの馬蹄形の丘陵上に約50基の古墳が所在する。この丘陵は講武平野の西端近くに位置し、丘陵最高所である標高54ｍの13・14号墳墳頂からは講武平野のほぼ西半分を見わたすことができる。講武平野は島根半島部の谷あいに開けた平野で面積約140ha、半島部では持田・川津平野とならぶかなり広い耕地面積を有する。この平野は谷奥から流れ出す多久川（現講武川）によって形成された沖積平野で、古くから水稲耕作地として格好の条件をそなえていたものと考えられる。

鹿島町は、島根半島のほぼ中央部に位置しており、日本海に面する恵曇（えとも）・御津（みつ）といった漁業を中心とする集落、講武平野を中心とした講武・名分・佐陀本郷といった農業を中心とする集落からなっている。しかし、松江市に隣接するため、近年は同市の通勤圏、商業圏に含まれているといっ



第１図　奥才古墳群とその周辺の遺跡（1／50000）

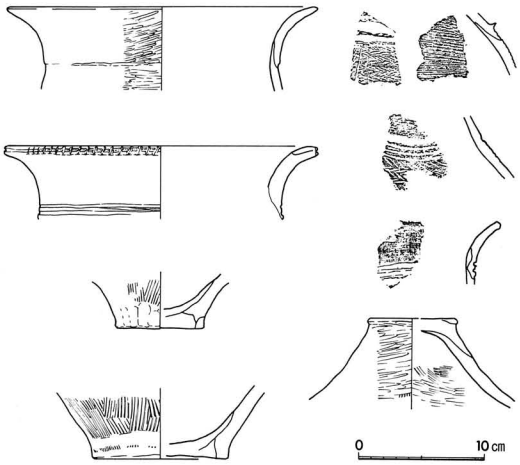
A．佐太講武貝塚　B．佐太前遺跡　C．古浦砂丘遺跡　D．志谷奥遺跡　1．奥才古墳群　2．鵜灘山古墳群
3．名分丸山古墳群　4．かまの古墳群　5．面目古墳　6．中尾谷山古墳群　7．狐堀古墳　8．秋葉山古墳群
9．臼畑古墳　10．中ノ空古墳　11．向山古墳群　12．岩屋古墳　寺の奥横穴群　14．寺尾横穴群
15．貝塚横穴群　16．恵谷横穴群　17．嵐廻横穴群

てよい。こうした動向により、主に農村部では兼業化が進み、1960年には153世帯を数えた専業農家が、1980年にはわずか18世帯に減少している。一方、第２種兼業農家も817世帯から561世帯へと減少しており[1]、相対に農業離れが進んでいるものと考えられる。人口はこの間に10,065人から9,094人と漸減傾向にある。なお、1974年には片句地区に建設された島根原子力発電所が操業を開始している。現在、新たに２号機の建設が開始されている。

奥才古墳群周辺の遺跡に目を転じると、縄文時代の佐太講武貝塚[2]が現在知られる最も古い遺跡であり、1933年に史跡指定を受けている。貝塚は汽水性のヤマトシジミを主とし、ここから出土する縄文土器は早期末から前期初頭の条痕文土器がその大半を占めている。土器の他に各種の石器・骨角器の出土を見ている。

弥生時代に入ると、前期から奈良・平安時代に至る集落遺跡と考えらえる佐太前遺跡[3]、やはり同じ位の時期幅をもつと考えられ、集落址と墳墓が存在することが確認されている古浦砂丘遺跡[4]が知られている。これら両遺跡の実態は必ずしも明らかではないが、前期から一貫して低湿地を水田として開発していたと考えられ、こうして高められた生産力が奥才古墳群など数多くの古墳群を築く原動力となったと考えられる。その他銅鐸２、銅剣６を出土した志谷奥遺跡[5]がある。銅鐸は、外縁付鈕１式四区袈裟襷文のものと、扁平鈕式四区袈裟襷文のもので、銅剣はいずれも中広形に属する。周辺の集落での祭祀に使用されたものと考えられる。偶然の機会に発見されたものであるが、調査によって埋納壙が検出されている。

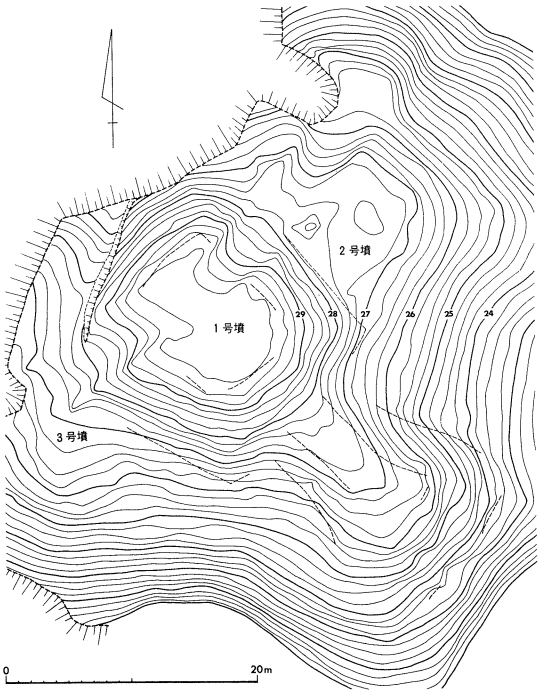
古墳時代には前記２遺跡の他には集落遺跡の存在は知られておらず、住居の実態は依然不分明であるが、水田を見おろす丘陵上には奥才古墳群をはじめ、累々と古墳群が築かれている。古墳は前期から後期までを通じての



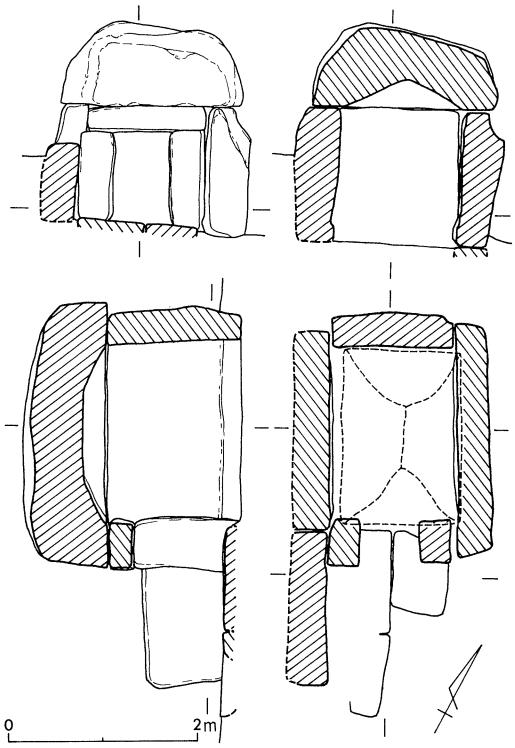
第２図　佐太前遺跡出土遺物実測図

第３図　志谷奥遺跡銅鐸・銅剣出土状況復元

築造が確認できる。奥才古墳群と水田を挟んで向かい合う独立丘陵上には10余基からなる鵜灘山古墳群[6]が知られている。この古墳群中には柄鏡形の墳丘をもつ前方後円墳があり、前期にまで溯る可能性がある他、群構成も奥才古墳群と類似しており注目される。さらにこの北の丘陵上には、7基からなり、全長約40mの前方部の大きく開く古式の墳丘をもつ前方後方墳を含む名分丸山古墳群[7]が知られており、高い密度で古墳の分布することが明らかになりつつある。これらをはじめ、周辺の古墳群で主体部の判明するものでは奥才古墳群と同様に礫床や箱式石棺あるいはその両者を採用するものが多く、箱式棺を有し、鉄剣等を出土した中ノ空古墳[8]など、前期から後期前半代にまで古墳群毎に若干の時期差を有しながら築造されており、非常に強い斉一性を示している。これらの古墳群は、講武平野をとりかこむ山塊上に営まれており、その規模も大きい。その他の地区では単独墳が主で群をなすとしても、2～3基程度のようで、安定した水田を有する講武地区が卓越した生産力を有していたものと考えられる。後期に至ってもこの傾向は変わらず、やはり講武平野に横穴式石室を有していたと伝えられ、鉄剣や須恵器子持壺を出土した向山古墳[9]、切石造りの石棺式石室である岩屋古墳[10]などの首長墓が築かれる一方、各地に横穴墓が営まれる。20穴以上からなる寺の奥横穴群[11]、丸天井形の寺尾横穴群[12]、整正家形の恵谷横穴群[13]などをはじめ、非常に多い。

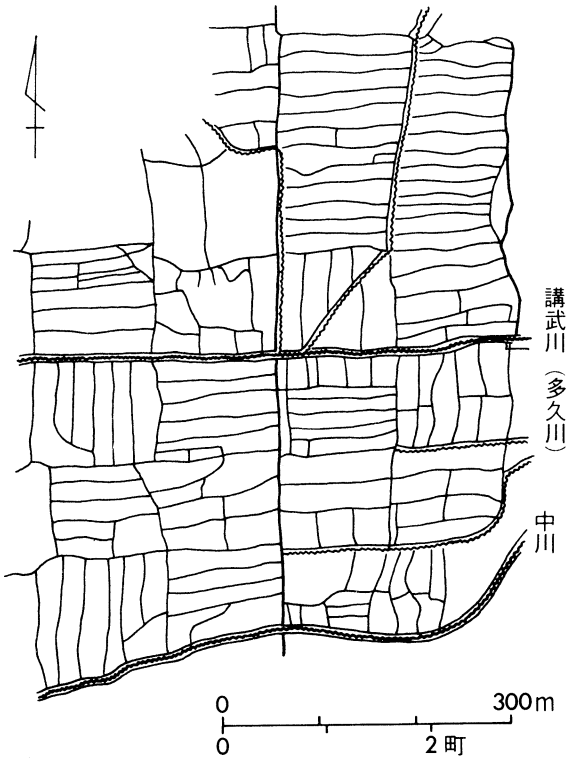


第4図　名分丸山古墳群測量図



第5図　講武岩屋古墳実測図

古墳時代以降、『出雲国風土記』の著された8世紀代には当町は島根郡、秋鹿郡にまたがり、講武平野は島根郡の余戸里（あまりべのさと）や生馬（いくま）郷の一部に含まれるようである[14]。この後、10世紀の『倭名類聚抄』には余戸里は多久郷として一郷に昇格しており、この間に平野の開発がさらに進み、人口の増加もあったのであろう。この頃に前後して講武平野には条里制が敷かれ、三ノ坪、八ヶ坪といった字名が残っている[15]。



第6図　講武地区条里制地割図

平安時代末には、佐太神社の周辺は安楽寿院が寄進され、佐陀荘が成立するが、講武平野も西半はこの荘園に含まれていたようである。佐太神社は、出雲国一宮である杵築大社（現出雲大社）に次ぐ二宮であり、古代末から中世にかけて大きな勢力を誇っていた。鎌倉時代初期に佐陀荘の下司職に補任された朝山氏は、承久の乱後、佐太神社神主を兼ね、荘園支配の実務にあたったと考えられる[16]。この朝山氏は佐陀氏を名のり、南北朝期には佐陀城（芦山（ろさん）城か）に拠り、戦乱に加わっている。佐陀荘は戦国末期には、尼子氏にかわって勢力をはった毛利氏の支配下に入り、毛利氏家臣による所領分割によって蚕食され、荘園としての体制は失われていくようである。南北朝期から戦国期にかけての戦乱に際して、この一帯にも多くの山城が築かれており、殿山・海老山・大勝間・芦山・池平城跡など相当の規模をもつものもある[17]。このうち大勝間山城は、史料としての信憑性は低いが、『陰徳太平記』[18]といった軍記物に名前が見えている。

この頃には農・漁業の他に海岸部の恵曇地区では製塩が行われていた[19]ことがわかる他、船便を利用した交易もあった[20]ことがわかっており、多様な生産・交易の舞台ともなっている。

近世には宍道湖から日本海へ抜ける人工の河川である佐陀川の開削[21]がなり、宍道湖沿岸の水害が緩和されると同時に、流域の水田開発に大きく寄与した他、宍道湖岸との水運による交易が開け、この地域に経済的発展をもたらすことになった。

第４章　調査の概要

第１節　支群構成

奥才古墳群は講武平野を見下ろす標高約50ｍ、水田からの比高約35ｍを測る馬蹄形をなす独立丘陵上に営まれている。この丘陵には自然の起伏を利用して、比較的大きい古墳を中心に小規模な古墳数基が従う形で各支群が構成されている。古墳群は７支群、50余基で、今回調査の対象となったのはⅠ・Ⅲ～Ⅶ支群の計26基であった。各古墳には、調査の対象となったものから順次号数を符した。以下、丘陵西端部の支群から順次その構成を記すことにする。

第Ⅰ支群は丘陵西側端部に位置する支群で、19・42・20～26号墳の計９基で構成される。中でも21号墳は本古墳群中最大の規模を誇る円墳である。22～26号墳は、北に向かって延びる尾根をそれに直交する数本の浅い溝によって画し、一辺８～９ｍの方形墓域を形成する。ほとんど盛土を施さないもので、21号墳に追従する形で連なっている。

第Ⅱ支群は本古墳群の北西部に位置し、27号墳を中心に37・40・41・36号墳の計５基で構成されている。27号墳を除く他は、尾根を溝によって画して墓域を形成するもので、さほどの高まりは認められない。

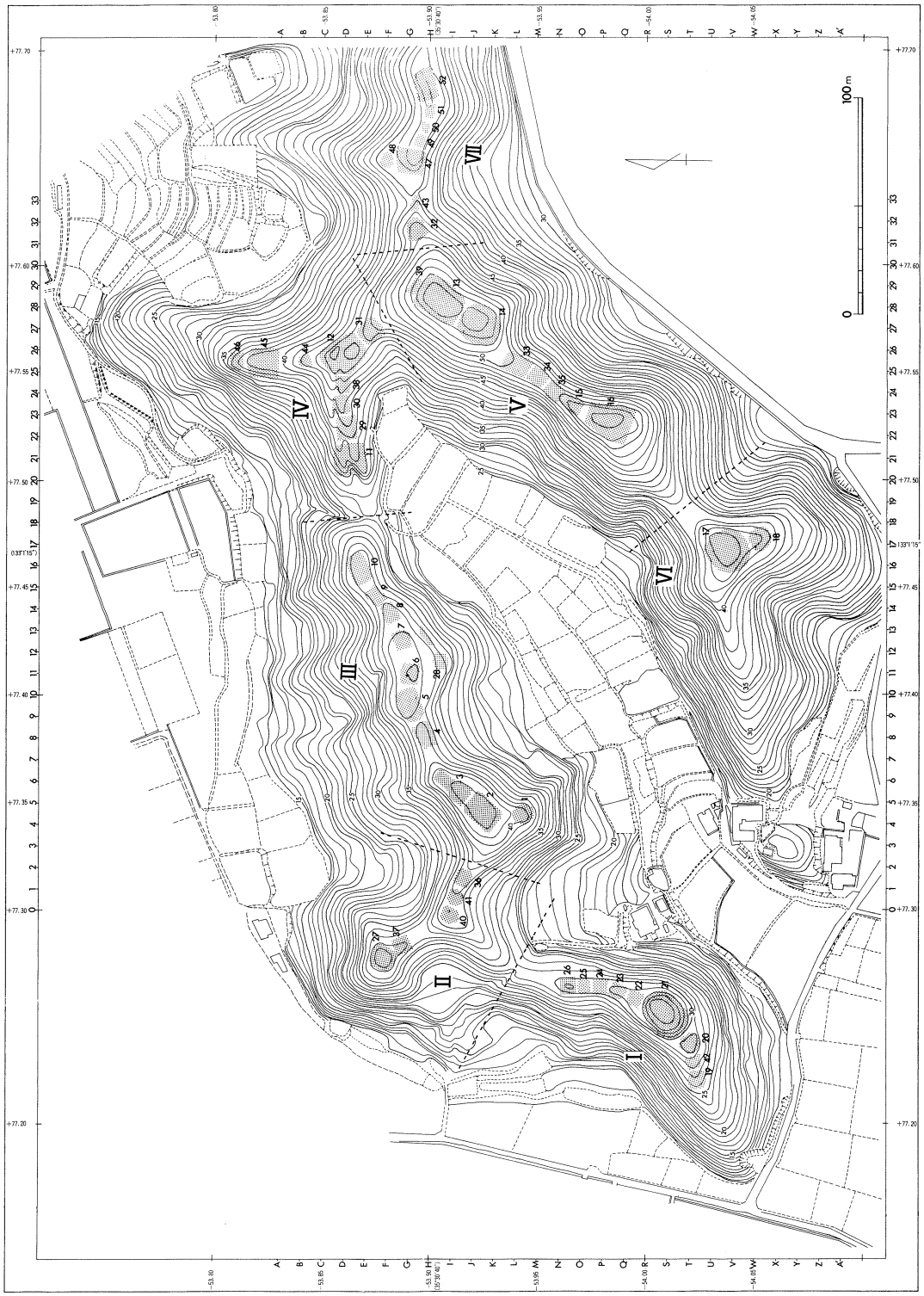
第Ⅲ支群は第Ⅱ支群の東側に位置し、１～10・28号墳の計11基から構成されている。立面的に眼につくのは１～３号墳および９・10号墳で、他は浅い溝で方形墓域を画しほとんど盛土を施さないものである。

第Ⅳ支群は馬蹄形の丘陵の最も奥の部分に位置し、第Ⅲ支群の東端部とは尾根が互いに下降している。ここでは11・12号墳を中心に29・30・38・31・44・45・46号墳の計９基で構成されている。29・30・38・31号墳は尾根をそれと直交する溝で方形墓域を画すものである。

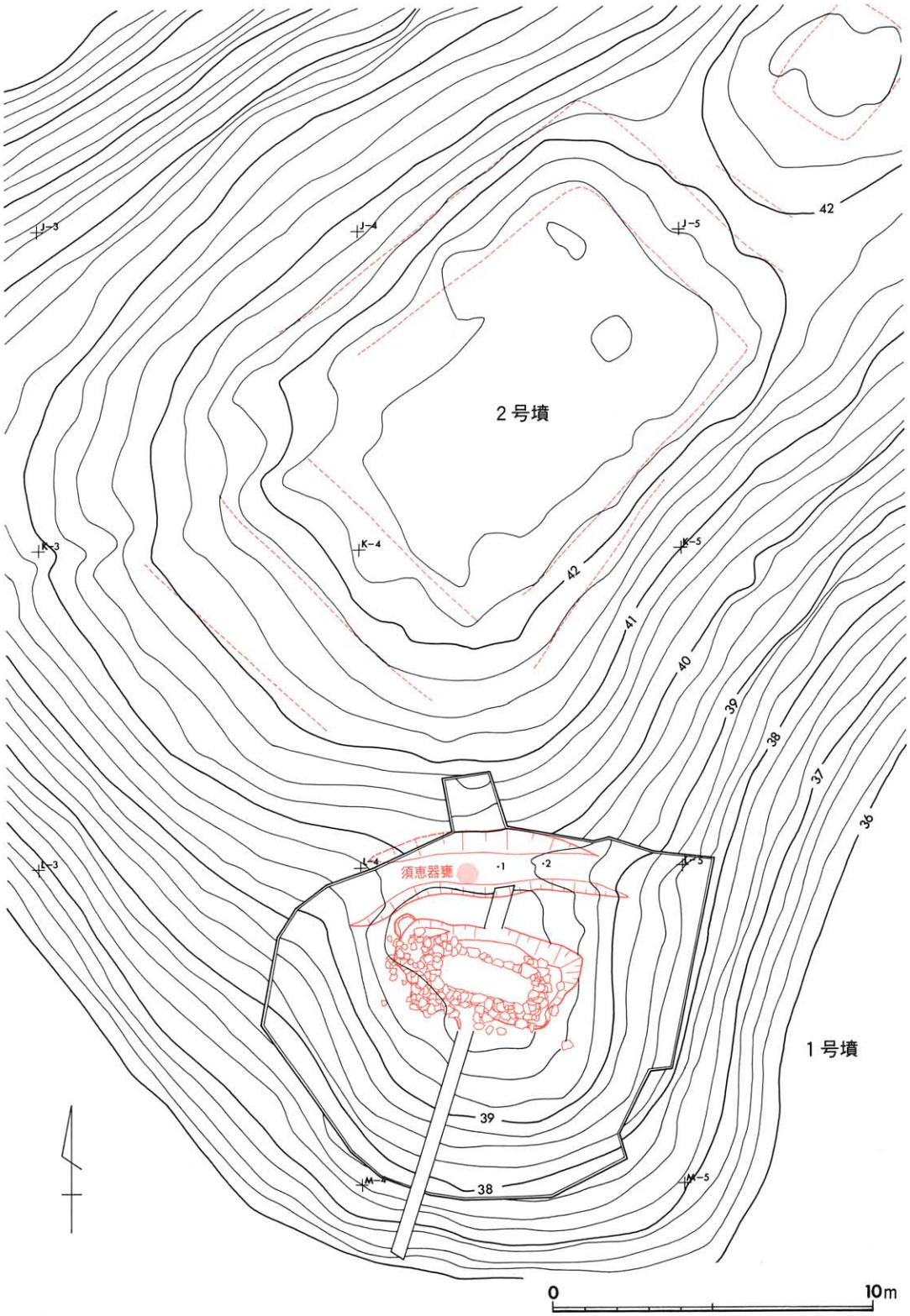
第Ⅴ支群は第Ⅳ支群のほぼ南東に位置し、磁北にほぼ45度東へふれる形で走る尾根上に築かれている。本古墳群で最大規模の方墳13号墳と、円墳14号墳を中心として、39・33～35・15・16号墳の計８基で構成されている。33～35号墳が馬背状の尾根を直交する溝で方形墓域を画す点は、第Ⅲ・第Ⅳ支群の例と類似している。

第Ⅵ支群は16号墳南にある鞍部を隔てて営まれ、立面的な17号墳とそれに続く18号墳の２基で構成されている。

第Ⅶ支群は13号墳の東裾から北東に延びる尾根に営まれている。現在32・43号墳を始め８基以上を確認しているが、山径によって墳形等不明なものも含まれている。



第7図　奥才古墳群配置図（1／3000）



第8図　1・2号墳墳丘測量図

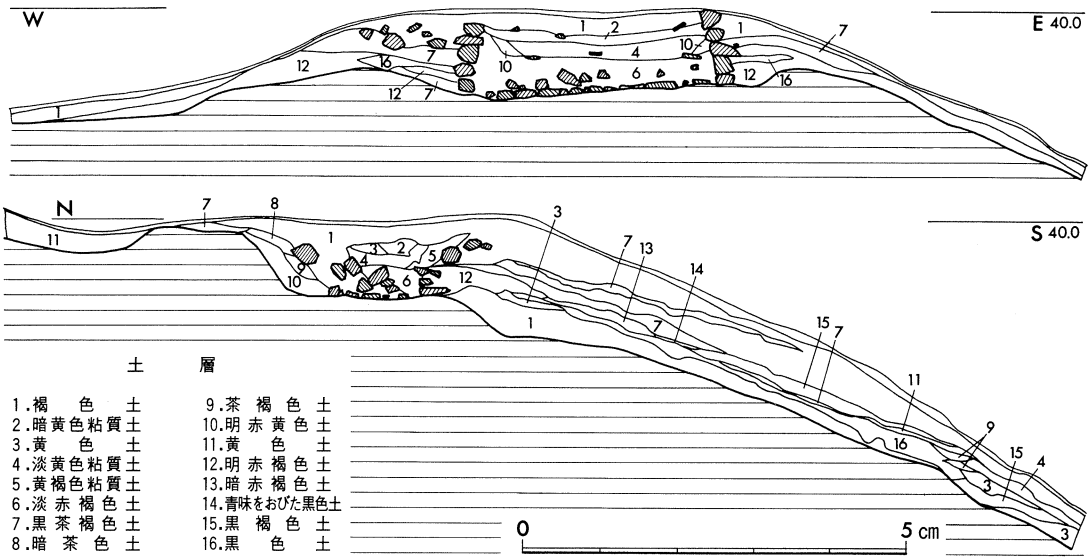
第2節　第Ⅲ支群

ほぼ東西にのびる約150mの尾根上に1～10号墳および28号墳の計11基が位置している。尾根は2・3号墳のあたりを最高所とし、標高約42.5mである。この高所から東へ次第に低くなってゆき、東端の10号墳では約37mである。この地点で尾根は一端途切れ、さらに東へのびて第Ⅳ支群に至る。2～10号墳は尾根上に造られているが、1・28号墳は尾根がわずかに突き出す地点に築かれている。わずかな緩斜面を利用するため、その墳丘は多くを盛土することによって造られている。

(1)　1号墳

第Ⅲ支群最高所の2号墳墳裾からわずかに南へ尾根が突き出す地点に築かれている。この墳丘を築く際に2号墳の墳裾を削っており、2号墳は1号墳に時期的に先行するようである。墳頂平坦面で標高約40mを測る。本墳は、調査前には明らかな円墳と考えられたが、2号墳との鞍部に設けられた溝はかなり直線的で、方墳の可能性も考えられ、墳形は判然としない。墳丘さし渡しは約10m、墳頂平坦面は約5mである。高さは東西墳裾との比高は約1.5m、南側墳裾とは約4mを測る。

墳丘はその多くを盛土によって築かれており、その中央部に竪穴式石室が構築されている。緩斜面に石室基底面を掘り込んでいるため、北側では地山を大きく掘りくぼめる掘方が検出されているが、南側では旧表土からのわずかな掘方が検出されたにすぎず、石室の構築に従って盛土を施し、墳丘としている。緩斜面という立地のために、変則的な石室の構築方法を採用しているようである。また、墳丘上面に円筒埴輪を有し、墳丘北側区画溝内に須恵器甕を埋置していた。



第9図　1号墳土層図

竪穴式石室　墳頂平坦面中央に、E－21°－Sと主軸をほぼ東西とする竪穴式石室が構築されている。内法長3.15m、同幅は東側で1.05m、西側で0.95mである。深さは東側で0.90m、西側で0.95mを測る。

石室各壁は30×20×20cm程度の石材を積み上げている。下方の石材にわずかに大きめのものを使用しているようである。北側の壁は約7割の石材が石室内に崩落した状態で検出された。崩落することなく残存していた南側壁では殆ど持ち送りは認められないが、東壁では約20cm、西側では10cm程持ち送りが認められた。石材はおおむね横目地が通るように積まれているが、東壁のように石材を立てて使用した例もある。また、壁下段では石材は土のう積を意図しているようではあるが、上段に進むに従って練瓦積の部分もまま見られ、縦目地が通る個所もかなりある。

石室床面には偏平な板石が敷かれており、この床石にも壁と同質の石材が用いられている。床の東側では主に大形の石材を使用し、中央部付近では小形の石材を使用している。厚さは10cm前後とほぼ均一であるが、石室基底面が西側より東側で約0.25m高く掘り残してあり、石室床も同様の傾斜を有している。また、石敷の床面と四側壁の間には障間があり、石室基底面の地山が露出している。東側ではさほど障間はなく、床石は側壁最下部の石材と接している。

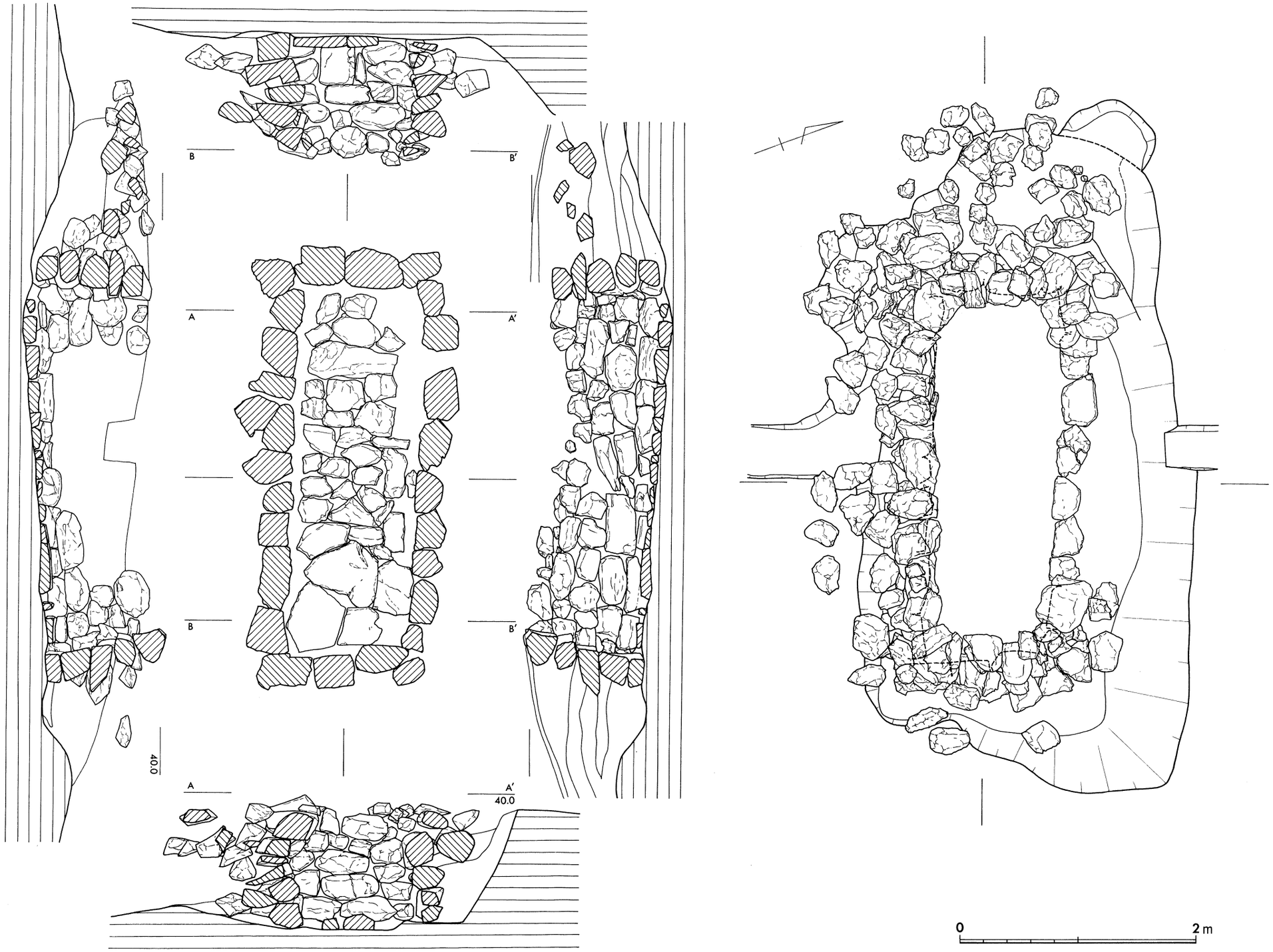
この石室は天井石を有さず、木板のようなもので石室をおおっていたものと考えられる。

斜面を利用して構築されているため、土壙掘方は北側でのみ明瞭に確認され、その長辺は約5.6m、深さは約1mを測る。この掘方と石室の間の石材はわずかしか認められず、ひかえ積などはほどこさない石室のようである。しかし、石室上端とほぼレベルを等しくして、主に石室西側に多くの石材が検出されており、これらの石材の使途は不明である。

この石室は、竪穴式石室としては小規模で各壁に使用する石材も極めて大形であり、天井石を有さず、ひかえ積などはもたない。さらに石材を積む際にも縦目地が通る壁があるなど、粗略な石室であるといわねばならない。それは、後述の遺物からもわかるように、竪穴式石室としては最終末の時期のものであるためと考えらえる[22]。

石室内遺物出土状態　竪穴式石室内からは須恵器蓋杯セット計6個体、管玉4、切子玉1、鉄刀1、刀子1が検出されている。

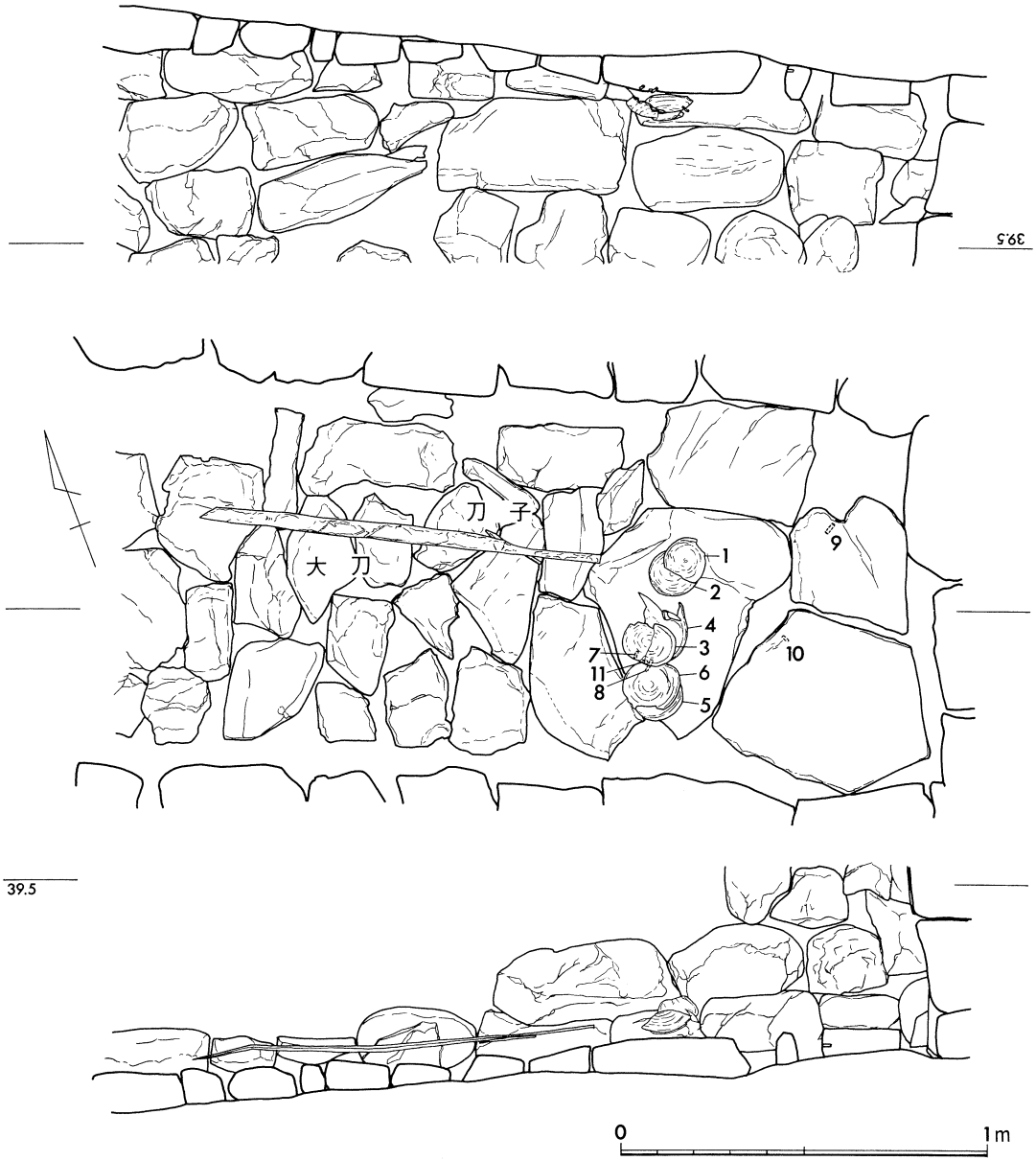
須恵器蓋杯は、石室東側の最も大きな床石上に横一列に3セットが並んで検出された。蓋杯はいずれも伏せた状態で副葬されている。北側の蓋杯のセット1・2、3・4は伏せた状態の杯に蓋をかぶせ、南側のセット5・6は伏せた状態の蓋5に杯身6をかぶせている。いずれの蓋杯も容器として使用されたものではなく、出土地点から推察して被葬者の枕に転用されたものであろう。頭位が東を向くことは、石室床石が西よりも20cm高くなっていることにも矛盾しない。さらにこの須恵器4・5の接する位置で、須恵器の内側に入りこむようにして碧玉製の管玉2と水晶製の切子玉1



第10図　1 号 墳 竪 穴 式 石 室 実 測 図

が検出された。また、もう２本の管玉は、東側に隣接する石材の下にもぐりこむようにして検出された。いずれも被葬者の身につけていたものが転落、散乱したものと考えられる。

石室主軸に沿ってやや中央から北寄りで、切先を西に刃部を北に向けて鉄刀１が検出された。この鉄刀の下、関(まち)部分と交差するように刀子が出土している。切先はほぼ北西に向いている。須恵器蓋杯を枕とする頭位ならば、被葬者の右腕に沿って副葬されたものと考えられる。



第11図　１号墳石室内遺物出土状態実測図（1／20）

埴輪出土状態　墳丘各地点で多くの埴輪片が採集されており、８本以上が樹立されていたものと考えられるが、埴輪基底部の残存により本来の樹立地点が知られるものは、下図の５本にすぎない。

この５本の埴輪は、石室側壁が崩落した際に若干移動している可能性もあるが、基底部の出土状態からおおむね本来の樹立地点に近いものと考えらえる。石室との位置関係も側壁崩落のため明確ではないが、残存する石室と考え合わせると、石室北側壁の上面付近に石室主軸と平行するように立て並べられていたものと思われる。標高は39.9m前後を測り、石室上面よりいくらか低くなっており、これは石室北側壁の崩落の際に陥没したものであろう。

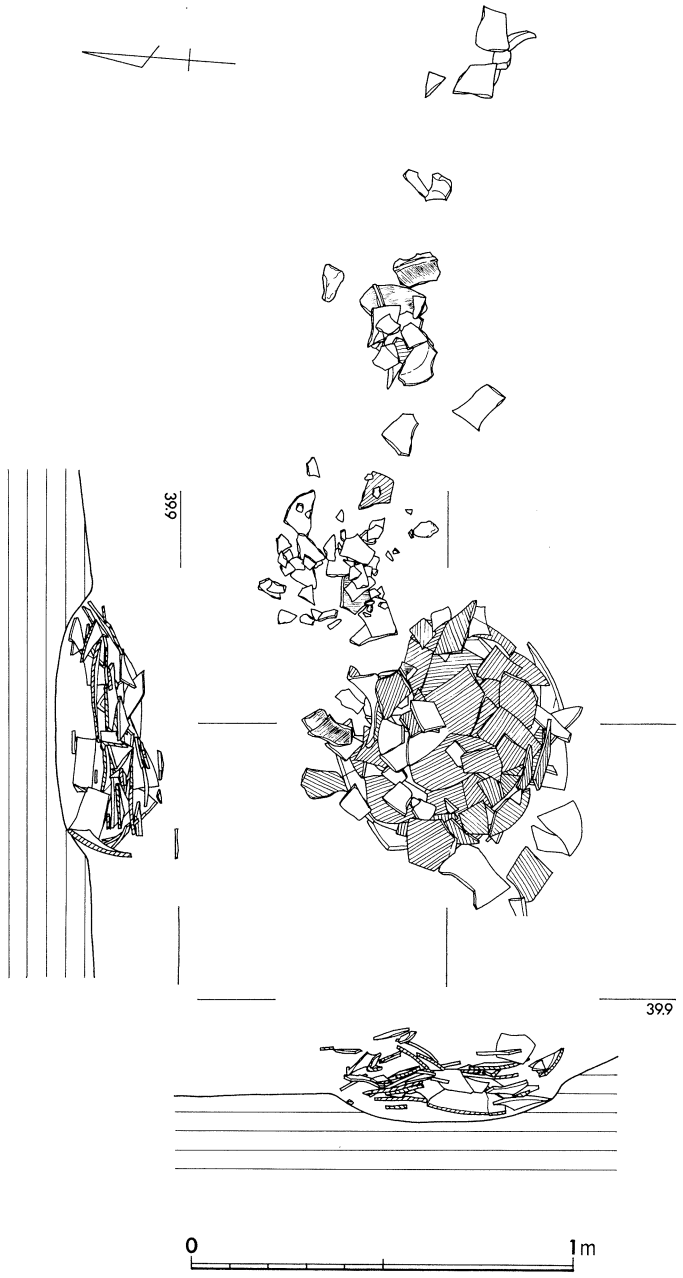
その他の破片は墳丘各地点に散乱しているが、特に墳丘北側および墳丘西墳裾付近で数多く検出されている。墳丘北側の破片は石室上面の基底部を有するものとの接合資料が多いが、西側墳裾のものはそれ自体で個体となり、完形に近い状態で転落したものと考えられ、その出土地点から、石室北側壁上面と同様に西側上面にも立て並べられていた状態が推測できる。

第12図　１号墳埴輪出土状態実測図（1／30）

溝内遺物出土状態　墳丘北側には幅約0.2mの溝が掘られて、１号墳墳丘と２号墳墳丘を区画している。この溝内やや東寄りに須恵器甕が、その西側に須恵器短頸壺がいずれも破片となった状態で検出され、溝内に転落した状態の埴輪片も検出された。

須恵器甕は径0.8mの浅い掘り込み内に埋置されている。復元の結果、底部および口縁端部を欠失しているが、底部付近の破断面が掘り込みの底部に接しており、底部と考えられる破片も認められないことから、意図的に甕底部を打ち欠いた状態で溝内に据えられていたものと考えられる。頸部および口縁部付近の破片は土圧で甕内に落ち込んだ状況を呈しており、口縁端部の破片が認められないことから、口縁部もやはり打ち欠いた状態で溝内に据えられたものと考えられる。内面のタタキメは丁寧に消してあり、石室内の須恵器の年代観とほぼ一致し、古墳の造営と時を同じくして据えられたものと考えらえる。

短頸壺は溝底部に接して発見されているが、破片が



第13図　１号墳溝内遺物出土状態実測図（1／20）

やや散乱した状態であった。

出土遺物　石室内からは須恵器蓋杯３セット、管玉４、切子玉１、刀子１、鉄刀１が、墳丘からは埴輪８本以上、須恵器大甕１が出土している。

蓋杯(1)～(6)はいずれも口径の比較的大きなもので、天井および底部のヘラケズリの面積が広い。蓋は体部直立に近く立ち上がり、内面端部は段をなすが、やや鋭さを欠いている。杯は立ち上がりが高く、内面端部がかすかにではあるが段をもつ。杯(4)は外面底部に「X」字状のヘラ記号をもっている。(3)～(5)は焼成不良で、殊に(3)は著しく、細部の観察は不可能であった。これら蓋杯は、以上の特徴から山陰の須恵器編年Ⅱ期[23]に属するもので、この須恵器を出土した１号墳は、奥才古墳群中時期の判明しているものでは、最も新しい時期のものである。

管玉は４本とも緑色凝灰岩製と考えられ、淡い緑色を呈する。(7)は他のものより短く2.1cmであるが、(8)～(10)はいずれも3.0～3.1cmを測るものである。径はいずれも0.8cm程度のもので、穿孔は一方から行なっている。外面は丁寧な研磨がなされ、縦方向の研磨の痕跡が残っている。

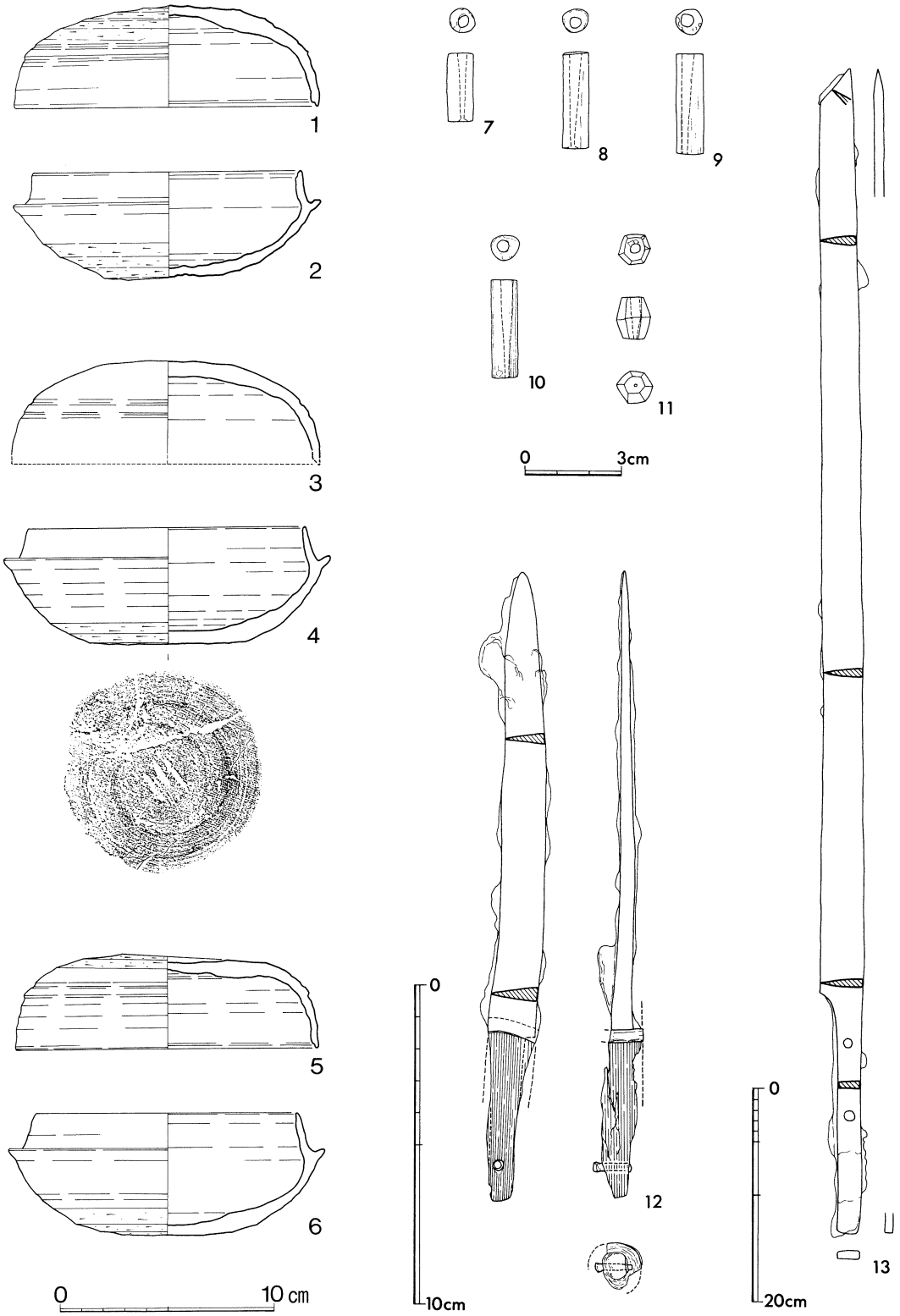
切子玉(11)は水晶製のもので、截頭六角錘を２つあわせた通有の形を呈する。長さは1.3cm、最大径1.1cmを測る。穿孔は一方からのものである。水晶の透明度は高い。

刀子(12)は長さ19.6cmを測るもので、刃部は長さ13.8cmを測り、断面縦長の三角形を呈している。関付近にはリング状に金具が残存しており、柄のせめ金具と考えられる。刃部には背関が認められ、茎は長さ5.1cmを測る。木質が付着していることから、柄を有していたことが知られた。茎端部近くには目釘が残存している。

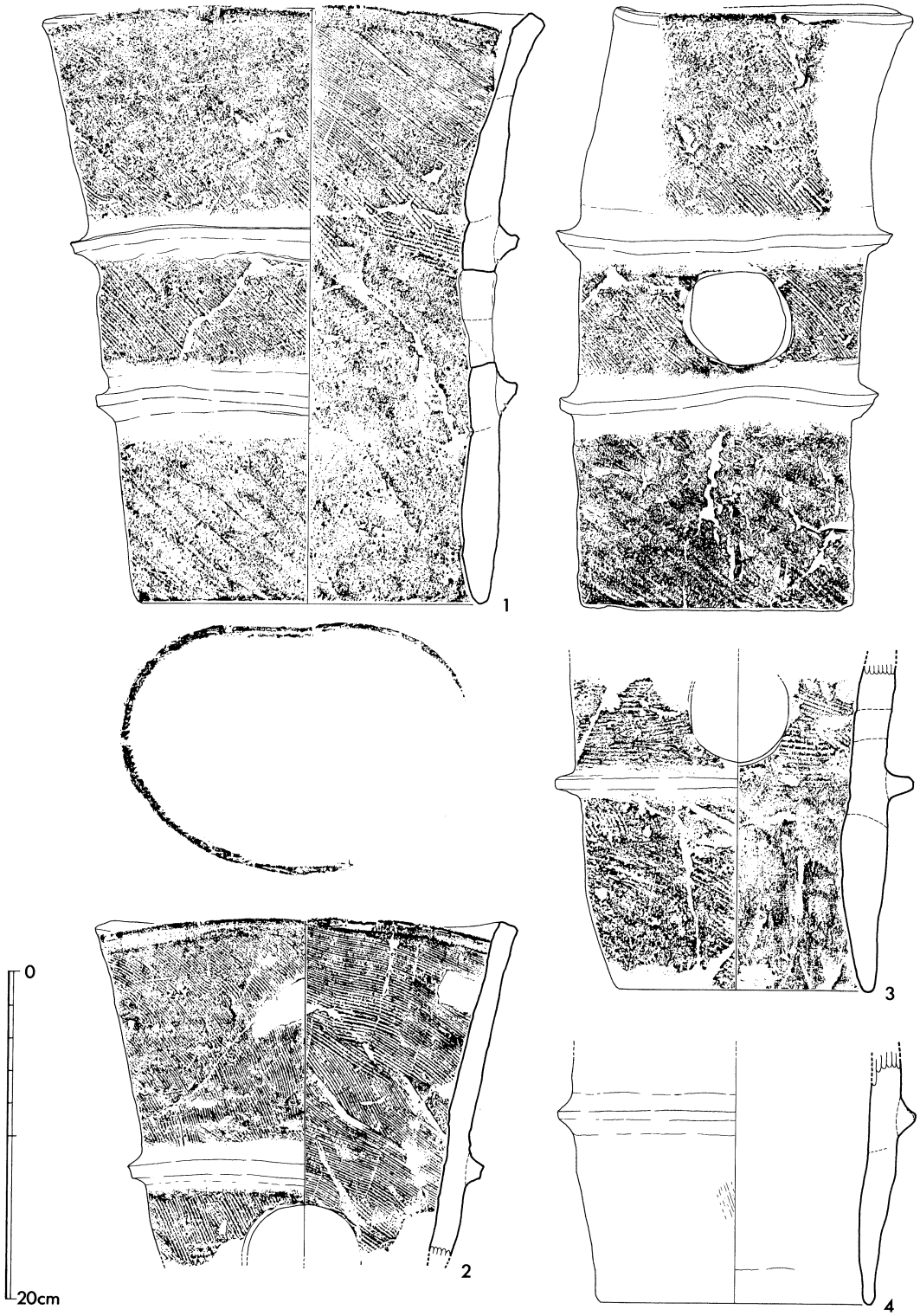
鉄刀は(13)は、全長109cmを測る重量感のある直刀で、刃部長86.5cm、茎長22.5cmを測る。身幅は3.8cmで、断面は縦長の三角形を呈している。峰は平たく、幅0.8cmを測る。切先は鯔(かます)鋒形を呈し直線的なつくりである。茎での身幅は2.1cmを測り、２つの目釘穴をもっており、関に近いものから径0.8cm、1.0cmである。外面に木質などは残存しておらず、外装は外した状態で副葬された可能性がある。

埴輪は８個以上が確認できており、焼成では須恵質のものと土師質のものがあるが、土師質の焼きあがりを呈するものにも、黒斑を有するものは１片もなく、いずれも窖窯で焼成されたもの[24]と考えられる。全形の判明する(1)では焼成時の窯変著しいが、器高36cm、底部径18cm程度で、２段のタガを有するものである。他には全形の判明するものはないが、基本的にはこの埴輪と同様の規格を有するものと考えられる。中段対向する位置に１対の円形の透しを有する。口縁はいずれもシャープな面をなし、タガは横ナデによって調整され、(4)・(12)以外は突出度が高い。

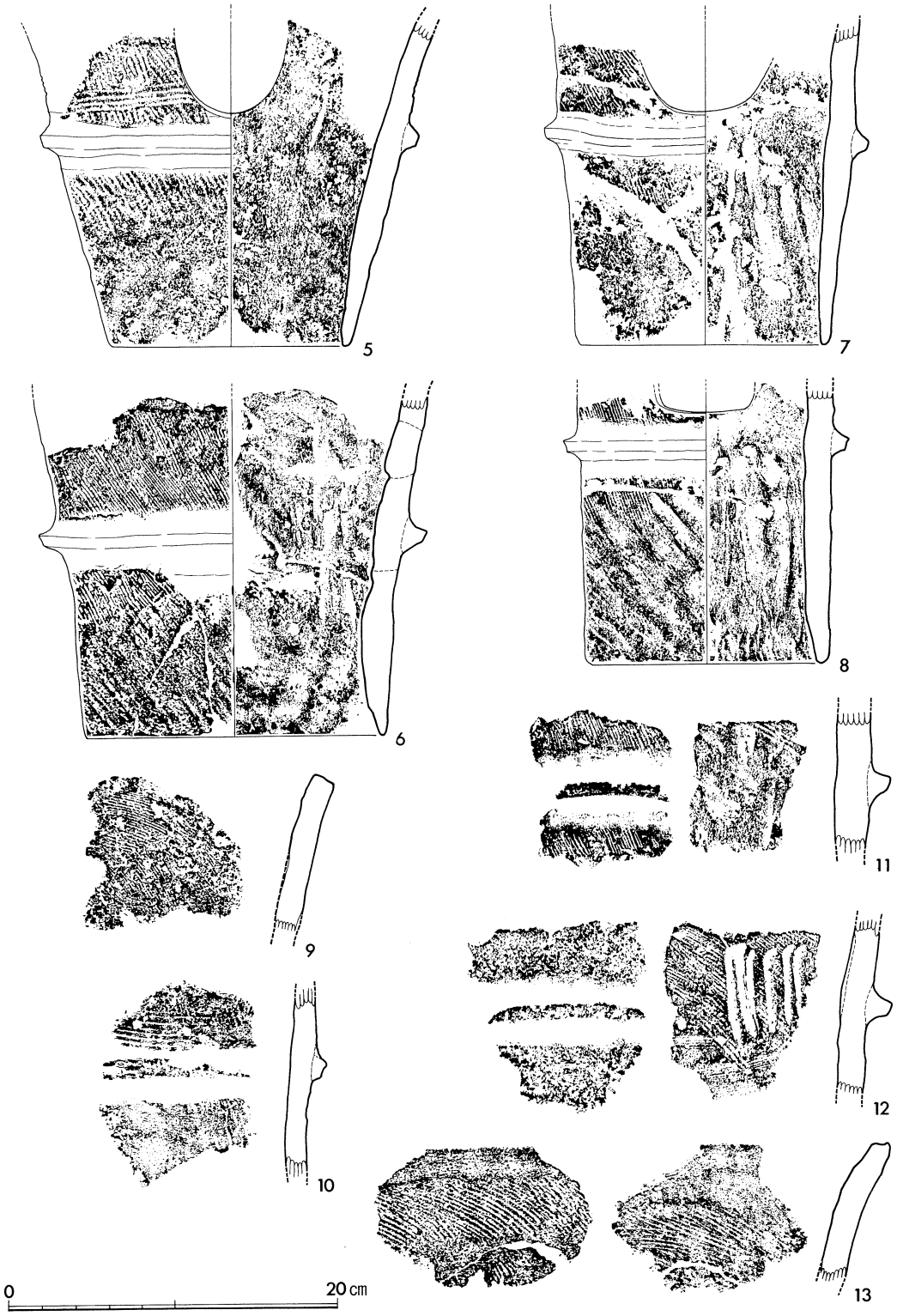
外面の調整は、基本的には右上がり斜めのハケをもつが、これはタガの上下で連続しており、タガ貼付以前に施す１次調整である[25]。２次調整としての横ハケを行なうのは(3)・(5)・(12)のみで、(5)の横



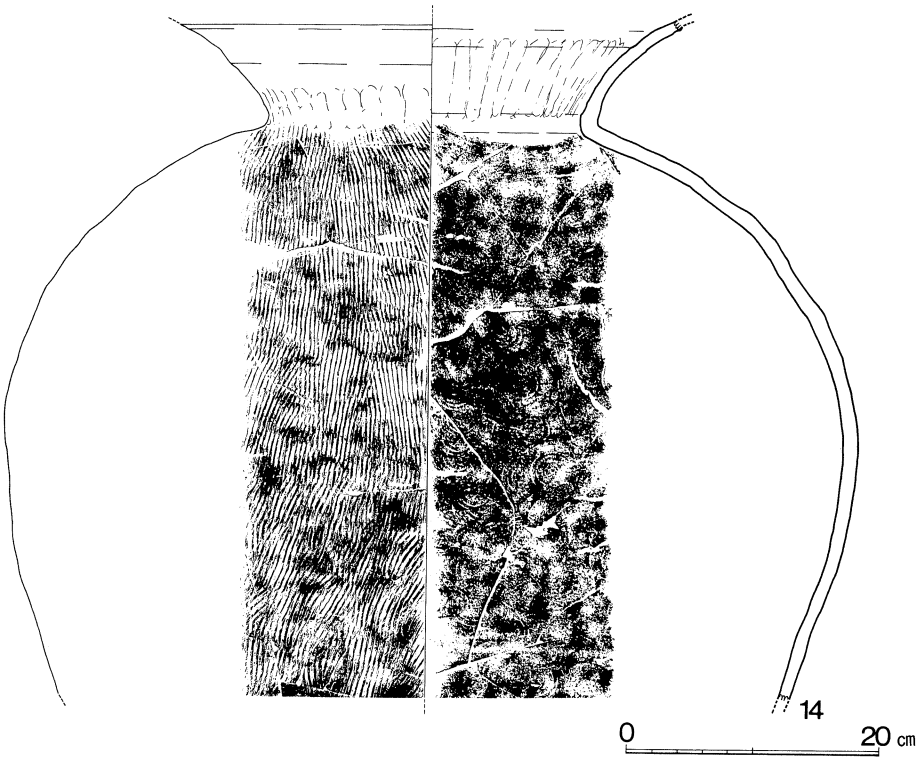
第14図　1号墳石室内出土遺物実測図（1～6は1／3、7～12は1／2、13は1／6）



第15図　1号墳出土埴輪実測図(1)　(1/4)



第16図　1号墳出土埴輪実測図(2)　(1/4)



第17図　1号墳北側溝出土須恵器実測図（1／6）

ハケはハケの条線は太いが工具自身は狭い。横ハケの施し方は明瞭にはわからないが、B種あるいはC種横ハケと考えらえる。最下段には左上がり斜めのナデが見られる。このナデには幅の広い(1)・(8)と狭い(3)・(6)がある。幅の広いナデは稜を明瞭に残しており、ケズリの可能性をもってはいるが、砂粒の動きは認められない。内面の調整は上半のみ斜め右上がりのハケで、下半は斜めあるいは縦方向にナデ上げる。内面下端付近は断面が薄くなっており、全体が完成してから倒立させて再調整を行なっていると考えられ、その際の押圧痕が内面に残る。この底部調整のうち(3)は内面に板状工具による圧痕をわずかに留めており、特異な調整方法として注目される。また(10)は工具による押圧痕を内面に有している。粘土紐は、幅の明瞭にわかる個体はないが、粘土紐の傾きはいずれも内面に低く、外面に高くなっている。

これらの埴輪はタガ間に2個の円孔を有し、底部調整をもつものである。外面調整はほとんどが2次調整を欠くものであるが、わずかにB種あるいはC種横ハケを2次調整として有するものがある。これらの特徴から、1号墳出土の埴輪は、川西編年[26]V期に含まれるものと考えられる。

須恵器大甕(14)は墳丘北東溝底で検出されたものである。底部および口縁端部を予め打ち欠いて据えられたものと推測される。体部は球形を呈し、体部中位で最大径68cm、頸部で径26cmを測る。体部外面には縦方向のタタキメ、内面にもなでて消しているが同心円状のタタキを施す。

第1表　1号噴出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
14−1	杯蓋	14.1	−	4.8	口径大きく、天井部平ら。口唇端部の段は比較的シャープ。天井部器壁厚い。	暗灰色	石英・長石などやや多い。	良好 一部灰被り。	
3		14.0	−	4.9	外面／天井部ヘラケズリ。ロクロ回転右。体部回転ナデ。	灰白色	砂質	不良	
5		13.9	−	4.5	内面／天井部中央ナデ調整。以下回転ナデ。	暗灰色	石英・長石など。	良好	
2	杯身	12.4	−	5.1	口径大きく、立ちあがり高い。口唇内側にかすかな段。 外面／底面回転ヘラケズリ。ロクロ回転右。体部回転ナデ。 内面／底面ナデ調整。以下回転ナデ。	灰色	石英・長石など多い。大粒のもの目立つ。	良好。外面一部灰被り。	
4		12.8	−	5.5		暗灰色	石英・長石などわずかに含む。	不良	外面底部に×印のヘラ記号。
6		12.1	−	5.8		暗灰白色			
15−1	埴輪	最大 30.1 最小 18.1	最大 20.3 最小 14.6	36.3	2段のタガを有する。タガの突出度高い。第2段に円形2方向の透しを有する。 外面／最下段左上り斜メに指でなであげる。第2・3段で連続する。タガ部・口唇部ヨコナデ。 内面／最下段から第2段半ばまで縦方向に指でなであげる。それ以上はななめのハケメ。	暗灰色	長石の大粒の砂粒多い。	良好。須恵質焼けひずみ、ヒビ多い。	窯変著しく、平面楕円形を呈する。
2		25.4	−	−	直線的に開く最上段。しっかりしたタガをもつ。円形2方向の透し。 外面／左上りの縦に近いハケメ。短く断続する。口唇部・タ部ヨコナデ。 内面／左上りの横に近いハケメ。	暗青灰色	長石などの砂粒含むが密。	良好 須恵質	
3		−	15.0	−	器壁厚く、タガ大きく突出する。円形2方向の透し。 外面／最下段上半ななめのハケメ。下半なでてハケメを消す。第2段ヨコハケ。 内面／最下段たてになであげる。下部に工具の押圧痕残る。第2段よこ・ななめのハケメ。	赤褐色	石英・長石その他の大粒の砂粒多い。	やや不良 土師質	
4		−	16.2	−	底部器壁薄い。タガ突出度低い。 外面／最下段かすかにたてのハケメ。 内面／不明。			不良 土師質	
16−5		−	14.1	−	基底部。しっかりしたタガを有する。 5・7・8は円形2方向の透しをもつ。 外面／最下段上半ななめのハケメ。下半指でななめになであげる。 第2段左上りななめのハケメ。5のみはそののちにヨコハケを施こす。 内面／たての指ナデ。5のみ最下部に指による調整痕。	赤褐色	石英・長石などやや多い。	不良 土師質	
6		−	18.2	−		暗青灰色 一部赤灰色	砂粒含むが密。	良好 須恵質	
7		−	14.9	−		赤褐色	石英・長石など大粒のもの多い。	不良 土師質	
8		−	13.8	−		赤味がかった灰白色	砂粒やや多い。	普通	外面の一部と内面は須恵質に焼けるが、外面は土師質様を呈する。
9					各部破片。端部をもつ破片は平坦面を有する。タガはしっかりしているが、12のみは低い。 外面／左上りななめのハケメをもつ。12はこののちヨコハケを施す。タガおよび端部はヨコナデ。 内面／左上りななめのハケメをもつ。10はこののち工具による押圧痕を残す。11はたての指ナデも見られる。12は観察不能。	赤褐色	石英・長石の他、白いごく軟質の石を含む。	良好 土師質	
10						淡黄褐色	石英・長石などわずか。	普通 土師質	
11						外面／赤味の強い黄褐色 内面／暗灰色		良好 須恵質	
12						赤褐色		普通 土師質	No.5と同一個体か。
13							石英・長石などやや多い。	やや不良 土師質	
17−14	甕		胴部最大径 67.5		口縁部大きく開く。肩部丸みを帯びるが、胴部下半は直線になる。 口縁部ヨコナデ。胴部と口縁部接合の際のたてのナデが内外面に残る。胴部外面は平行のタタキメ。内面は同心円のタタキメを施すが、なでて大半を消す。	淡青灰色	長石などを含むが比較的よく精選されている。	良好	口縁および底部を欠失する。

2・3号墳は当初工事対象地内に含まれていたが、関係者の尽力・理解を得て現状のまま保存されることとなった。よって、ここでは墳丘の現況についてのみ報告する。

(2)　2号墳

第Ⅲ支群中最高所に位置する方墳で、隣接する前方後方墳である3号墳とともに、立地・規模ともにこの支群の盟主墳と考えられるものである。

墳丘は平面長方形を呈し、丘陵尾根方向に長い。尾根方向長軸で17m、短軸11.5mを測る。しかし、墳丘南西側短辺では尾根の分岐点にあたっているためか大きく広がっており、約15mになるものと考えられる。墳丘南のコーナー付近は1号墳築造の際に削り取られており、先にも述べたが、1・2号墳の先後関係を示している。1号墳は山陰の須恵器編年[27]Ⅱ期の遺物を出土しており、2号墳が1号墳より溯った時期の築造であることは確かであろう。墳丘西側のコーナーには後世の道が走り、ややコンターが乱れている部分もあるが、全体に整美な墳形がよく保存されている。

墳頂は広い平坦面を有し、長辺12m、短辺8.5mを測る。墳頂部の標高は42.5mで、墳裾からの比高は東側で0.5m、西側で0.8mを測る。

西側墳裾にはテラスが残っており、2号墳墳丘を削り出した際に土砂を除去した跡であろうと考えられる。13号墳北東に遺存する39号墳も同様のテラスで、平坦面上に周溝をめぐらし、わずかな盛土を持っていたと考えられており、この地点でも同様の遺構の存在が推定される。このテラスは2号墳短辺沿いに長さ約9m、幅約3mを測る。テラス上面の標高は41.5mである。

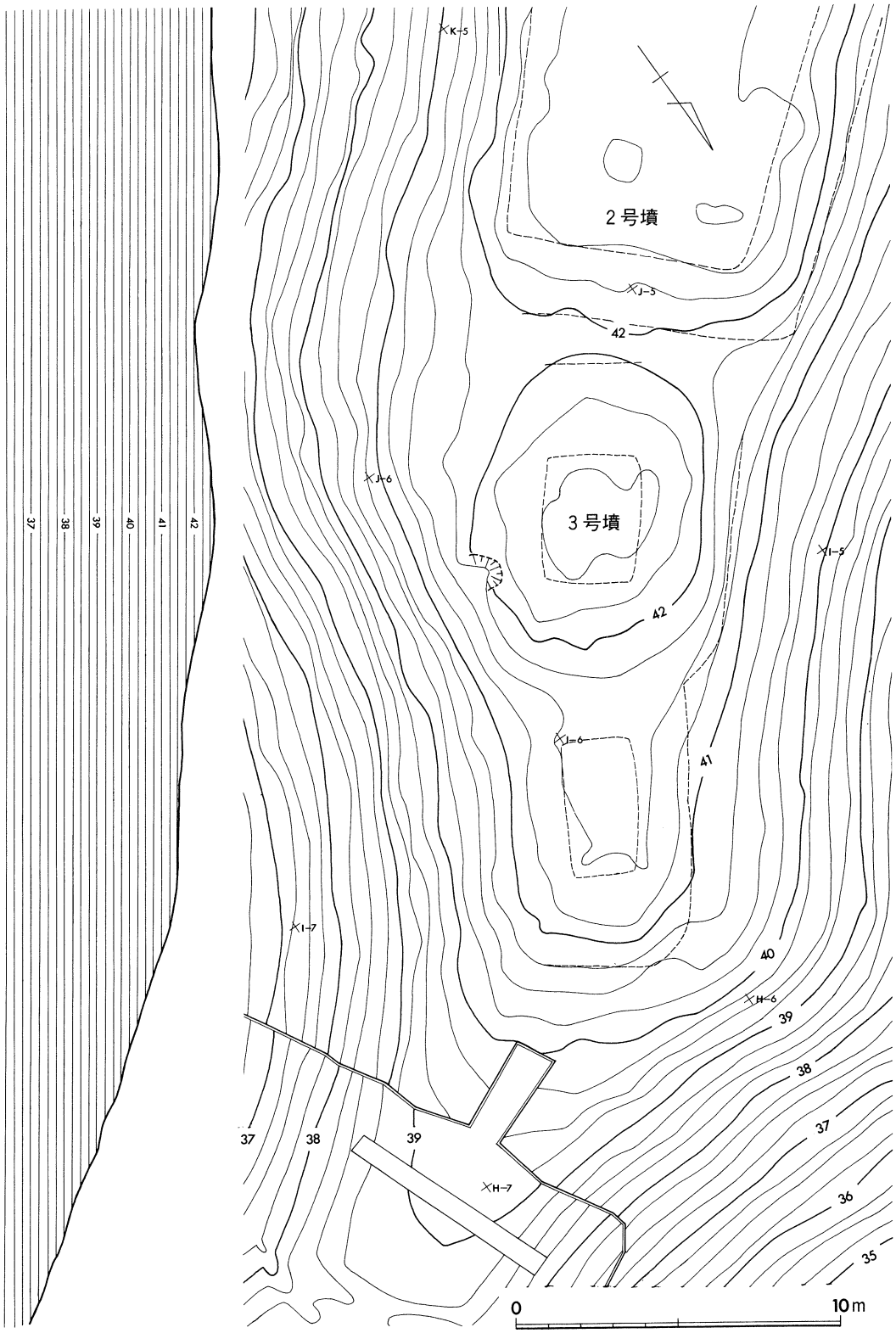
(3)　3号墳

2号墳の東側に隣接する前方後方墳である。丘陵尾根に溝を設け、地山を削り出すことによって墳丘としている。こうして造られた墳丘であるため、本来一続きの尾根である2・3号墳墳頂はほぼ等しい標高値を示している。この溝の幅は、現状では上端6.5m、下端で1.5mを測る。

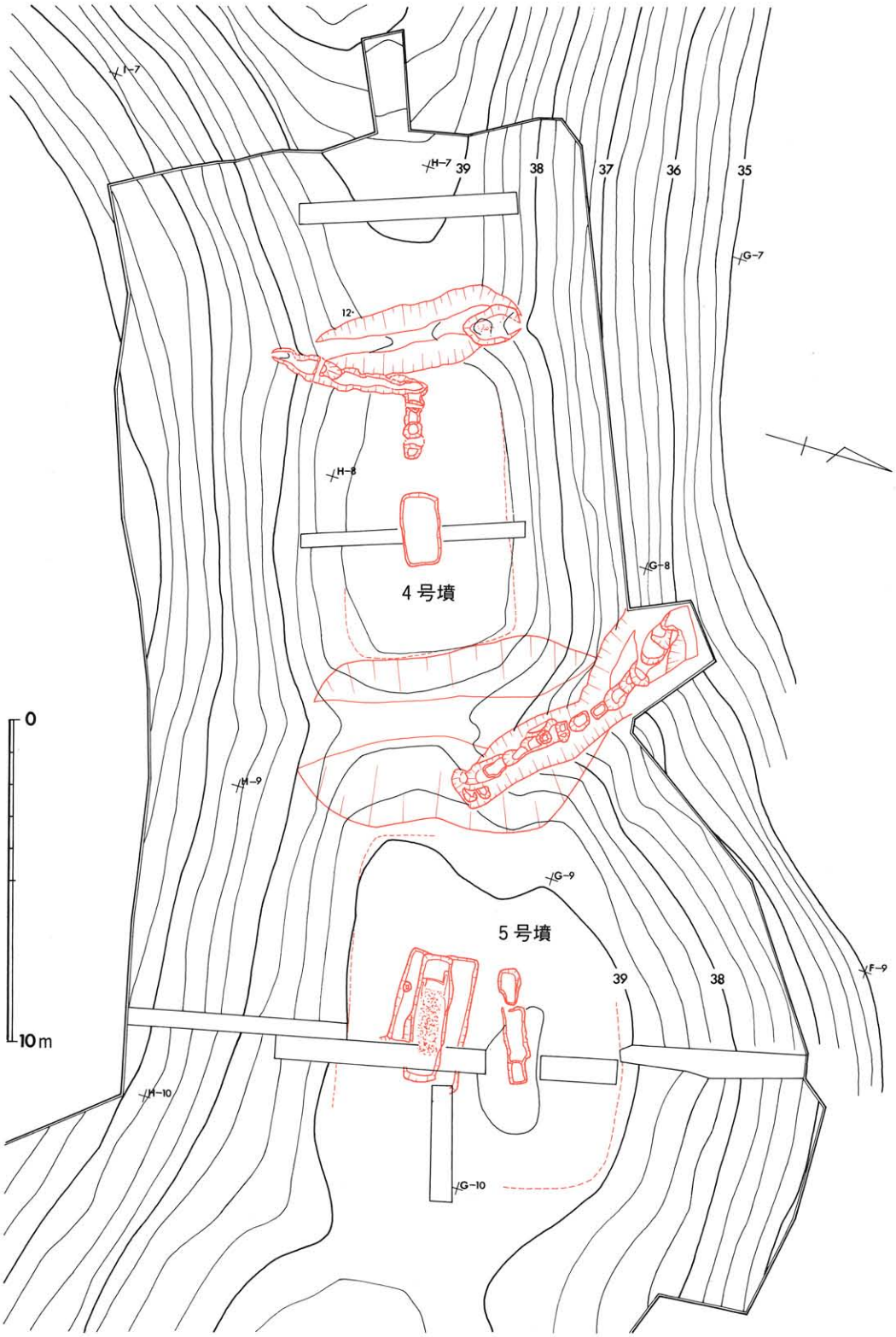
墳丘は主軸沿いに全長19mで、後方部長10m、前方部長9mである。南東斜面の墳端が明瞭でないので幅は明らかでないが、後方部で約9m、前方部で約6mを測るものと考えられる。

後方部は斜面の傾斜が緩やかで、墳頂平坦面は4×3mと狭い。墳頂の標高は42.6mで、西側溝底との比高は0.5mである。前方部はくびれ部から端部まで開かず、高さも、後方部の傾斜変換点からほとんど変らずに前方部上端に至っている。しかし、墳裾の標高は大きく異なり、2号墳側の墳裾の前方部墳裾とは約1.3mの高低差がある。傾斜をもつ尾根上に築かれた墳丘であるためと考えられる。

この3号墳は本古墳群中唯一の前方後方墳であり、大形の方墳である2号墳とともに注目される存在である。



第18図　3 号 墳 墳 丘 測 量 図



第19図　4・5号墳墳丘測量図

(4)　4号墳

2・3号墳の位置する高所が大きく降り、5号墳墳頂で再びピークを迎えるまでの丘陵鞍部に位置する古墳である。墳頂の標高は38.75mである。

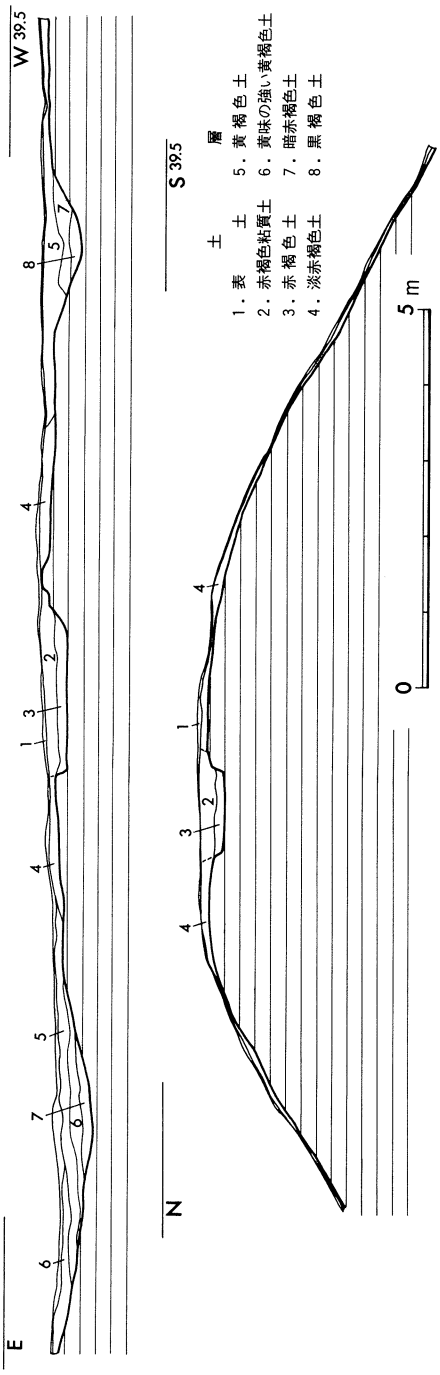
丘陵尾根に東西2本の溝を設けて方形台状の墳丘を区画し、東西長辺11m、南北短辺8mの規模を有している。本来は若干の盛土を施していたものと考えられるが、そのほとんどが流出しており、表土下わずかで基盤層となる。この基盤層は墳丘中央やや西寄りで、わずかに盛り上がりを見せる。墳丘南北の斜面には加工の痕跡は認められず、それぞれの自然傾斜のまま降っている。

墳頂平坦面は東西長辺8.5m、南北短辺5.5mで、東側溝底との比高は0.4mである。墳丘東西を区画する溝は、東側溝で幅6m、深さ0.4m、西側溝で幅2m、深さ0.35mを測る。この溝内には黒褐色土がつまっており、この覆土中からは須恵器片が採集されている。

墳頂平坦面ほぼ中央に小規模な素掘りの墓壙が掘られているほか、墳丘南斜面から4号墳西側溝をかすめるように階段状遺構が登っており、墳頂平坦面で屈曲して途切れる。また西側溝底北端で指頭大の円礫を含む浅いピットが検出されている。調査区内では、本墳に伴うと考えられる遺物の出土は見ていない。

なお、4号墳西側にも緩斜面が続いており、遺構の存在が推定されたので、この部分についても調査したが、須恵器細片を採集したにとどまり、何らの遺構も検出されなかった。

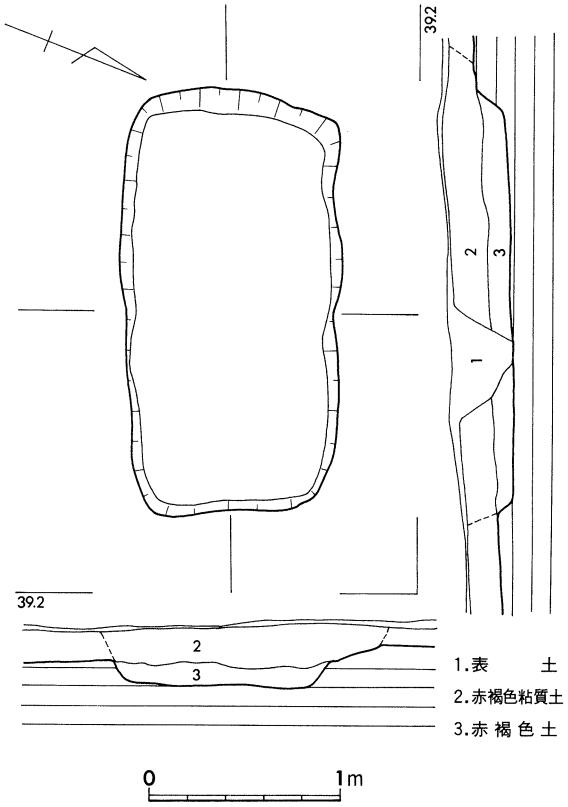
主体部　墳丘のほぼ中央に掘り込まれている素掘りの土壙で、平面形は隅丸の長方形を呈する。主軸を丘陵尾根に一致させ、E－23°－Nとほぼ東西を向く。検出面での規模は東西2.2m、南北1.2m、深さ0.15m



第20図　4号墳土層図

である。

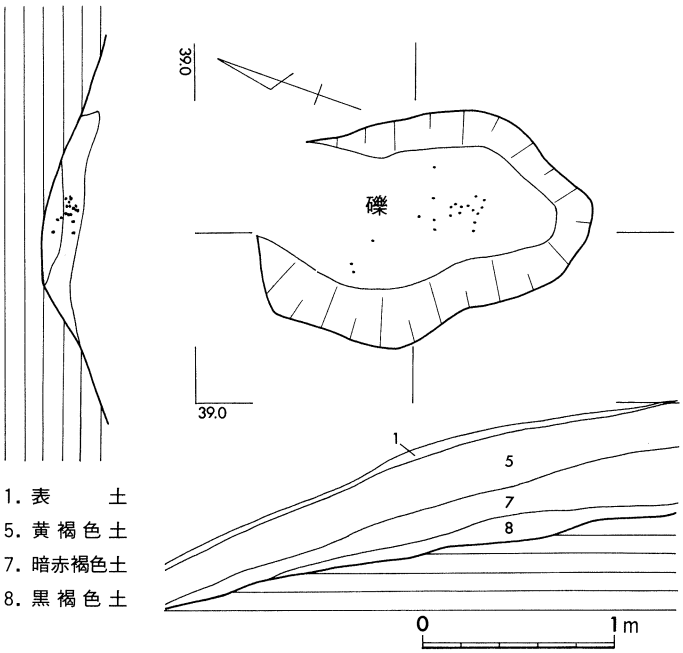
墳丘上面の土砂が流出しているため、土壙の下部のみが残存しているが、墳丘縦・横断面図を見ると、主体部西・南側で地山が大きく盛り上がる部分があり、この部分も含めて考え得るならば、この主体部は二段掘りのものであった可能性がある。墳丘は主に地山の削り出しによるが、この部分でわずかに二段掘りの状況が残り、盛土をしている他の部分では検出できなかったと考えられる。墓壙底面は西側が0.09m高くなっており、頭位は西を向くものと考えられ、主に東を頭位とするこの古墳群中では特異な存在である。床面で木棺の痕跡などは検出されず、また副葬品等の遺物もなかった。



第21図　4号墳主体部実測図

西溝底土壙　墳丘西側溝北端で指頭大の円礫を含む土壙が検出されている。溝の底をわずかに掘りくぼめただけのもので、長辺1.7m、短辺1.2mを測る。底面は不整形な楕円の平面形を呈する。深さは約0.2mを測るが、北側で掘方は途切れ、墳丘斜面の傾斜に続いている。土壙内の覆土は溝最下層の黒褐色土であった。

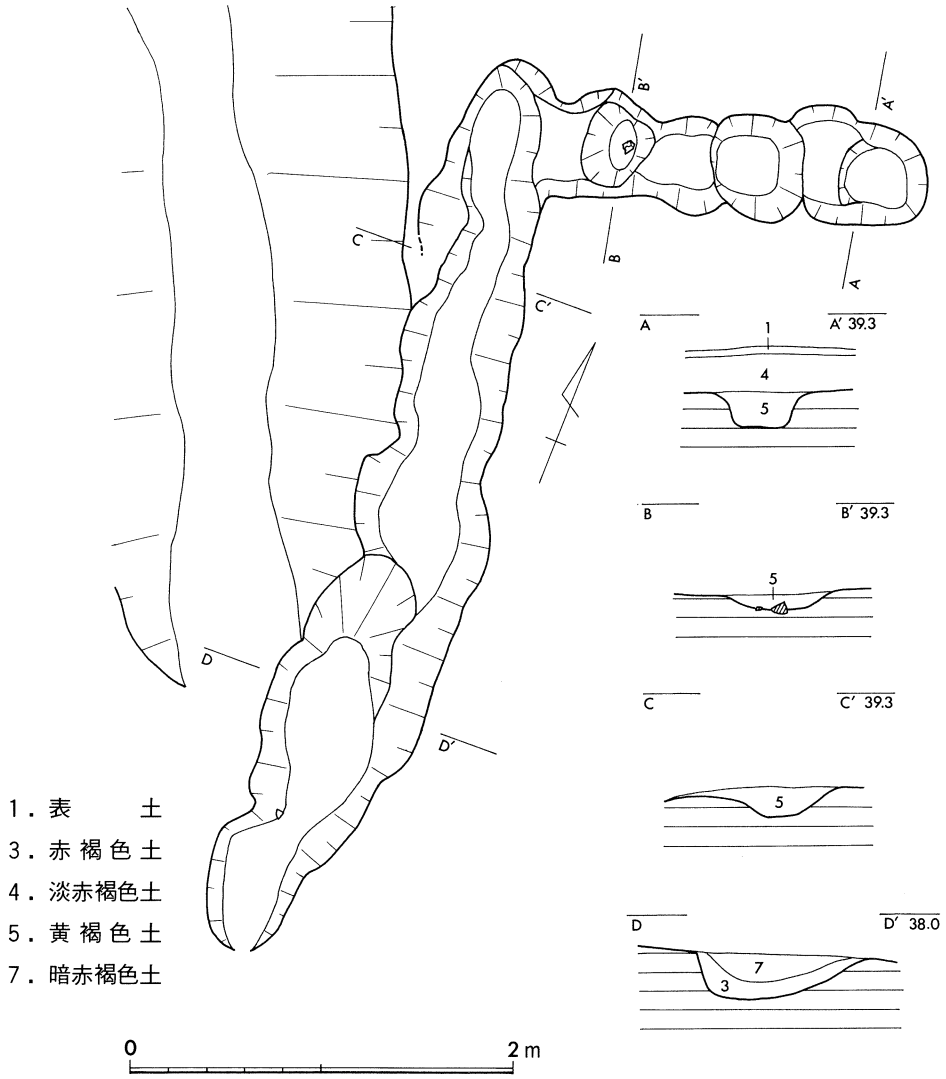
礫は約20個が検出されているが、遺構の性格は不明というほかはない。



第22図　4号墳西溝底土壙実測図

階段状遺構　墳丘南斜面から西側溝をかすめるようにして登り、墳頂平坦面で大きく東方へ屈曲して途切れている。全長は約7.5m、幅は0.5～0.8mである。階段状遺構と呼んではいるが、墳丘上では「階段」というよりも土壙の列、墳丘斜面でも浅い溝とでも呼んだ方がふさわしいものである。覆土は、斜面下方で赤褐色系の土層だが、それ以上の部分では黄褐色土となっている。覆土中に地山の角礫をわずかに含んでいる。斜面の部分にはほとんど段は認められず、この遺構の性格も不明といわざるを得ない。

なお、この遺構が4号墳西側溝を一部壊して設けられている点、遺構下部でわずかに須恵器小片を含んでいる点などから、第1主体築造後一定の期間を経た後に造られたものと考えられる。



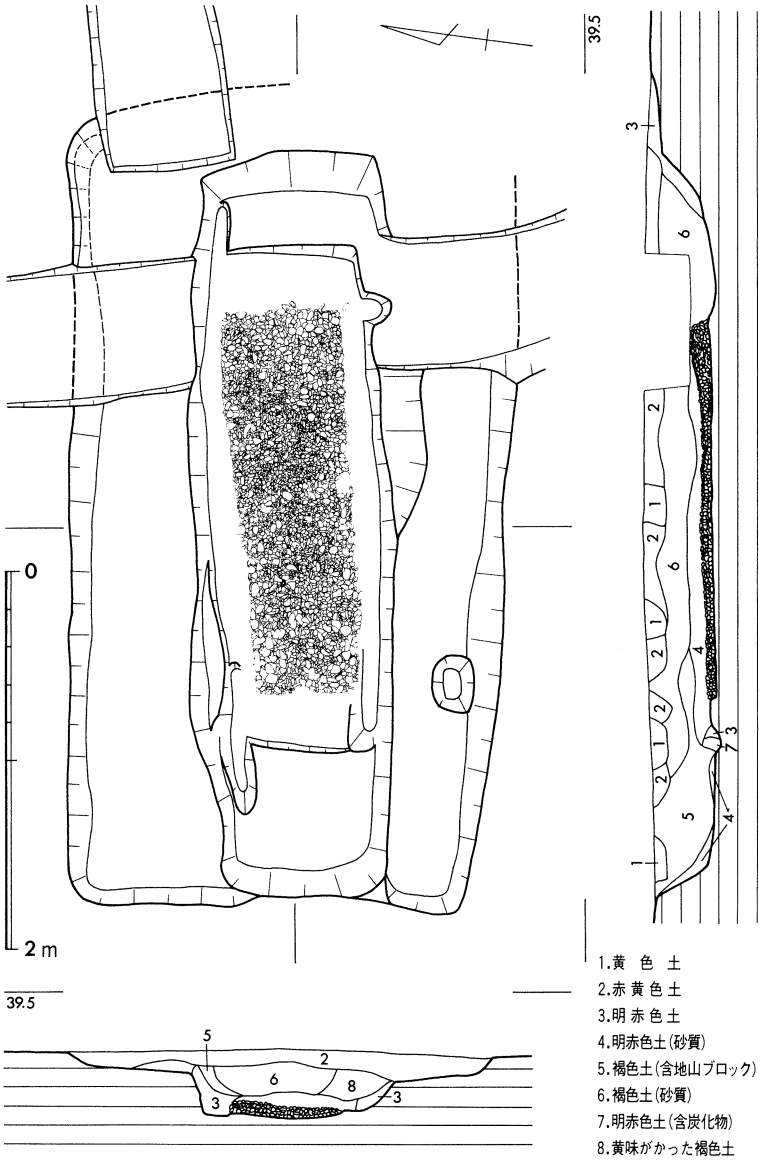
第23図　　4号墳階段状遺構実測図

(5)　5号墳

4号墳の東に接して営まれるもので、尾根に直交する溝によって方形墓域が区画されている。墳丘は東西約16m、南北約15mを測り、墓域を区画する溝は、西側は4号墳と、東側は6号墳とそれぞれ共有している。西側を区画する溝は長さ10.0m、幅5.5m、深さ0.4mを測り、東側もほぼ同様な規模と思われる。

2条の溝に狭まれた墓域上面の表土は、調査以前に重機によって削平されているため明らかにしえなかったが、墳丘測量時には目立った高まりは認められなかった。地山は全体に明褐色を呈し、重機による攪乱のため、遺構の検出にはきわめて困難な土質であったが、墳頂部で交差するサブトレンチを2本設定し、2基の主体部を検出した。

第1主体　墳丘中央やや南寄りで検出したもので、主軸はE－7°－Nを測り、墳丘主軸および尾根方向と平行である。構造は長さ4.2m、幅2.4m、深さ約0.3mを測る土壙の中央に、内法長2.1m、幅約0.6mを測る箱式木棺を埋置した後、床に指頭大の礫を敷きつめている。土壙内には、北長手沿いに幅0.5m、南長手沿いに幅0.4mのテラスが設けられ、南側テ



第24図　　5号墳第1主体実測図

ラスでは径約0.25mの土壙1が検出された。

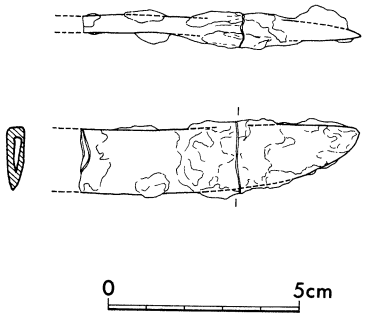
礫床の幅は東側で0.62m、西側で0.52mを測り、被葬者の頭位は東方を指すものと推定された。また、副葬品は礫床北東隅で鉄製刀子片1が出土した。

第1主体部出土遺物　鉄製刀子は茎部を欠損し、全体に銹化が著しいが、残存長7.2cm、幅2.8cmを測る。12号墳第1主体出土の刀子に似たものと思われる。

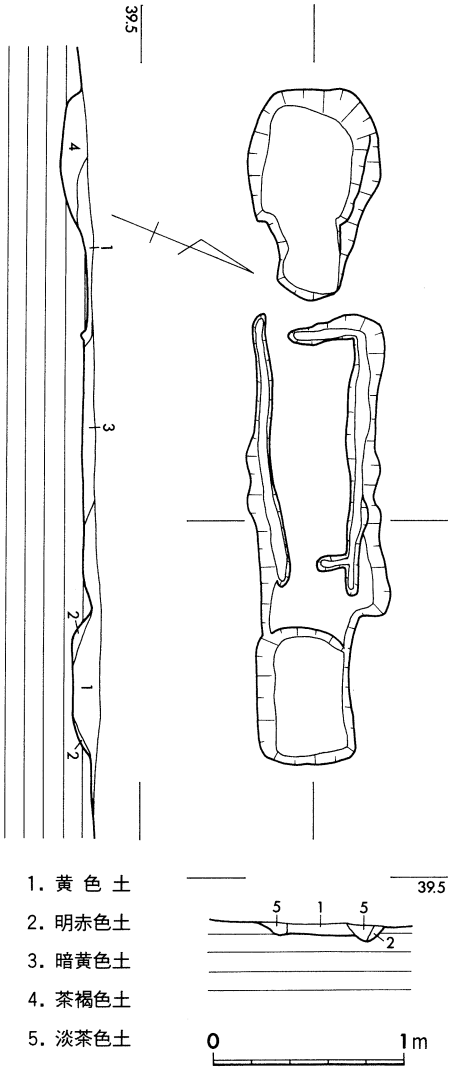
第2主体　第1主体の北側に、尾根方向に穿たれた狭長な素掘りの土壙である。この土壙は、土層観察用畦の一部が重機の攪乱からまぬがれていたため、その掘り込み面を確認することができた。表土直下約10cmの所から掘り込まれており、その面から掘り込まれていたとしても、土壙床面まで6cmを測るに過ぎないものであった。しかし、これでは被葬者を埋葬するにはいささか浅く、本来はいま少し上面から掘り込まれていたものと推定される。また、墳丘が形成されている付近の地山は極めて軟弱であることから、上部は流れ去った可能性も考慮されよう。

検出した主体部は、E－23°－Nを測り、ほぼ長方形の土壙を3つ連ねたような形である。中央の土壙は長さ1.6m、幅0.7m、深さ0.06mを測り、底部壁沿いには棺材を固定したとみられる浅い溝が四方に認められる。長手板を仕組んだとみられる1.4mの2条の溝は、南西側が北東側より広い造りとなっており、このことから、被葬者の頭位は南西側であると推定された。また妻板らしき痕跡もあるが、両妻板間の長さは1.1mと非常に短いものである。

南西側の土壙は長径1.1m、短径0.7m、深さ0.14mを測る不整形なもので、やや丸味のある平底である。北東側の土壙は平面方形を呈し、長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.14mを測り、底はほぼ水平である。



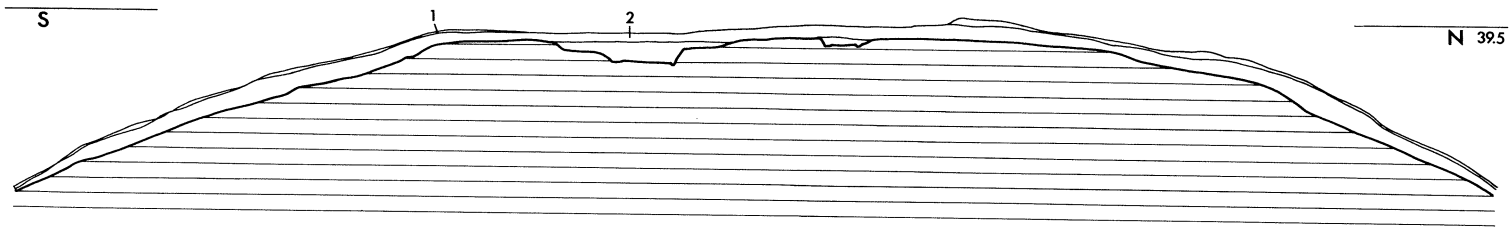
第25図　5号墳第1主体出土遺物実測図



第26図　5号墳第2主体実測図

階段状遺構　5号墳西側の北側斜面で検出されている。斜距離で9.7m、幅は上端付近で1.35m、下端では2.90mとなっている。検出面からの深さは上端で0.30m、下端では1.30mと深くなる。階段の段は比較的明瞭で22段を数え、さらに調査区外に続くと考えられる。なかには「段」と呼ぶよりも土壙と呼ぶ方がふさわしい部分もある。横断面は底の平らなV字状を呈する。この階段状遺構は北側斜面を登り、4・5号墳を区画する溝を一部破壊して設けられており、4・5号墳築造後に造られたものと考えられる。付近で点々と須恵器が採集されていることも矛盾しない。

第27図　5号墳階段状遺構実測図　(1/60)



5号墳

1. 表　　土

2. 明褐色土

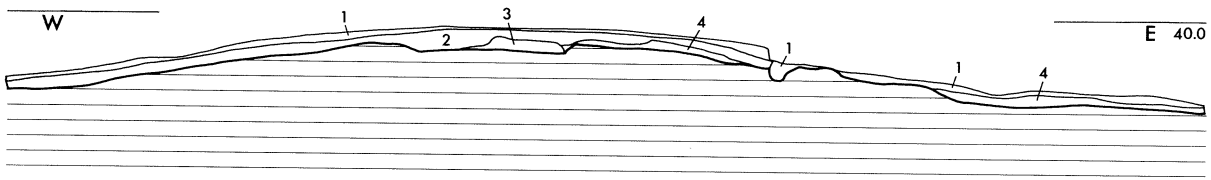
6号墳

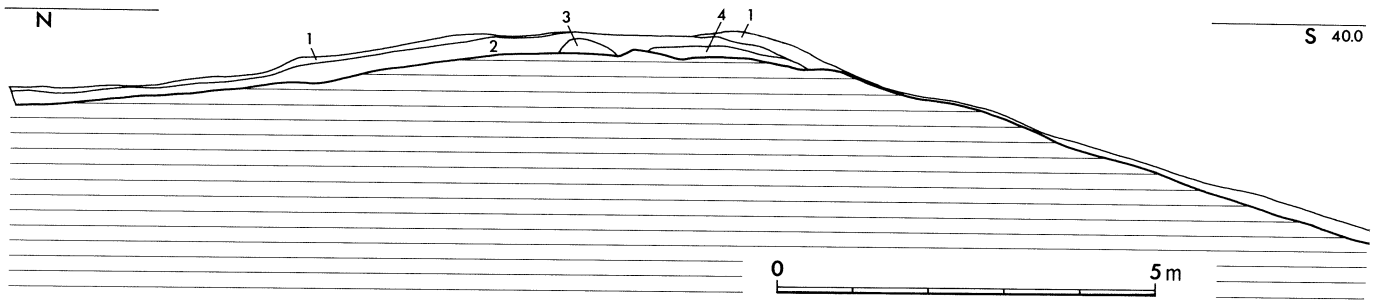
1. 表　　土

2. 黄味がかった褐色土

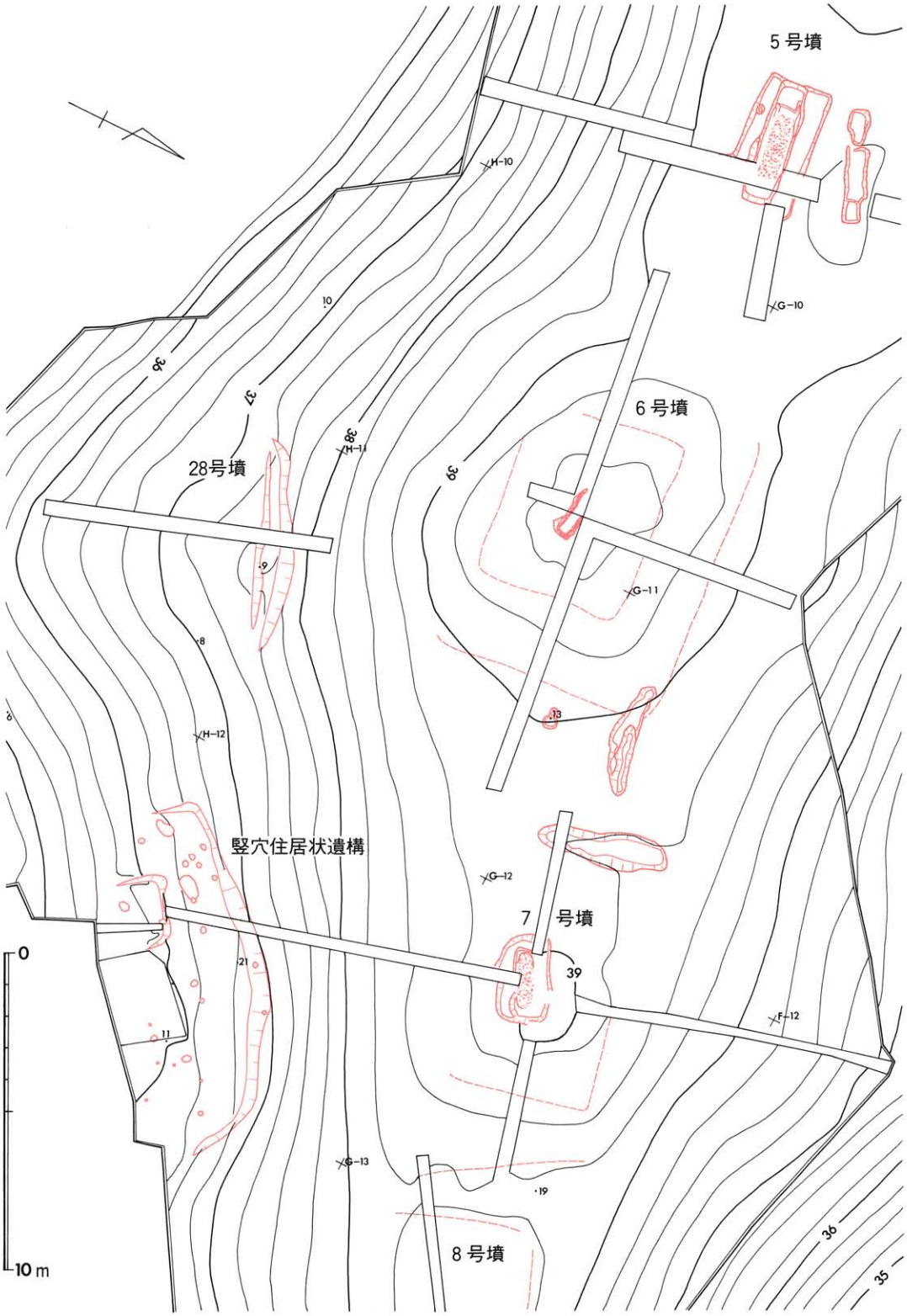
3. 黄　色　土

4. 淡 灰 色 土





第28図　5・6号墳土層図



第29図　6・7・28号墳墳丘測量図

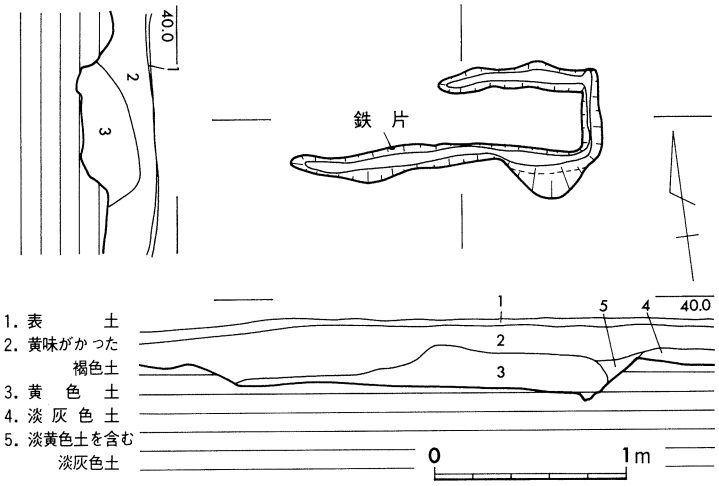
(6)　6号墳

5号墳の東側に隣接し、尾根に直交する2本の溝によって方形墓域が画されている。西側の溝は5号墳と、東側の溝は7号墳とそれぞれ共有する形となっている。墳丘は、東西13m、南北11mを測り、わずかにだが高さ0.7mが認められる。標高は39.8mである。

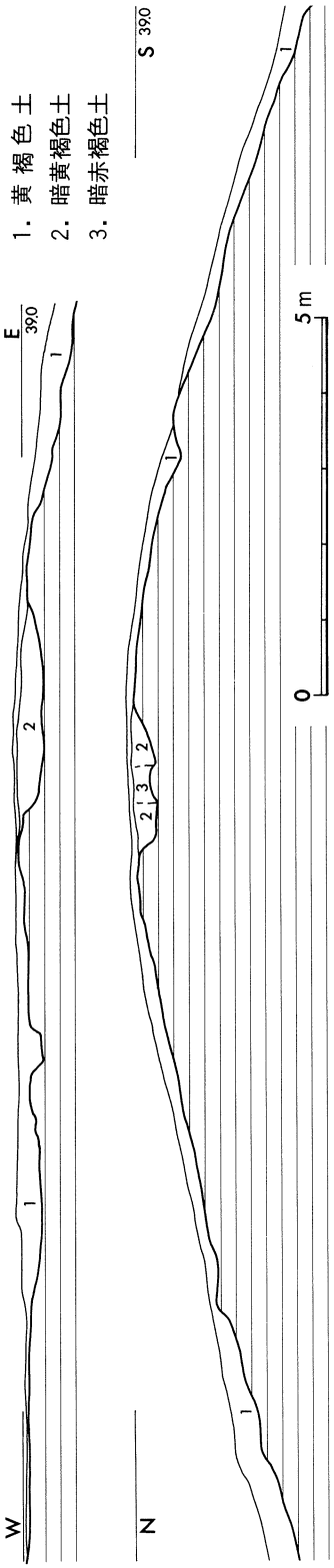
本墳が第Ⅲ支群の第4号墳以東の中で立面的に見えるのは、立地が比較的高位置にあることに加え、後述するように、盛土が施されていた可能性があることも関係する。

調査は、尾根筋中央とそれに直交する土層観察用畦を設定して実施し、腐蝕土を除去すると、下は黄褐色の軟弱な地山であった。墓域を画す溝はその地山に掘り込まれているが、溝の掘り込みや肩の稜線は不明瞭で、溝に向かって緩やかに下降する線は、溝底に達すると隣接する墳丘に向かって再度緩やかに上昇していく。

墳丘中央で検出された主体部は平面ほぼ「コ」の字状を呈し、半周する溝状のものである。これは、木棺の長手板および妻板を仕組んだ痕跡であろうと判断された。残存規模は、長手板の痕跡は長さ1.5m、幅0.05m、妻板の痕跡



第30図　　6号墳主体部実測図



第31図　7号墳土層図

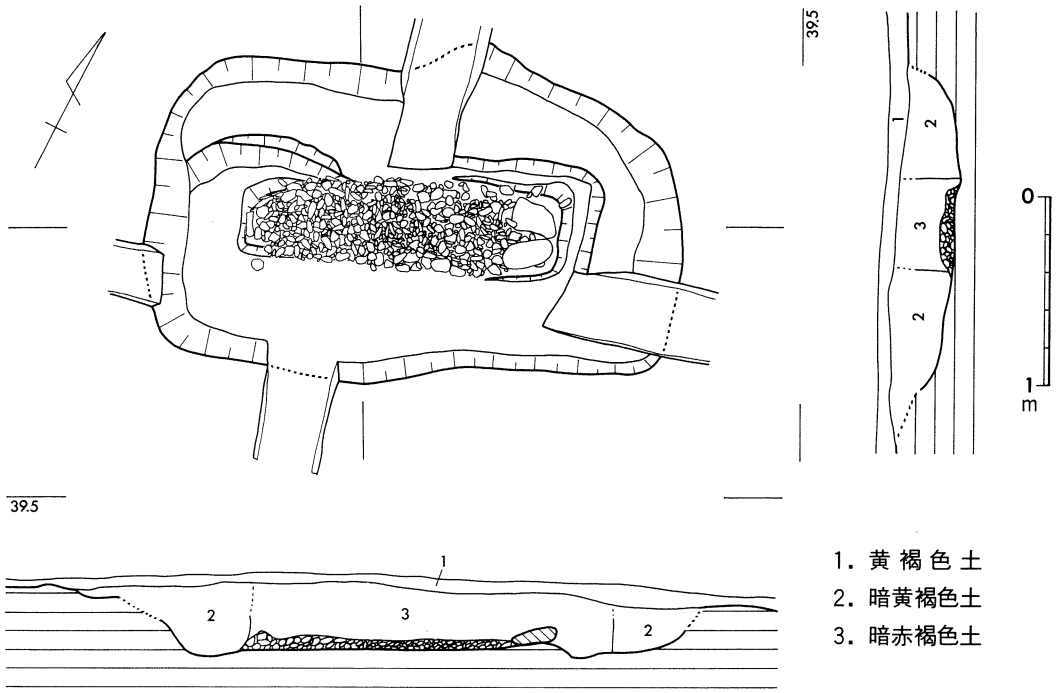
は長さ0.4m、幅0.03mを測り、深さはいずれも0.04m前後である。棺の痕跡から、主軸方向はE－7°－Sと推定される。この痕跡は表土下30cmの位置にあり、埋葬をおこなうにはいささか浅すぎると考えられ、本来はもう少し上面から掘り込まれていたものと推定される。したがって、墳丘成形時には盛土が施されていた可能性が考えられる。

主体部としたものの、床面は礫を敷く等の行為はなされていない。なお、床面のレベルは西方がやや高くなってはいるものの、2本の長手板痕の幅は東方が少し広くなっている。被葬者の頭位がどちらを向くのかは判断しえないが、本古墳群では東位をとるものが大半を占めることから推すとあるいは東位をとるものかもしれない。

出土遺物　主体部内側の長手板沿いで1辺1cm前後を測る薄い鉄片を得た。鉄片は図示しえないほどの小片で、その性格等は不明である。

(7)　7号墳

6号墳の東側に接して営まれており、6号墳との比高差は0.7mで6号墳より低い。前述したように、6号墳との間の溝は不明瞭である。古墳は丘陵の尾根上に築造されており、8号墳との間に幅3.1mの溝を掘り、地山の削平により墳丘を造り出している。墳丘は方形で、長辺12m、短辺10m、高さは東側の溝底から測って0.8mである。



第32図　7号墳主体部実測図

墳丘の中央部から主体部を検出した。地山面から長辺2.8m、短辺1.6m、深さ0.3mを測る土壙を掘り込み、その中央に内法長1.65m、幅0.45mの箱式木棺を埋置した後、床に礫を敷きつめている。土壙の底面は、箱式木棺が安定するように方形に掘り残してある。土壙内の覆土の観察により、木棺のあった部分の土層は暗赤褐色土で、その周囲は暗黄褐色土が入っている。

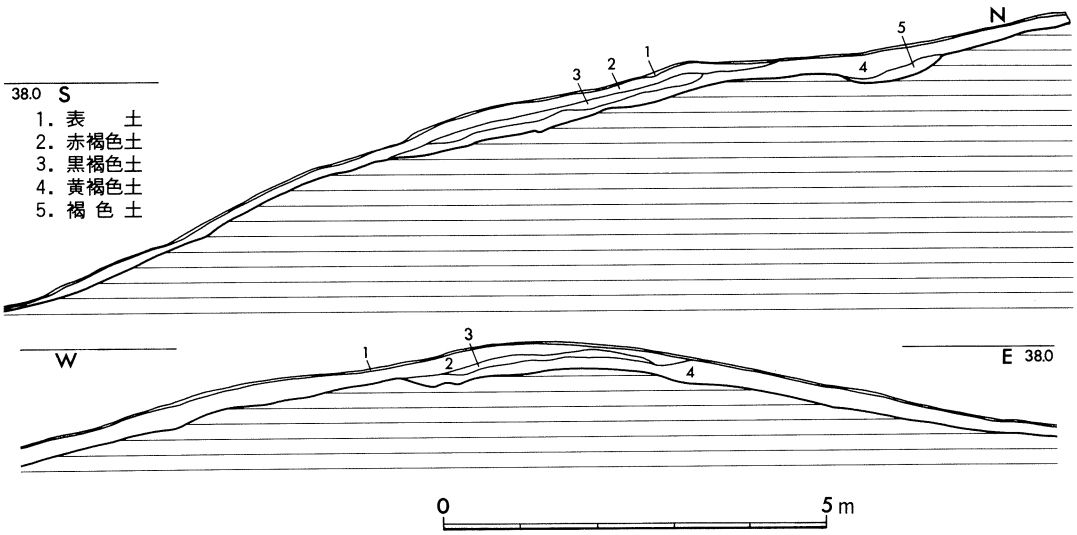
土壙底面の掘り残した部分には、径3～5㎝程の扁平な礫が厚さ約4㎝でほぼ水平に敷きつめられており、他の礫床の礫に比べて非常に大きいことが注目される。礫床の東側には、25×14×7㎝の枕石2個が「ハ」の字状に置かれており、被葬者の頭位は東を向くものと考えられる。また、主軸はE－15°－Nである。

主体部からの副葬品は出土しなかった。しかし本墳に直接ともなうとは考えられないが、東側周溝内より須恵器片が、また北東側の墳裾より紡錘車形鉄製品が出土している。

(8) 28号墳

第Ⅲ支群の位置する東西に延びる尾根が、わずかに突出している6号墳の南側斜面に築かれていたと考えられる。標高は第Ⅲ支群の他の古墳よりも約2.5m低く、37mである。調査前にはわずかにマウンド状の高まりが認められていたが、調査を行なっても主体部を検出することはできなかった。地山はなだらかな傾斜をもって降っており、本来墳丘のほとんどは盛土によるものであったと考えられる。この盛土内に設けられた主体部は盛土の流出とともに失われたものと考えられる。

しかし、わずかに北側で溝が検出されており、これがこの古墳の北側を区画するものであったと思われる。溝はほぼ直線的に掘られ、本来は方墳を意図したもののようで、溝の残存長6.7m、幅



第33図　28 号 墳 土 層 図

約1.2m、検出面での深さ0.2mを測る。この溝の長さが墳丘一辺の長さにほぼ等しいものとすると、一辺10mにも満たない小規模な古墳であったと考えられる。溝内には褐色土が堆積しており、この覆土内に須恵器小片を含んでいるが、時期を決定できるものではない。

そのほか、墳丘各地点で、山陰の須恵器編年[28]Ⅱ期の須恵器蓋杯が採集されている。この遺物をもって28号墳の時期と考えうるならば、同一支群中の1号墳と同時期に築造され、奥才古墳群中では最も新しい時期のものと認めることができる。この古墳と1号墳はともに丘陵尾根から突き出た支脈上に立地し、さらに墳丘のほとんどを盛土によって築成しているなど、多くの共通点を有している。また、1号墳同様、丘陵尾根上での古墳群の築造が終了した後に付け加えるように築造されたものと考えられる。古墳の立地としては非常に劣悪な地点に、わざわざ盛土してまでも墳丘を築造しなければならなかった理由などは不明である。

(9)　8号墳

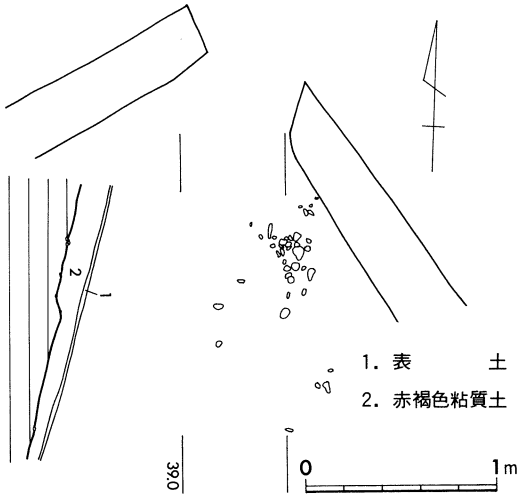
7号墳の東側に隣接し、丘陵がやや北寄りに折れ曲がる尾根上に築造されている。標高は38.6mで、7号墳との比高差は0.5mである。7号墳との間には幅3.1mの溝を掘り、地山削平により墳丘基盤を造り出し、その上に赤褐色の盛土を施している。盛土は0.2mしか残存していないが、築造当時はかなり厚かったと思われる。主体部はこの盛土内から掘り込まれ、地山上面を墓壙底としたものと考えられる。9号墳との間はやや離れており、緩斜面が続いている。

墳丘は、原形をかなり損っているが、方形を呈していると思われる。長辺12m、短辺10mで、高さは西側の溝底より1.5mを測る。

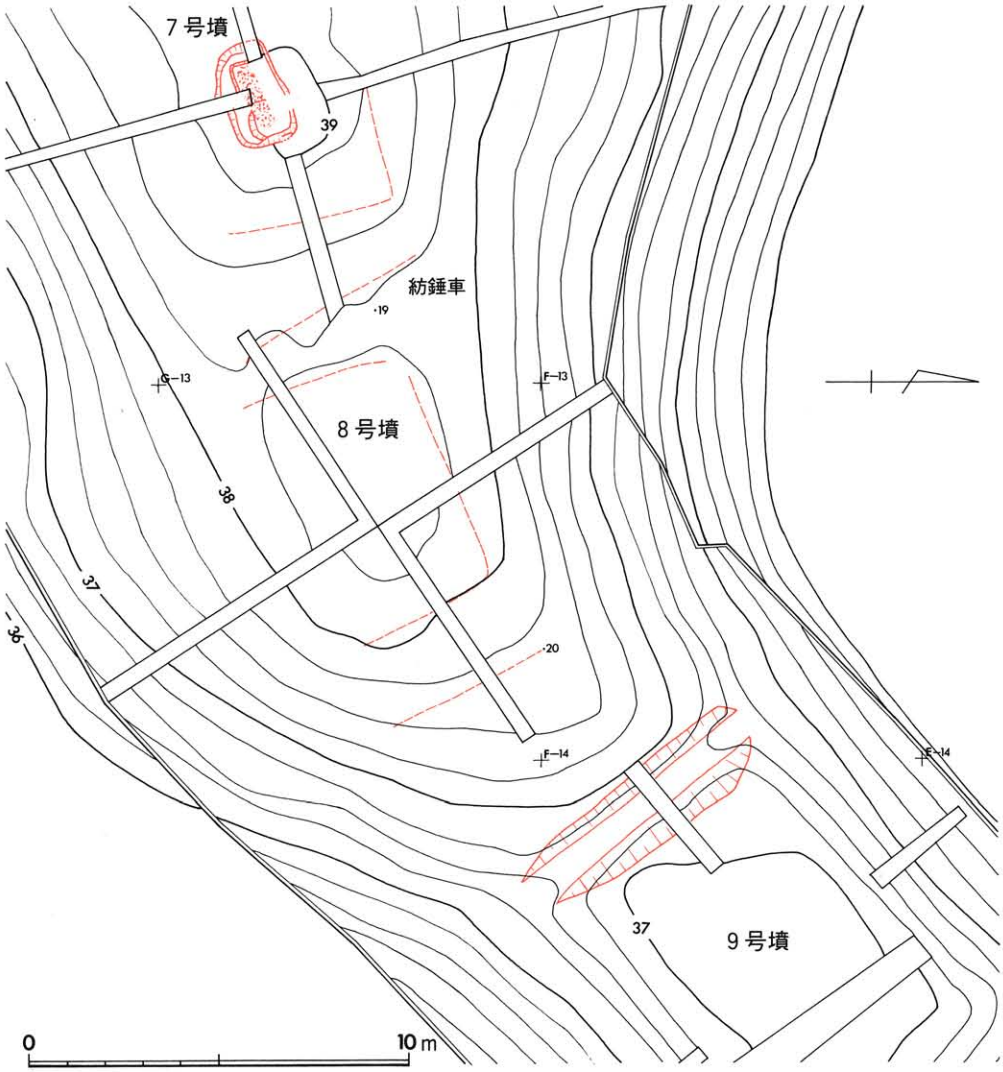
墳頂部北東寄りで、北側と南側の2箇所で指頭大の礫分布が認められた。北側で0.5×0.3m、南側で0.6×0.4mの範囲に分布しているが、地山面に加工が残るのは南側のみで、この南側のものが主体部底の礫床の一部が残ったものと思われる。礫の分布がまばらなため、頭位等もつかめない。

主体部は盛土内から掘り込まれていたが、この盛土が後世流出し、その上耕作や樹根等によって著しい攪乱を受けたため、その残存状態は極めて悪く、検出にも数本のトレンチを入れてやっと確認できたものである。

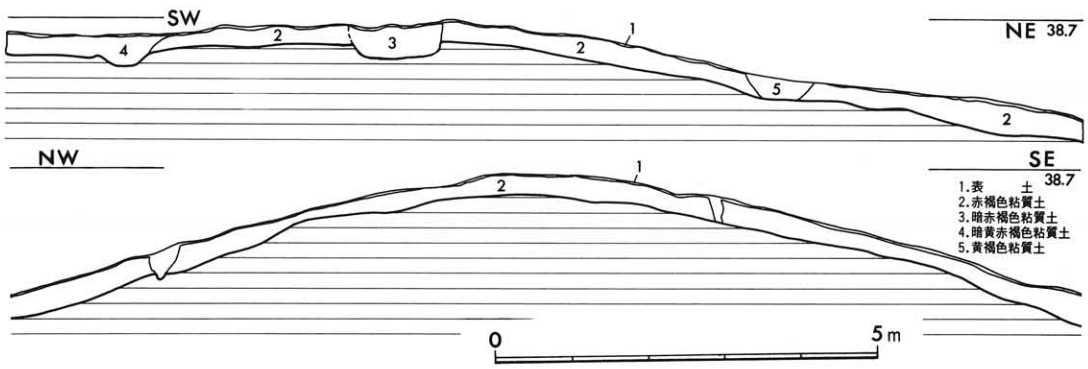
この古墳にともなうと考えられる遺物は出土しなかった。



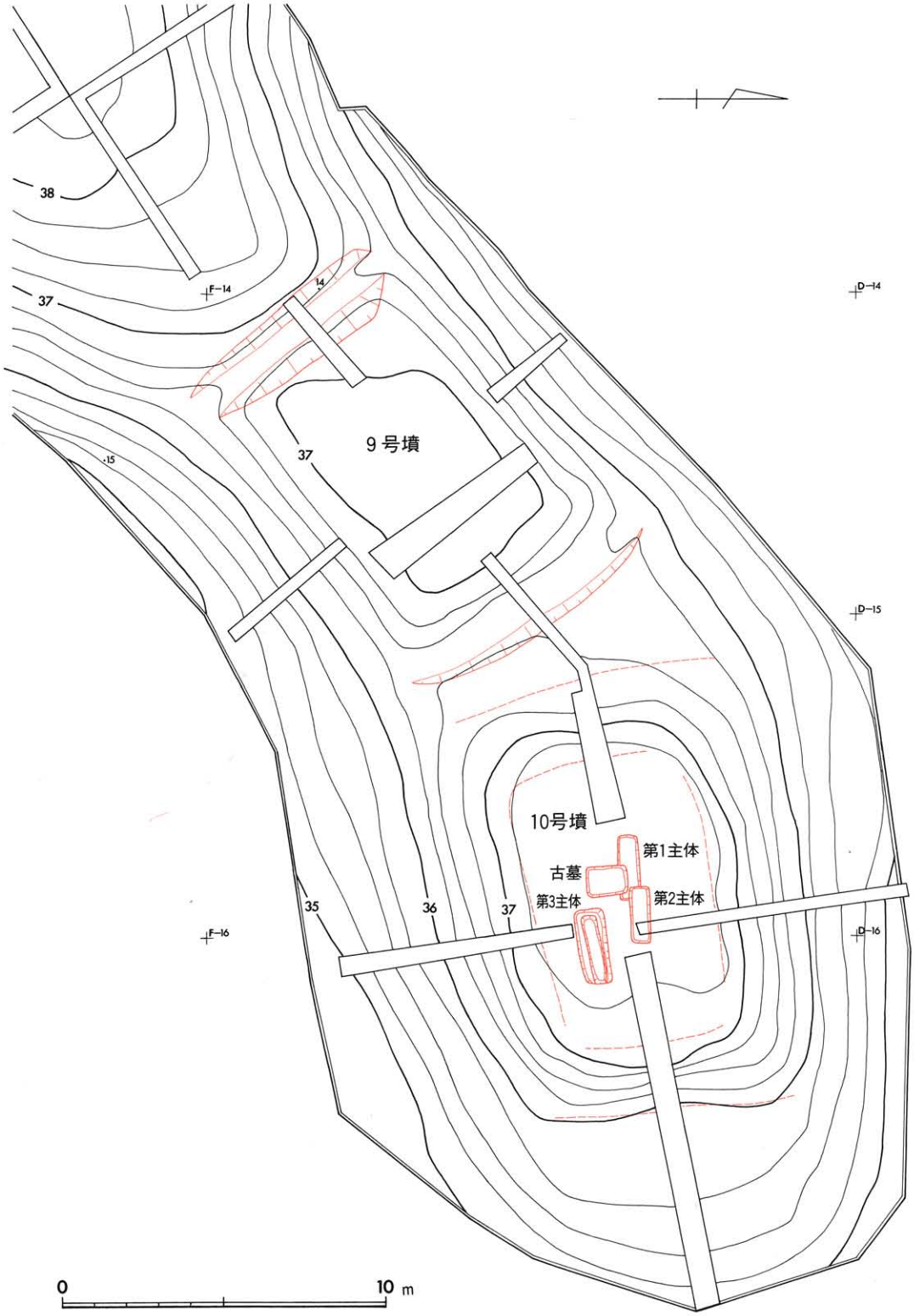
第34図　8号墳礫出土状態実測図



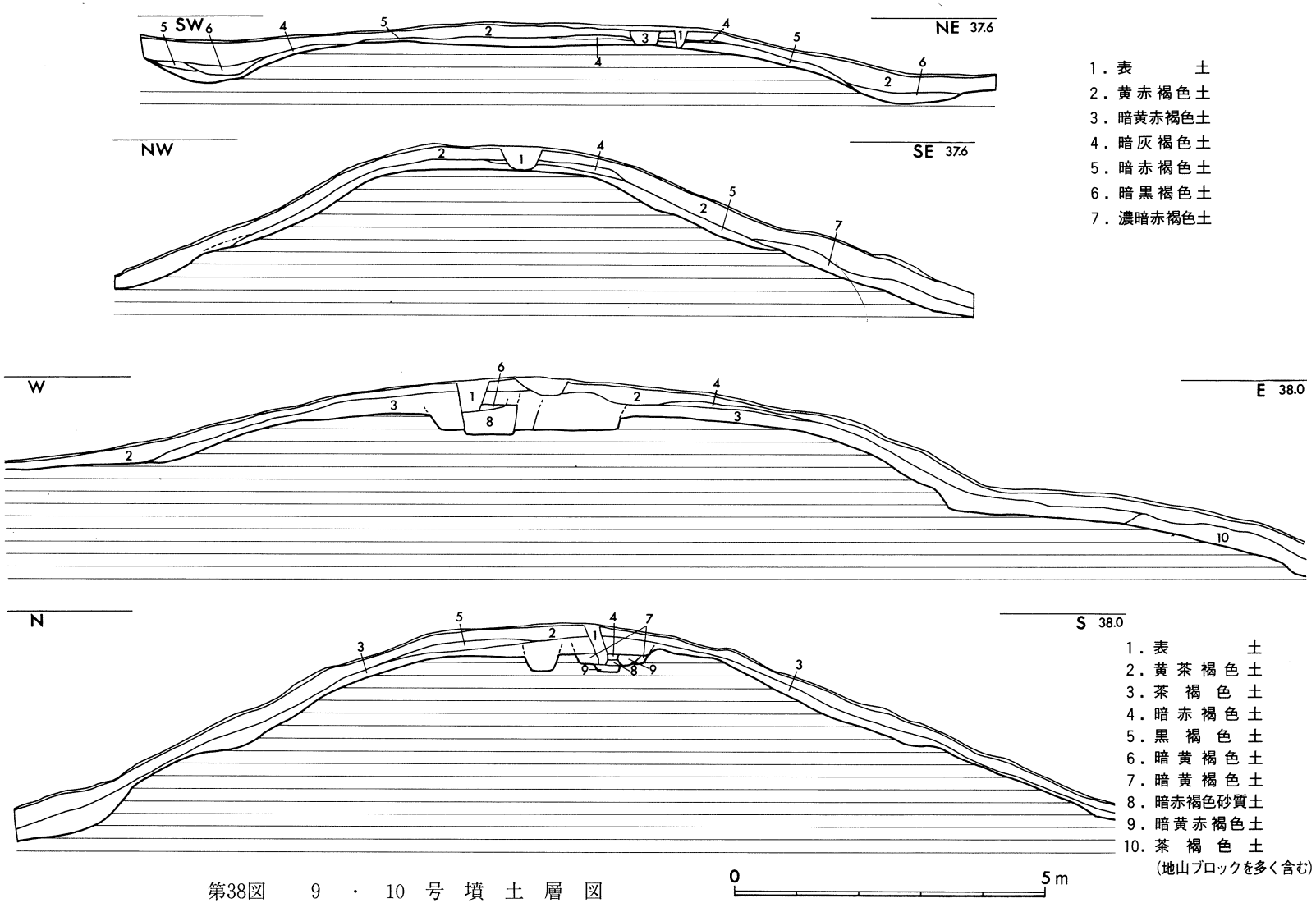
第35図　8 号 墳 墳 丘 測 量 図



第36図　8 号 墳 土 層 図



第37図　9・10号墳墳丘測量図



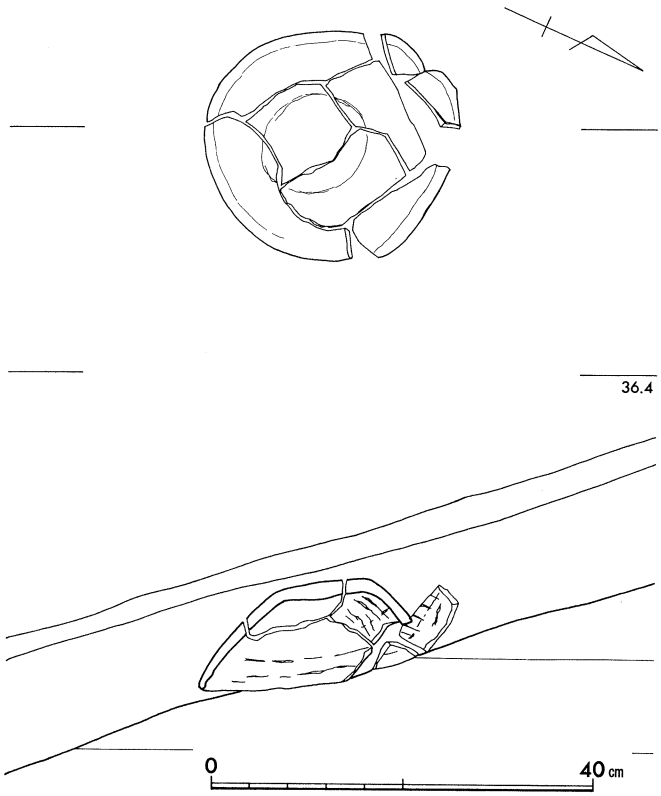
第38図　9・10号墳土層図

⑽　9号墳

8号墳と10号墳の間、第Ⅲ支群の尾根が東へ向けて8号墳から降った場所に位置する。調査前より、9・10号墳は長方形を呈する方墳で高まりをもっていることは確認できた。第Ⅲ支群中の5～8号墳と比較しても規模もやや大きく墳丘も高い古墳で、周囲から見ても容易に確認できた。

9号墳の西側は、8号墳より尾根が一段と降った後平坦になる所に浅い溝を掘っており、東側の10号墳との間には、幅2.5mの溝が掘られている。丘陵斜面の裾は不明瞭で墳丘と尾根との区別は容易ではないが、36mのコンターが回るあたりで斜面の傾斜が緩やかになっており、裾と考えて良いと思われる。

調査は、墳丘主軸方向にベルトを設け、中心部分とそれに直交するようにベルトを設け精査を行なった。しかし、地山が赤褐色の軟弱な土のため、表土から0.35m掘り下げたが主体部が検出できず、ベルトに沿って幅0.5mのトレンチを入れて土層の観察を行なった。墳頂部では、表土の下に0.2mの厚さで黄赤褐色土、その下が0.15mの厚さで暗赤褐色土、その下が地山となっていた。主体部は検出されなかったが、これは地山の土が軟弱なために盛土とともに表面が流失したか、本来主体部があったにもかかわらず、ベルトの土層を観察しても掘り方と思われる土層の変化を確認し得なかったものと思われる。

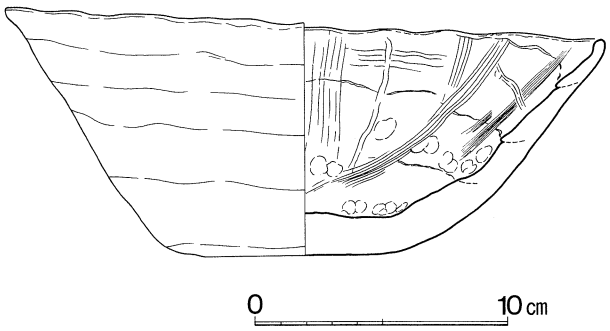


第39図　9号墳斜面土師質土器出土状態実測図

墳丘は地山を切削加工しており、整美な造りの方墳である。墳丘の長辺11m、短辺10m、北東側の溝底から測った高さは1mである。墳頂部の平坦面は長辺8m、短辺6mを測る。

墳頂部からの出土遺物はなく、南側墳裾から表土除去時に土師質土器1が出土している。墳丘斜面の地山面に貼り付くように伏せた状態で出土した。

出土遺物　土師質土器（第40図）は鉢というべき形態のもので、底部は平底で、体部から口縁部へ向け緩やかに広がって行き、口縁部がやや内傾している。端部



第40図　9号墳斜面出土遺物実測図

は丸味をもつ。表裏には粘土紐の巻き上げ痕が残り、指頭により整形している。その巻き上げ痕と直交するように、底部より口縁部へ向け強くナデ上げている。口径24㎝、底径9㎝、器高10㎝を測り、黄味がかった赤褐色を呈す。

この土器は古墳と時期的な隔たりがあると思われるが、他に類例がないため、時期の断定は困難である。

⑾　10号墳

第Ⅲ支群の東端、9号墳の東側に位置する方墳である。9号墳との間には幅2.5mの溝が穿たれており、11号墳との間は径により切断されているが、丘陵自体は本来緩やかな傾斜で続いていたと思われる。

本墳の南側の丘陵を下った位置に12.5×5.0mの平坦面があり、墓地となっていた。本墳の東側には、幅4.0mのテラス状の平坦面が造り出されている。墳丘は地山を切削加工しており、東西長14.0m、南北長9.0m、西側の溝底から測った墳丘の高さは0.7mである。9号墳と同様に極めて整美な造りの方墳であり、遠望しても方墳であることが明瞭に確認できるものである。

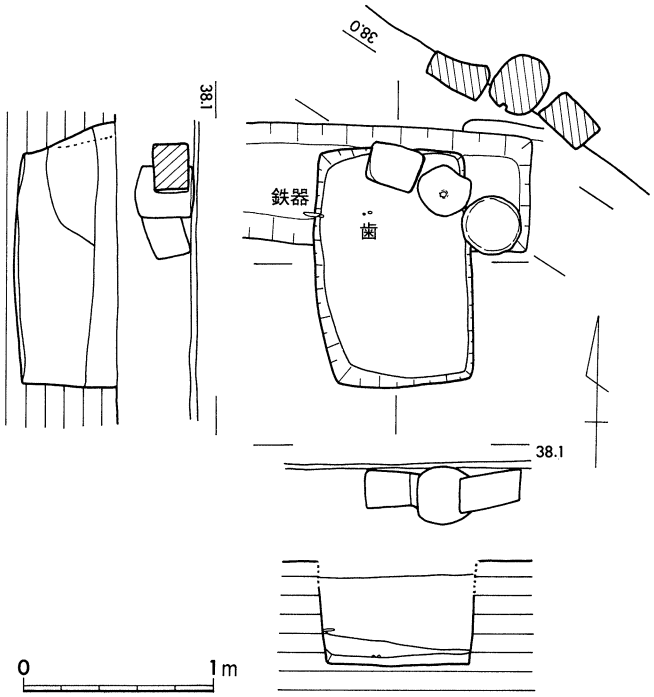
墳頂部には7.5×5.5mの平坦面があり、墳丘の長辺と平行するように第1・第2主体が検出され、第1主体の南側にはこれらと平行して第3主体が検出された。また、第2主体と切り合って直交するように土壙が穿たれている。この土壙上には五輪塔が3個並んで出土しており、第2主体よりも後に古墳を再利用して古墓であろうと思われる。

古墓　表土除去後、古墓の北東コーナーを斜めによぎるように、五輪塔の水・地輪が3個並んで出土した。これらは同一のレベルにより出土しているが、本来は土壙上に重ねて積まれていたと考えられる。この五輪塔を取り除いて精査したところで墓壙を確認した。赤褐色の地山に穿たれた素掘りの土壙で、長辺1.2m、短辺0.8m、深さ0.54mである。土壙の四壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平である。

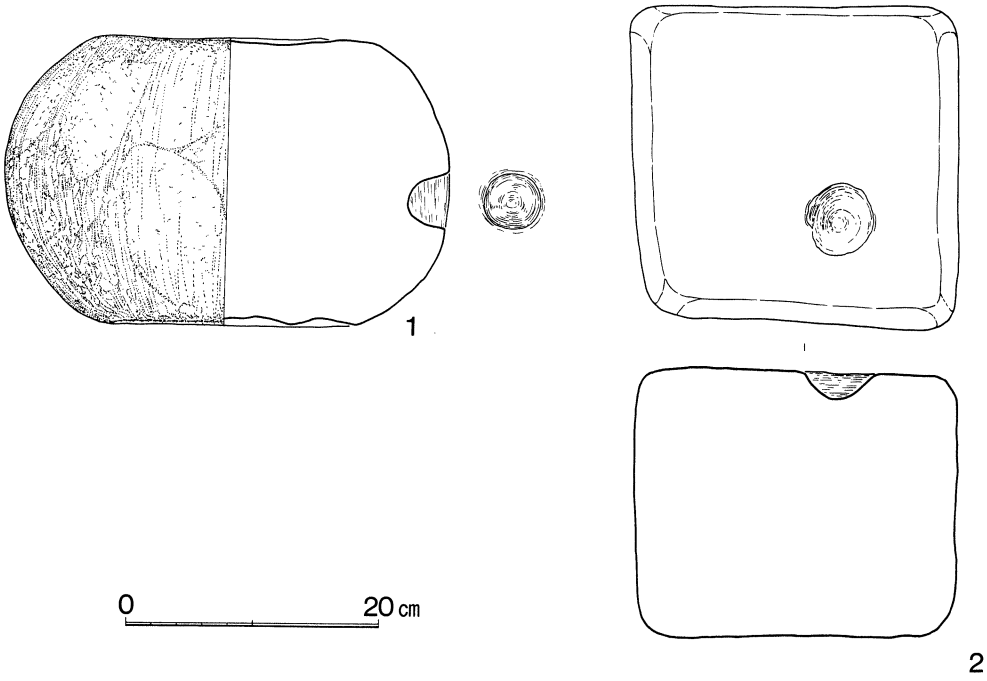
土壙内からは歯牙1と不明鉄器1が出土している。この鉄器は土壙の床より0.16m浮いて、第2主体にもかかったような位置にあり、古墳にともなうのか第2主体にともなうのか断定しかねるものである。

五輪塔　古墓の上面において、水輪1、地輪2が並んで出土している。本来は積まれていたものであろうが、セットとしては空・風・火輪を欠いている。

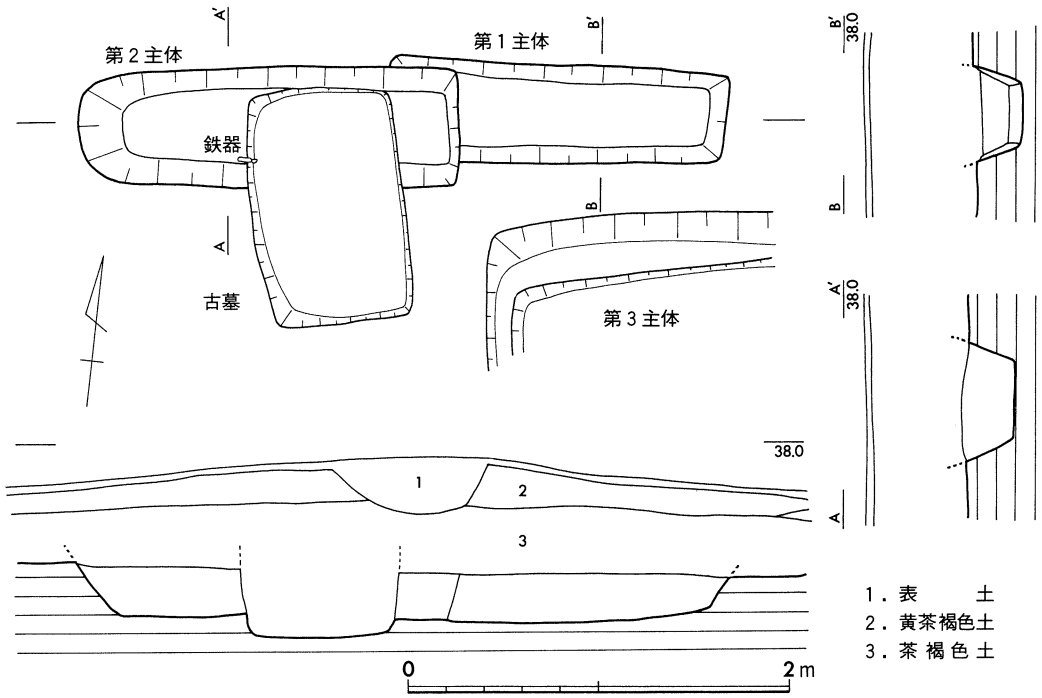
水輪（第42図１）は高さより上下の平坦面の径がやや短いものである。上面の径21㎝、下面の径20㎝、高さ23㎝、最大径35㎝を測る。側部に丸みをもち、径4.5㎝、深さ3.2㎝の穴が穿たれているが、この穴は各輪を重ねる際に役目を果たさないことから、二次的なものと思われる。地輪（第42図２）は立方体を呈し高さより幅がやや広い。最大幅26㎝、高さ21㎝を測る。上面の中心より多少角寄りに径６㎝、深さ２㎝の穴が穿たれているが、これも１と同様に二次的なものと思われる。（地輪がもう



第41図　10号墳古墓実測図



第42図　10号墳古墓出土五輪塔実測図（1／6）



第43図　10号墳第1・第2主体実測図

1点出土していましたが、プレハブ移動の際に紛失してしまったことを、ここにお詫びする次第であります。)

第1主体　墳頂部のほぼ中央に位置し、東西方向に長軸を持つ素掘りの土壙である。

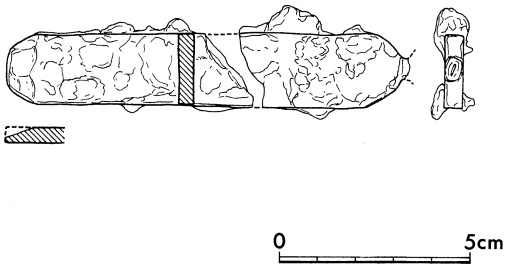
長辺1.8m、短辺0.5m、深さ0.25mを測る。土壙床面は東側の方が0.06m高くなっており、東に頭位をもつと考えられる。土壙の壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面からは木棺の痕跡等は検出されていないが、土壙の幅が狭く長さがあり、本来は土壙に沿うように木棺を入れていたと考えられるものである。

第2主体　墳頂部の第1主体と主軸を一にし、東側で第1主体と切り合っており、中央から東側にかけては後世古墓が穿たれている。

土壙は地山に掘り込まれており、長辺2.00m、短辺0.65m、深さ0.25mを測る。床面は西側の方が0.04mほど高くなっており、西側に頭位を持つとすると、第1主体と頭位が全く反対になるという位置関係になる。床面からは木棺の痕跡等は検出されていないが、第1主体と同様に土壙の四壁に沿うように木棺を入れたものと思われる。

土壙の床面中央部より鉄器が1点出土している。この鉄器は、古墓検出の際西側の壁より一部分が出土しており、第2主体と古墓のどちらにともなうものかは断定しかねるものである。

第１・第２主体部の切り合い関係から、第１主体(古)→第２主体(新)という新旧関係が知られるが、墓壙が切り合っているのは、奥才古墳群の中でも、39号墳とこの例だけである。



第44図　10号墳出土遺物実測図

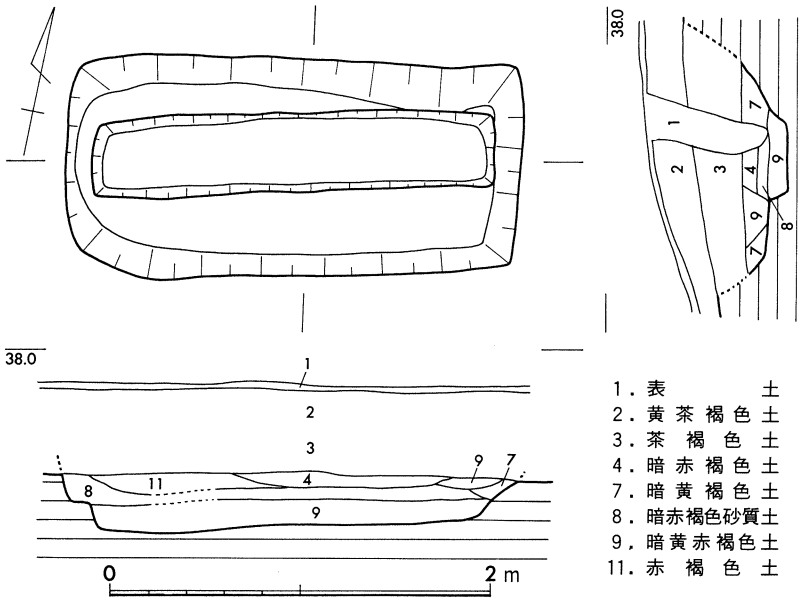
第２主体出土遺物　用途不明の鉄器で、中央が折れて途中を欠失しており、接合できない。板状を呈し両端は丸味を持っている。一方の端は一部を欠いており、もう一方は小さな突起が付いている。両端は刃部とはならず、横断面は長方形を呈する。残存長10.5㎝、幅1.8㎝、厚さ0.4㎝を測る。

第３主体　第１主体の南側に位置して穿たれている二段掘りの土壙で、第１・第２主体とほぼ同方向を示し、E－13°－Nを測る。

土壙の長辺2.4m、短辺1.1m、検出面からの一段目の深さは0.14m、二段目の長辺2.1m、短辺0.54m、深さ0.12mである。二段目の土壙は一段目の土壙の北側下端にわずかに寄せて設けられ、東北隅は両者が接する形となり、南側は長さ2.2m、幅0.3mを測るテラスが造り出されている。土壙の壁は、二段目が垂直に近く立ち上がり、一段目は緩やかに立ち上がる。

この主体部の床面は、西側に比して東側が0.05m高くなっており、このことから被葬者は頭位を東にして埋葬されたものと思われる。

副葬品等は認められなかったが、第１・第２主体が素掘り土壙で、やや小形であるのに対し、第３主体は二段掘り土壙の構造を有し、比較的整った形態である点が注意される。



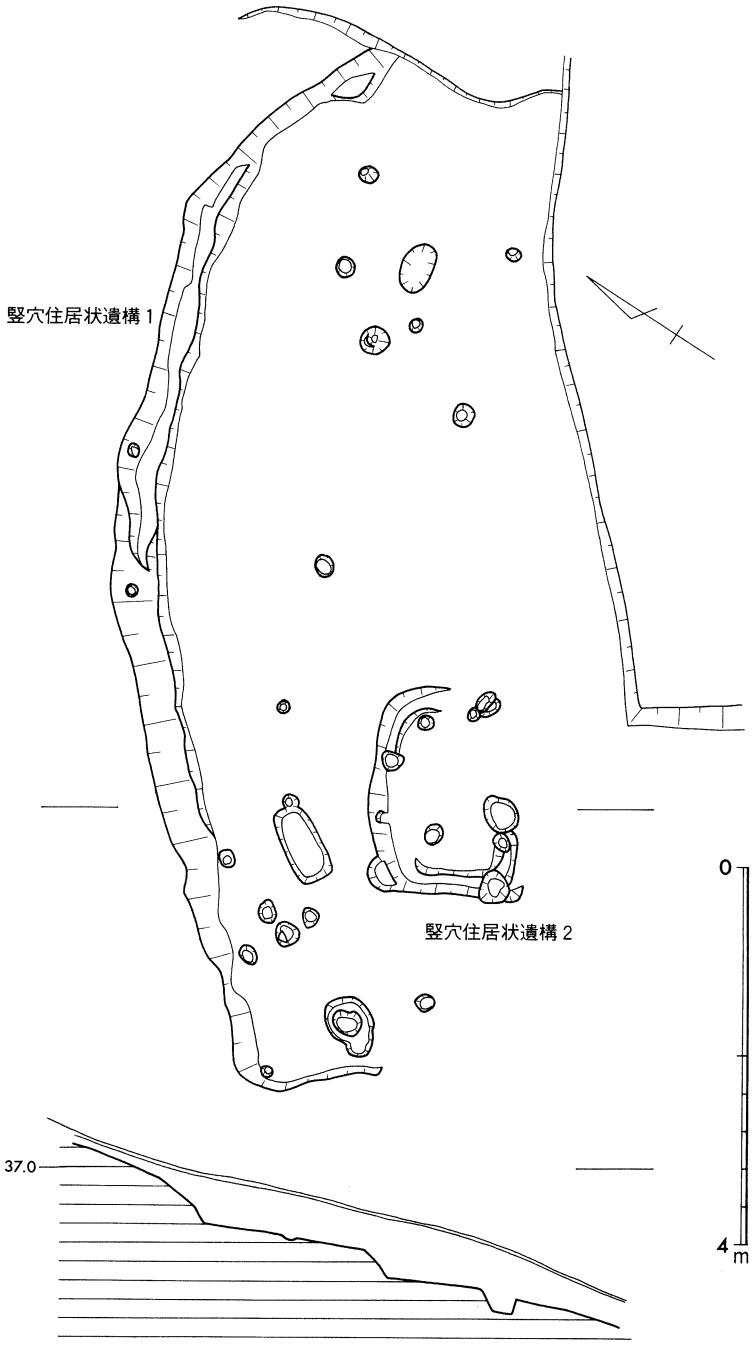
第45図　10号墳第３主体実測図

⑿　竪穴住居状遺構

７号墳下の南側斜面に位置し、狭いテラスと柱穴状の落ち込みからなる。この遺構は、７号墳の南側墳裾線を追う過程で検出したものである。７号墳墳頂から2.5ｍ下にあって、斜面は墳裾から約15°の傾斜で下降し、谷底に至る。谷底からの比高は約15ｍである。

調査は、７号墳南側斜面の精査中に細かい炭化物が認められたために急遽調査区を拡張するという形で行なった。墳裾下の斜面の表土を除去して降ると、尾根に沿うようにして走る落ち込み掘方を検出した。

この落ち込みの壁は約50°で掘り込まれ、弓なりに弧を描いており、壁面の中央から東端には幅0.2ｍの狭いテラスが長さ4.5ｍにわたって設けられている。壁の中央部には２つの柱穴状のピットがあり、いずれも径0.15ｍ、深さ0.10ｍを測るものであった。この落ち込み内の覆土中には、米粒大の炭化物が多く認められ、この覆土を除去することによって、竪穴住居状遺構が検出されたの



第46図　竪穴住居状遺構実測図（1／80）

である。

床面は、東西長10.8m、南北幅4.0mを測り、平坦ではあるが谷に向かって約8°傾斜しており、水平ではない。床面では、大小17個からなる柱穴状ピットとともに隅丸長方形プランの土壙1、楕円形土壙1、さらに三方を溝で囲む落ち込み1を検出した。大小の柱穴状ピットはほとんど径0.2m前後、深さ0.10m前後を測るが、中には床面西方端にみられるように、二段掘りで径0.60m、深さ0.25mの規模をもつものもある。隅丸長方形プランの土壙は西方端から約2.0mの位置で検出され、長さ0.85m、幅0.40m、深さ0.10mを測る。平面楕円形の土壙は床面東寄りで検出され、長径0.60m、短径0.30m、深さ0.05mを測る。この2つの土壙覆土中には多くの炭化物が認められた。

三方を溝で囲む落ち込みは中央やや西寄りで検出され、幅0.3mの溝によって区画されており、東西2.2m、南北1.5mを測る。床面はほぼ水平で、この落ち込みが掘られている広い床面との落差は0.25mである。溝に囲まれた中に大小9個からなる柱穴状ピットが検出された。径0.15～0.45m、深さ0.2～0.4mを測り、覆土に米粒大の炭化物が認められたことは前述した例と同様である。

この遺構は、弧状の掘り込み線や柱穴状土壙等から丘陵斜面に構築された住居跡を思わせるものがある。しかし、床面に穿たれている柱穴状ピットの相互関係を認められず、プランも極めて不整形であり、遺構のもつ性格は不明と言わざるを得ない。ただ注意すべきは、この遺構が南の谷を向く形となっており、冬期の北風を避ける位置にあるとともに、遺構覆土中にまんべんなく炭化物が認められたにもかかわらず人が生活をしたことを示す痕跡が認められないことである。積極的根拠があるわけではないが、あるいは埋葬にかかわる儀式等に関係する遺構である可能性も考慮されよう。

⒀　第Ⅲ支群出土遺物

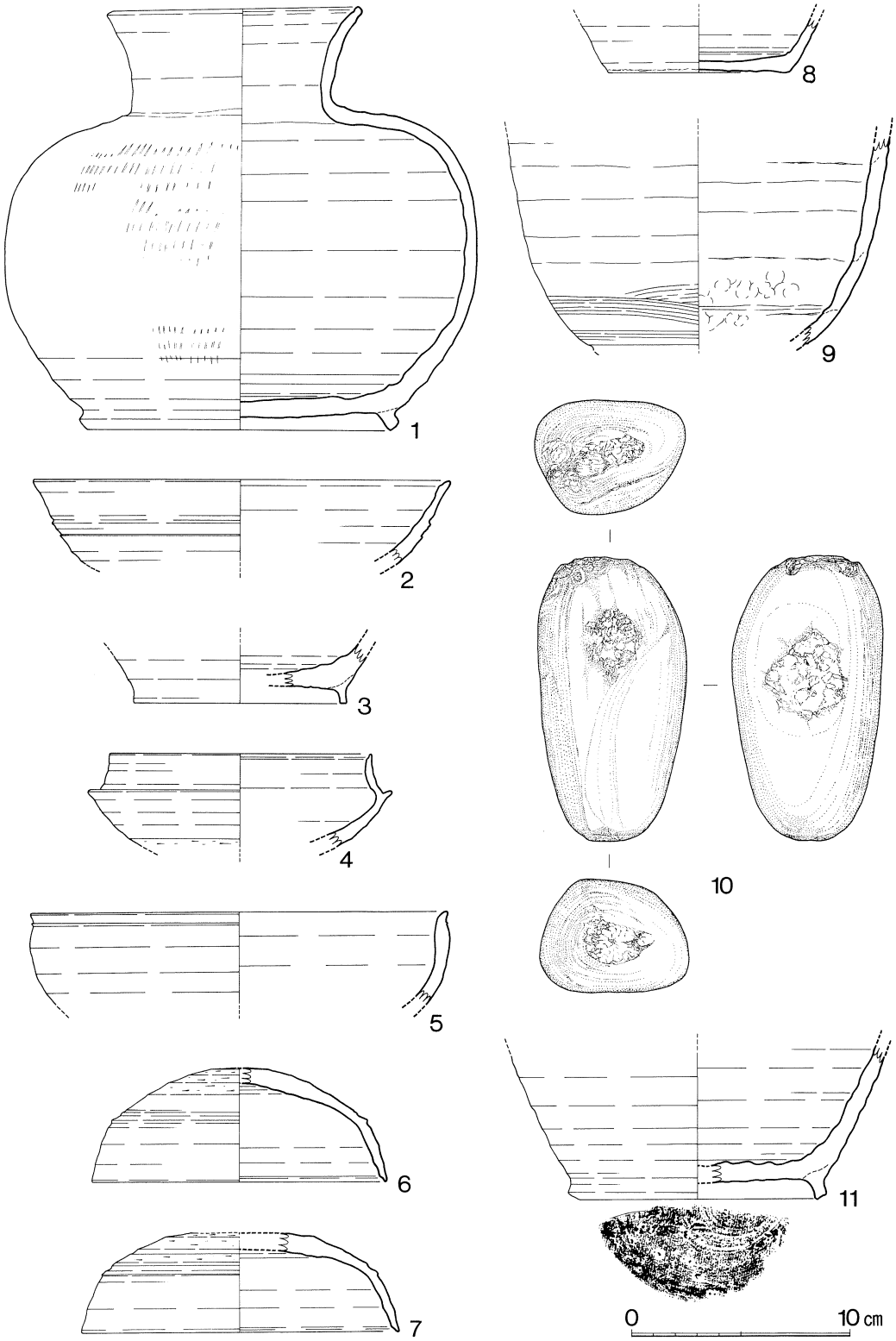
遺物は須恵器・石器のほか、五輪塔残欠などの石製品、紡錘車様の鉄器が出土している。(1)～(3)は1号墳周辺、(4)～(9)は28号墳周辺、⑽・⒀は6号墳周辺、⑾は竪穴住居状遺構周辺、⑿・㉒は4号墳周辺、⒁～⒄・㉓・㉗は9号墳周辺、㉑・鉄製品㉝は7号墳周辺、石製品㉘～㉝は10号墳南側から出土したものである。

須恵器短頸壺は、大きく張る胴部に短い頸部をもつもので、底部に高台を有している。体部外面には回転ナデの下に縦方向のタタキメが残っている。高杯(2)は口縁部の破片で、外面に2段の稜をもち、口縁端部には平坦面をつくる。杯(3)は高台を有するもので器壁はやや厚く、壺底部の可能性もある。底部は回転糸切りで切り離した後に高台を貼付けている。杯(4)は高い立ちあがりを有し、立ちあがりの内面端部は段を有している。外面底部はわずかに回転ヘラケズリの痕跡をとどめる。高杯(5)は口縁部の破片で、杯部が内湾し端部でわずかに外反する。蓋(6)・(7)はともに開きながらさ

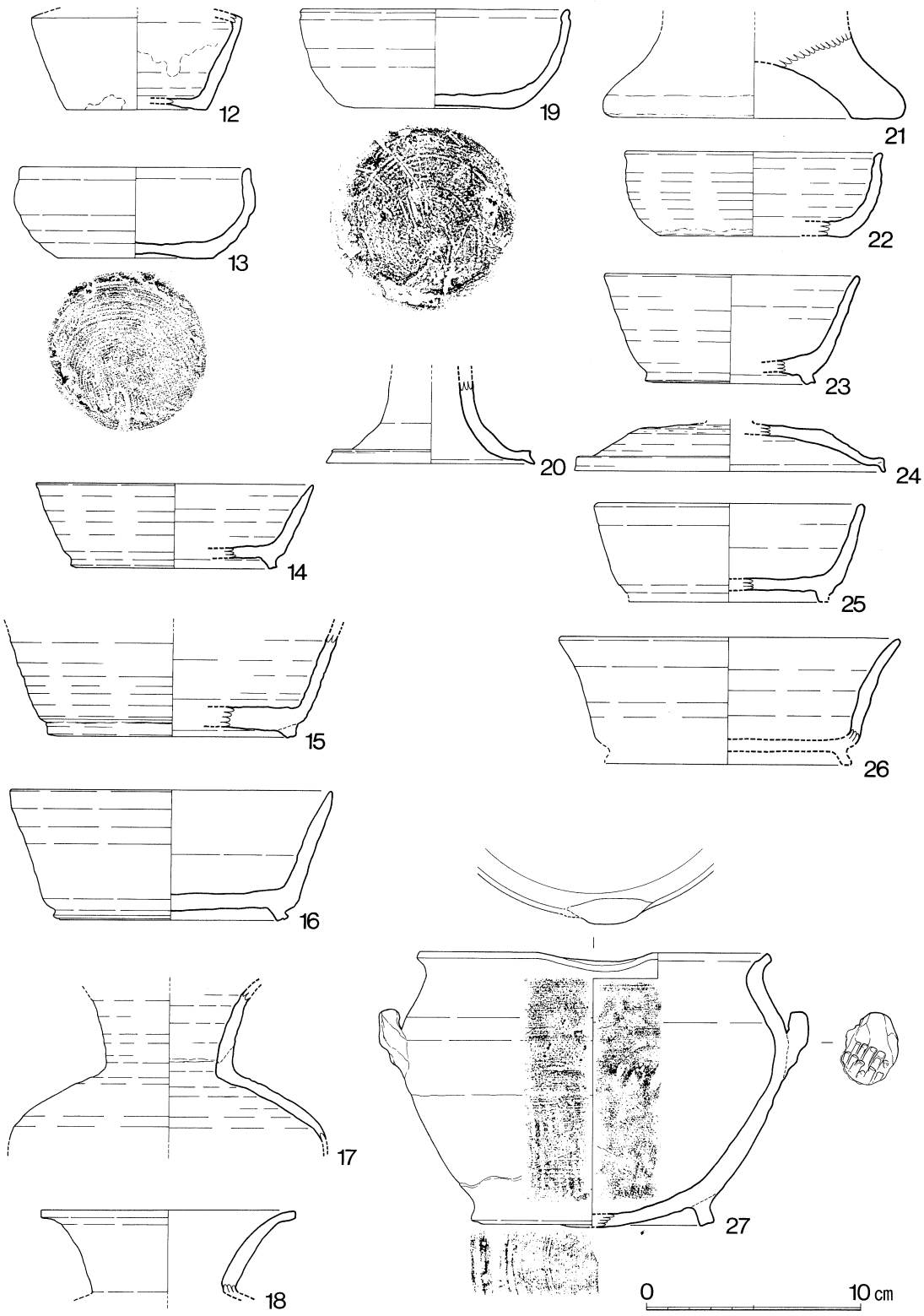
がる口縁部を有する。天井部1／2以上に回転ヘラケズリを施す。天井部と口縁部の境の稜はあまり突出せず、口縁端部内面にはわずかに段を有する。杯(8)は底部で、回転糸切りで切り離す。(9)は壺などの底部と考えられる破片で、円筒状の体部をもつと思われる。外面底部にはカキメをもち、内面底部には指頭圧痕を残す。断面で粘土紐の接合痕が観察できる。敲石(10)は棒状を呈し、表裏2面と両端面の4箇所に打痕をもつ。それ以外は加工痕はなく、なめらかな自然面である。壺(11)は高台を有する底部の破片で、高台から直線的に開く体部に至る。底部は回転糸切りで切り離す。小壺(12)は肩部で鋭く屈曲するもので、底部は上げ底気味の平底である。内外面とも厚く暗緑色の自然釉がかかる。杯(13)は体部が内湾し端部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離す。杯(14)・(15)・(16)はともに低い高台をもつもので、いずれも高台から屈曲して直線的に立ちあがる体部を有する。底部は回転糸切りで切り離す。壺(17)・(18)はともに口縁部付近の破片で、(18)の頸部内面には、体部と口縁部の接合痕を残す。杯(19)は体部丸味をもって立ちあがり、端部で外反する。底部は回転糸切りで切り離す。高杯(20)は脚部の破片で、裾部で大きく開き、端部で下方に折り曲げて面をつくっている。土製支脚(21)は端部で大きく開き、底部は上げ底となる。この1点のみ土師質の遺物である。杯(22)は体部内湾して立ちあがり、端部で外方に折り曲げる。底部は回転糸切りで切り離す。杯(23)は低い高台を有し、体部は直線的に立ちあがる。蓋(24)は器高低く、口縁端部は下方に折り曲げて直立する。天井部は回転ヘラケズリを残す。杯(25)・(26)はともに高台を有するもので、直線的に立ちあがる体部を有する。広口壺(27)は底部に高台を有し、丸味をおびた体部をへて、わずかに外反するだけの口縁部に至る。体部最大径付近に1対の把手を貼付け、口縁の1箇所を折り曲げて注ぎ口としている。体部内外面はタタキメをもつが、ナデで消している。

石製品は、五輪塔残欠と地蔵かと考えられる浮彫を施したものである。(28)～(30)は五輪塔空風輪である。(28)は上方でわずかに広がる円筒形を呈し、空風2輪は浅い溝をめぐらすのみで区画される。風輪下部には火輪の柄穴にはめこむための半球形の突起が削り残されている。石材はいわゆる来待石で、突起付近は工具痕が残る。(29)は円筒に三角錘を重ねたような空輪をもち、空風2輪はやや深い溝で区画される。風輪下部には、火輪にはめこむための長い突起が削り残されている。(30)は破損著しく、空風輪を区画する溝付近のみが残存する。(29)・(30)とも石材は来待石である。(31)・(32)は水輪残存部である。(31)はやや偏平で上下とも内くぼみとなる。花崗岩質の石材で風化著しい。(32)はやや大形のもので、上下面とも火・地輪との組み合わせのため深く掘り込まれている。(33)は地蔵尊のようなものを浮彫にしたもので、風化著しいが、胸で合掌した手の表現はかすかに認められる。

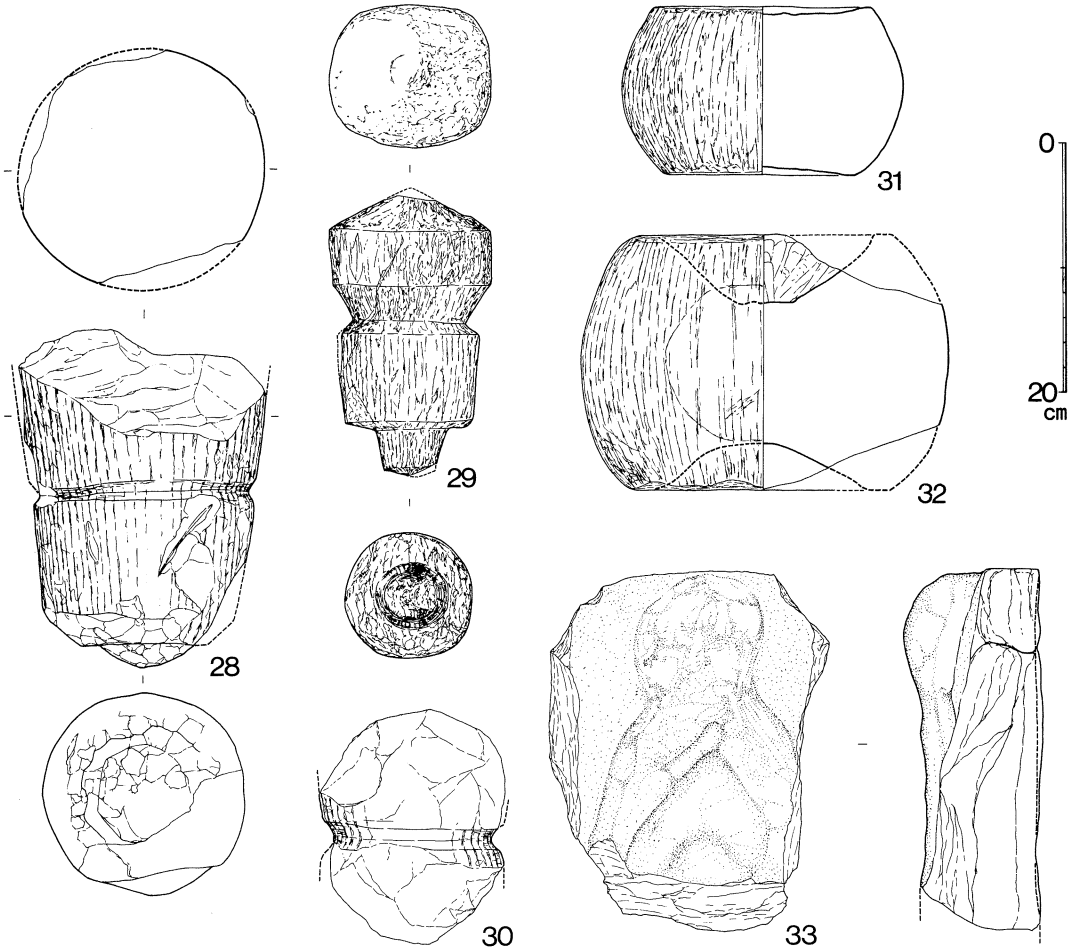
紡錘車形鉄製品(34)は、円盤の部分径4.5cm、厚さ0.3cmを測り、中央を貫通する軸は両端が欠損するが、1.6cmを残している。



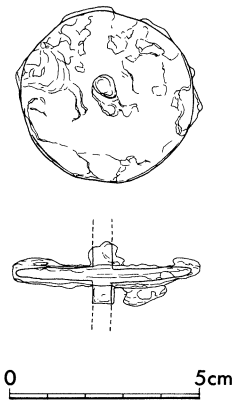
第47図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(1)



第48図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(2)



第49図　第Ⅲ支群出土遺物実測図 (3) (1/6)



第50図　第Ⅲ支群出土遺物実測図(4)

以上の遺物の時期は、須恵器では(4)・(6)・(7)が山本編年[29]Ⅱ期、(19)・(24)が国庁編年[30]第3形式、柳浦編年[31]第3式、(13)・(23)・(25)が国庁第4形式、柳浦第4式、(22)が国庁第3形式、柳浦第4式、(8)は国庁第5形式、柳浦第5式、(14)～(16)・(26)が国庁第5形式、(11)が国庁第3形式あるいは第4形式と考えられる。

石器(10)は敲石と考えられるもので、古墳の築造に先立つ時期の遺物の可能性がある。

五輪塔ほかの(28)～(33)は中・近世の墳墓にともなうものと考えられる。

第2表　第Ⅲ支群 遺構に伴わない遺物観察表(1)

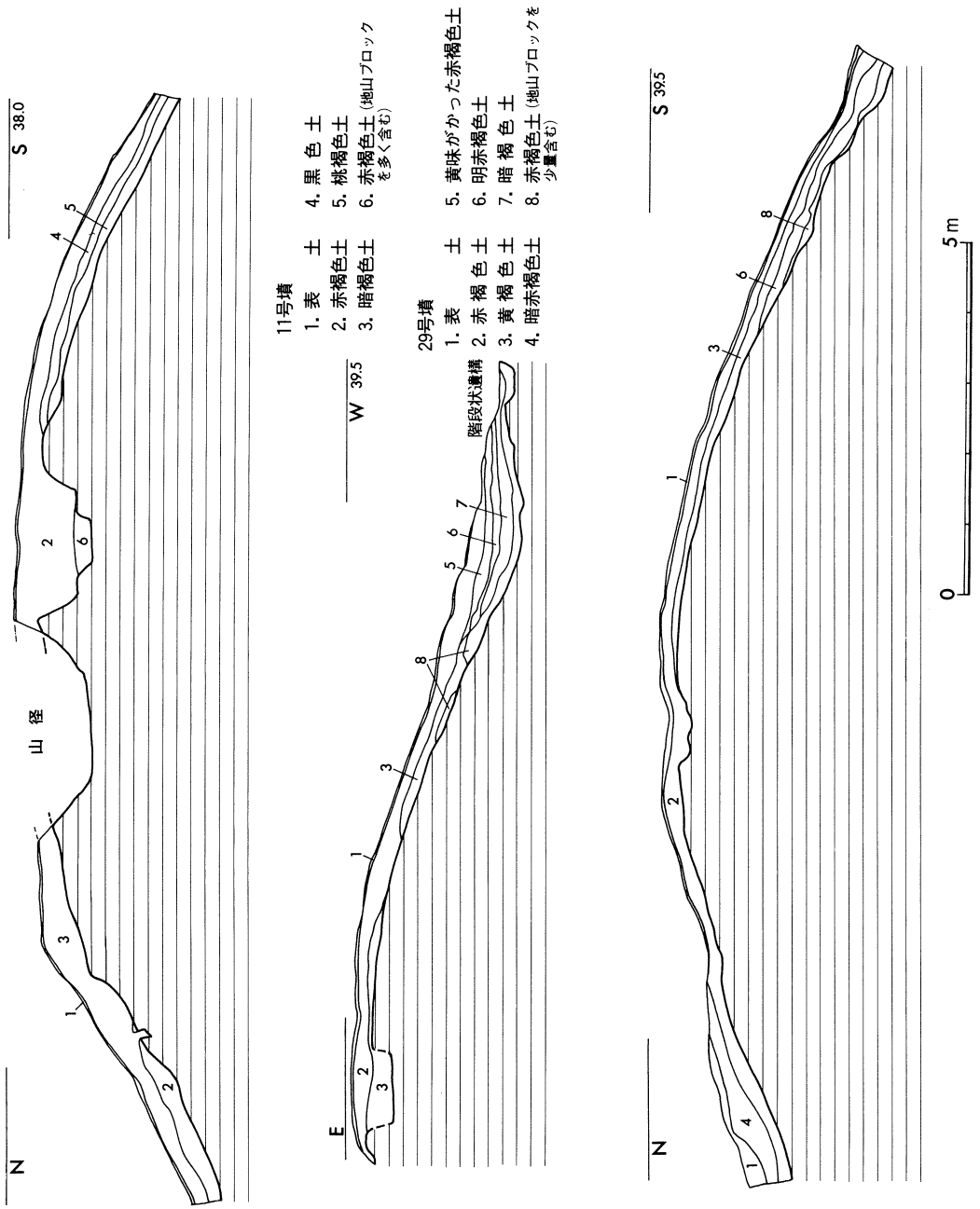
挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
47－1	短頸壺	11.3	14.0	19.7	高台がつくタマネギ形の胴部に短い頸部がつく。 胴部外面にタタキメが残るが、回転ナデで殆ど消える。底部かすかに切りはなした痕跡残る。	赤味をおびた灰白色	石英・長石など微細なもの多い。全体に砂質	不良	
2	高杯カ	19.0	－	－	口径大きい。端部は平坦面をなす。 外面は2ヵ所で段をなす。	青灰色	石英・長石など細かいもの含む。	普通	
3	底部	－	9.7	－	きゃしゃな高台をもつ。 底部、回転糸切り。	暗灰色	長石の微細なもの含む。	良好	
4	杯身	12.0	－	－	高い立ちあがりを有し、その端部では段をもつ。 底部回転ヘラケズリ、ロクロ回転右。		精選され密	普通	
5	高杯カ	19.0	－	－	丸味をもった口縁部。口縁端部は外反しながら丸くおさまる。口縁外面に細い突帯がめぐる。内外面とも回転ナデ。	灰味黄緑色	緻密	良好	
6	杯蓋	13.5	－	5.3	体部直線的な立ちあがり、天井部丸味をおびやや高い。口唇内面に段をもつが、シャープではない。 外面／天井部ヘラケズリ、ロクロ回転右。以下回転ナデ。 内面／天井部ナデ調整。以下回転ナデ。	灰色	細かい石英・長石をわずかに含む。	普通 口縁部の一部焼けひずむ。	
7		14.6	－	－	口径やや大きく、直線的に「ハ」の字に開く体部を有する。口唇内面にかすかな段をもつ。 外面／天井部全面に回転ヘラケズリ。以下回転ナデ。 内面／天井部中央ナデ調整。以下回転ナデ。	明灰色	石英・長石の小砂粒やや多い。	普通	
8	杯カ	－	8.3	－	平らな底部からやや開いて立ちあがる体部をもつ、底部回転糸切り。	暗青灰色	石英・長石など、やや大粒のもの多い。	良好	
9	壺カ	－	－	－	円筒状の胴部から丸くすぼまって底部に至る。 外面／回転ナデ。底部近くにカキメ。 内面／回転ナデ。底部近くに指頭圧痕。 粘土紐接合痕もある。	暗灰色	石英・長石の大粒のもの多い。特に長石目立つ。	普通	
11		－	10.8	－	高台をもち、直線的に立ち上がる胴部をもつ。底部回転糸切り。胴部内外面とも回転ナデ。	外面／黒灰色 内面／灰色	石英・長石の大粒のもの多い。	良好 堅緻	外面一部に自然釉。
48－12	小壺カ	－	6.6	－	肩部張り、器高低い胴部。 底部ヘラおこし。	灰色	精選され密		外面暗緑色の自然釉厚くかかる。
13	杯身	10.6	7.4	4.3	底部からゆるやかに立ち上がり、端部に向け内湾し、端部直立する。 底部回転糸切り。内外面とも回転ナデ。 内面底部ナデ調整。		細かい砂粒含み、全体に粗い。	やや不良	
14		13.0	9.2	4.0	高台をもち、底部から直線的に立ち上がる体部を有する。 底部回転糸切り。体部内外面とも回転ナデ。内面底部ナデ調整。	灰白色	精選されるが砂質		

第3表　第Ⅲ支群 遺構に伴わない遺物観察表(2)

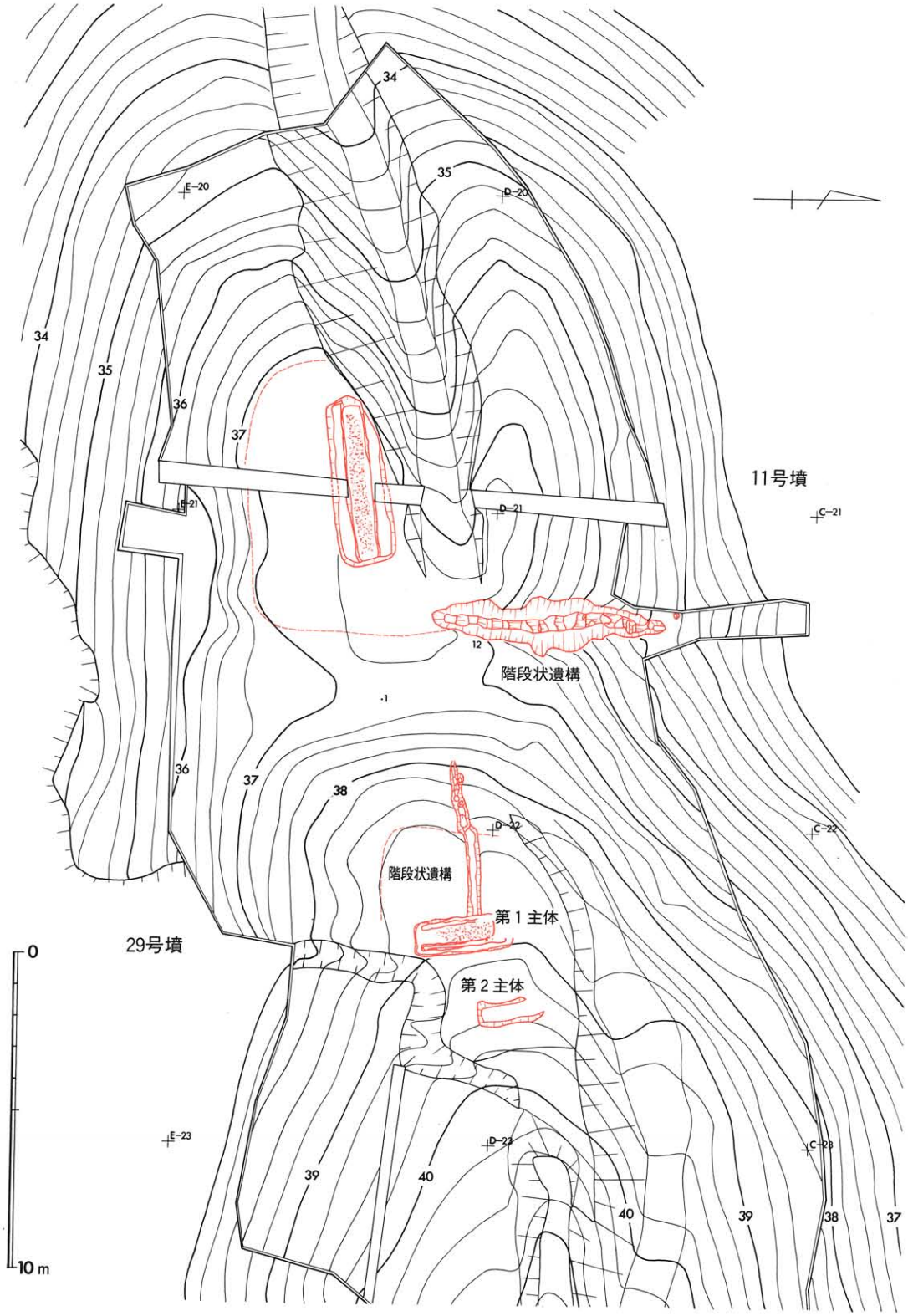
挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
48－15	杯身	－	10.8	－	低い高台をもち、直線的に高く立ちあがる体部をもつ。杯底部は平ら。 底部回転糸切り。体部内外面とも回転ナデ。内面底部ナデ調整。	灰白色	長石の砂粒が目立つ。	普通	
16		15.0	10.2	6.2	平坦な底部に低い高台がつき、口縁へ向け直線的に立ちあがる。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。	暗灰色	砂粒少なくきめ細かい。	やや不良	
17	壺	－	－	－	張り出す肩部から小さく開く頸部に至る。内外面とも回転ナデ。頸部内面に口縁部と胴部の接合痕を残す。		長石の細砂粒多い。	普通	
18		12.0	－	－	ゆるやかに広がる口縁部。端部でわずかに折り曲げる。内外面とも回転ナデ。 口縁部と胴部の接合面で剥離する。	青灰色	やや大粒の砂粒わずかに含む。	良好	
19	杯身	12.4	7.2	4.7	底部から口縁に向けゆるやかに立ち上がり、端部わずかに外反する。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。	灰色	長石をわずかに含む。		
20	高杯	－	9.8	－	裾に向けゆるやかに広がり、下方に向け折れ曲がる。内外面とも回転ナデ。	青灰色	砂粒わずか。		
21	土製支脚	－	15.4	－	裾ひろがりとなり、底部内面は内ぐりとなる。 底部内面ヘラケズリか。	明るい黄橙色	きわめて粗い	不良	土師質
22	杯身	12.0	8.8	4.0	平坦な底部、丸味をもった体部を有する。端部わずかに外反する。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。	青灰色	長石の細砂粒目だつ。	普通	
23		11.8	7.2	5.2	低い高台から直線的に立ちあがる体部。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。	外面／青灰色 内面／淡褐色	長石の砂粒多い。	普通。内面は火のまわり悪く、もろい。	
24	杯蓋	14.4	－	－	扁平な蓋。端部近くで外反し、端部は下方に折れ曲がる。 外面／天井部回転ヘラケズリ。 内面／天井部ナデ調整。以下回転ナデ。	暗灰色	長石・石英など大粒のもの多い。	普通	
25	杯身	12.4	－	4.7	平らな底に低い高台がつく。体部直線的に立ち上がる。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。		きめ細かい。		
26		16.0	－		直線的に開く体部を有する。 内外面とも回転ナデ。	明るい茶灰色		良好	
27	把手付甕	16.2	10.2	13.0	高台のつく丸底からゆるやかに立ち上がり、頸部にかけてくびれ、口縁部は外反する。把手は胴部最大径に貼り付ける。口縁を1ヵ所片口状に折り曲げ、注ぎ口とする。 体部内外面タタキで成形し、なでてその痕跡を消す。口頸部回転ナデ。内面底部ナデ調整。	灰色	長石の砂粒をわずかに含む。		9号墳・38号墳付近採集のものが接合。

第3節　第Ⅳ支群

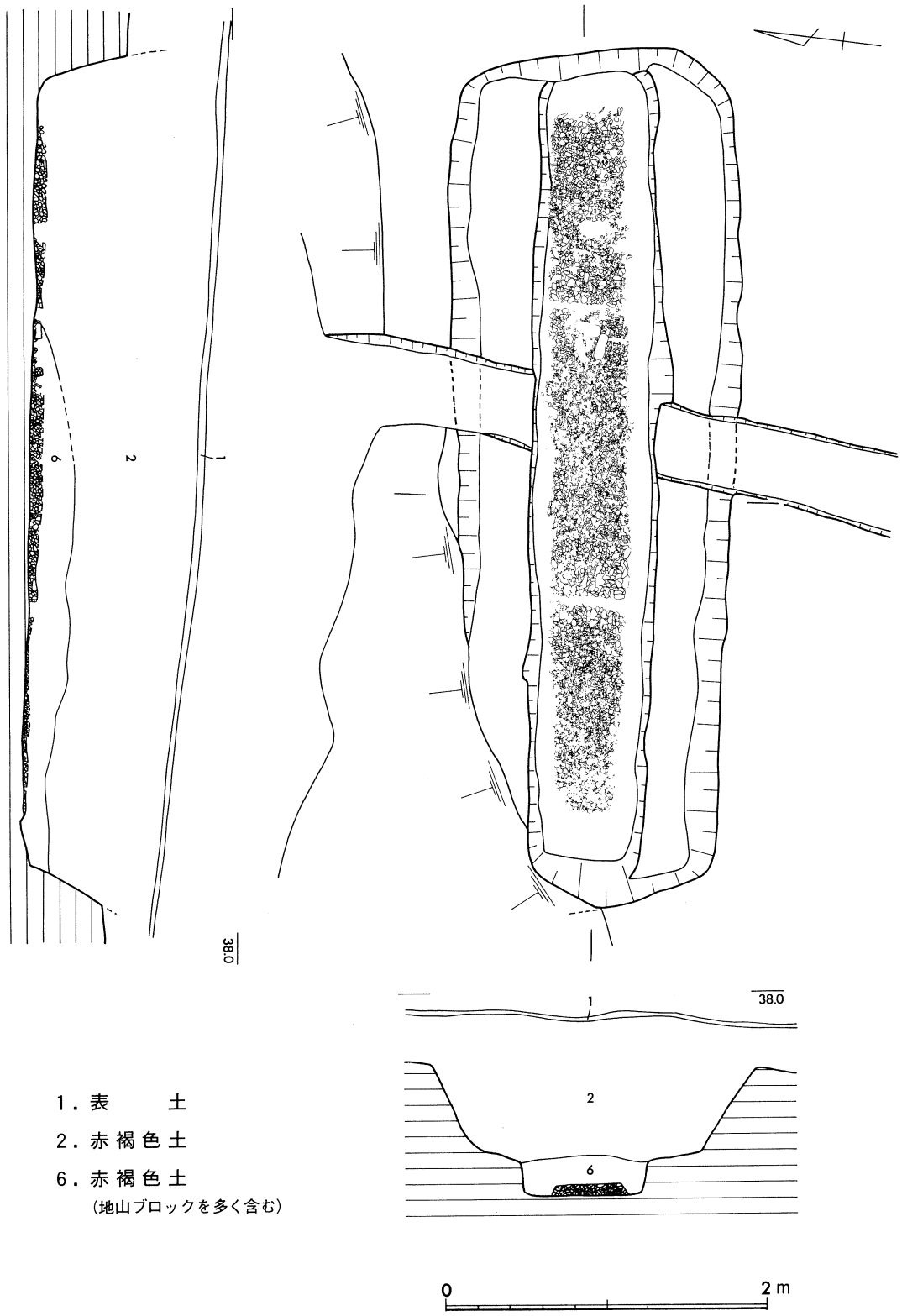
(1)　11号墳



第51図　11 ・ 29 号 墳 土 層 図



第52図　　11・29号墳墳丘測量図



1．表　　土

2．赤褐色土

6．赤褐色土
（地山ブロックを多く含む）

第53図　11号墳主体部実測図

第Ⅳ支群中最も西側に位置し、墳丘の中央よりやや北側を東西に走る径によって削平されている。墳頂の標高は37mである。東側に位置する29号墳との間には尾根と直交するように溝が掘られており、墳頂からの比高は0.3mと浅いが幅は2.5mと広い。また溝の覆土も0.8mに及んでいる。墳丘は地山を方形に削り出しており、東西15.5m、南北10.0mを測る方墳である。

この古墳の埋葬施設は、墳丘のやや南側より検出された。遺構の確認が困難なため墳丘中央部に南北にトレンチを設け、その壁面において主体部を確認した。また、墳丘北東部の斜面には階段状遺構が存在している。

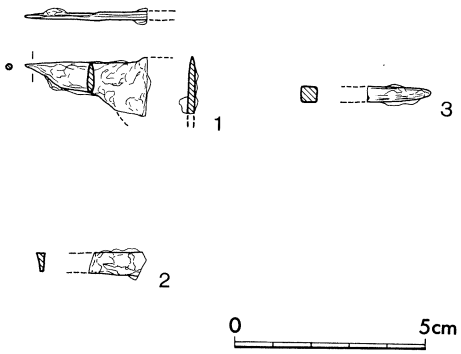
地山面に二段掘りの土壙が掘り込まれており、主体部は主軸をE－13°－Nにとる。土壙は北西部分を道により削り取られているものの長方形を呈している。規模は、上面で長辺5.35m、短辺1.8m、2段目で長辺5.05m、短辺0.75m、深さは2段目までは0.20～0.43m、壙底までは0.15～0.26mである。1段目の壁は緩やかな傾斜だが、2段目の壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。

土壙の底には指頭大の礫が敷かれ、礫の周辺部分が直線的になることから、土壙内には木棺の埋置が考えられる。また礫床は2箇所途切れた所があり、その幅は約0.06mである。これは2枚の長手板の間に仕切板2枚を入れ、3室に仕切ったものと考えられる。礫床は全長4.4m、幅0.45m、東側から各々の長さは1.20m、1.78m、1.30mに分かれている。中央の室東側に、長さ16cm、幅8cmの大きめの偏平な礫を2個「ハ」の字状に置き、枕石としている。壙底も西側より東側の方が0.16m高くなっていることから、頭位は東を向くと考えられる。礫の厚さは0.01～0.07mで、東側の方が厚く敷かれている。礫除去後の床面は平坦になっていた。礫床の東側区画から不明鉄器3点が出土し、この主体部の副葬品と考えられる。

出土遺物　1は刀子の刃部の破片であり、先端部分が残ったものである。残存長3.2cm、厚さ0.2cmを測る。

2は刀子の茎の一部分で、断面は方形を呈している。残存長1.3cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmを測る。

3は鉄鏃の茎の先端部分と考えられ、断面正方形を呈している。残存長1.7cm、厚さ0.4cmを測る。



第54図　11号墳主体部出土遺物実測図

(2)　29号墳

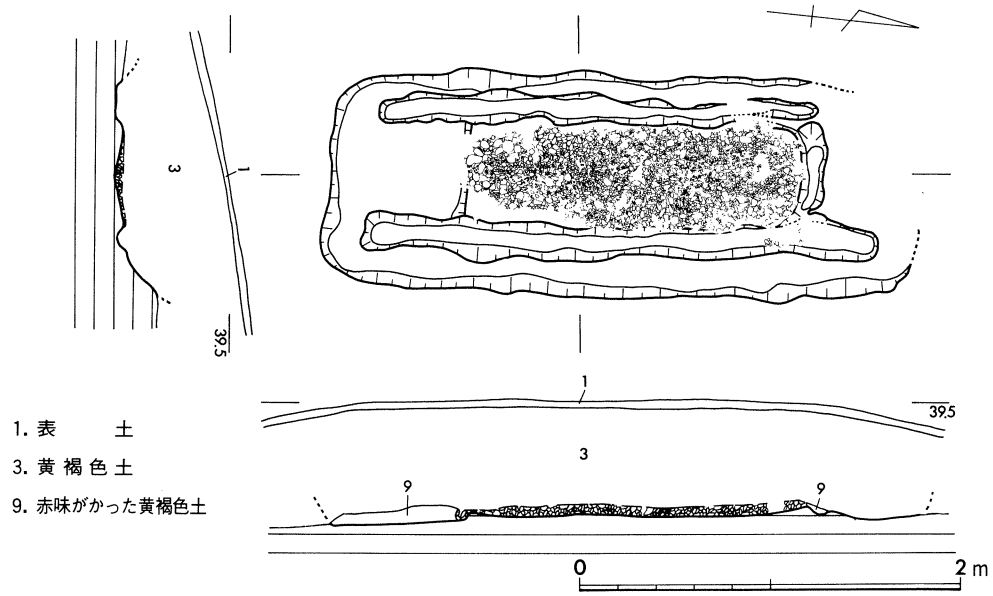
第Ⅳ支群11号墳と30号墳の間に位置する。墳丘西側では11号墳と区画する溝が残っているが、東側ではこのような施設は検出されなかった。北側斜面は道によって変形し、南東側は畑によって削平され、水路状の溝が蛇行するように残っているが、本来の墳丘は東西10m、南北12mの方墳であったと考えられる。墳頂の標高は約39mで、西側墳裾との比高は2mである。

墳頂には約７×７ｍの平坦面があり、礫床を有する第１主体と素掘り土壙の第２主体が、主軸を南北にして並んでいる。また、墳頂から西側斜面にかけて階段状の遺構が残っており、29号墳墳裾で一端途切れるが、これは、11号墳北東部の斜面の階段状遺構に続くものと考えられる。

第１主体　墳丘上面は著しく攪乱を受け、29号墳西側斜面の階段状遺構はこの第１主体を破壊するように設けられており、階段状遺構床面で、礫が若干検出された。墓壙は礫床上面で初めて検出できた。主軸はＮ－16°－Ｗとほぼ南北を向くものである。墓壙は北側で掘方が不明瞭な部分もあるが、長辺3.05ｍ、短辺1.15ｍである。墓壙内には木板で箱形に棺が組んであったものと考えられ、板の痕跡が残っている。この痕跡から、長手板は東側で2.6ｍ、西側で2.2ｍ、妻板は北側で0.4ｍ、南側で0.5ｍ程度のものであったことがわかる。棺の内法は長辺1.75ｍ、短辺0.55ｍで、側板が南北にそれぞれ約0.4ｍずつ張り出していることになり、棺の両妻手側にそれぞれ空間をもっていたことが知られる。

棺の内側底部は地山を約0.04ｍ削り残して台状にし、その上面に礫を敷いている。礫床は棺の内法にほぼ一致し、幅は北側で0.5ｍ、南側で0.4ｍ、厚さは北側で0.04ｍ、南側で0.02ｍを測る。礫床上面でも北が南よりも0.04ｍ高く、頭位は北を向くものであったことが知られた。礫床は周辺部では径５㎝前後の比較的大きな礫を使用しているが、中心部では非常に小粒な小豆大の礫を使用しており、この部分は被葬者を横たえるためか、若干くぼんだようになっている。

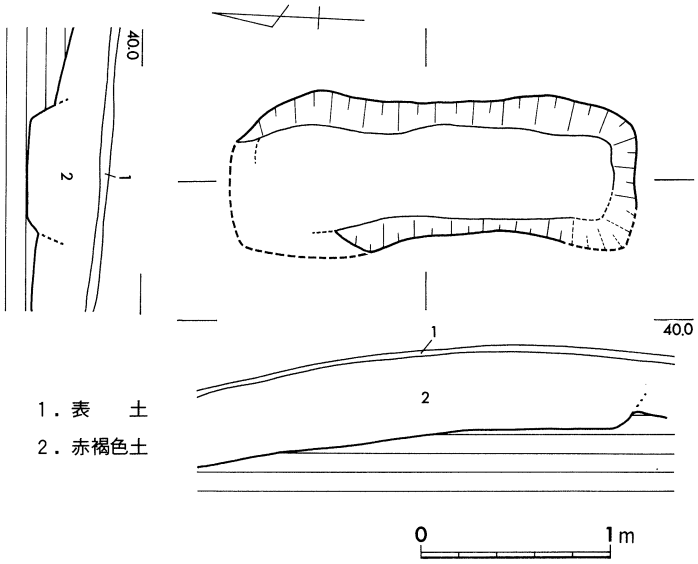
第１主体からの出土遺物はなかった。



第55図　29 号 墳 第 1 主 体 実 測 図

第2主体　第1主体の1.8m東に位置する素掘りの土壙である。主軸はN－11°－Wで、第1主体とほぼ平行である。

北側および南西側で墓壙掘方は攪乱されているが、長辺2.15m、短辺0.75mを測る。検出面からの深さは0.14mである。墓壙底面は南側が0.15m高くなっており、南に頭位を向けるものとすると、第1主体と第2主体は全く頭位を逆にすることになる。



第56図　29号墳第2主体実測図

また、床面には木板の痕跡などは残っていないほか、遺物を検出されなかった。

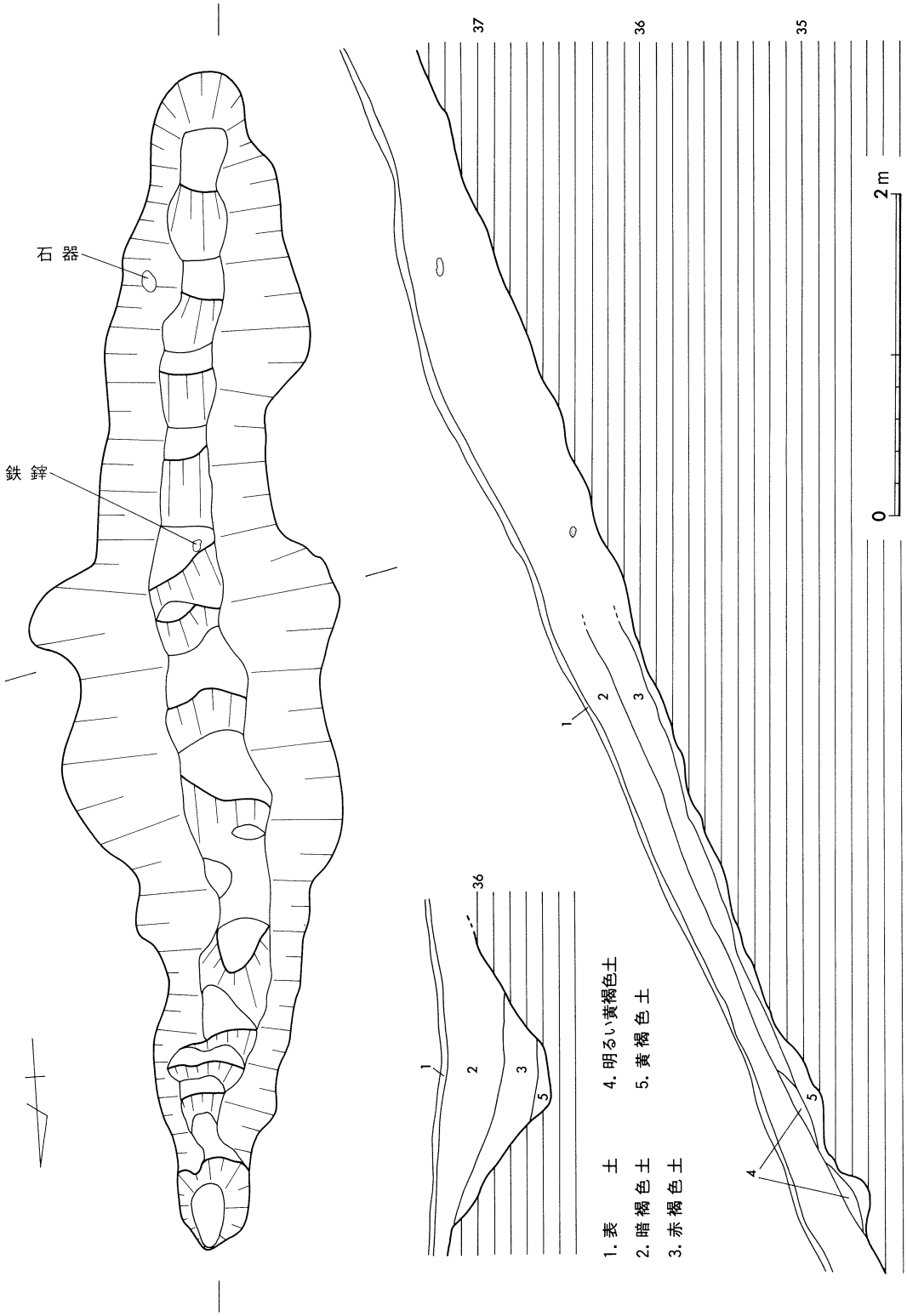
(3)　階段状遺構

11号墳北東部斜面と29号墳西側斜面の2ヵ所で検出されている。両者はそれぞれ途切れてはいるが、互いにつながるものとすれば、第Ⅳ支群のある丘陵を北から登って11号墳墳頂あたりで大きく屈曲し、29号墳斜面を登り墳頂部で途切れる道筋が考えられる。

11号墳北東部斜面の階段状遺構は主軸をほぼ南北にとり、標高35mから37.3mにかけて検出され、これ以下では途切れて検出できなかった。全長は斜距離で約8m、中心部で幅1.6m、検出面からの深さ0.5mを測る。断面は底の平らなV字状を呈している。階段状の段そのものはそれほど明瞭ではないが、16段を数えることができる。斜面に掘った溝にわずかに段を設けることによって階段としたもののようである。この階段状遺構が途切れた下方に径約0.2m、深さ0.3mの土壙が1つ検出されている。この土壙および階段状遺構の下半の覆土は炭化物を多く含んでいる。

また、階段状遺構の上半覆土中から、敲石状の石製品と鉄鋌1が採集されている。いずれも遺構床面から浮いた状態での検出であり、この遺構にともなうものとは考えられない。

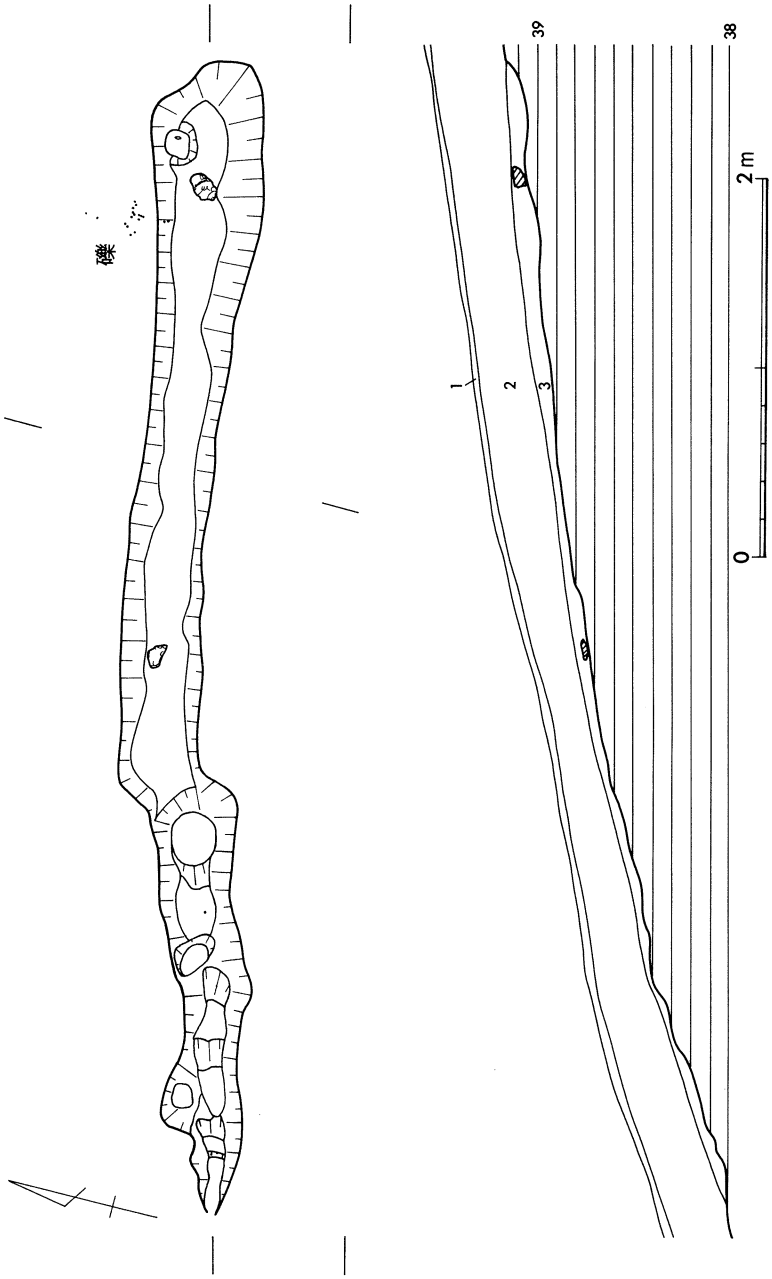
29号墳西側斜面の階段状遺構は主軸をほぼ東西にとり、標高38mから39.2mにかけて検出された。全長は斜距離で6.2m、幅は0.3～0.55m、深さは検出面から約0.5mを測り、全体に前述のものより小規模なものとなっている。階段状の段は斜面の部分のみに7段穿たれており、墳丘平坦面の部分では溝状になる。この遺構覆土中にも炭化物を多く含み、2片の石材も検出されている。さ

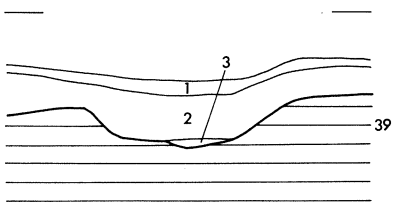


第57図　　11号墳北東階段状遺構実測図

らにこの端部は29号墳第１主体直上で途切れ、溝端部底では礫が多く検出された。この階段状遺構は29号墳第１主体を一部破壊して設けられており、このことから階段状遺構は29号墳の埋葬にともなうものではなく、後世に掘削されたものであろうと推定される。

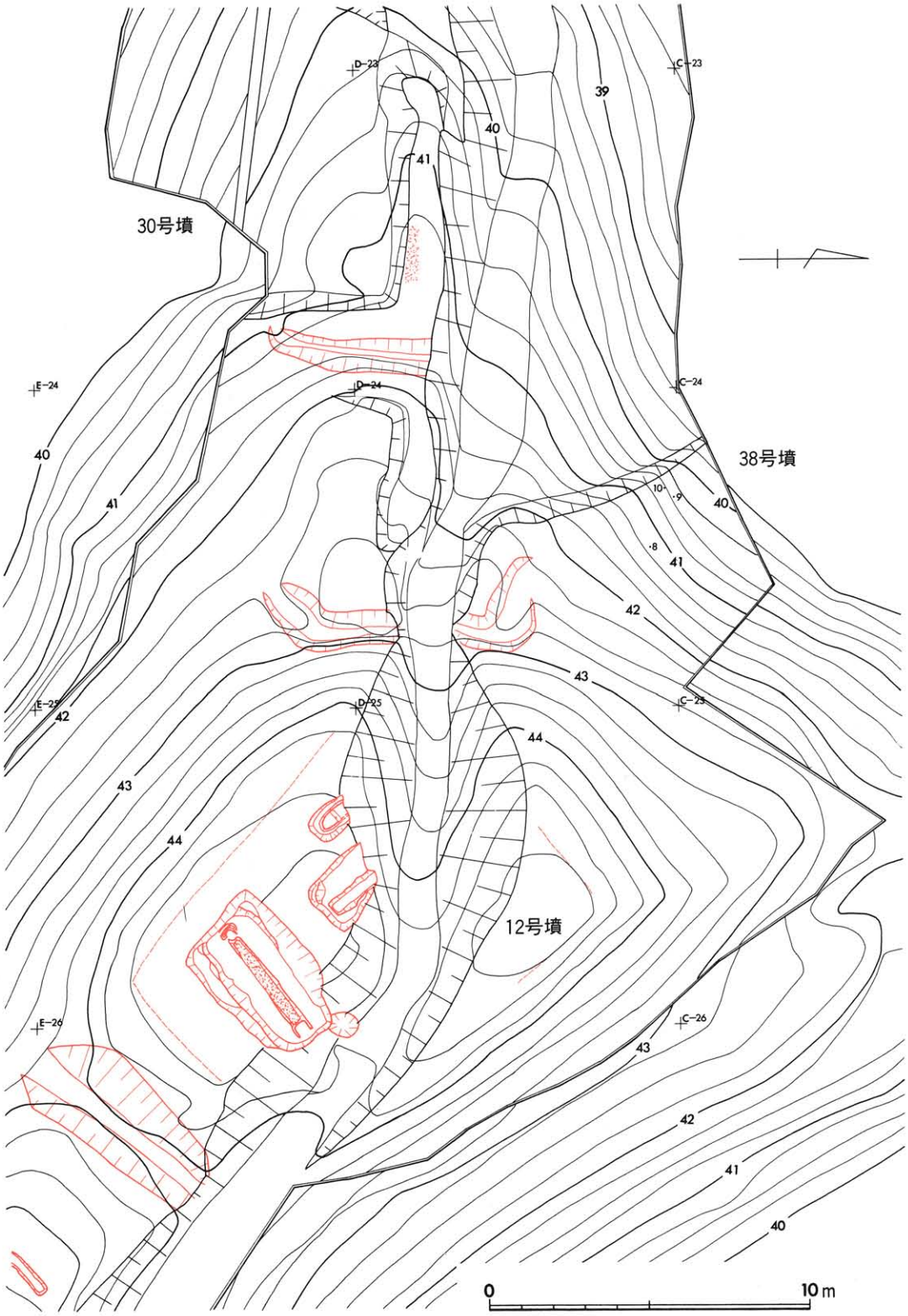
先にも述べたが、２本の階段状遺構が結びついて道として機能するものならば、古墳の築造後に付設されたものと考えられる。





1．表　土
2．赤褐色土
3．暗黄褐色土

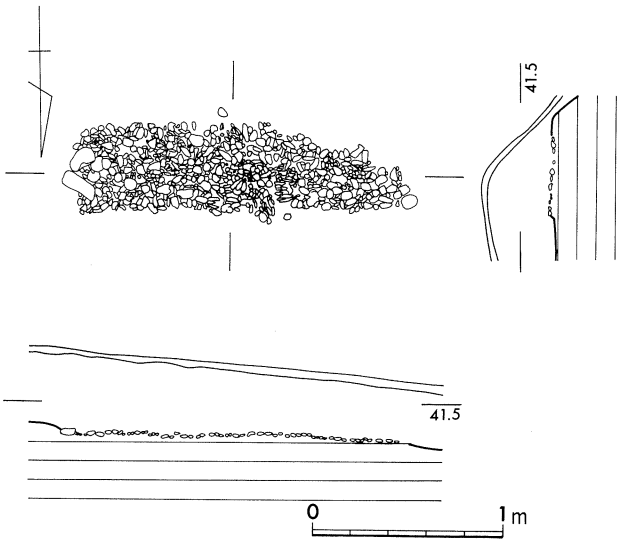
第58図　29号墳西階段状遺構実測図



第59図　30・38・12号墳墳丘測量図

(4) 30号墳

29号墳と38号墳の間につくられた古墳で、山径と畑によって大きく損われているが、8×8m程度の方墳と考えられる。38号墳と墳丘を区画する溝を共有している。



第60図　30号墳主体部実測図

墳丘中央付近のわずかに残った高まりで、長さ1.80m、幅0.45mの礫床が検出できた。主軸はE－1°－Nにとる。標高は41.3mで、攪乱のため墓壙は検出できなかった。礫は指頭大よりやや大きく、東側に長さ18cm、幅8cmの偏平な大きい礫2個が「ハ」の字状に配され、枕石と考えられた。この枕石から頭位は東を向くものと考えられる。

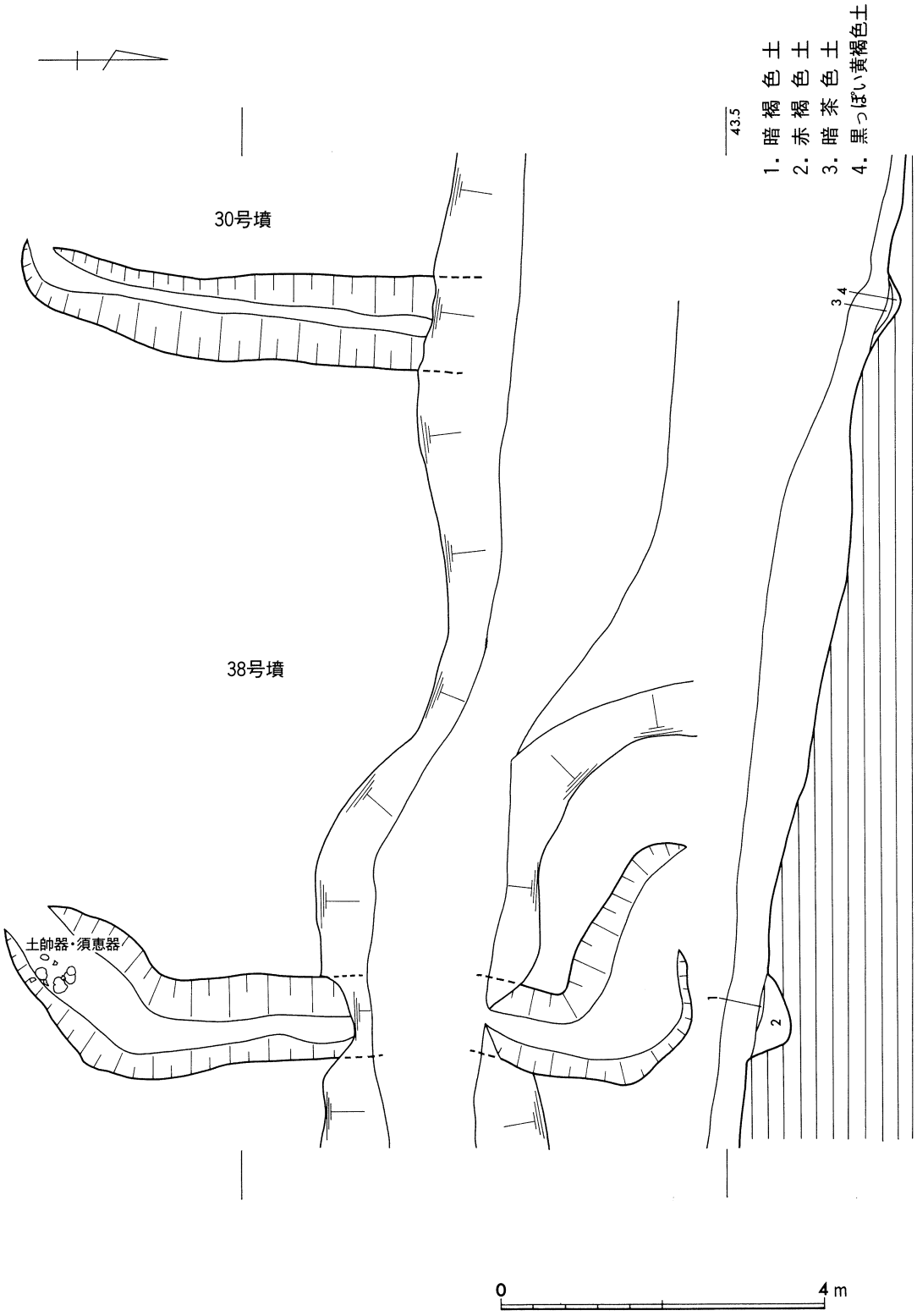
礫床の北側長辺が直線状になることから、礫は木棺の床面に敷きつめられたものであろうと判断されたが、墓壙や棺の痕跡が残っていないため、どのような木棺が使用されたかは不明である。

この主体からの出土遺物はない。

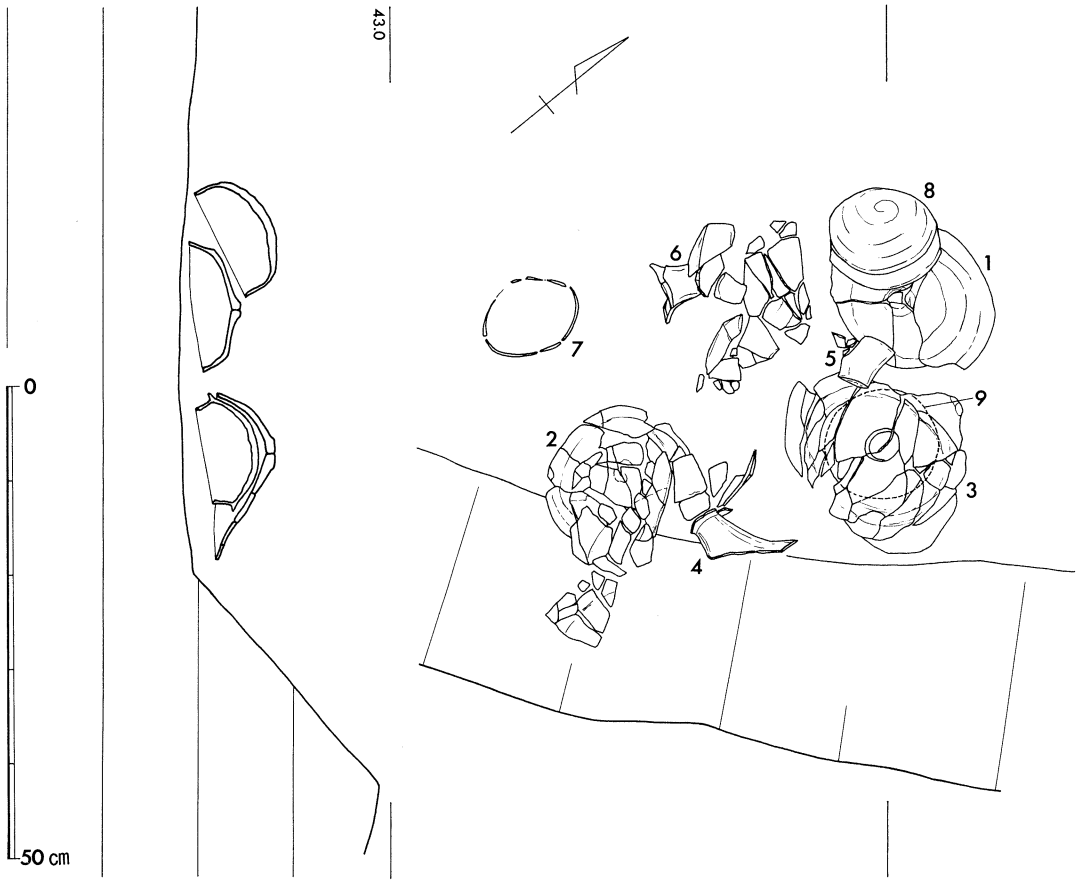
(5) 38号墳

30号墳の東側に位置し、東西に走る尾根と直交するように溝を掘り、墳丘を造り出している。墳丘中央部はそれを縦断する後世の道により削り取られ、また、南側も畑として耕作されていた。墳丘自体も後世かなり削り取られており、調査前には明瞭な墳丘の高まりは認められなかったが、道に削られた断面の精査の結果、溝状の落ちこみが検出され、墳丘を画す東側溝の確認ができたのである。この東側の溝は「コ」の字状に周り、南北の長さは約7.5m、中央部での上端幅約1m、下端幅1.5m、深さ約0.4mである。西側の溝は38号墳の溝より30号墳の溝としてとらえた方が良いと思われる。主体部は、以上のような状況のため検出し得なかった。

東側溝の南隅からは、土師器の高杯5ないし6、土師器碗1、須恵器の蓋杯各1が出土している。これらはすべて口縁を下に向け、伏せた状態で出土している。特に須恵器杯(9)は伏せた後に、土師器高杯(3)をかぶせており、注目された。土器は溝の底辺に密着しており、溝を穿った後余り時間を経ない内に供献されたものと思われる。主体部からの出土遺物ではないが、溝の底面より出土しており、本墳の築造時期に近いものと思われる。また、東側の溝は12号墳の北西コーナーの一部を切るように掘られていることから、12号墳（古）→38号墳（新）という関係が認められる。



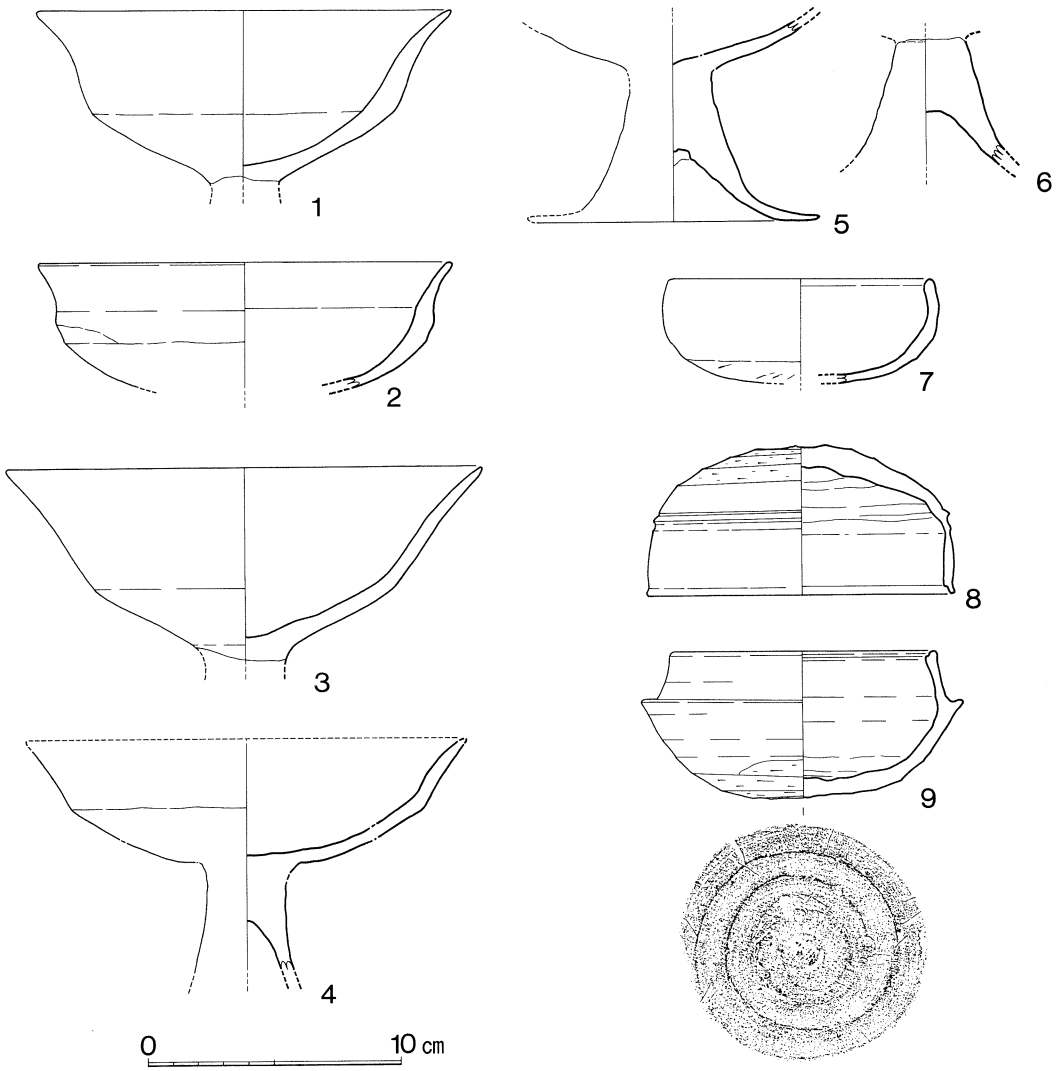
第61図　30・38号墳溝実測図（1／80）



第62図　　38号墳溝内遺物出土状態実測図　(1／8)

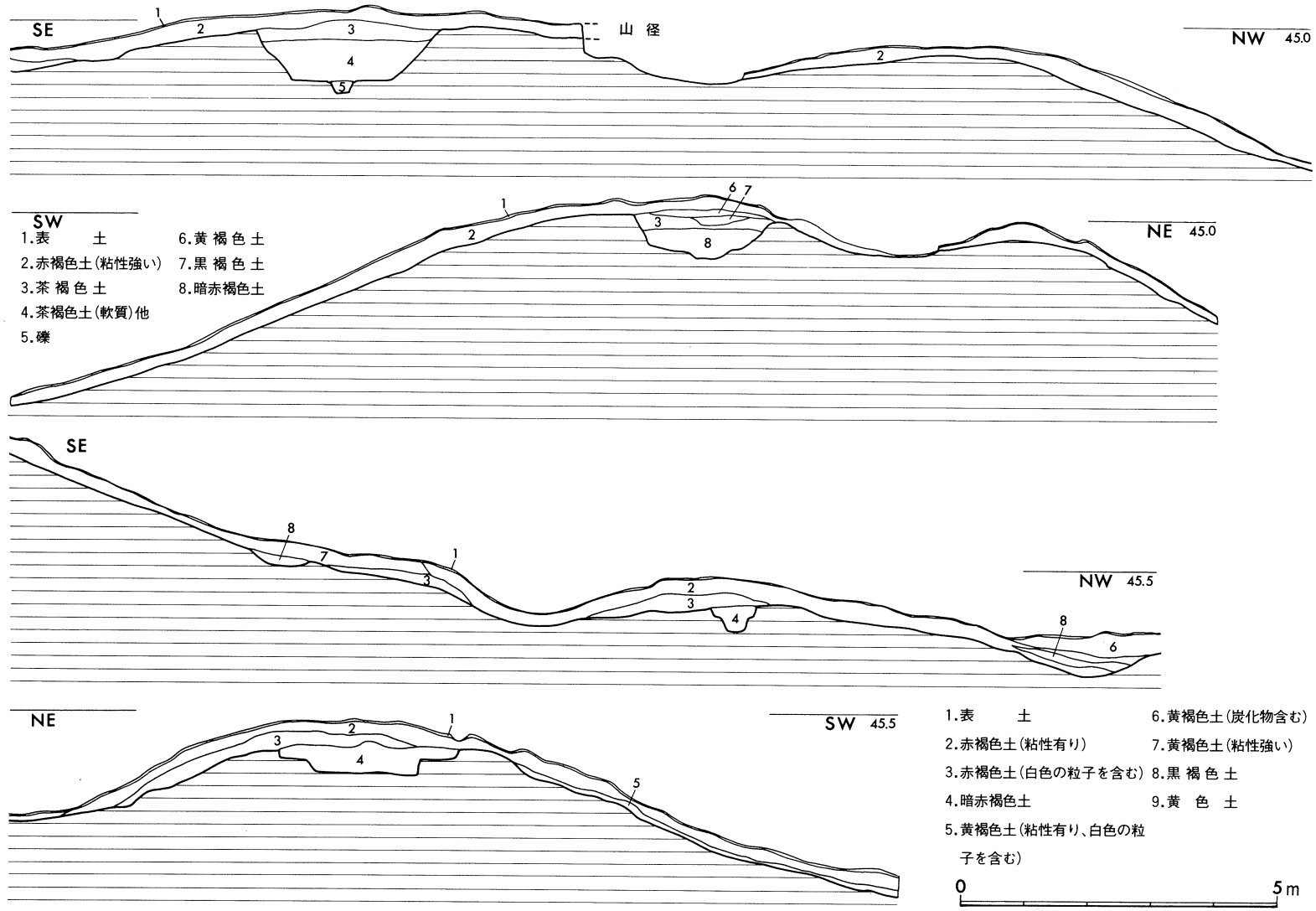
出土遺物　土師器は高杯の杯部３、脚部２、碗１である。高杯の杯部(1)は体部から口縁部の境で屈曲し、口縁部へ向け外反して立ち上がる。端部は丸味をもち、内外面ともナデ調整を施す。推定口径16.5㎝、高さ7.0㎝を測る。(2)・(3)も杯部で、体部でやや屈曲し、口縁部へと続く。内外面とも風化が著しく調整は不明である。(4)は杯部から脚部にかけての破片で、杯部は体部途中で屈曲し口縁部に至る。推定口径17.5㎝である。(5)は脚部の破片で、脚部径11.5㎝、筒部径3.4㎝である。(6)は筒部のみが残ったものである。(7)は碗と考えられ、口径10.5㎝、残存高4.2㎝を測る。体部に丸味をもち、口縁部も内湾気味に立ち上がり、端部に丸味をもつ。底部外面はヘラケズリの後をナデている。以上、色調はいずれも赤褐色で、焼成はやや甘い。

須恵器は蓋・杯１対が出土している。蓋(8)は、口径に比して器高が高く、稜が明瞭につくり出されており、口唇部はやや肥厚して２段になっている。天井部外面ヘラケズリ、同内面ナデ調整、他は内外面横方向の回転ナデを施こす。口径12.0㎝、器高6.0㎝、色調は淡青灰色、焼成は良好で堅



第63図　38号墳溝内出土遺物実測図　(1/3)

緻である。身(9)は底部から体部にかけて丸味をもち、受部は外方へのびる。立ち上がりはやや内傾し、端部はやや肥厚し段を有する。底部外面は回転ヘラケズリ、同内面はナデ調整、他は回転ナデを施す。底部外面に「／」のヘラ記号を施し、口径10.3cm、受部径12.6cm、器高5.9cmを測る。色調は淡青灰色で、焼成は良好である。蓋・身とも胎土には石英・長石をやや多く含む。この杯・蓋は、口径に比して器高が高く、稜が明瞭につくり出されており、口唇部はやや肥厚し、2段になっている。これらの特徴から、山陰の須恵器編年[31]のⅠ期に含まれるものと思われる。また、土師器類も須恵器の杯と出土位置を同じくし、一括して溝内に埋置された状況を示しており、同時期のものと考えらえる。



第64図　12・31号墳土層図

(6) 12号墳

第Ⅳ支群は38号墳の東側、31号墳の北西側に位置している。墳丘を東西方向に山道により削平されており、墳丘中央部は残っていない。前述したように、墳丘の北西墳裾の一部は38号墳の溝により削られてなくなっている。また、南東裾は31号墳と溝を共有しており、墳丘と直交して溝が掘られている。墳丘は地山を切削加工し、長辺18.5m、短辺16.0mのやや長方形の方墳を造り出している。墳頂の標高は44.8m、南東部の溝底からの比高は0.8mである。

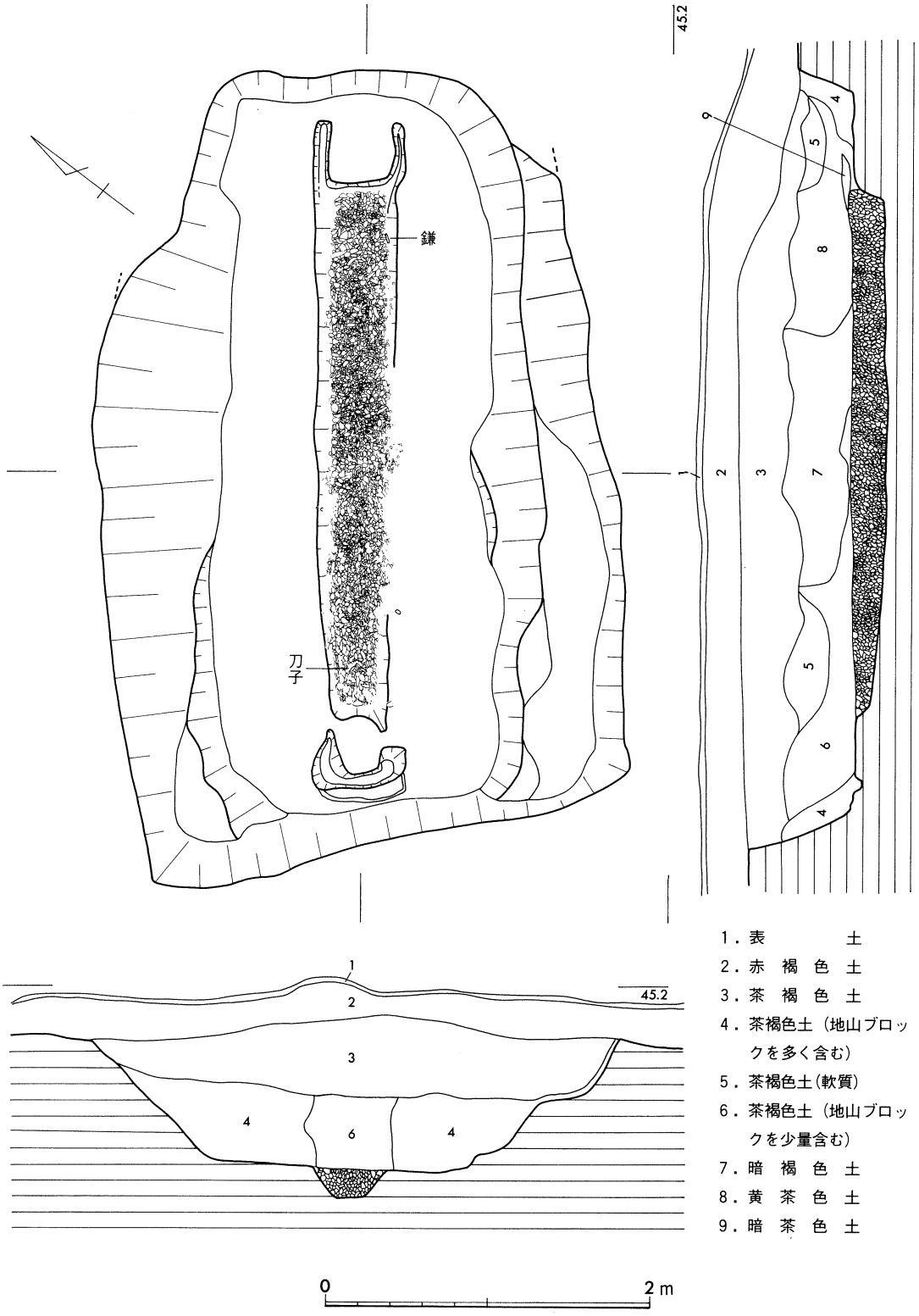
墳頂には12.5×9.5mの平坦面があり、南西方向へ主軸をもつ第1主体部と、それに直交するように第2、第3主体部が地山に掘り込まれている。また、第1主体部の北側コーナーの土器を埋置した土壙と第1主体との切り合いを示す部分は、道により削られており、両者の新旧関係は明確にしえなかった。

第1主体　墳頂に堆積する土砂を約20㎝除去して地山面を精査したところ、南東部で長方形の土壙掘方を検出した。土壙は2箇所にステップをもつ素掘りの墓壙で、上面で標高44.8mを測る。北側の一部は道により削平を受けているが、長辺4.8m、短辺3.2m、深さ0.78mを測り、墓壙の幅としてはこの古墳群中最大である。墓壙壁は逆台形状に立ち上がる。墓壙の北西および南西部には階段状のステップが掘り残されており、墓壙内におりる際の段と考えられる。深さは0.8mあり、大人でも一息に登れないことから、削り残されたものと思われる。このような施設は第2主体でもみられるほか、14号墳第1主体、17号墳第1主体でも認められている。土壙底面は極めて平坦に削られており、床を平坦にすることにかなりな意識がはらわれている。

墓壙中央では長さ3.2m、幅0.4mを測る礫床が検出された。礫床主軸はE－38°－Nである。礫床のレベルは、両端ではほぼ等しいが、北東側が南西側よりわずかに幅広くなっており、北東を頭位とするものと考えられた。上面は被葬者を横たえるためか若干くぼんでいる。墓壙底面よりさらに0.22m深く、断面逆台形の溝状の掘り込みが認められ、指頭大から径5～6㎝の礫がその中にまでぎっしり詰まっていた。礫床上からは、北東側および南西側で鉄器が1点ずつ出土している。

礫床の四周には地山を掘り込んで木棺板材の痕跡が残っており、南西側では「コ」の字状、北東側では礫床短辺に接して木棺妻板の痕跡が認められた。木棺は長手板の内側に妻板を入れ、その中に礫を敷いたものと考えられる。土壙内覆土中、暗褐色土がほぼ礫床に対応しており、この土層が木棺の痕跡であると判断された。

この主体部の埋葬順序については、まず地山に墓壙を掘り込み、墓壙中央に礫を入れる溝状の掘り込みと木棺板材を受ける溝を穿ち、この溝に合わせて木棺を設置する。次いで木棺内に礫を敷いて被葬者を横たえ、副葬品の鉄器を頭付近と足先に納め、確認はできないが木棺に木板で蓋をする。最後に土を埋め戻して終了することが想定される。



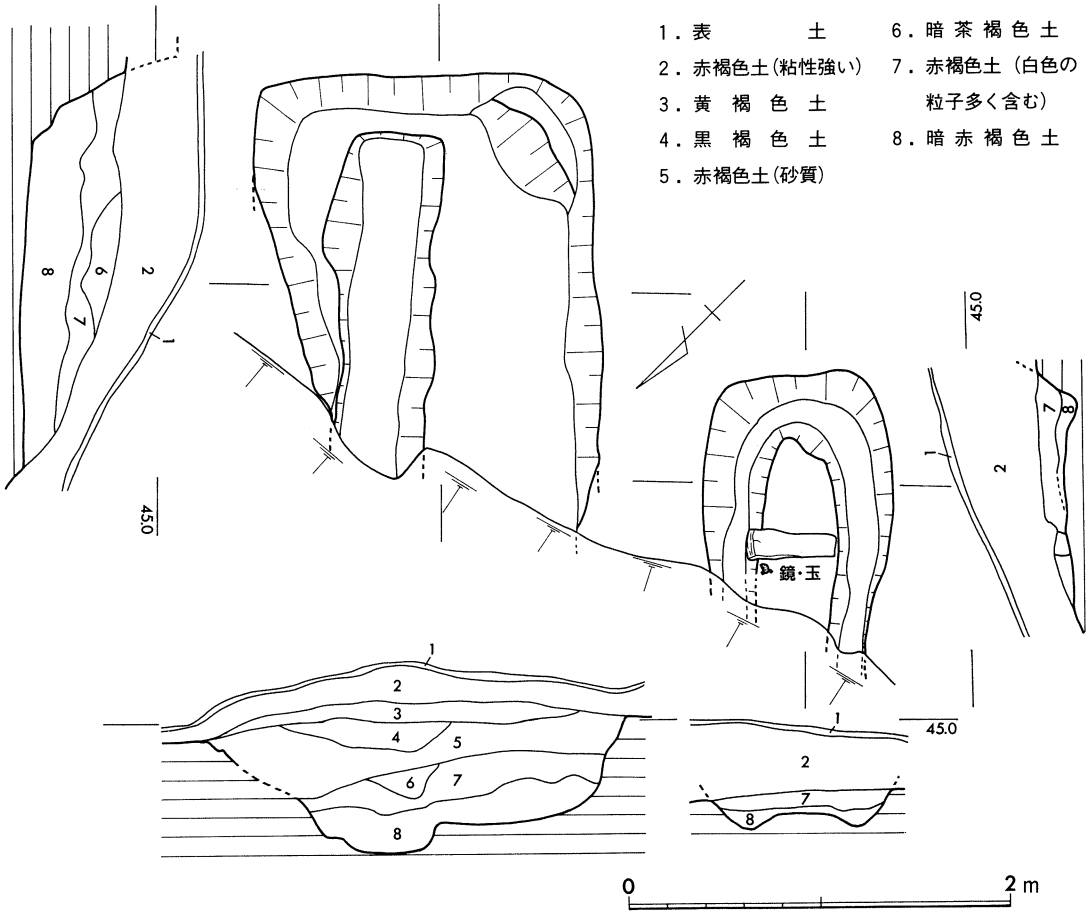
1．表　　土
2．赤　褐　色　土
3．茶　褐　色　土
4．茶褐色土（地山ブロックを多く含む）
5．茶褐色土(軟質)
6．茶褐色土（地山ブロックを少量含む）
7．暗　褐　色　土
8．黄　茶　色　土
9．暗　茶　色　土

第65図　　12号墳第1主体実測図

第2主体　第1主体部の北西部に位置する墓壙で、主軸はS－30°－Eで第1主体部とほぼ直交する位置関係にある。主体部の北西部は道により削平を受けており、南東部分しか残っていない。

墓壙は黄色土の地山より掘り込まれており、墓壙内の覆土は暗赤褐色土である。墓壙壁は桃色の地山である。墓壙は二段掘りで、一段目の壁は急な角度で立ち上がり、床面はほぼ水平である。墓壙は残存長2.4m、短辺1.8m、検出面からの深さ0.4m、二段目は残存長1.8m、短辺0.5m、深さ約0.13mを測る。南側コーナーにおいて壁の南側に狭い平坦面が削り出されており、階段状のステップと考えられる。これは、前述の第1主体の墓壙にみられたものと同様な性格を有すると考えられる。二段目の掘り方は細長く、高さも低い。壁が極めて垂直に近く立ち上がること等から、この内側に木棺を入れて被葬者を埋葬したものと思われる。頭位は、墓壙底面の南東部が約0.03m高くなっており、南東を向くものと考えられる。

この第2主体からの出土遺物はなかった。

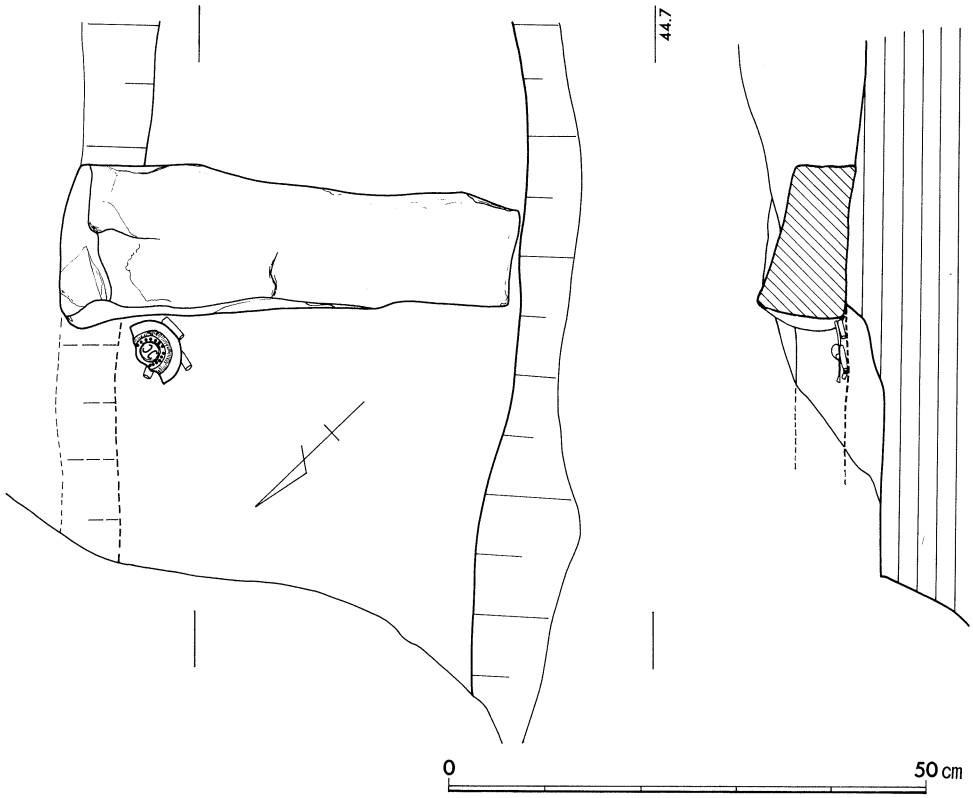


第66図　12号墳第2・第3主体実測図

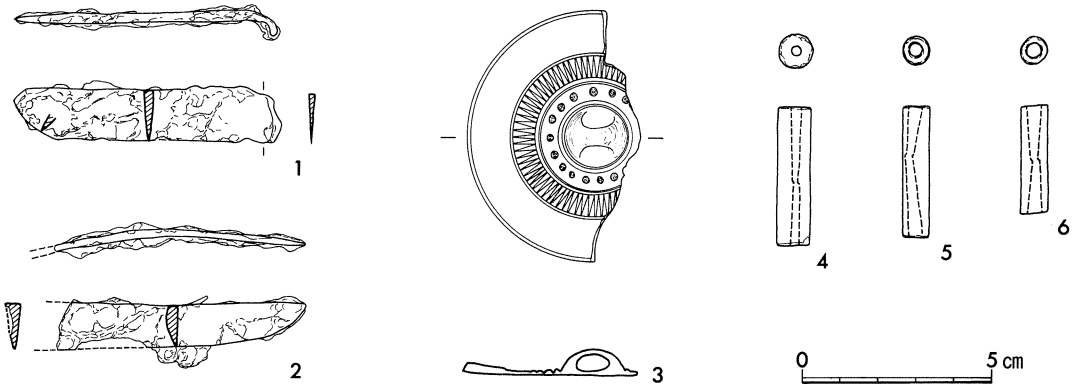
第３主体　第１主体の北西部、第２主体の西隣に位置する。主軸はＳ－44°－Ｅで、第２主体と平行する位置関係にある。第２主体と同様に北西部を道により削平され、土壙上部も著しく攪乱されており、土壙南東側底部が残っているのみである。土壙は、地山面に掘り込まれる素掘りの土壙で、土壙内には赤褐色および暗赤褐色土が堆積していた。土壙は長辺の残存長1.5ｍ、短辺1.0ｍ、深さ0.23ｍである。

土壙底には幅約0.2ｍ、深さ0.07ｍの溝が周って穿たれており、この溝に木棺の側板を入れ、棺を組み合わせていたと考えられる。この溝から復元される木棺の幅は0.6ｍ前後である。また、土壙底の中央は方台状に削り残してあり、南東側には主軸と直交して木棺内を区切るように長方形の石が置かれている。この石は長さ48㎝、幅13㎝、厚さ６㎝を測り、地山に密着した状態で検出された。

第３主体からは珠文鏡１、管玉３が出土している。これらの副葬品は、土壙底の石の北側に、地山面から約３㎝浮いた状態で、管玉３個の上に鏡が鏡面を下にして出土した。鏡は完形ではなくほぼ半分に割れていた。



第67図　12号墳第３主体遺物出土状態実測図　(1／8)



第68図　12号墳第１・第３主体出土遺物実測図（1／2、１・２は第１主体、３～６は第３主体出土）

第１主体出土遺物　礫床上より鉄器２点が出土している。

鎌（第68図１）は長さ7.0cm、幅1.3cmを測り、厚さは背部で0.3cmである。端部は折り返しており、刃部の先端へ向けて湾曲している。

刀子片（第68図２）は刃部の破片で、関の部分を欠いている。残存部の長さ6.5cm、幅1.1cm、厚さは背部で0.4cmを測る。

第３主体出土遺物　土壙底の石の北側から鏡１、その下から管玉３が出土している。

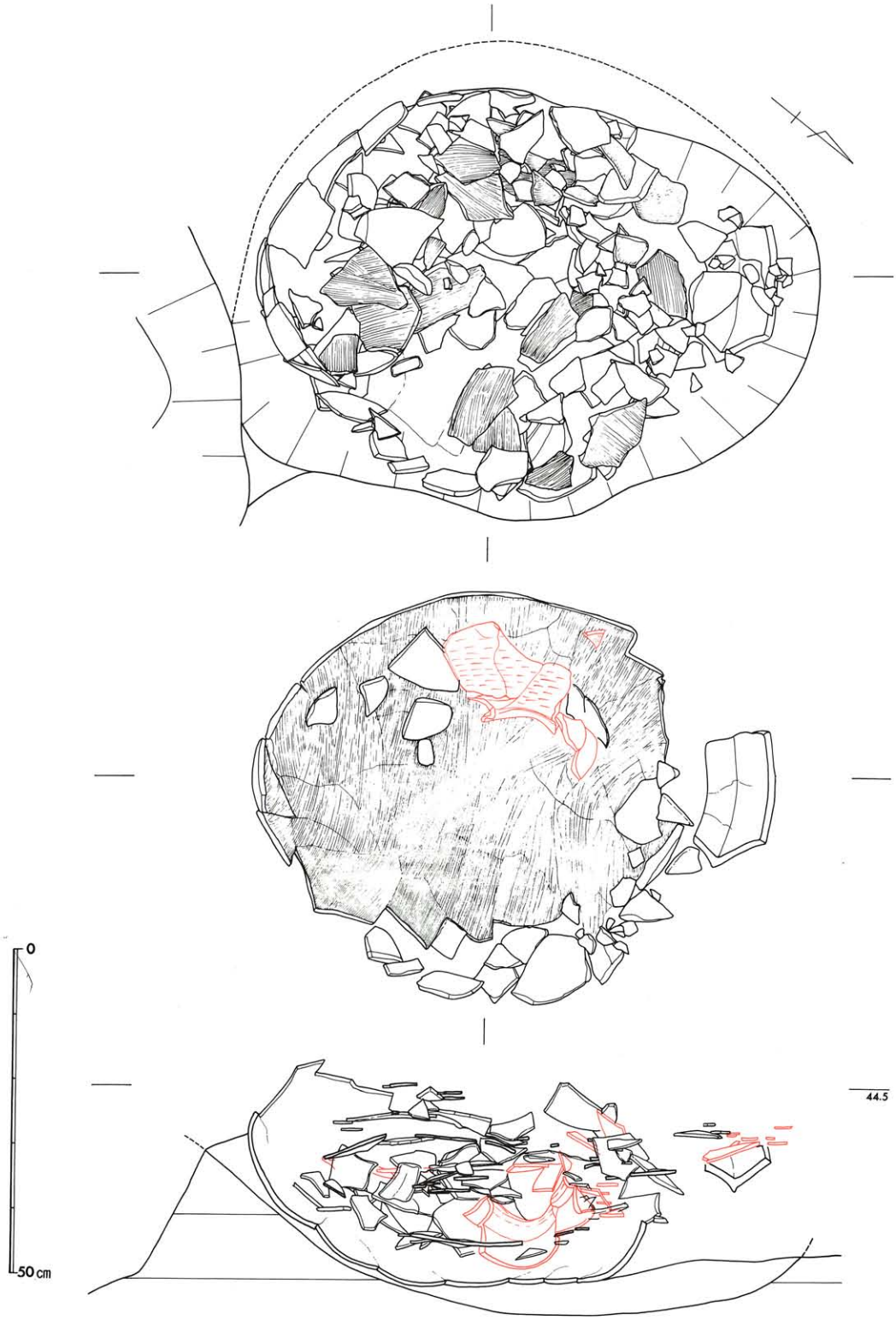
鏡（第68図３）は珠文鏡で、全体の約半分が残っている。主体部の残存状態も悪く、道により半分以上が削られており、本来鏡は完形であったとも考えられるが、鏡の破断面は磨滅が認められ、また鏡の下の管玉が完全に残っており、最初から壊れていたものを副葬した可能性も考えられる。

鏡の復元径は6.7cm、背面構成は、鈕から外方へみていくと鈕座、珠文帯、櫛歯文帯、平縁となっている。珠文は、復元すると合計18個からなると思われる。縁は平縁で幅1.0cm、厚さ0.25cmを測る。櫛歯文は中心から外へ向き斜辺が長く、各所に破損部があるため数は不明である。長さは0.6cmを測る。鈕は、径1.6cm、高さ0.6cm、厚さ0.7cmを測る。

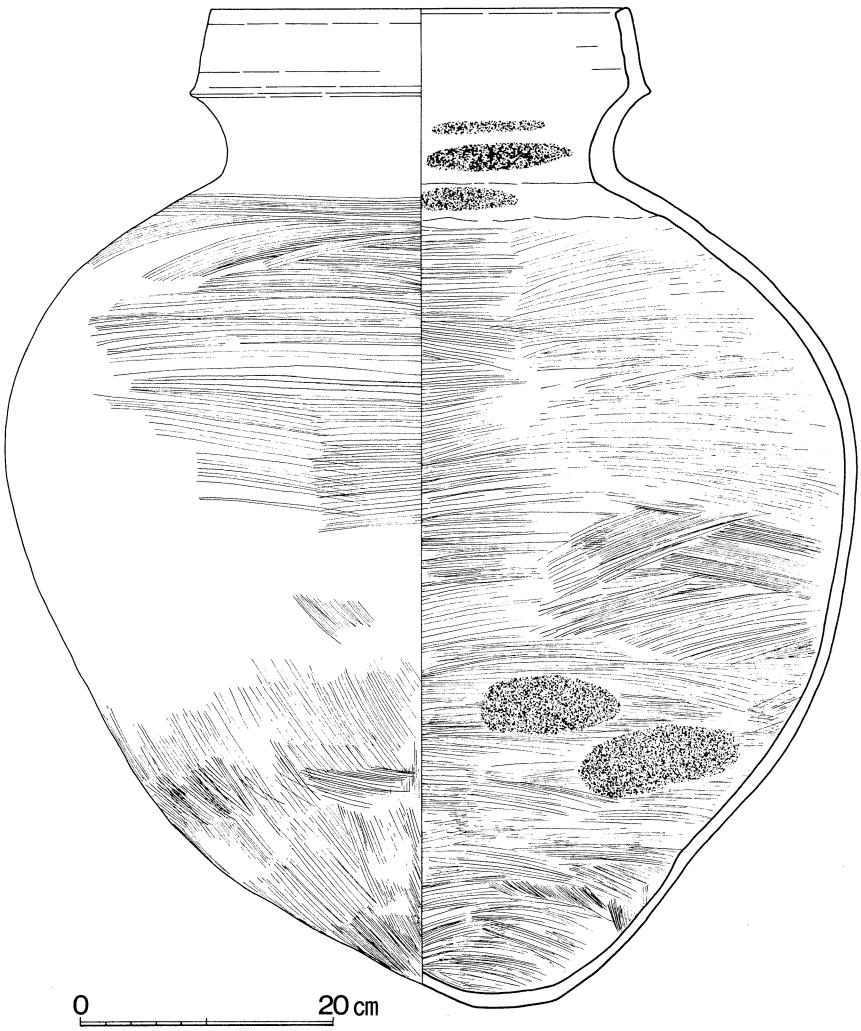
管玉（第68図４～６）は、(4)が緑色凝灰岩、(5)・(6)が碧玉製と考えらえるもので、材質を異にしている。(4)は長さ3.7cm、径0.9cmを測り３本中では最も大きい。(5)は長さ3.5cm、径0.7cmを測る。(6)は長さ2.8cm、径0.7cmを測るものである。３本とも荒磨きの痕跡を残さないほど丁寧に研磨され、碧玉製と考えられる(5)・(6)は現在でも光沢を保っている。穿孔は３本とも二方から行なわれており、注目される。

土師器壺　12号墳第１主体部の北西隅に接して穿たれた土壙内に埋置されていたもので、大小各１個が出土した。壺は大形のものを１号壺、小形のものを２号壺と呼称することとした。

検出された土壙は平面楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.62m、深さ0.23mを測る。土壙上部は



第69図　12号墳土師器壺出土状態実測図（1／10）

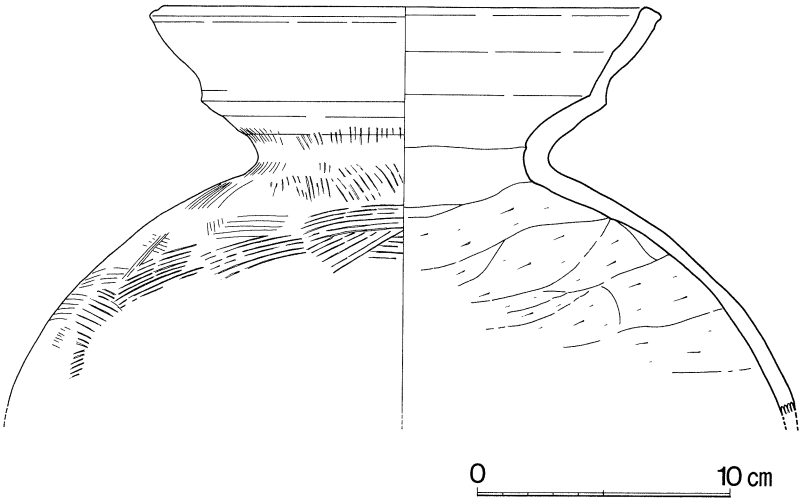


第70図　12号墳1号壺実測図（1/6）

道によって削平されており、第1主体との切り合い関係は不明である。また削平されているため、1号壺の口縁部および胴部の大半も大きく破損していた。

土師器壺は、まず1号壺が口縁部を東に、底部を西に向け、ほぼ水平な状態で出土した。1号壺の内部上面には陥没した胴部の破片が多数認められた。これらの破片を取り上げると内部には微粒の黄褐色土が堆積しており、その中から2号壺が検出された。2号壺は、1号壺の胴部中央よりやや北寄りで、口縁部を下にする形で出土したが、胴部下半を復し得る破片は認められなかった。

1号壺（第70図）は器高80cm、口縁径33cm、胴部最大径67.5cmを測る。焼成は良好で、大粒の砂粒を多く含んでいる。口縁部は複合口縁となるが、立ちあがり部がやや内傾するところに特徴がある。口縁部は、内外面とも横方向のナデ仕上げとしている。胴部は球形に近い形態で、底部は平底



第71図　12号墳2号壺実測図

の名残りをわずかに留めている。胴部の仕上げは、外面上半が横方向、下半が縦方向のハケメ、内面が横方向のハケメとなっている。

2号壺（第71図）は口径21cm、胴部残存最大径32cmを測る。口縁部は逆「ハ」の字形に開く形で、口唇部がやや肥厚し、端部でわずかにうちくぼみとなる平坦面をなす。内外面とも横方向のナデ仕上げとしている。胴部は球形を呈し、外面は不整方向のハケメを施し、胴部上半から頸部にかけてハケメは斜めから縦方向に変化する。内面は横方向へラケズリの後部分的にナデており、器表にざらつきがない。

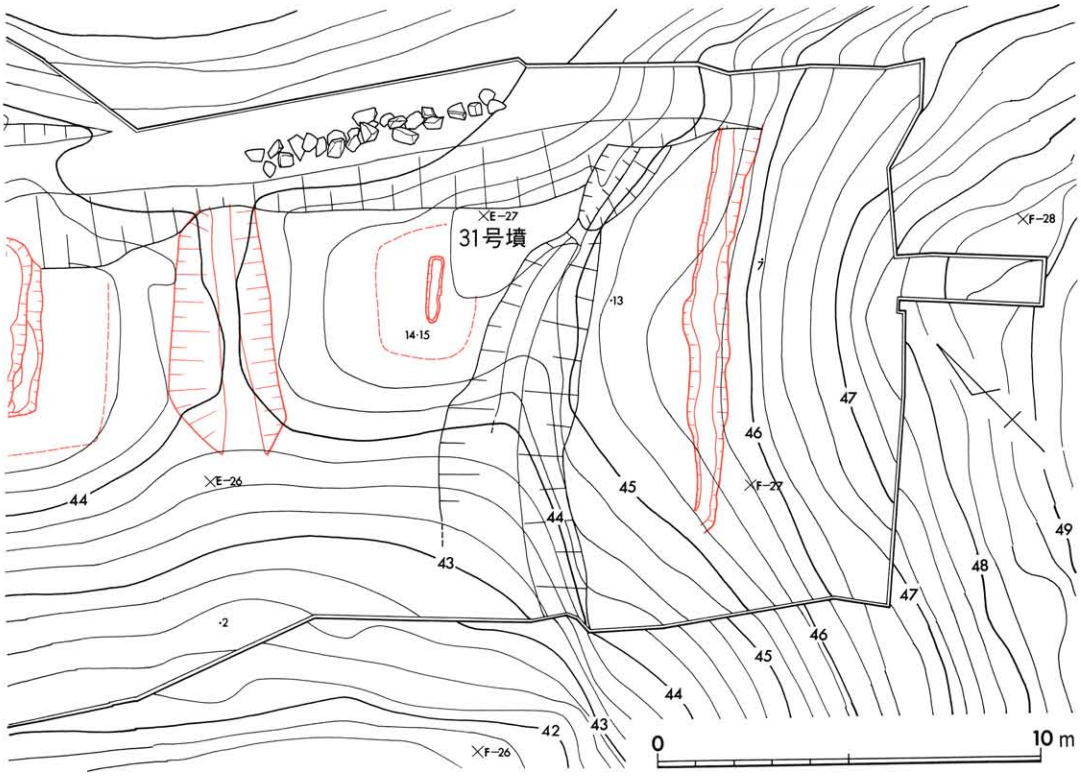
(7) 31号墳

12号墳の東辺に接して営まれる方形墳で、第Ⅳ支群の東端に位置している。

墳丘周辺の樹木を伐採した時点で、12号墳の墳丘中央を東西に横切る山径の続きが本墳の東北墳裾線をえぐる形で走り、さらに東側墳裾にも、先の山径に直交する別の山径が溝状に認められた。このように、外見から墳形を推すことは困難な状態であった。

表土を除去すると、墳丘の土は赤褐色を呈し、地山との判別が困難で、主体部の掘り込み面もかろうじて確認できるという状態であったが、意外にも損壊部分は少なかった。これは、東側に第Ⅴ支群の丘陵斜面が立ちふさがって、長年の間に流下する土が墳丘全体を覆っていたため、山径は墳丘を大きく損うまでには至らなかったからであろう。

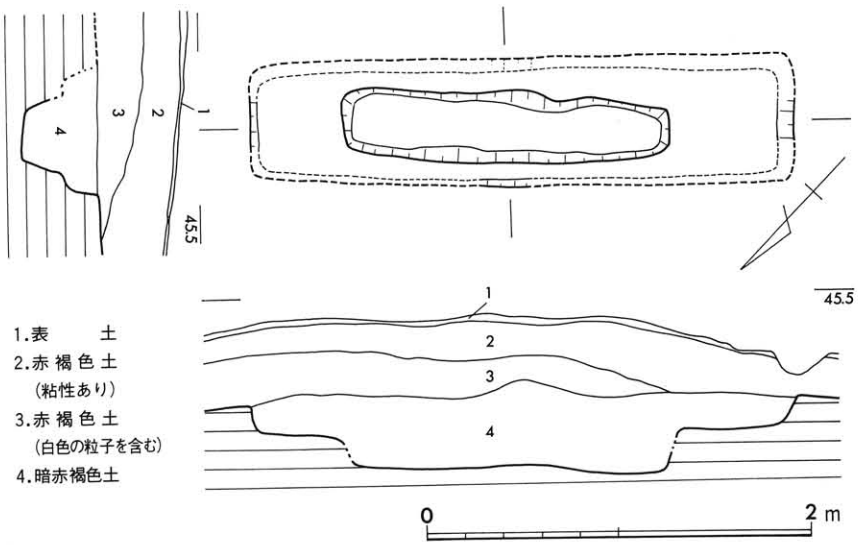
検出された主体部は二段掘り土壙で、長さ2.85m、幅0.70mを測る土壙中央に、さらに長さ1.7m、幅0.4m、深さ0.2mの土壙を掘り込んだものである。しかし、上段の掘方は土層の観察によって確認されたものである。主軸方向はE－44°－Nを測り、下段土壙の北側が南側に比して、幅が



第72図　31 号 墳 墳 丘 測 量 図

やや広く床面も幾分高いので、頭位は北と判断された。また本墳にともなう副葬品はなかった。

なお、墳頂部には最近まで荒神が祭られていたと言われ、上面で散見された土師質土器杯・磁器香炉・幣串、さらに東北辺墳裾に沿っていられた列石等も、それに関係するものであろうと考えられた。（第75図14～18）



第73図　31 号 墳 主 体 部 実 測 図

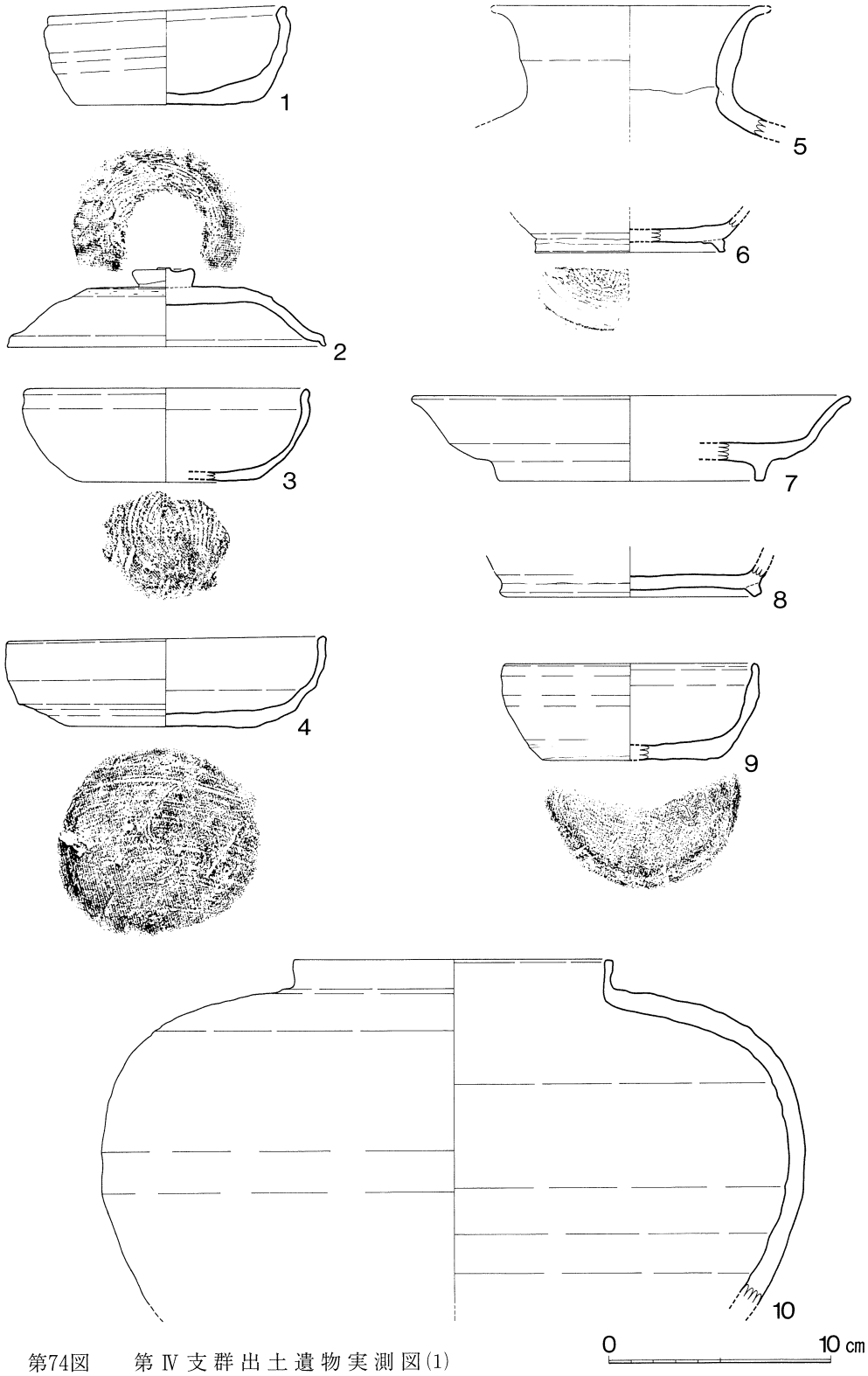
(8)　第Ⅳ支群出土遺物

遺物は、須恵器・石器・カワラケ・磁器である。(1)は11・29号墳周辺、(2)～(5)は12号墳周辺、(6)・(7)・(13)～(18)は31号墳周辺、(8)～(11)は38号墳周辺、(12)は11号墳北東階段の出土である。(14)～(18)は31号墳東側の荒神の祭祀にともなう遺物である。

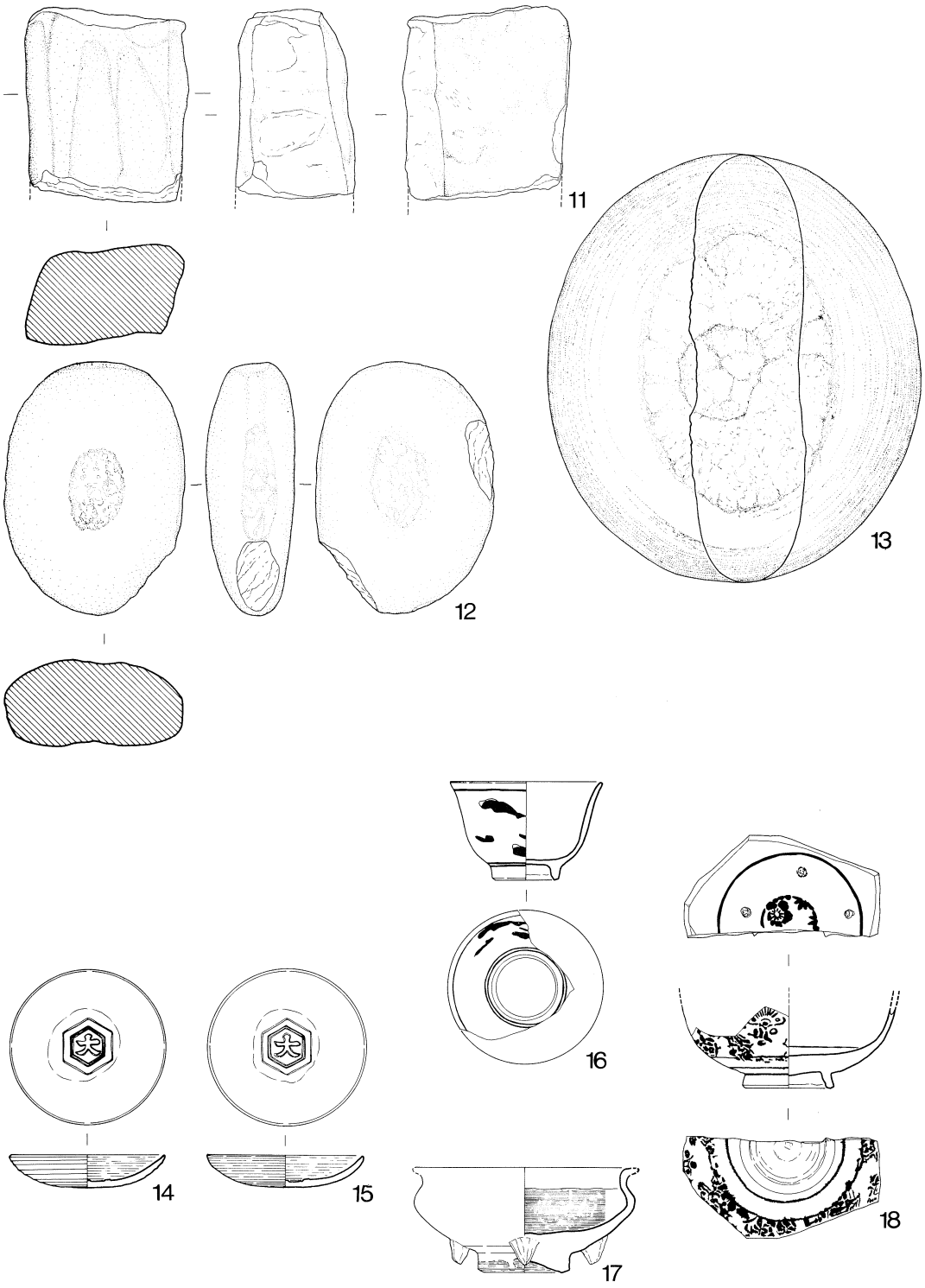
須恵器杯(1)は口径10.5cm、器高4.3cmを測る。体部は内湾して立ちあがるが、端部で外反する。底部は回転糸切りで切り離すが、明瞭には残っていない。蓋(2)は口径14.3cm、器高3.6cmを測る。天井部は回転糸切りで切り離した後に擬宝珠状のつまみを貼り付ける。糸切りを施した周辺部は回転ヘラケズリで仕上げている。口縁部は内側に折り曲げている。杯(3)は口径12.6cm、器高4.3cmを測る。体部は内湾して立ちあがるが、端部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離している。杯(4)は口径14.2cm、器高4.0cmを測り、口径やや大きい。体部は垂直に近く立ちあがる。底部は静止糸切りで切り離している。壺(5)は口縁部の破片で、頸部最小径は9.3cmを測る。頸部内面に口縁部と体部の接合痕が残っている。杯(6)は底部の破片で、高台径8.5cmを測る。底部は糸切りで切り離した後、華奢な高台を貼付けている。杯(7)はあるいは皿かとも考えられるが、口径19.6cm、器高3.9cmを測るものである。底部は回転糸切りで切り離した後に、やや高い高台を貼付ける。体部は大きく開いている。杯(8)は底部のみが残存しており、高台径11.8cmを測る。回転糸切りで切り離した後、低い高台を貼付け、糸切り痕をナデによって消している。杯(9)は口径11.1cm、器高4.4cmを測る。内湾する体部は端部でさらに内側に折り曲げる。底部は回転糸切りで切り離している。短頸壺(10)は口縁径14.4cm、体部最大径31.8cmを測る。ごく短い頸部からタマネギ状の体部に続くものである。体部外面にはかすかにタタキメが見えるが、回転ナデによって消している。

石器(11)は玉砥石と考えらえるもので、残存長8.7cm、幅7.4cm、厚さ4.9cmを測る。両端を折損しており、残る4面は程度の差はあるもののいずれも磨滅している。最も頻繁な使用痕が残る面には2条のくぼみが認められる。石材は砂岩質のものである。石器(12)は凹(くぼみ)石と考えられるもので、長さ11.7cm、幅8.2cm、厚さ4.0cmを測る。扁平な楕円形を呈し、表裏2面と側面3箇所に敲打痕を残している。この痕跡が残る部分以外は著しい磨滅を示す。石材は砂岩質のものである。石器(13)も凹石と考えらえるが、長さ19.8cm、幅17.1cm、厚さ5.1cmと大形のものである。扁平な楕円形を呈し、1面にのみ面積の広い敲打痕を残すが、中心部のみやや深くくぼんでいる。この裏面は磨滅して平滑な面となっている。側面はなめらかな面をなす。

カワラケ(14)・(15)は全く同巧のもので、口径7.2m、器高1.5cmを測る。内面底部に亀甲形の枠内に「大」の字のスタンプを押して、枠と「大」を浮きあがらせるものである。内面回転ナデ、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。磁器(16)は茶碗で、口径6.9cm、器高4.6cmを測る。やや深い杯部に垂直に近い高台を有する。外面に青・白・黒3色で文様を描き、内面には文様をもたない。磁器(17)は香炉



第74図　第Ⅳ支群出土遺物実測図(1)



第75図　第Ⅳ支群出土遺物実測図(2)

と考えられるもので、扁球状の体部は大きく外反して口縁部をなす。底部は削り出しの高台をもち、外面底部に3本の脚をもつが接地するものではなく、脚として機能しておらず痕跡的なものである。外面および口縁内面には淡い黄緑色の釉薬がかかる。磁器⒅は碗で、丸味をもち、やや深い体部に削り出しの高台を有する。内外面に明るい紺色の染付をもつ。内面見込みには圏線の内側に花文を描く。外面下半には3本の圏線をもち、その上方に草文状の文様を描く。内面底部には3箇所に重ね焼きの時の窯道具の痕跡が残っている。

以上観察してきた遺物の時期は、須恵器では(1)～(3)・(6)・(9)が出雲国庁編年[33]第4形式、柳浦編年[34]第4式、(4)が国庁第3形式、柳浦第3式、(7)・(8)が国庁第5形式に属するものである。(5)・⑽は時期不明である。石器では⑿・⒀が凹石と考えられるもので、古墳の築造に先立つ時期の遺物の可能性がある。⑾については時期の判定は困難である。カワラケ・磁器は荒神の祭祀にともなうもので、時期は近世以降であることを示している。

第4表　第Ⅳ支群 遺構に伴わない遺物観察表(1)

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
74－1	杯身	10.6	8.0	4.5	平坦な底部から口縁に向けてゆるやかに立ち上がり、端部わずかに外反する。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。	灰色	細砂粒含む。	不良 軟質	
2	杯蓋	14.5	－	3.6	平らな天井部から口縁に向けゆるやかに広がり、端部に内側に折れ曲がる。 偏平な擬宝珠状のつまみを貼り付ける。 天井部外面回転糸切り。以下回転ナデ。 天井部内面ナデ調整。以下回転ナデ。	端部外面のみ暗灰色	大粒のもの含む。	良好 堅緻	
3	杯身	13.0	8.2	4.3	平らな底部から口縁にかけてゆるやかに立ち上がり端部で外反する。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底面ナデ調整。		砂粒少ない。	良好	
4		14.2	8.4	4.2	平らな底部からゆるやかに広がり、口縁にかけて直立気味に折れ曲がり立ち上がる。 底部静止糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。器壁薄い。	口縁部のみ黒灰色			
5	壺カ	－	－	－	直立気味の頸部から外へ向け広がる口縁部。内面に口縁部と胴部の接合痕を残す。				
6	杯身	－	8.6	－	低い高台をもつ。 外面底部糸切り痕を残す。内面底部ナデ調整。	外面／黄茶色 内面／灰味茶色	密	やや不良	
7		19.6	11.8	3.9	高台をもち、底部から口縁にむけて直線的に広がる。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナデ調整。	灰色	砂粒少量	良好	

第5表　第Ⅳ支群 遺構に伴わない遺物観察表(2)

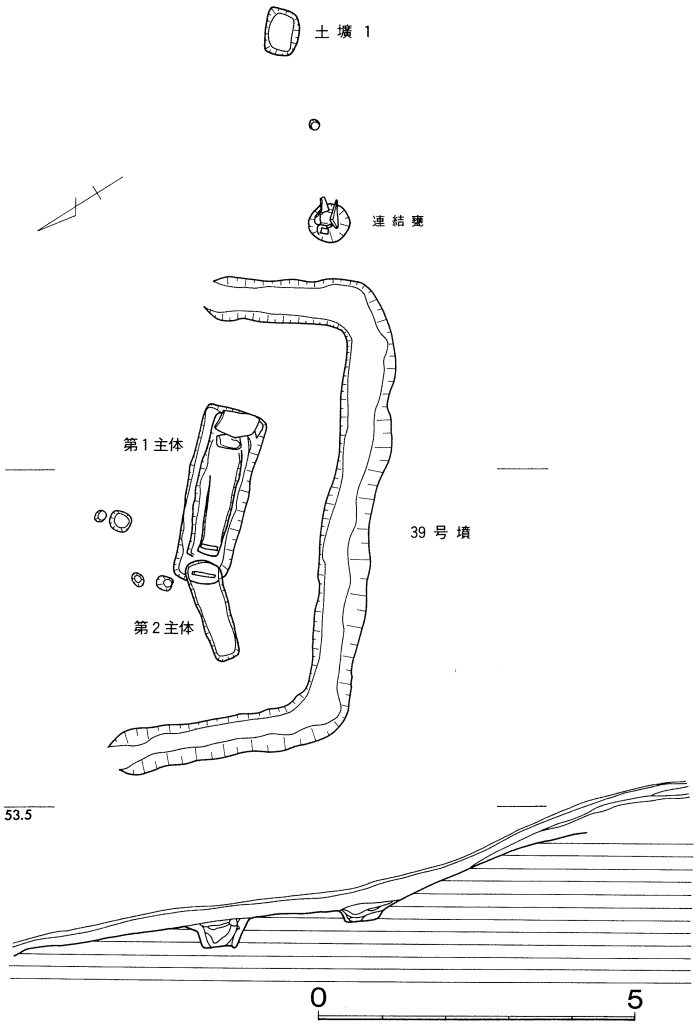
挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
74－8	杯身	－	11.2	－	低い高台をもつ平坦な底部。 底部回転糸切りののちナデ。高台・体部回転ナデ。内面底部弱いナデ調整。	暗灰色	長石など少量含む。	普通	
9		11.2	8.0	4.4	平坦な底部から高く立ち上がる体部を有し、その端部で内湾する。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底面ナデ調整。				
10	短頸壺	14.5	－	－	直立する短い口縁をもち、胴部大きく張る。胴部以下底部にむけてゆるやかにせばまってゆく。 内外面とも回転ナデ。外面下部に消されてはいるがタタキメを残す。	外面／灰色 内面／灰白色	緻密	良好	
75－14	カワラケ皿	7.0	－	1.5	丸味をもった浅い皿。 外面回転ヘラケズリ。(ロクロ回転左) 内面強い回転ナデ。 内面底部に六角形の枠の中に「大」の字を浮き彫りにするスタンプによる浮文をもつ。	灰白色	精選され密。		土師質
15									
16	茶碗	6.8	2.8	3.6	径小さく、やや高い削り出し高台に深い体部がつく。 外面に青・黒・白三色の染付。青色で口縁部と底部にそれぞれ1・2本の線。 黒・白2色で雲形の文様を描く。	白色 青・黒・白の染付			磁器
17	香炉	－	6.2	－	高台をもつ底部から大きく開き、口縁で再び屈曲して開く。体部下半に3本の支脚をもつが接地しない。 外面／体部下半回転ヘラケズリ。高台も削り出す。高台には釉薬かからない。 内面／口縁部のみ釉薬かかる。以下は釉薬かからない。この部分回転ナデ。	灰白色 釉薬／淡い黄緑色			
18	杯	－	4.2	－	薄手のやや高い高台をもち、丸味をおびて立ち上がるやや深い体部をもつ。 外面／回転ヘラケズリにより器形を整え、高台も削り出す。 内面／釉薬の下に回転ナデの痕跡が残る。 明るい紺色で花を密に描く。	灰白色 釉薬／明るい灰白色 染付／明るい紺色			内面底部に3個の円形の重ね焼痕。香炉様のものを重ね焼きしたものか。

第4節　第Ⅴ支群

(1)　39号墳とその周辺遺構

13号墳の東側には墳裾線に沿って比較的平坦なテラスが認められた。このテラスは幅6.0m、長さ20.0mで、13号墳墳頂部との落差は1.5mを測るものである。

このテラスは平野に向かって張り出す形になっており、当初は、平野から13号墳を仰ぎ見た場合二段築成に見せるために削り出された加工壇であろうと考えられた。しかし、表土を除去しながら調査を進めていくと、平面「コ」の字状に浅い溝で墓域を画した39号墳、性格不明の柱穴状遺構、さらに性格不明の土壙1、土器をともなう甕棺の一種とみられる遺構を検出した。そこで、このテラスは13号墳の付属施設的な削り出しではなく、独立した墓域として扱うべきものと判断された。

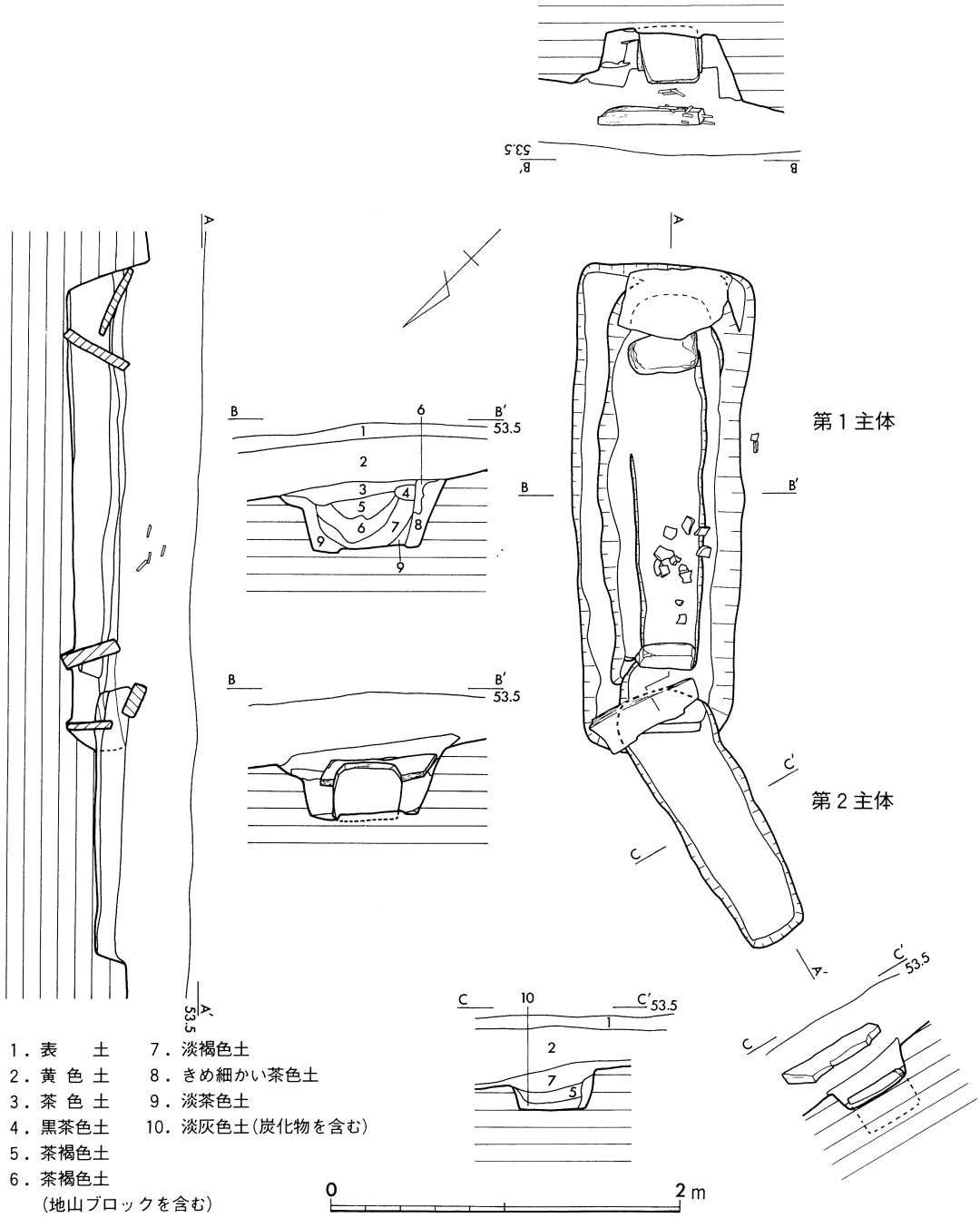


第76図　39号墳とその周辺遺構実測図（1／120）

以下、39号墳・甕棺墓・土壙1の順で概要を記すことにしたい。

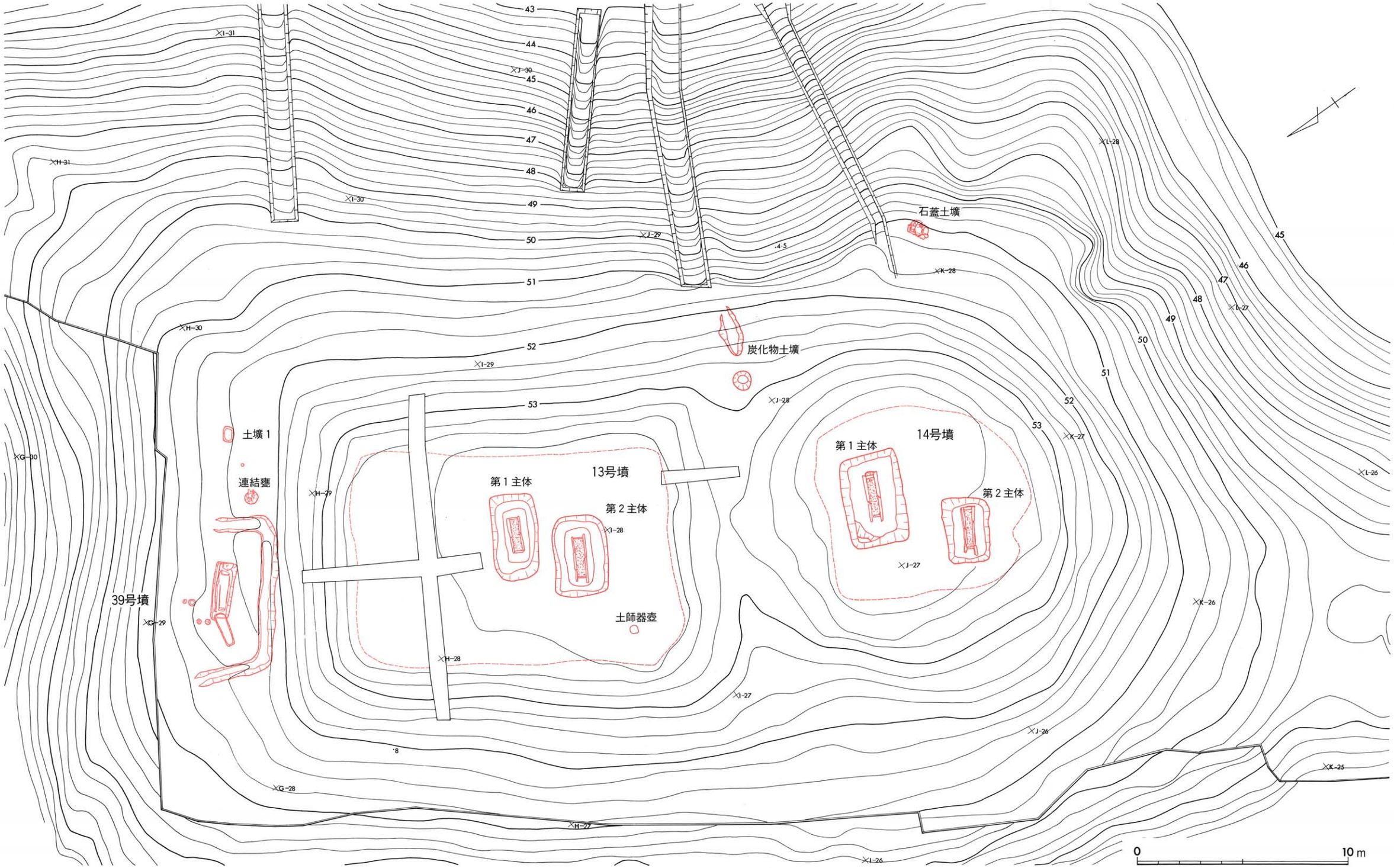
(2)　39号墳

13号墳東側墳裾線に沿って、平面「コ」の字状に深さ0.2mを測る浅い溝を半周させて墓域とし、その墓域内にほぼ東西方向に2つの主体部を設けている。



第77図　39号墳第1・第2主体実測図

溝の長さは南辺2.5m、13号墳墳裾線に沿う西辺7.5m、北辺3.5mを測る。幅は南辺と西辺が約0.8m、北辺は0.7mとやや狭くなっている。墓域東辺を画す溝は認められない。これは、東辺にあたる部分がテラスの肩にあたり、その東は急斜面となっており設けることが不可能とみられるから



第78図　39 ・ 13 ・ 14 号 墳 墳 丘 測 量 図

である。あるいは、本来必要を生じなかったとも想像される。溝の断面は全体に逆台形を呈すが、西辺では13号墳墳丘斜面の角度がそのまま下降して溝底に至り、底はほぼ水平な面を呈した後垂直に近い角度で立ちあがる形となっている。

第1主体　墓域の中央やや南寄りで検出した埋葬施設で、主軸方位E－44°－Sを測り、位置等から中心主体と考えられるものである。長さ2.8m、幅1.0～8.5m、深さ0.35mを測る土壙内に、妻板部分のみに板状石材を使用し、長手板は木板を用いている。これは、いわば組合式木棺と箱式石棺との折衷形ともいうべきものである。土壙の幅は南東がやや広く、被葬者の頭位は南東を示すものと判断された。

棺について詳述すると、土壙内頭位側の妻部分には0.4×0.3m、厚さ0.05mを測る方形の板状石材を用い、その上に0.6×0.5m、厚さ0.05mを測る板状石材を架構する形となっていた。脚側の妻板には外側と内側0.4mを隔てて板状石材2枚が立てられていた。外側のものは0.4×0.2m、厚さ0.06mを測り、内側のものは0.3×0.3m、厚さ0.09mとやや大きい石材を用いていた。後述するが、第2主体部頭位上面で認められた板状石材は、第1主体脚部の2枚の石材上面に架構されていた可能性が強い。長手板が仕組まれていたとみられる床面には、相対して幅0.15m、深さ0.02mの溝が認められた。このことから、厚さ0.15m前後を測る板材を長手板として用い、先の板状石材を挟む形に仕組まれたものと判断された。

以上記した諸点からすると、この棺は被葬者の納められる中央の部屋と、頭位・脚位の板状石材によって仕切られた小副室から構成されているといえよう。蓋材はみられなかったが、土壙の上縁南隅や北辺に蓋を架構するための狭いテラスが認められた。よって蓋は長手板と同様木板が使用されたものと推定された。なお、この主体部の上面で手の平大の板状石材が散見された。

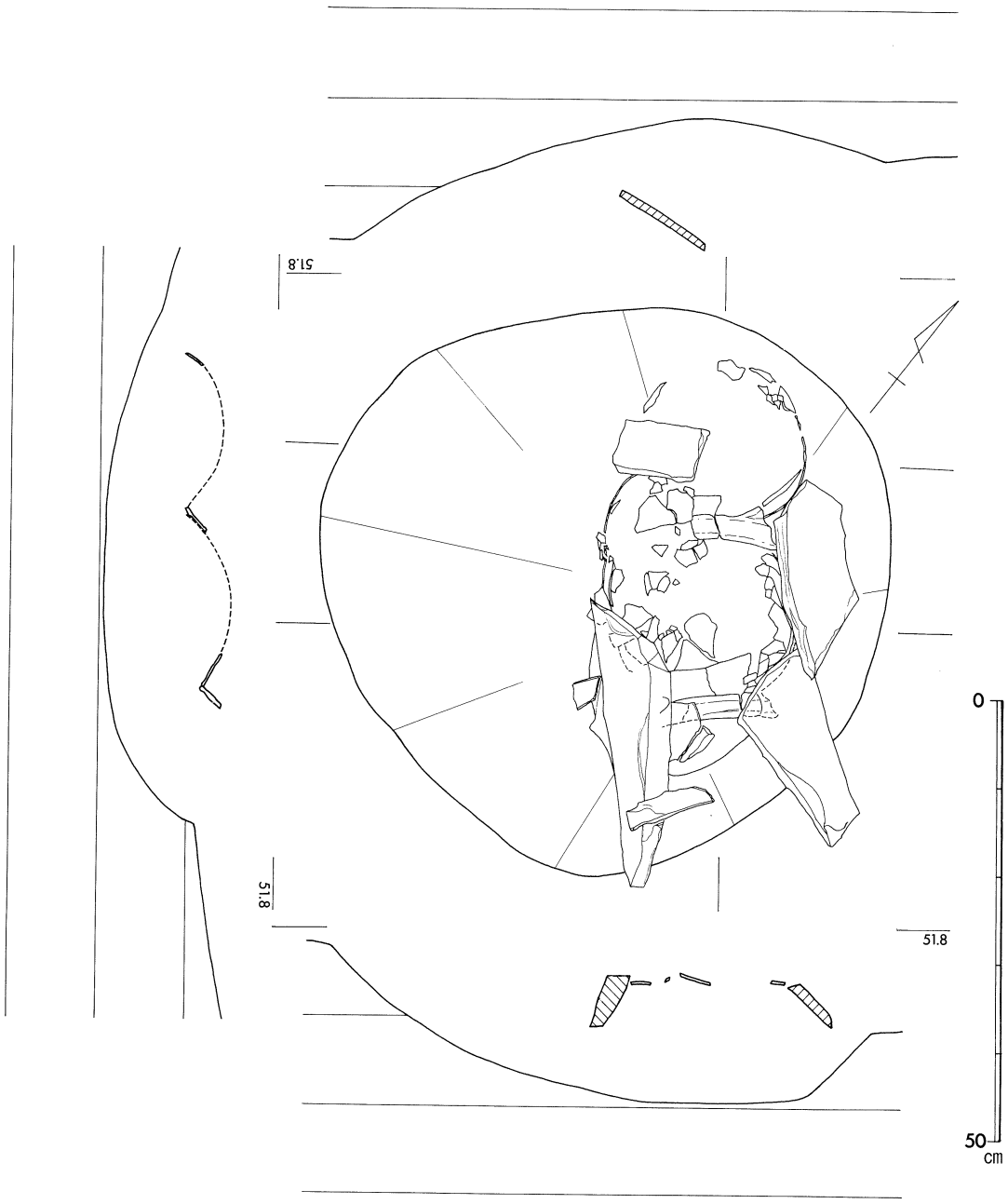
第2主体　第1主体の脚部に重複して掘り込まれている素掘りの土壙で、主軸方向はE－16°－Sを示し、長さ1.6m、幅0.5～0.4m、深さ0.2mを測るものである。この土壙の床面は平坦で、棺材を仕組んだ痕跡等は認められなかった。土壙の幅は東方がやや広く、このことから被葬者の頭位は東を示すものと判断された。ここでも第1主体と同様、蓋材は認められなかった。

ところで、第1・第2主体の間には、その切り合い関係から第1主体（古）→第2主体（新）という新旧関係が認められた。両者は互いに重複しないよう配慮されていた可能性がある。たとえば第1主体は墓域の中央よりやや南東寄りに穿たれており、これは、おそくとも第1主体の被葬者が埋葬される時点で、次の被葬者を埋葬する計画があったことを示している。しかし、結果的に一部重複してしまったものと考えられる。

第2主体の頭位上面で板状石材が認められ、あたかもこの主体部にともなうかにみえる。しかし本来は第1主体の脚部に位置する小副室の蓋の一部であったものが、後に第2主体の埋葬に際し、

原位置から移動されたもので、同主体部の埋葬終了後に再び置かれたものと推定される。

なお、39号墳と13号墳との新旧関係については、39号墳の溝が13号墳の墳裾線に沿う形に掘られており、明らかに13号墳に規制されていることから、13号墳(古)→39号墳(新)という関係が考えられる。



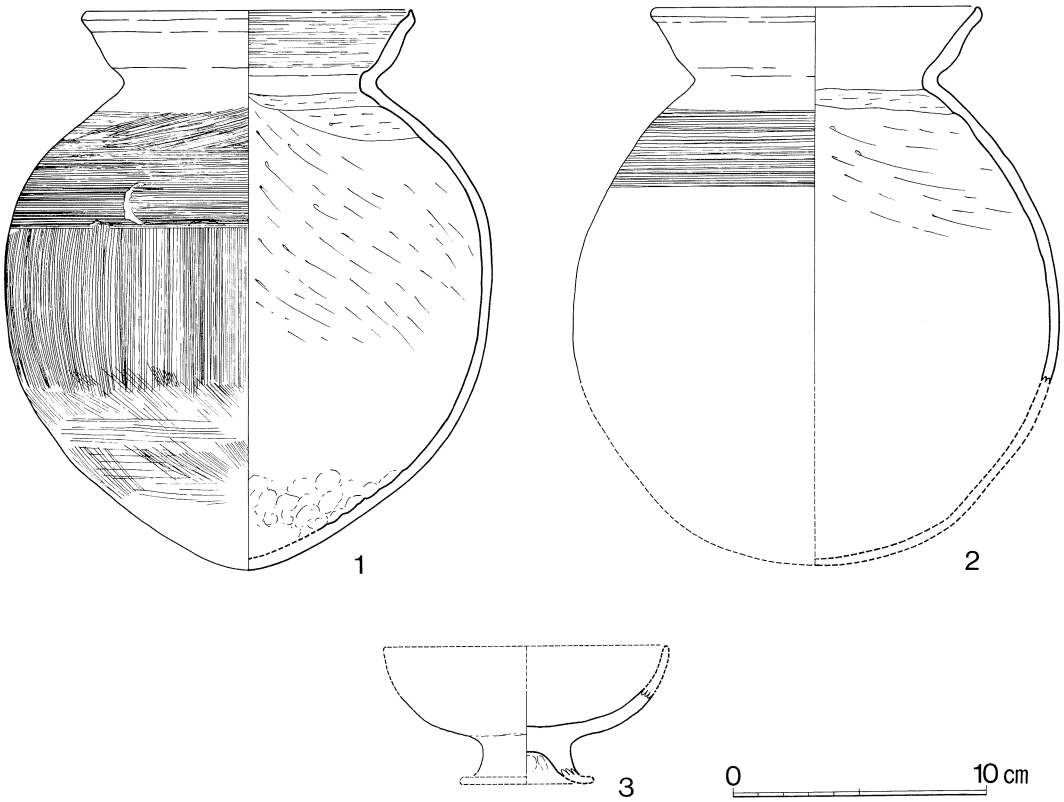
第79図　連結甕出土状態実測図 (1/8)

(3) 甕棺墓

39号墳の南側に位置する甕棺と考えられるものである。直径0.65m、深さ0.10mを測る平面円形の浅い土壙内に土師器甕を縦並びに伏せ、その両脇を板状石材で覆ったものである。土壙は断面浅い皿形を呈し、土師器は土壙東壁寄りに床面よりやや浮いて出土した。縦に半截した甕を内側を下にしてほぼ水平に伏せ、さらに別の半截した甕の口縁部で先の甕の底部を覆うように伏せていた。検出した時点では、2個体の土師器甕を連結させたもののように思われたが、土壙底面側に甕の破片が認められず、別々に実測した甕1、甕2には類似点が多く、両者は同一個体と考えられる。

土師器甕の両脇は大小6箇からなる板状石材をたてかけ、断面「ハ」の字状に覆っていた。この石材は、本古墳群中で箱式石棺に使用されているものと同様なものであった。なお、土壙の南側掘り込み脇で、礫床に用いられているものと同様な礫1箇が出土した。

土師器甕　この甕は焼成も良好とは言いがたく、検出時には上面が著しく損われていた。器壁も薄く破片も小片が多かった。土師器甕1は土壙内南側で検出され、板状石材に覆われていた。器高22cm、口縁径13cm、頸部径10cmを測る。口縁部の形態は単純に屈曲するいわゆる「く」の字口縁と称されるものである。胴部は全体に球形に近いもので、肩部はゆるやかに曲線を描いて下降する。



第80図　連結甕実測図

底部は逆円錐状にとがる形となっている。

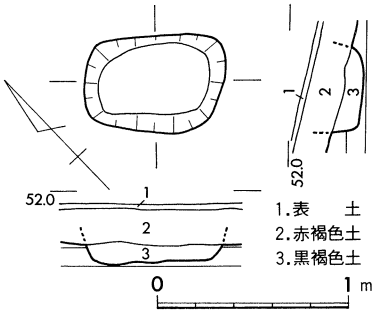
口縁部内外面とも横ナデで仕上げており、胴部外面ハケメで仕上げられているが、上・中・下とその方向を異にしている。肩部付近が横、胴部中央が縦、胴部下半から底部にかけて斜め方向のハケメとなっている。内部は斜め方向のヘラケズリ、底部付近に指頭圧痕が認められる。

土師器甕2は1の北にあったもので、胴部下半が変形しているが、その点を除けば形態、仕上げ等細部にわたって1に酷似している。

この遺構にともなうと断言はできないが、13号墳墳裾線付近で低脚杯1を得ている。全体に風化が著しく、比較的小形の部類に属するものであろう。

(4) 土壙1

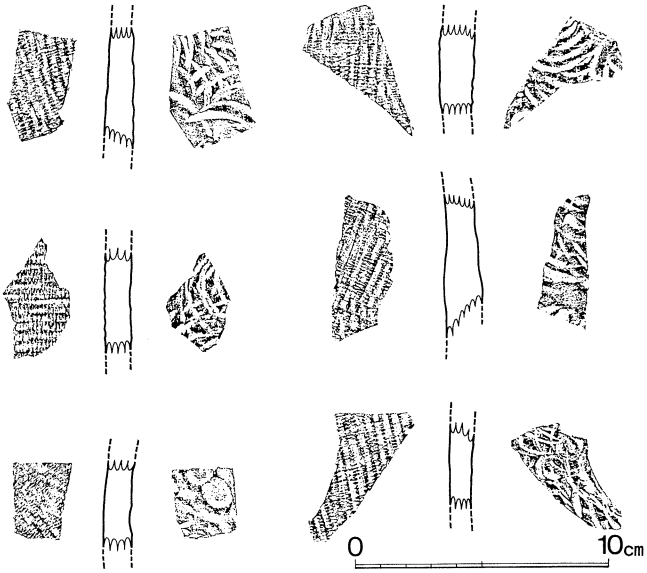
13号墳の北東部にあるテラス上の平坦面、標高51.7mに位置する。表土除去後、須恵器甕の破片が出土し、精査を行なったところ、地山面に掘り込まれた土壙を検出した。平面隅丸方形を呈し、長辺0.7m、短辺0.5m、深さ約0.05mで床面はほぼ平坦である。壁は逆台形状に緩やかに立ち上る。土壙の覆土は炭化物・焼土粒を多く含む黒褐色土で、床・壁が焼けている。



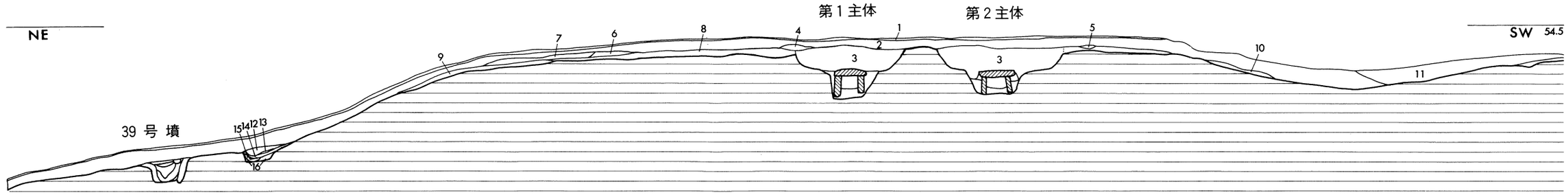
第81図　土壙1実測図

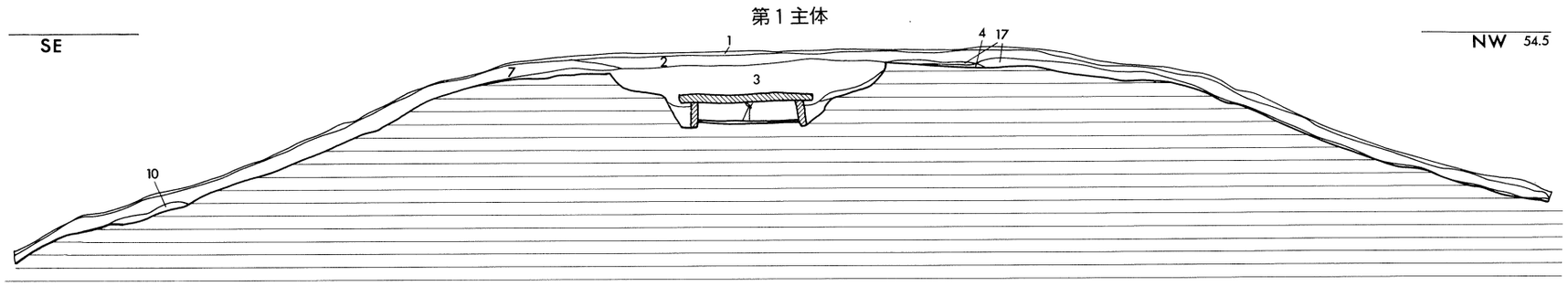
須恵器甕は、すべて胴部の破片である。外面は平行タタキメ、内面は同心円状のタタキメを施している。胎土、焼成、器厚から、破片は同一個体と思われ、テラス上の埋葬主体よりは新しいものと考えられる。

その他、土壙1周辺および39号墳周辺で5穴の土壙が確認されている。土壙1に隣接する土壙は径0.15m、深さ0.15mを測り、底部は平坦である。土壙1と同様、黒褐色土が充満している。柱穴様を呈するが、1穴しか検出されず、その性格は不明である。



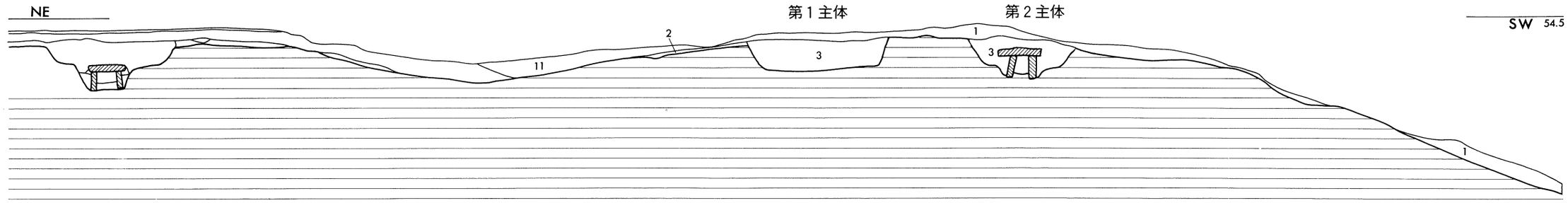
第82図　土壙1出土遺物実測図

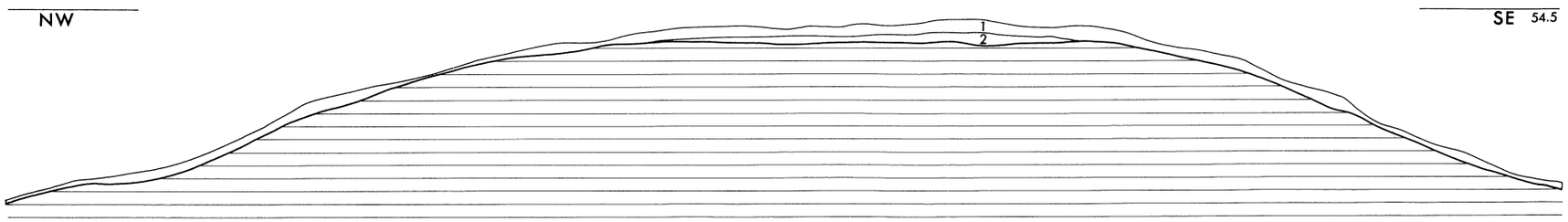




13 号 墳

1．表　　土
2．黄 色 土
3．茶褐色土
4．茶褐色土を含む黄色土
5．黄褐色土
6．黄色ブロックを含む褐色土
7．褐 色 土
8．黄 色 土(砂質)
9．暗茶色土
10．赤 色 土
11．赤褐色土
12．淡赤褐色土
13．淡赤褐色土(地山ブロックを含む)
14．淡赤褐色土(粗い)
15．茶褐色土
16．褐 色 土
17．黄 色 土(白色の地山ブロックを含む)





14 号 墳

1．暗赤褐色土
2．黄 色 土
3．赤 色 土
11．赤褐色土

0　　5 m

第83図　39 ・ 13 ・ 14 号 墳 土 層 図

(5) 13号墳

本古墳群中最高所の標高53.9mにあり、各支群の配置からみても扇の要的位置に営まれている。整美な墳丘で、23×19×1.5mの墳丘規模は方墳で本古墳群中最大である。主軸はN－34°－Eである。墳頂部からは北側眼下に展開する講武平野が眺望され、被葬者の盟主的要素を窺わせる。

墳頂部が極端に平坦であることから、後世削平された可能性も考えられたが、約30cm表土を除去すると、墳丘は丘陵頂部の高まりを削り出して成形されていることが知られた。しかし39号墳側は丘陵が平野に向かって緩やかに下降するため、わずかな盛土によって平坦面が確保されていた。なお、調査終了時に行なった墳丘の断割調査の結果から盛土の下には暗茶色の旧表土が認められたので、墳丘成形時に旧表土を除去する作業は行なわれなかったものと判断された。

主体部は墳頂部中央より南に偏った位置に、2基の箱式石棺が埋置されていた。また、南西隅から土師器の大壺が1個体分出土した。

第1主体　墳丘の中央で検出した中心主体と考えられる箱式石棺で、主軸はE－27°－Sを測り、中央短軸線とほぼ一致している。この石棺は長辺4.2m、短辺2.2m、深さ0.8mを測る隅丸方形二段掘土壙の中央に埋置されている。土壙は緩やかな傾斜で掘り込まれ、幅約0.35mのテラスを周らした後、垂直に近い傾斜でさらに掘り込まれている。

石棺の蓋石には2枚の板状石材が用いられ、東側の蓋石は長さ1.10m、幅0.60m、厚さ0.12mを測り、西側のそれは長さ0.90m、幅0.65m、厚さ0.10mとやや小さいものであった。両者の接する面以外の側面は敲打法によって面取り加工が施され、横断面はかまぼこ形を示す形となっていた。蓋石裏面の長手板と妻板が接する部分にははつり加工が施され、両者の間に隙間が生じないよう考えられている。蓋石の隙間は青灰色粘土による入念な被覆が施されていたが、棺内には暗茶色の微粒土が若干流入していた。石棺は内法長1.55m、幅0.38m、深さ0.26mを測り、東西の妻板を各2枚の石材で一辺を構成する長手板で挟む形となっていた。妻板は長手板両端よりわずかに内側に入った位置に仕組まれており、妻板が接する長手板内面には、両者を固定するために浅い溝状の刳り込みが施されていた。また、棺を構成する石材と同質の破片が土壙内のテラス上に浮いた形で散見された。なお、棺上面を覆う土壙内の土質は一様で腐蝕土等が混入していなかったことから、石棺の埋め戻しは短時間に行なわれたものと推定される。

棺内の床面には指頭大の礫が厚さ0.09mに渡って敷きつめられており、その上面は東方が若干高く、被葬者の頭位は東方を示すものと判断された。

棺内からの出土遺物はなかった。棺外の東側蓋石直上で指頭大の土師器片を得たが、これが棺上にあったのは意図的なものか否かは速断できない。また、土壙南西隅から30cm離れた地山面で、直径約15cmのほぼ円形で比較的密な感じの炭化物の塊を採集した。

第2主体　第1主体の南側で検出した箱式石棺で、主軸はE－30°－Sを測り、第1主体とほぼ平行である。ただ第1主体がやや東寄りの中央部に位置しているのに対し、本主体中央は13号墳の長軸線が横断する形となっている。つまり第1・第2主体の間には互いに棺身約半分ずつのずれが生じている。同様なずれは14号墳でも認められ、このことは注意すべきことと言えよう。

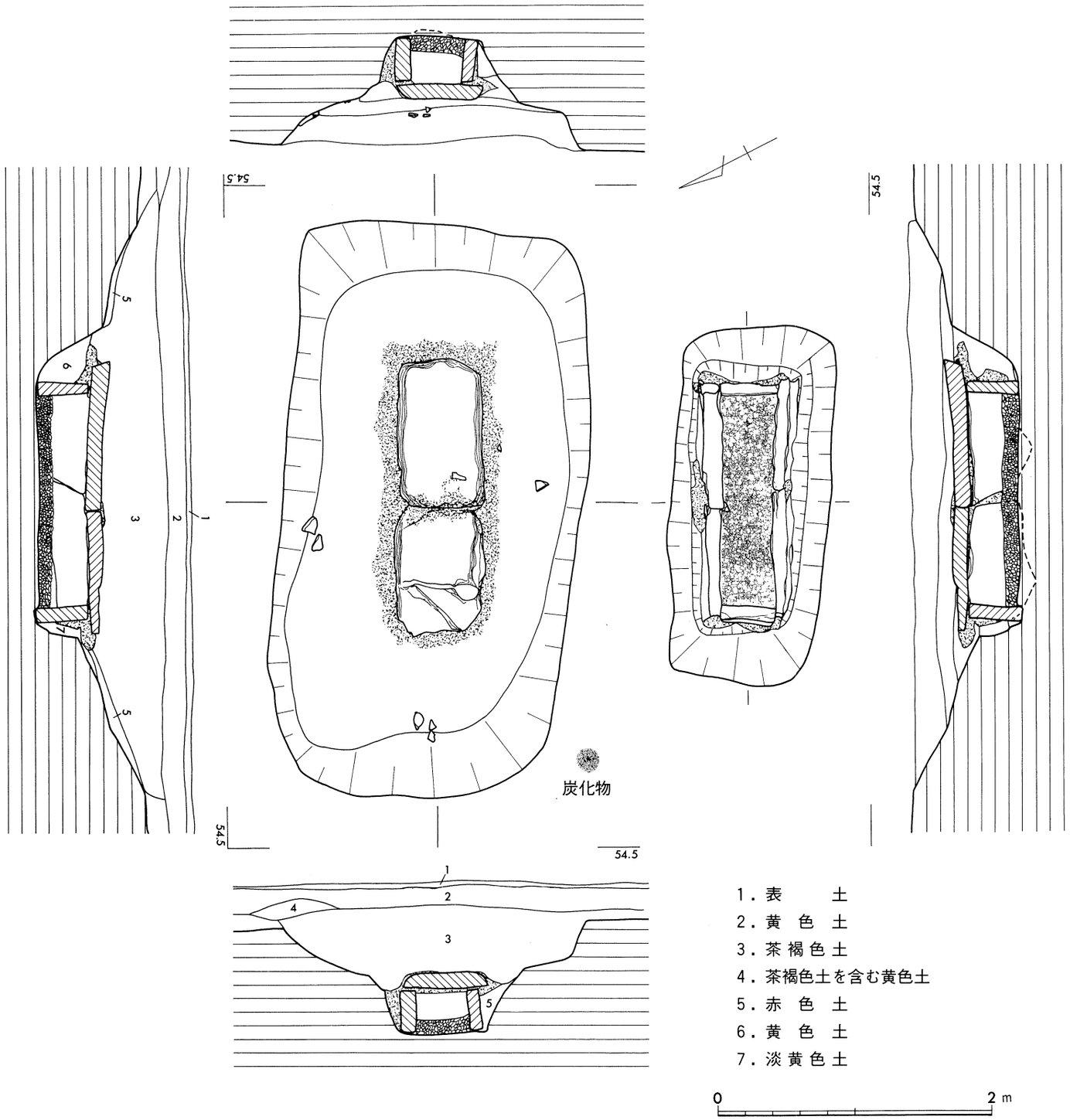
調査は表土除去から着手したが、腐蝕土に鍬を入れた直後に手の平大の板状石材が多数出土した。結果的にこの石材は墳丘加工面より約20㎝上層に浮いた形で出土した。この石材は箱式石棺の棺材として使用されることが多く、後世石棺が破壊されたためその残骸が出土したものと考えていた。しかし周囲を精査するにしたがって、これら石材の下に長辺3.9m、短辺2.5m、深さ約0.7mを測る隅丸方形二段掘墓壙が検出され、その中央に箱式石棺が埋置されていることが判明した。土壙は第1主体と比較するとやや幅広くなっているが、形態はほぼ同様で、第1主体より若干鋭角に掘り込み、幅0.2～0.6mのテラスを周らした後、垂直に近い傾斜でさらに掘りこんでいる。

石棺の蓋石には2枚の板状石材が用いられ、東側の蓋石は長さ1.60m、幅0.75m、厚さ0.09mを測り、西側のそれは長さ0.66m，幅0.70m、厚さ0.09mと極端に小さいものである。2枚の蓋石は表裏とも顕著な加工痕は認められないが、東側の蓋石は14号墳第1主体の蓋石と形態が酷似していることが注意される。つまり方形に近い形を呈している蓋石の角および長辺等の曲線に共通したものが認められ、両者は同一母岩から板状節理を利用して割出されたことを示唆するものである。よって、両被葬者の埋葬はさしたる時間差を経ずして行なわれたものと推定することができよう。蓋石の隙間は第1主体と同様、青灰色粘土による入念な被覆が施されていたため、蓋を除去した折、内部には若干の微粒土の流入が認められたに過ぎなかった。

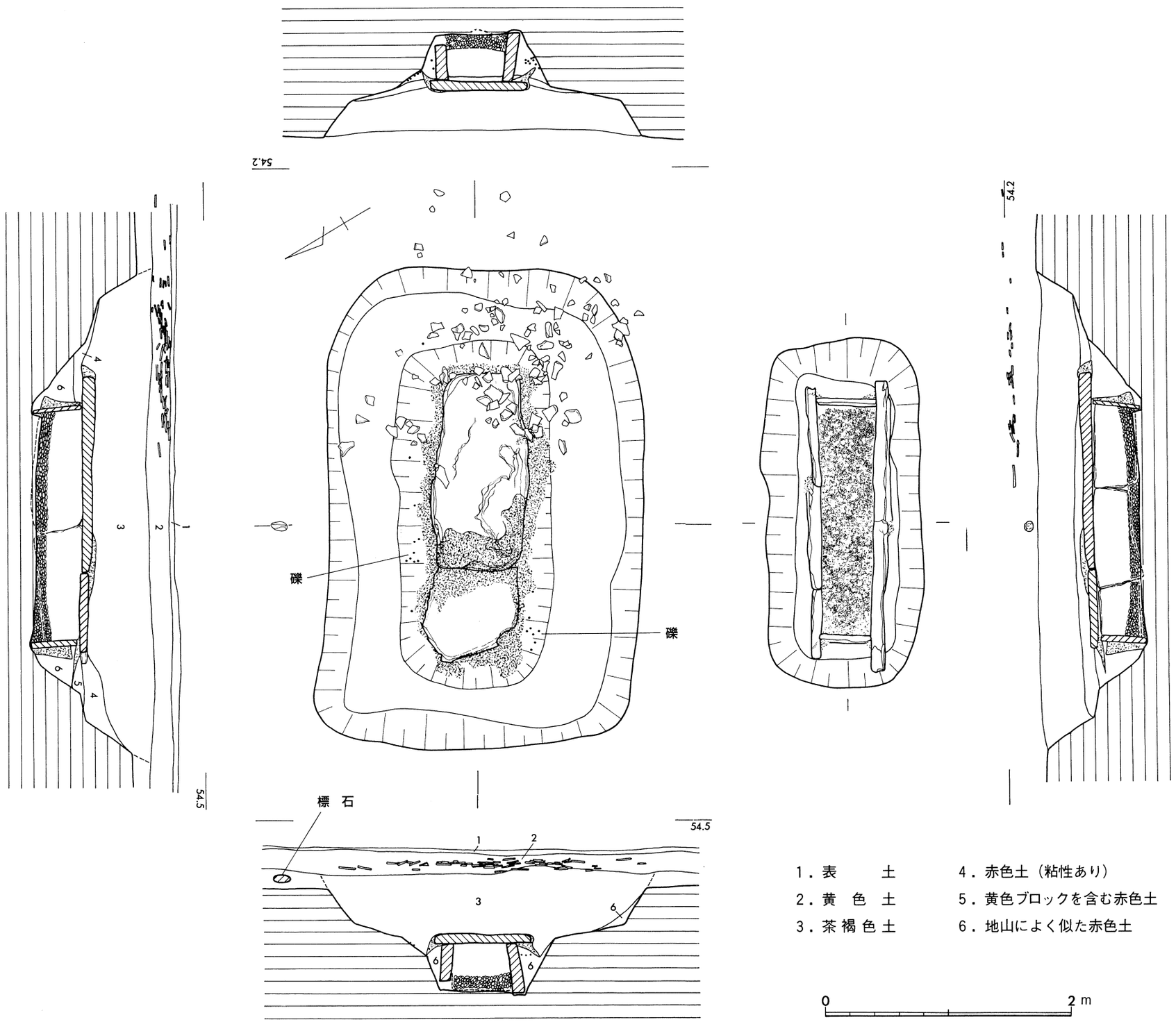
石棺は内法長1.85m、幅0.42m、深さ0.26mを測り、東西の妻板を各2枚の石材で一辺を構成する長手板で挟む形となっている。妻板は長手板両端より若干内側に入った位置に仕組まれており、妻板が接する長手板内面には、両者を固定するために浅い溝状の刳り込みが施されていた。なお、北側長手板が3枚の石材を継いで一辺を構成しているかに見えるのは、各側板が棺の規模のわりにやや薄い石材が使用されたため、長手板の西側沿いに亀裂が生じたからである。

棺内の床面には指頭大の礫が厚さ0.10mに渡って敷きつめられ、中央がやや低くなっていた。礫床は東側が西側よりやや高く、また幅も東側が0.08m広いことから、頭位は東方を示すものと判断された。棺内床面に敷きつめられたと同様な礫が棺外の西側で散見されたが、これは石棺埋置に際し、床面に敷く礫が飛散したものと考えられる。

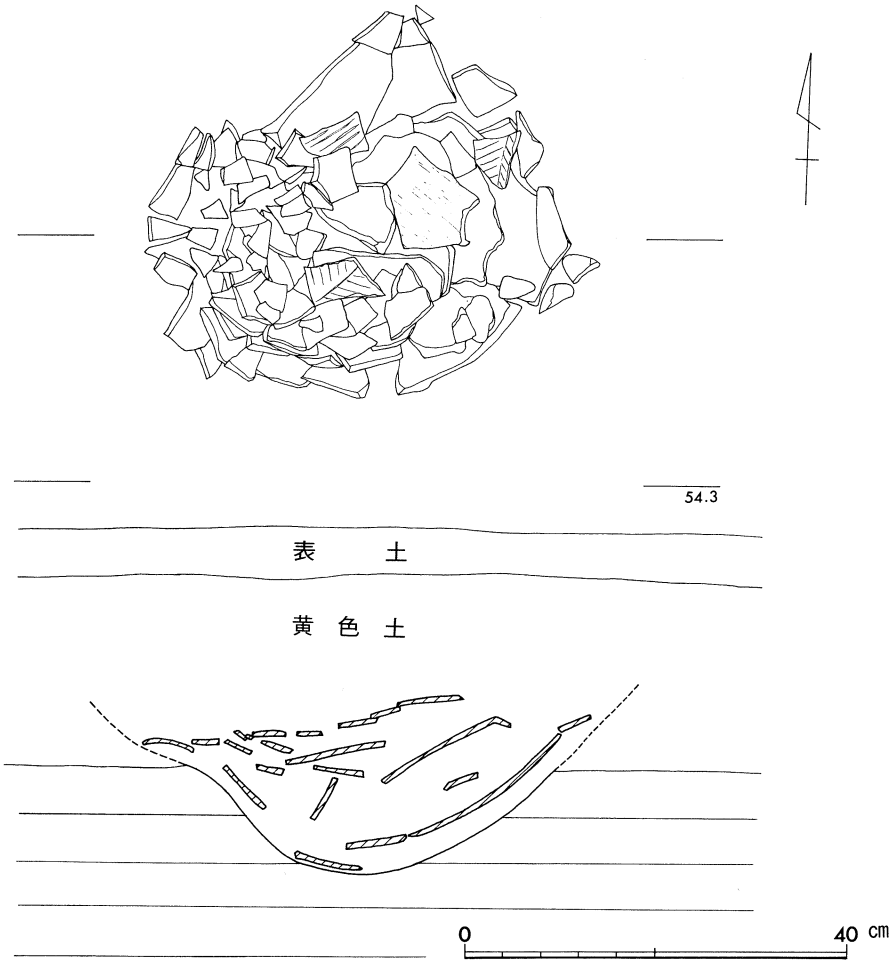
第2主体の北側墳丘加工面直上で、長径14.4㎝、短径8.2㎝を測る鶏卵形の礫が1個出土しており、これはいわゆる墓標とされるものであろうと考えられる。しかし、出土地点が第1主体と第2主体との中間に位置しているため、どちらにともなうものかは速断の限りではない。



第84図　13 号 墳 第 1 主 体 実 測 図



第85図　13 号 墳 第 2 主 体 実 測 図



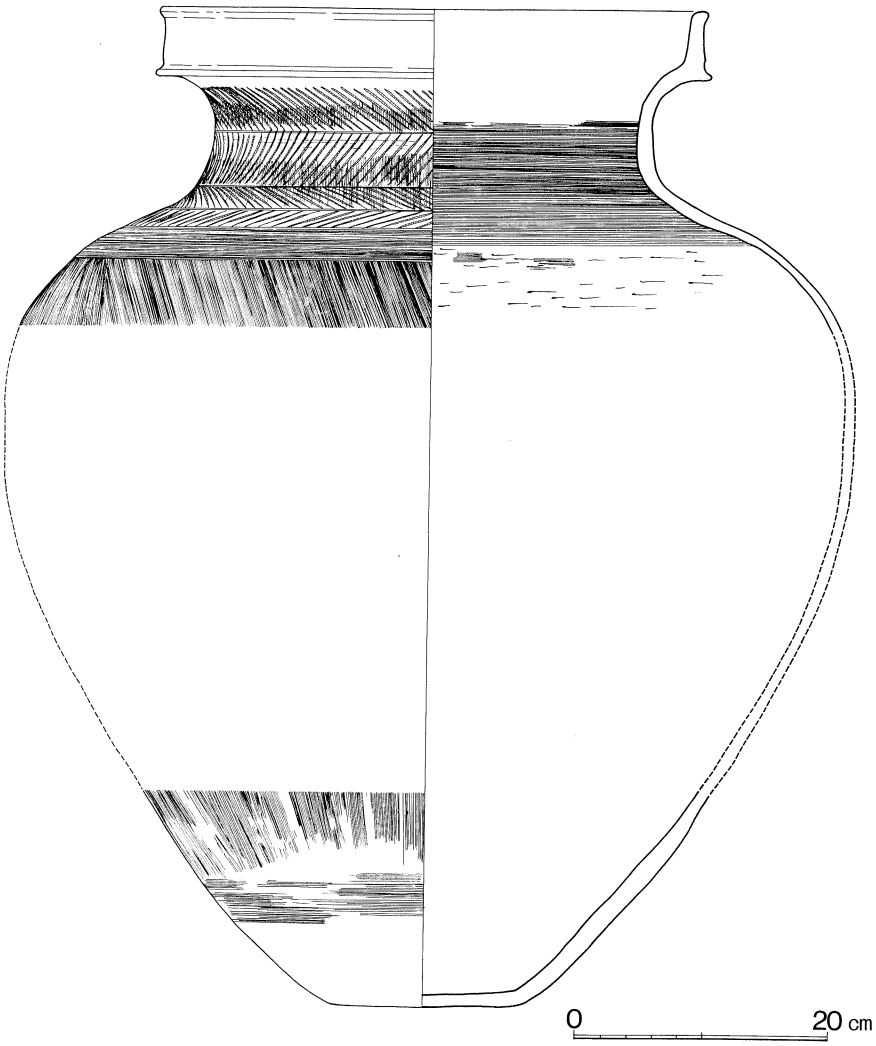
第86図　13号墳土師器壺出土状態実測図　(1／8)

墳頂出土遺物　第２主体から約４ｍ南で土師器壺が検出された。壺は地山面に底部を沈め、その内部に口縁部・肩部等の破片が集積する形で出土した。この出土状態から、壺は成形を終了した墳丘上面を径約41㎝、深さ約12㎝の擂鉢状に掘りくぼめ、その中に正位置に置かれたものと考えられ、長年の風雨によって肩部・口縁部が破損し、その破片が内部に落下したものと判断された。当初、大形の壺であったことから壺棺の可能性も考えらえたが、出土状態から壺は地上に出ている部分が大部分あったと想定され、埋葬施設と考えるよりは一種の供献形態を示すものと推定された。

この土師器壺は胴部を欠損するものの、一応の形態をうかがうことができた。体部は倒卵形を呈し、破損はしているが個々の破片の焼成は比較的良好で、器壁は厚く胎土は大粒の砂を含んでいる。推定器高約79.5㎝、口縁径44㎝を測り、肩部残存最大径66㎝、底部径14㎝となっている。

口縁部外面下端は突出し横ナデに仕上げられている。ほぼ垂直に立ち上がり、口唇端はやや肥厚する複合口縁を呈する。内面には著しい風化が認められた。

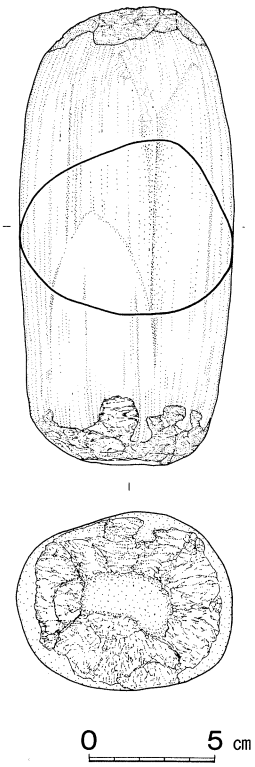
頸部は径35cmを測り、口縁から下降する曲線は弧を描いてすぼまった後、大きく開いて再び下降する。頸部外面には3条の平行沈線がめぐらされ、この平行沈線によって作り出された4帯の空間には、縦方向のハケメ調整の後板状工具による綾杉文が施文されている。一帯内の施文間隔は1～2cmで、比較的不揃いである。綾杉文の最下施文部から肩部にかけて風化が認められ、著しい部分はあばた状となっている。肩部には幅2.5cmにわたって横方向のハケメ調整が認められ、その下は縦方向のハケメ調整となっている。頸部内面は幅約10cmにわたって横方向のハケメ調整が認められ、肩部内面はハケメ調整の後、横方向のヘラ削りが施されている[35]。



第87図　13号墳土師器壺実測図（1/6）

胴部下半から底部は地山面に固定されていたこともあって、その破片はほとんど接合された。復元された胴部下半は一見深鉢形を呈し、外面は上部が縦方向、下部が横方向のハケメ調整となっている。なお、底部から約7cmにかけての部分は肌がやや荒れていた。

13号墳斜面出土遺物　13号墳墳丘南側斜面で、板状石材とともに石器が出土した。出土位置は同墳の東コーナーよりやや南寄りで、東側テラスとほぼ同レベルで、このことからこの石器の上限は同墳築造時期を遡らないものと判断された。形態は円柱形を呈し、長さ18.4㎝、断面は長径8.4㎝、短径7.0㎝を測る。端部は、上部とした方はやや丸みをもち、下部とした方は平坦に近い形となっており、敲石に見られるような使用痕跡が認められた。何かを打撃する用途に使用されたものと推定される。

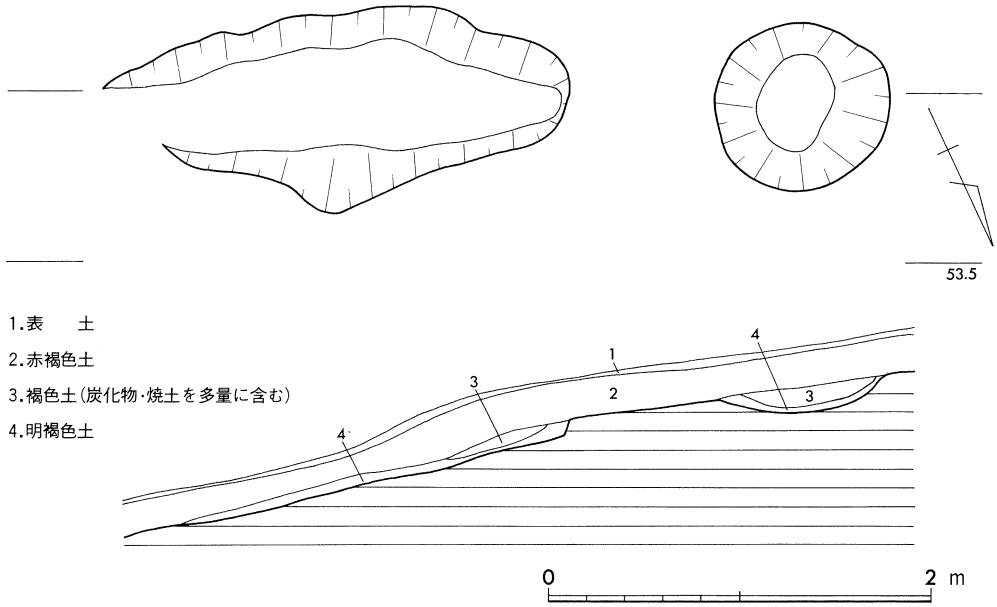


第88図　13号墳出土石器実測図

(6) 炭化物土壙

13・14号墳中間の鞍部南東側で、平面円形の土壙と溝各1が緩斜面の傾斜に沿う形で検出された。円形の土壙は直径0.92m、検出面からの深さ0.15mを測り、覆土は炭化物や焼土を多量に含む。溝は長さ2.45m、幅は最大で1.05m、検出面からの深さは0.10mを測り、横断面は逆台形を呈している。覆土は、炭化物や焼土を多く含む褐色土層とその下層の明褐色土層からなっている。

この遺構に含まれる炭化物・焼土から火が燃やされたことは明らかだが、遺構にともなう遺物はなく、時期は不明である。



第89図　炭化物土壙実測図

(7) 14号墳

古墳群が形成される丘陵の東側、最も高所の標高54.3mに位置する。尾根上、北東側に13号墳と溝を共有して隣接している。西側は尾根が約4.5m低くなり33号墳へと続いているが、調査前の地形測量図によると、墳丘と尾根の境は明確でなく、墳丘から尾根の斜面へと続いており墳裾は明確でない。周溝内に墳丘の土が流れ込んでおりコンターも乱れている。墳丘は直径約18mの円墳で、北西部の墳裾もあまり明瞭ではないが、北西墳裾からの比高は約2mである。南西部16号墳上より見ると、墳丘と尾根が一体となって見えるため一層大きく感じられる。北西部の谷を隔てた10号墳上より見ると、墳丘の盛り上がりや平坦面、13号墳との間に溝を切った様子が明確にうかがえる。

調査は、13号墳の長軸方向に設定した基準線を延長し、中心点でこれと直交するように基準線を設け、それに沿って幅0.2mのベルトを残して掘り下げた。表土の除去作業の階段で指頭大の礫が散在して出土したため、礫のレベルを測りながら精査を行なった。

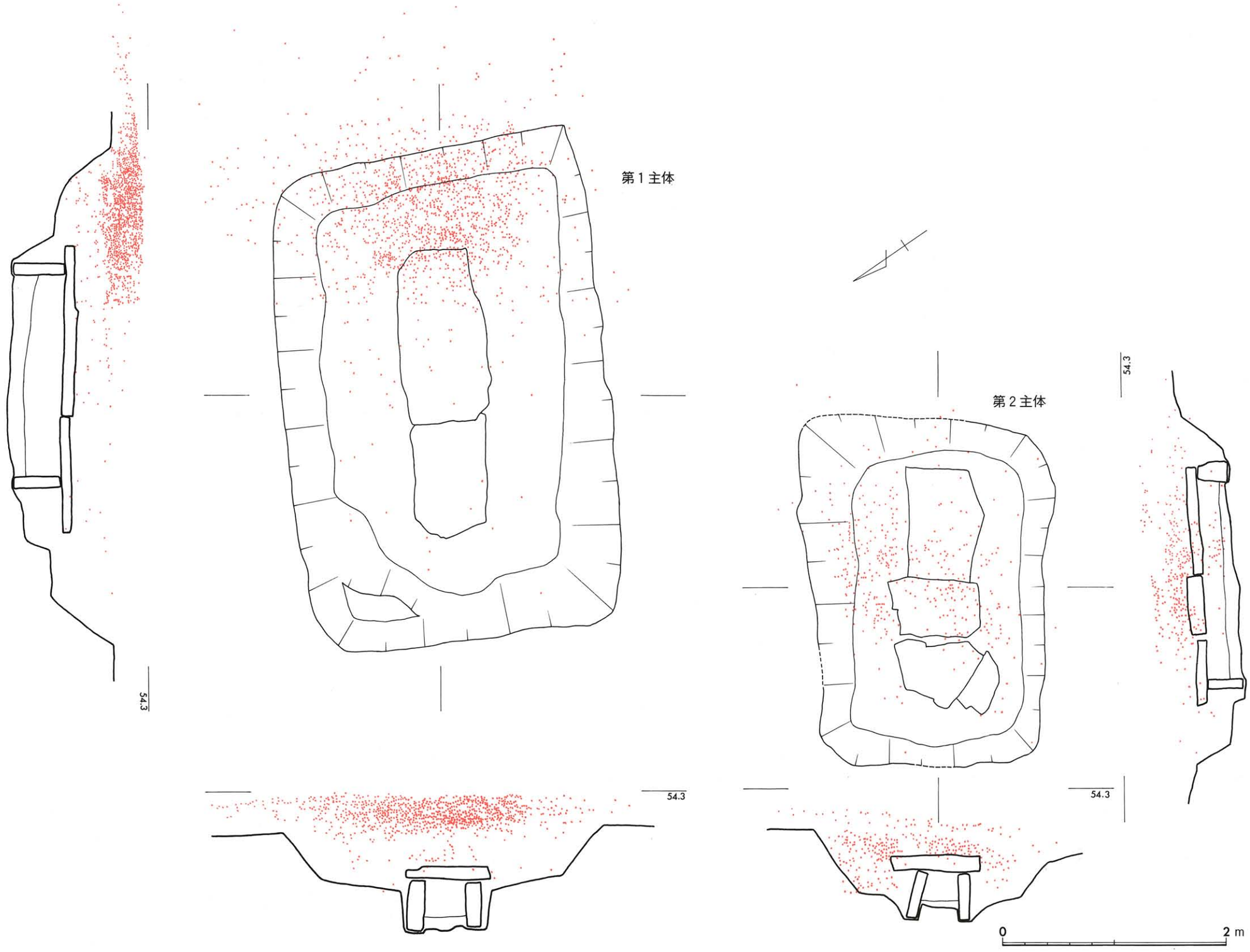
表土下20cmの黄色系の地山面に、13号墳と同様の墓壙が大きく掘り込まれていた。主体部は2基で、共に箱式石棺を埋葬主体としていた。2基は主軸方向を同一にしており、南西部に位置する第2主体部の方が南西側へ約4m寄っている。この主体部のあり方は、隣接する13号墳の2基と同様の位置関係にある。13・14号墳の各主体部は、ともに同様にずれた配置を示すとともに、頭位も東から30度南へ扁った向きにそろえられており、主体部の向きを意図的にそろえていることを窺うことができる。

14号墳北東側の側溝は13号墳と共有しており、丘陵地山面を掘り込んでいる。13号墳の主軸方向のベルトに沿った位置での周溝は幅約4m、表土からの深さ0.4mである。断面は緩やかな孤状を描いている。周溝内の土層の観察によると、13号墳が14号墳より古い時期のものと考えられる。

周溝内からは土師器片1が出土している。また、周溝東側には炭化物の混じった土が堆積しており、その下部には土壙が掘り込まれていた。

礫出土状態　14号墳の第1、第2主体部ともプラン確認のため表土を除去した段階から礫が散在して出土しており、主体部掘り方内の覆土にも多量の礫が含まれていた。この礫は主体的の箱式石棺内の礫と同様のものであり、出土量は第1主体部の方が多い。

垂直分布を見ると、第1主体部では上部から下部までまんべんなく分布しているが、特に上部に多いようである。第2主体部では掘り方の内部に多く、その中でも下部に集中している。水平分布を見ると、第1主体部では頭位のある東側に集中しており、第2主体部では中央部から東側にかけて分布している。これは、埋葬時の掘り方を埋める際に、意識的に東側に多量の礫を混入したためと思われる。なお、13号墳の第2主体部覆土上に散在していた石棺と同一の10cm前後の石材片も、主体部東側に集中して出土したことが注目される。



第90図　14号墳礫出土状態実測図

第１主体　14号墳の中央やや北寄りで検出した箱式石棺で、中心主体と考えられるものである。主軸方位はＥ－31°－Ｓを測る。この石棺は長辺4.4m、短辺2.9m、深さ0.5mを測る隅丸方形二段掘墓壙の中央に埋置されている。墓壙はやや急な傾斜で掘り込まれており、墓壙中段の北西隅の斜面に長さ約0.5m、幅約0.3mを測るステップが認められる。同様なステップは12号墳第１・第２主体、17号墳第１主体でも検出されている。

石棺の蓋は２枚の板状石材を用いるもので、東側の蓋石は長さ1.54m、幅0.70m、厚さ0.11mを測り、これは前述したように、13号墳第２主体の箱式石棺の蓋材と同一母岩から切り出された可能性が大きい。西側の蓋石は長さ1.00m、幅0.62mを測り、やや小さいことは13号墳の各主体部と同様である。蓋石の隙間は青灰色粘土で入念に被覆されていたにもかかわらず、石棺内には外部から流入した土が充満していた。石棺は内法長1.80m、幅0.46m、深さ0.34mを測り、東西の妻板を各２枚の石材で一辺を構成する長手板で挟む形となっている。石棺の側板は厚さ0.10～0.14mを測るもので、上面は敲打法によって全面がほぼ平坦になるように仕上げられ、蓋石裏面との間に隙間が生じないよう配慮されていた。長手板内面も敲打法によって平坦にするとともに、厚さを均一にしている。また、２辺の長手板の内面の妻板が接する部分には、それを固定するための浅い溝状の刳り込みが施されていた。

棺の西側端部には小副室が認められた。それは長手板の端から約0.4mも内側に妻板を仕組み、南北２辺の長手板端を利用して三方を外界から仕切り、残りの一方は地山に粘土を塗布して壁とするものである。内法は長さ0.30m、深さ0.35mを測り、幅は石棺の内法幅と同様0.46mである。なお、副室の蓋は石棺の脚方向の蓋石端部が兼ねる形となっている。

棺内の床面は指頭大の礫が厚さ0.1～0.2mにわたって敷きつめられていたが、副室内には認められなかった。礫床上面の高さは東方向が0.13m高く、頭位は概ね東にとるものと思われる。

この石棺は、他のものと構造上やや異なる点が認められるので列記する。

石棺の長さは古墳群中の他の例と大きく変わるところはないが、内法の幅は第２主体のものも含め、14号墳のものは狭いことが指摘できる。さらに、この種の棺では被葬者の頭位方向をやや幅広に、脚方向を狭くするのが一般的であるが、この石棺では両者に差がほとんど認められないばかりか、逆にわずかではあるが脚方向が広くなっており、注意される。

このような棺の形態は、石棺を埋置する２段掘り墓壙下段の掘り込みがほぼ垂直に、かつ石棺の外法に合わせて正確に掘りこまれていることから、偶然生じたものではなく、当初から計画的になされたものと考えられた。特に下段の掘り込みは、13号墳第１・第２主体や14号墳第２主体が40～60°と緩やかな傾きで掘り込まれるのに対して、ほとんど垂直に掘り込まれており、特異である。そのほか、用途は不明であるが、礫床下部の地山面には棺の中央に縦に走る長さ1.40m、幅0.20

m、深さ0.05mを測る浅い船底形の溝が認められた。

また、棺材各所には敲打法による入念な表面の整形が行なわれ、使用石材も質が均一で、慎重に吟味されたことがうかがえるものであった。

この第1主体にともなう遺物は棺外から出土した鉄剣・鉄槍・素環頭大刀・鉄鏃・鉇・鉄製刀子・用途不明鉄器各1と、棺内から出土した鏡2面・紡錘車形石製品1のほか、被葬者の歯牙等がある。以下、棺外の遺物から順次、出土状態等を記すことにする。

棺外北側長手板沿いに、鉄剣が切先を被葬者の脚方向に向け、刃を上下に立てた状態で検出された。その上面は、灰白色粘土で被覆されていた。

棺外南側長手板沿いで、鉄槍をはじめとする鉄器類が検出された。これら遺物の置き方は、まず用途不明鉄器を被葬者の脇腹にあたる位置に置き、さらに切先を脚方向に向けて鉄槍を水平に重ね、その切先に大刀の環頭部が重なるように添え、刃は棺身へ向ける形となっていた。鉄鏃・鉇・刀子は、被葬者の脚の脇にあたる位置に先端を脚方向に向け、重ねて置かれていた。これらは鉄剣と同様に上面は灰白色粘土で被覆され、検出時には鉄槍の茎と素環頭大刀の環頭の一部が認められるに過ぎなかった。

棺内の遺物はいずれも被葬者の頭位とみられる東側の床面に、まとまった形で検出された。

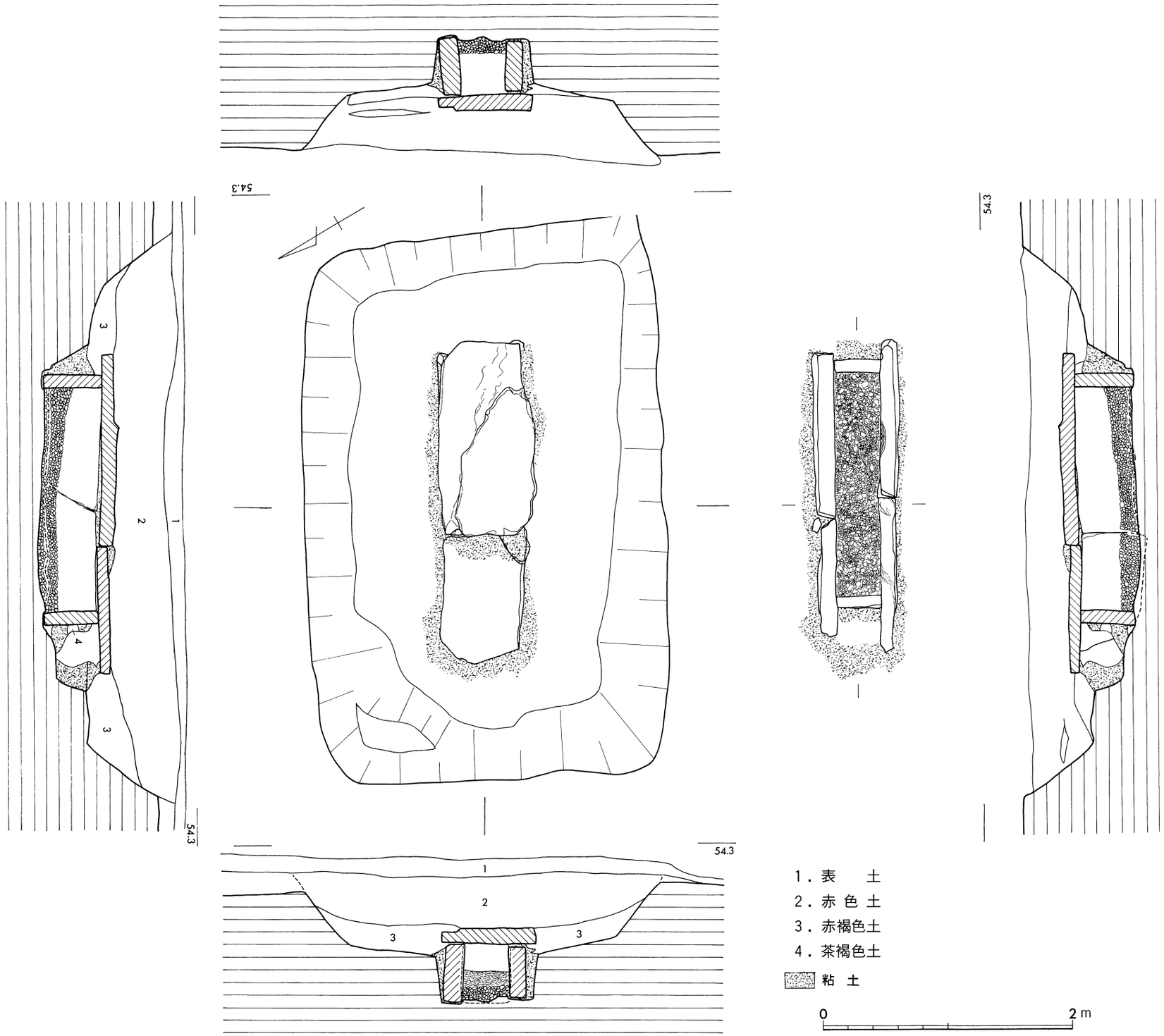
北側長手板と妻板内面に接するように、内行花文鏡が鏡面を上にして、その下でわずかに南にずれた位置に、方格渦文鏡が鏡面を下にして、いずれもほぼ水平な状態で出土した。内行花文鏡の一部には布目が認められることから、副葬の際には、布にくるまれていたものと判断された。

南側長手板と妻板が接する隅では、紡錘車形石製品が平坦面を上面にして出土した。鏡と紡錘車形石製品との間の礫床面には被葬者の歯牙が5本認められ、内行花文鏡上面の一端に人骨の一部とみられる骨片があった。

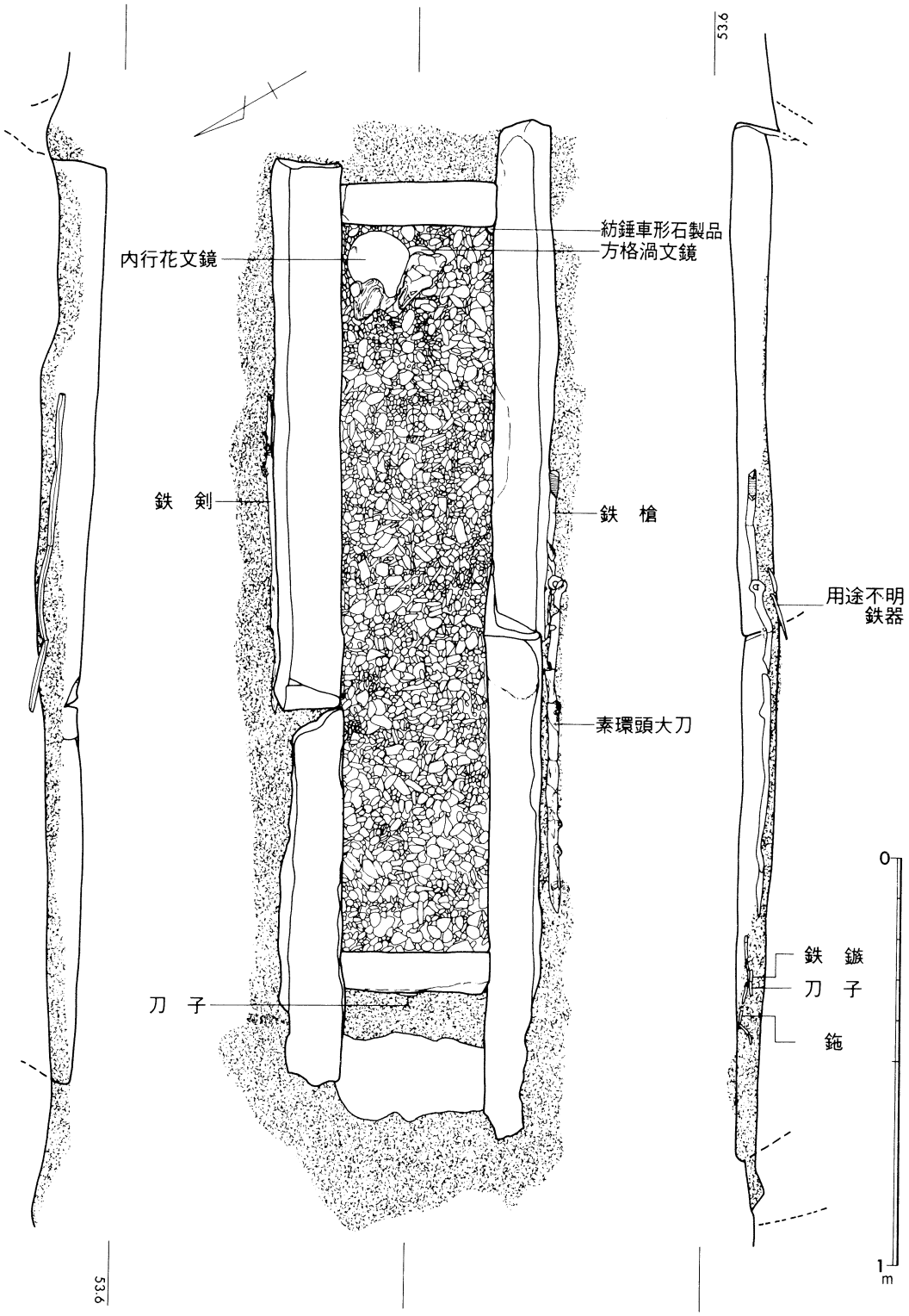
棺の西側端部に設けられた副室内からは、鉄製刀子1を検出した。この刀子は妻板に塗布されていた粘土中に、切先を北に刃を下に向けた状態で出土した。副室内では、小さな副葬品を納めるには十分な空間があるにもかかわらず、副葬品は認められなかった。

第1主体出土遺物　鉄剣（第93図1）は残存長77cm、茎部は長さ12.5cm、幅2.0～2.7cmを測る。断面は方形を呈し、目釘1が認められる。剣身は64.5cmを測るが、切先を破損しているので本来は1cm前後長かったものと考えられる。剣身幅は刃関付近で3.4cmを測り、切先に向かって序々に細くなっており、切先付近で2.3cmを測る。剣身断面は、鎬の頂稜が明瞭なアクセントとして認められず、薄い菱形を呈している。

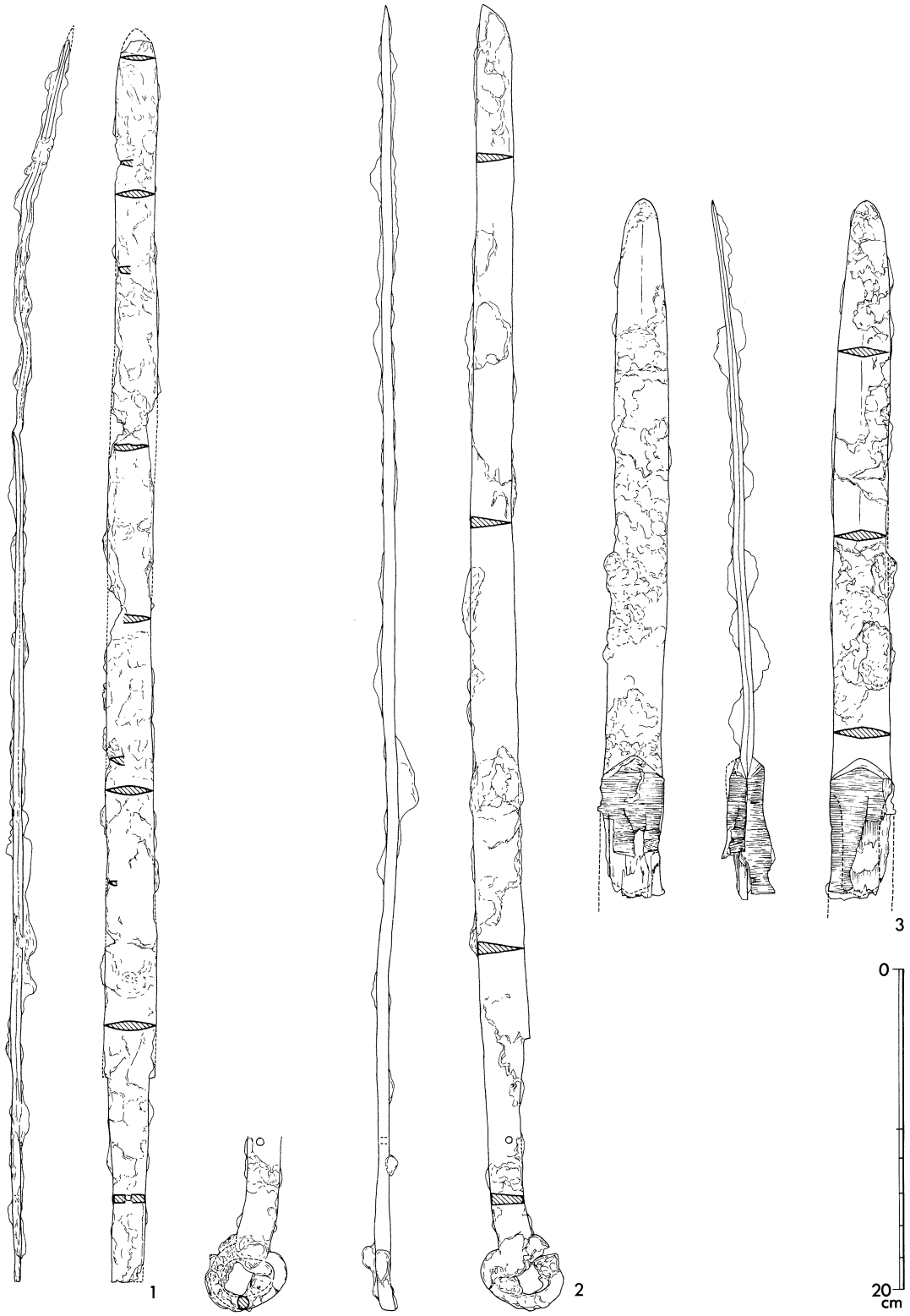
剣身には大小8箇所の人為的な破損部分が認められた。その最も著しいのは関から29cmの位置と、それよりやや切先寄りの関から40cmの位置である。両者とも刃が大きくえぐれた形となってお



第91図　14 号 墳 第 1 主 体 実 測 図



第92図　　14号墳第１主体遺物出土状態実測図　(1／16)



第93図　14号墳第１主体石棺外出土遺物実測図(1)　(1／4)

り、とりわけ切先寄りの破損部分は、本来3㎝ほどあったとみられる剣身幅が約半分に減じるほど損われ、刃筋もこの部分から約5度の角度をもって屈曲している。以上記した2箇所の破損した部分は、いずれも一方の刃部に上方から大きな衝撃が与えられたものと考えられ、それに対する他方の刃部の破損は、下にあてがわれたものと刃が接することによって生じたものと判断された。なお、外装等に関する痕跡は認められなかった。

素環頭大刀（第93図2）は全長81.5㎝を測る平造り鉄製大刀で、全体に錆化が認められるが、保存状態は良好である。素環の柄頭は背部側からのびる茎尻を環状に曲げる造りとなっており、一部に著しい錆化があってやや変形しているものの、平面形が横長の楕円形に近いものである。

素環部の法量は長径4.6㎝、短径3.8㎝を測る。茎部は長さ12.4㎝、幅2.0㎝、厚さ0.6㎝を測り、断面は方形を呈し、背部がやや厚くなっている。刃関は明瞭であるが背関は認められない。刀身は刃渡り64.5㎝を測り、内反り1.0㎝が認められる。背は角背で、切先へ向かって序々に薄く加工されている。刀身幅は刃関付近で0.7㎝を測り、断面二等辺三角形を呈す。切先は刃の線が緩やかに弧を描いて背の先端と交わる形となっている。

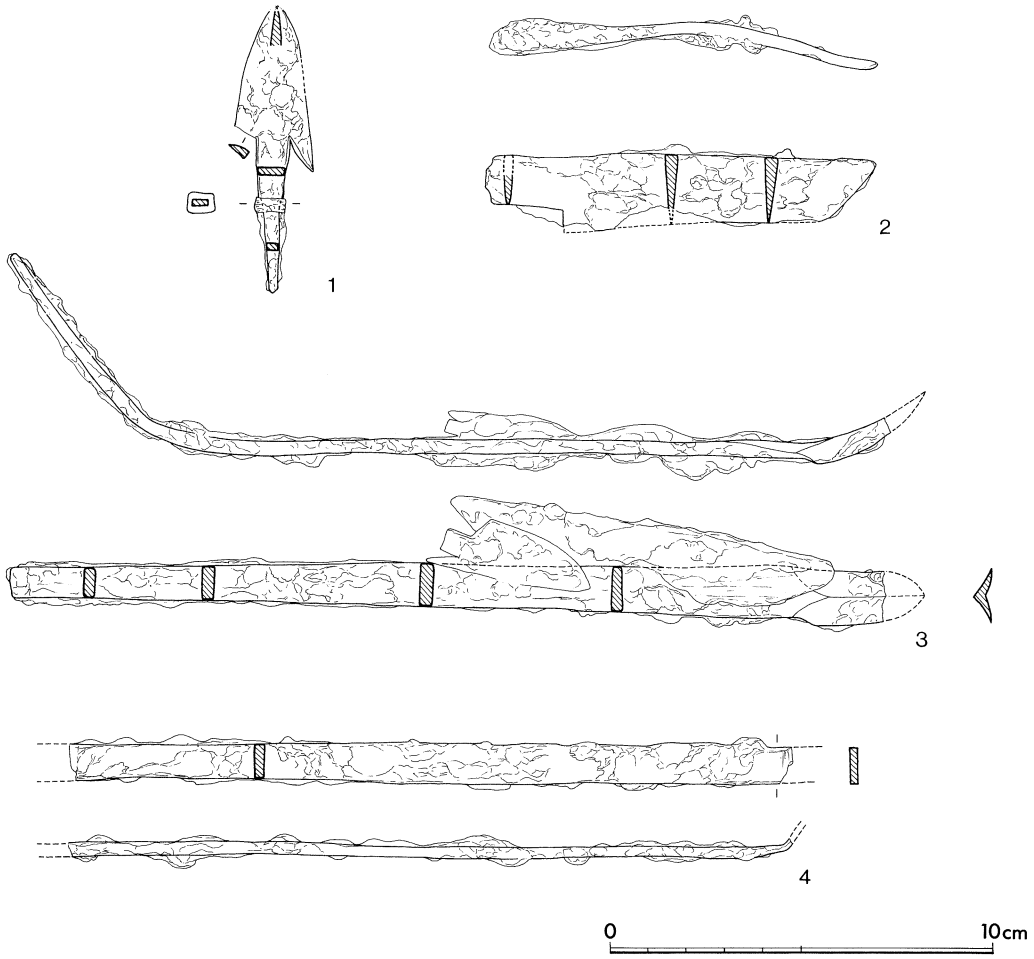
なお、茎部に柄外装等に関する痕跡はみられなかったが、中央部で目釘穴1が認められた。刀身には鞘、金具等の痕跡は認められなかった。

鉄槍（第93図3）は残存長41.5㎝を測る。槍身の刃渡り36.8㎝、厚さ0.6㎝を測り、鎬造りの細長い柳葉形を呈す。全体に錆化は認められるものの残存状態は良好である。鎬の頂稜は明瞭なアクセントをみせず、そのため断面は薄い菱形となっている。切先は鋭くとがらず、序々に細くなり、丸味をもっておさまる形態となっている。

この槍先について特筆すべきは、黒色漆を塗布した柄の一部が極めて良好な状態で残存し、いわゆる呑口式の形態が確認できることで、柄の緊結方法を検討する格好の資料を提供している点であろう。漆の塗布された柄先端は、検出時に上面となっていた部分では当初の形態を保つものの、下面となっていた部分では土圧のために潰れている。

一部破損した漆膜の下には、木質と槍の関部が観察できる。これによれば槍身の関部は弧を描きながら幅を減じる形となっており、茎の断面は方形を示す。この木柄の着挿、緊結に際しては、①柄の先端部を茎部の長さほどを縦割りとする。②先端部を約100°の角度にとがらせる。③縦割りした隙間に槍茎部を着挿する。④着挿した槍先を固定するために柄先端を細糸できっちりと巻きしめる。⑤その上に黒色漆を数度塗布し緊結を終了したものと推定される。

なお、柄は石棺外の粘土内に密封されていたにもかかわらず、実測図に示した部分以外はそのスタンプさえも検出できなかったこと、柄の大半が欠損していることを考えあわせると、埋納にともなって意図的に切断されたものと判断された。



第94図　　14号墳第１主体石棺外出土遺物実測図(2)

鉄鏃（第94図１）は長さ7.5cmを測り、身の形が二等辺三角形を呈す。腸抉（わたくり）は片方を欠損しているが、切り込みは比較的深い。身は片面がややふくらみをもち、他の面が平坦になっている、いわゆる片丸造である。茎部は身に近い部分の幅が0.7cm、厚さ0.2cmとなっている。茎部の中ほど、幅が細く変化する位置に、幅0.5cmを測る帯状の銹が認められる。一見金属のようでもあるが、桜皮の痕跡である可能性も考えられる。

刀子（第94図２）は鉄鏃、鉇等と折り重なる状態で納められていたため、刃筋等に若干変形した部分が認められるが、概ねその形態をうかがうことができる。長さ10.2cm、身幅1.7cm、茎の長さ2.0cmを測る。背はいわゆる角背で、刃関は明瞭だが背関は認められない。全体に、長さに対して幅が広い観がある。

鉇（やりがんな）（第94図３）は刃部先端を欠損しているが、残存長25.5cmを測る。茎部は長さ23.0cm、幅

0.8～1.4cm、厚さ0.3cmを測り、刃部に向かって序々に幅広の造りとなっている。身は両刃を有し、表中央に鎬がはしる。裏面は鎬に沿って浅い溝があり、断面逆「V」字形を示す。身は茎部に対し約25°の反りをもっている。

なお、茎部は端から6cmの位置が約55°の角度をもって背の方向に曲がっていることが注目される。これは、埋納に際して意図的に曲げられたものと判断された。

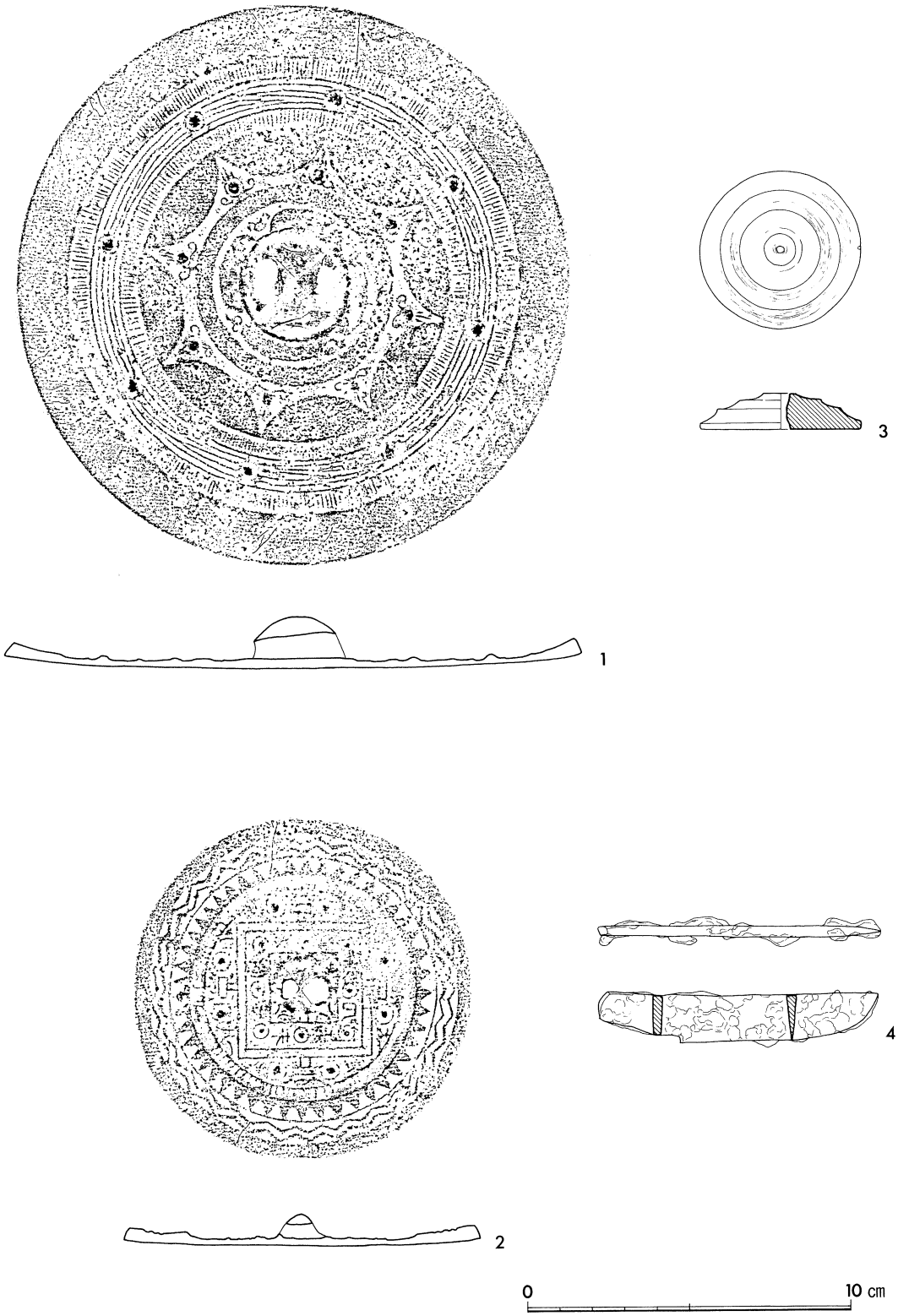
用途不明鉄器（第94図4）は残存長19.0cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る細い板状の鉄器である。両端部は欠損しており、全容を推すことは無理である。一方がやや薄く、比較的急角度で屈曲する形となっていることから、鉈の茎部かとも考えられたが、刃部らしいものは認められなかった。よってここでは一応用途不明鉄器としておいた。

内行花文鏡（第95図1）は面径17.9cm、厚さは鈕の部分で0.3cm、縁の部分で0.5cmを測る完形品である。鏡面、鏡背の一部は銹化が進み、明緑色を呈している。鏡面はほぼ平坦だが、鏡縁近くでわずかに反りがあり、鏡縁の方へ向けて厚さを増している。

背面の文様は鈕から外方へみていくと、鈕、鈕座、圏線、内行花文帯、櫛歯文帯、雲雷文帯、櫛歯文帯、平縁へと続いている。鈕は高さ1.3cm、径2.9cmを測る。鈕座は径4.9cmを測り、四葉形を呈する文様が中心から外へ向け4個配されており、それらの間には4個の単位文を配している。この単位文は、小円の外側にわらび手状の文様が2本表現してある。四葉形は幅0.6cm、長さ2.3cmで、幅に対し長さのある扁平な形である。鈕座の外周には幅0.7cmの一段と高くなった圏線がめぐっている。内行花文帯は8個の花文から成り、各花文の間には8個の単位文が配されている。単位文は小円の内側にわらび手状の文様が2本、外側に紐状の線が中央に長く両側に短く3本表現されている。花文は長さ3.6cm、幅1.5cmを測る。花文外周には幅0.6cmの狭い櫛歯文帯がめぐっている。その外周には8個の乳文を配し、その間を平行三角文の組み合わせにより雲雷文帯がめぐる。雲雷文帯の幅は0.9cm、長さ4.5cmで、文様は4本の突線により表わされている。最外周には、幅0.7cmを測る櫛歯文帯がめぐる。縁は幅1.5cmを測り、鏡面の反りのために0.4cm反っている。鈕を中心として外へ見ていくと、内行花文帯の単位文と雲雷文帯の乳文が一直線上に並び、四葉形の中心と内行花文帯の単位文、雲雷文帯の乳文も一直線上に並んでおり、整った文様構成となっている。

縁の一部と鈕の上部には布目が見られることから、この鏡は副葬時に布に包まれていた可能性が考えられる。また、各文様の端には部分的に赤色顔料の付着がみられることから、副葬時に顔料が全体に薄く塗布されたものと思われる。

この内行花文鏡と良く似た文様の鏡は、福岡県の沖ノ島19号遺跡[36]より出土している。この鏡は径がやや異なり、同笵ではない。



第95図　　14号墳第１主体石棺内出土遺物実測図　(1／2)

方格渦文鏡（第95図２）は面径11.0cmを測る小形の銅鏡で、鏡背には方格渦文を鋳出している。鏡面・鏡背とも銹化がかなり進んでおり、暗緑色を呈している。厚さは鈕の部分で0.2cm、平縁の部分で0.4cmを測り、平縁上の外区で厚くなっている。

背面の文様は鈕から外方に見てゆくと、鈕、鈕座、圏線、方格文帯、櫛歯文帯、鋸歯文帯、複線波文帯、平縁へと続いている。鈕は径1.6cm、高さ0.8cmを測る。鈕座は方形で、鈕座内には退化した四葉文とみられる文様を配している。

内区は方格が二重の突線で描かれる。この内面に円座を有する低い８乳が配される。この乳は突線で表現される乳座を有している。この８乳の間が銘帯となっているが、銹化の進行もあって読みうるものは「未」１字で、「巳」らしき字は明確な判読はできず、本来の十二支を記した銘文の意味が忘れられて文様化したもののようである。方格外には円座をもつやや高い８乳が配され、方格各辺に接して「T」字状の規が突線で描かれ、乳と規の間を渦文で埋めている。この外側に櫛歯文帯が描かれ、小斜面をへて外区にいたる。外区はやや大ぶりな鋸歯文、圏線で区切られて、やはり大ぶりな複線波文帯が描かれ、平縁に至っている。

この鏡に似た文様構成をもつものは、静岡県磐田市神明神社古墳出土鏡、熊本県玉名市繁根木古墳古墳出土鏡などがある[37]。

紡錘車形石製品（第95図３）は全体に緑灰色を呈する、いわゆる碧玉製紡錘車と称されるものである。上径1.1cm、最大径5.0cm、厚さ1.1cmを測るもので、中央には貫通孔がうがたれている。下面は平坦だが、上面には３条の刳りこみが稜をもって周っている。周縁部は厚さ0.2cmを測り、底辺から各稜までの距離はそれぞれ0.6cm、0.9cm、1.1cmを測る。

貫通孔は上面で径0.6cm、中央で0.4cm、下面0.7cmを測り、中央部の径がやや小さくなっているため、穿孔は上下両面から行われた可能性が強い。

平面は正円を呈し、研磨が全体に入念で加工工具痕跡は認められない。石材は比較的硬質で光沢があり、淡黄色のしまが走る。上面では、刳り込みや稜に妨げられてはいるものの目の細かい柾目紋様が、下面では緑灰色に淡白色の粗い板目紋様がみられる。作製に際し自然のしま紋様を見せることは一種の加飾として計算されていた観がある。

この紡錘車形石製品は、岩崎卓也氏の分類[38]によれば、大阪府北河内郡四条畷町岡山所在の忍岡古墳[39]出土のものに、穿孔方法を不問とすれば外形は大阪府河内長野市三日市大師山古墳[40]のものに類似している。なお、県内での出土例は安来市荒島町所在造山１号墳[41]に次いで２例目である。

刀子（第95図４）は副室内から出土したもので、長さ8.7cm、身幅1.4～1.6cm、厚さ0.3cmを測る。背はいわゆる角背で、刃関は明瞭であるが背関は認められない。長さに対し幅が広い観があることは、棺外から出土した刀子と同様である。

第２主体　第１主体と主軸をほぼ平行にしており、主軸方向はＥ－34°－Ｓである。第２主体の方が約２ｍ西側に寄っている。

墓壙の掘り方は、上面で長辺3.1ｍ、短辺2.3ｍ、下面で長辺2.6ｍ、短辺1.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。墓壙床面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。墓壙は第１主体と同様に緑灰色の地山に掘り込まれており、覆土は赤褐色である。

墓壙には箱式石棺が埋置されている。石棺の長手板は土圧により内側へ傾いている。墓壙床面に長手板側は深く、妻板側は浅く溝を掘り、長手板を深く埋め込み妻板を固定している。石棺の内法は長辺1.8ｍ、東側の短辺0.4ｍ、西側の短辺0.3ｍ、深さ東側0.25ｍ、西側0.30ｍ、東側短辺の幅がやや広く組み合わせてある。

石棺の組み合わせは妻板が長手板に挟まれている。長手板は両辺とも３枚の石を使用しており、南東側は長手板が小口の石と辺がそろっているが、北西側の長手板は妻板より端がはみ出している。これは、第１主体でみられた小副室の石の組み方と似ている。また、長手板の石の継ぎ目は互いに斜めに加工している。南東側の蓋石は長方形を呈し、石棺の長辺に沿って置かれ、他の２つの蓋石は長辺と直交して置かれている。直交して置かれた蓋石は、後世松の根により破壊されている。各石の継ぎ目には粘土で被覆している。粘土は第１主体ほどは徹底しておらず、継ぎ目をわずかに覆う程度である。石棺内には、土が流入し蓋石の裏面まで堆積している。

長手板、妻板の蓋石との接合面には加工時の工具痕が残っており、特に内側には明瞭に残っている。工具痕の幅は約3.0㎝である。

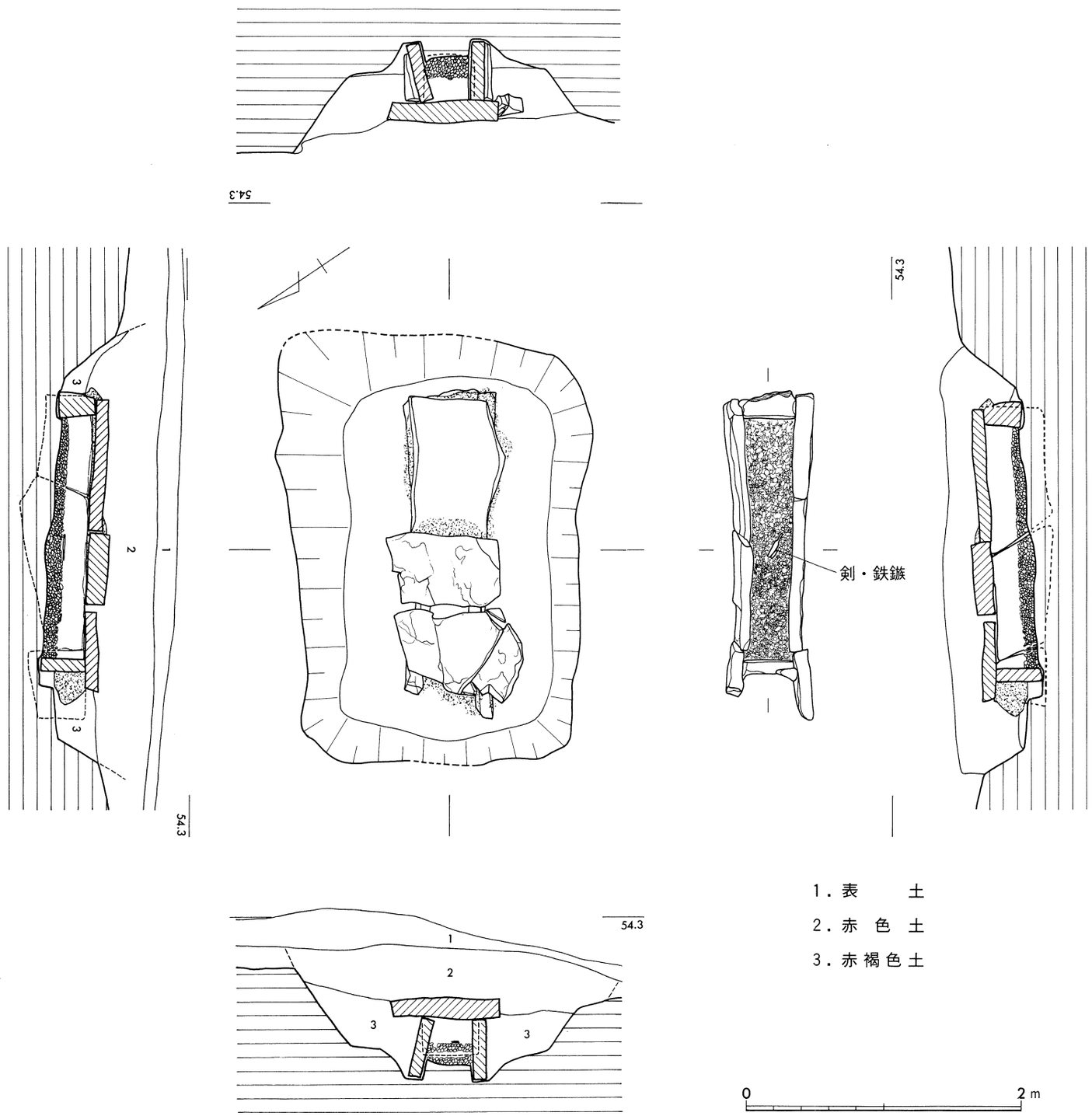
石棺床面には第１主体と同様に指頭大の礫が厚さ0.08ｍで敷きつめられている。礫床は、南東側の方がやや高くなっており、中央部分がややくぼんでいる。

遺物は、礫床上より鉄剣、鉄鏃、刀子各１点が出土している。鉄剣と鉄鏃は、石棺中央部において鋒先を西側に向け、平行に置かれている。刀子は中央よりやや西側寄りで、同じく鋒先を西側に向けた状態で検出され、銹とともに鉄針が付着していた。

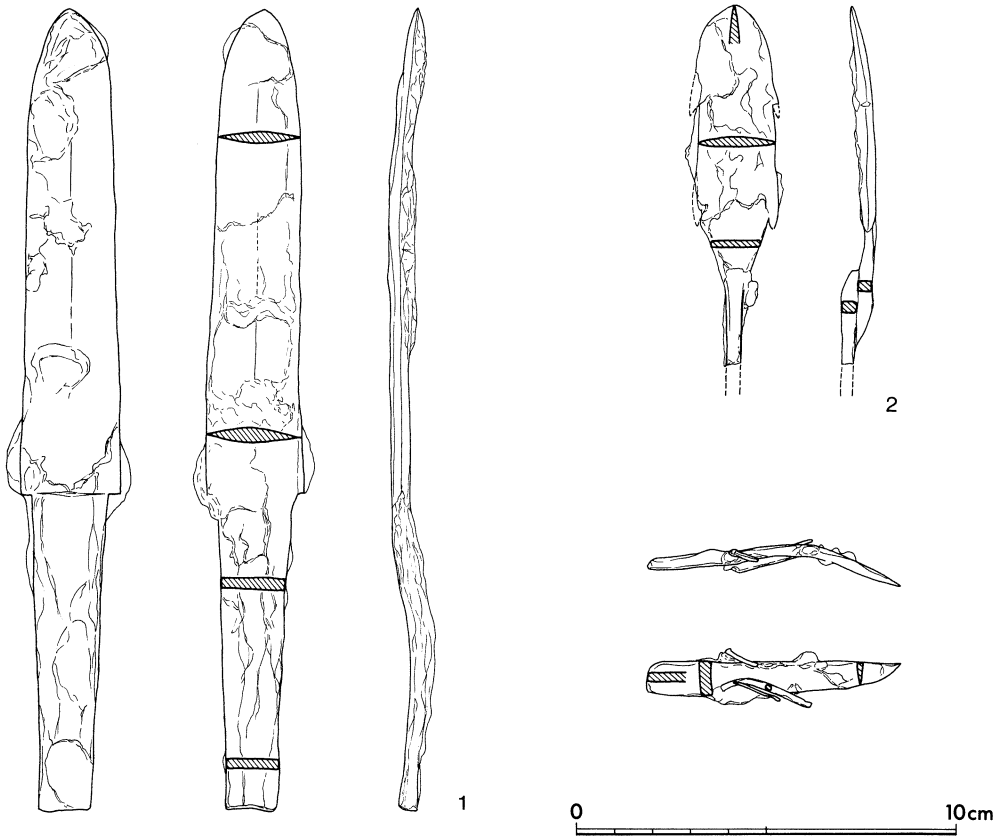
第２主体出土遺物　第２主体石棺内からは、鉄剣１・鉄鏃１・刀子１・鉄針２以上が検出された。

鉄剣（第97図１）は、長さ21.2㎝と剣としてはやや小ぶりのもので、刃部長12.8㎝、茎長8.4㎝を測る。刃身幅は2.4㎝で、刀部断面は厚い部分で0.4㎝のレンズ状を呈するが、中央でかすかに稜をもち、鎬（しのぎ）となっている。刀身と茎の境の、銹が著しくない部分では関が認められる。茎は長く、目針穴などは有さないもので、断面方形を呈する。関の部分で幅1.9㎝、端部で1.4㎝で先にゆくほど幅は狭くなっている。厚さは0.3㎝で刀身よりも薄いため、関の部分でかすかな段がつくように観察できる。装具などの痕跡は認められない。

鉄鏃（第97図２）は平根式のもので、篦被（のかつぎ）の一部を欠失しているが、残存長9.5㎝を測る。大形



第96図　14 号 墳 第 2 主 体 実 測 図



第97図　14号墳第２主体出土遺物実測図

の短い棘を２段２対に有すると考えられるが、３本は欠失している。刃部横断面はレンズ状を呈する。箆被は断面約0.4cmの方形を呈し、折損した部分と重なりあうようにもう１本の箆被が銹着しているように観察できる。全体に大形のもので、戦闘に使用されるものというよりも、多分に儀仗的な性格をもつものと考えられる。

刀子（第97図３）は、長さ6.7cmとやや小形のものではあるが、「へ」の字状に曲がっている。銹化が進んでいるため、関の部分は確認できない。身幅は0.8cm前後であり、先端にゆくほど幅を減じている。断面は縦長の三角形である。茎はしっかりしたもので、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。背は平峰で直線的になっている。装具の痕跡などは認められないが刀身に針状鉄器が銹着している。

針状鉄器は、太・細の２種類３本が刀子に銹着している。少なくとも２本以上の鉄針が副葬されていたものと考えられる。鉄針（太・細）各１本は刀身側に、鉄針（細）１本は刀身峰に銹着している。鉄針（太）は曲がっているものの残存長2.4cm、太さ0.2cmを測り、これに接する鉄針（細）は残存長1.3cm、太さ0.1cmに満たないものである。刀身峰に銹着する鉄針（細）は長さ0.9cm、太さ0.1cm程度のものであろう。

(8) 石蓋土壙

14号墳の南東墳裾付近で検出されたものである。14号墳の南東側は同墳の墳丘が緩やかに下降し、一旦墳裾あたりでその傾斜角度を急にして再び下降するが、一部崖状を呈する部分も認められた。傾斜変換点には14号墳の裾に沿って南北に走る山径があり、石蓋土壙はその南脇にあって、崖上に位置している。

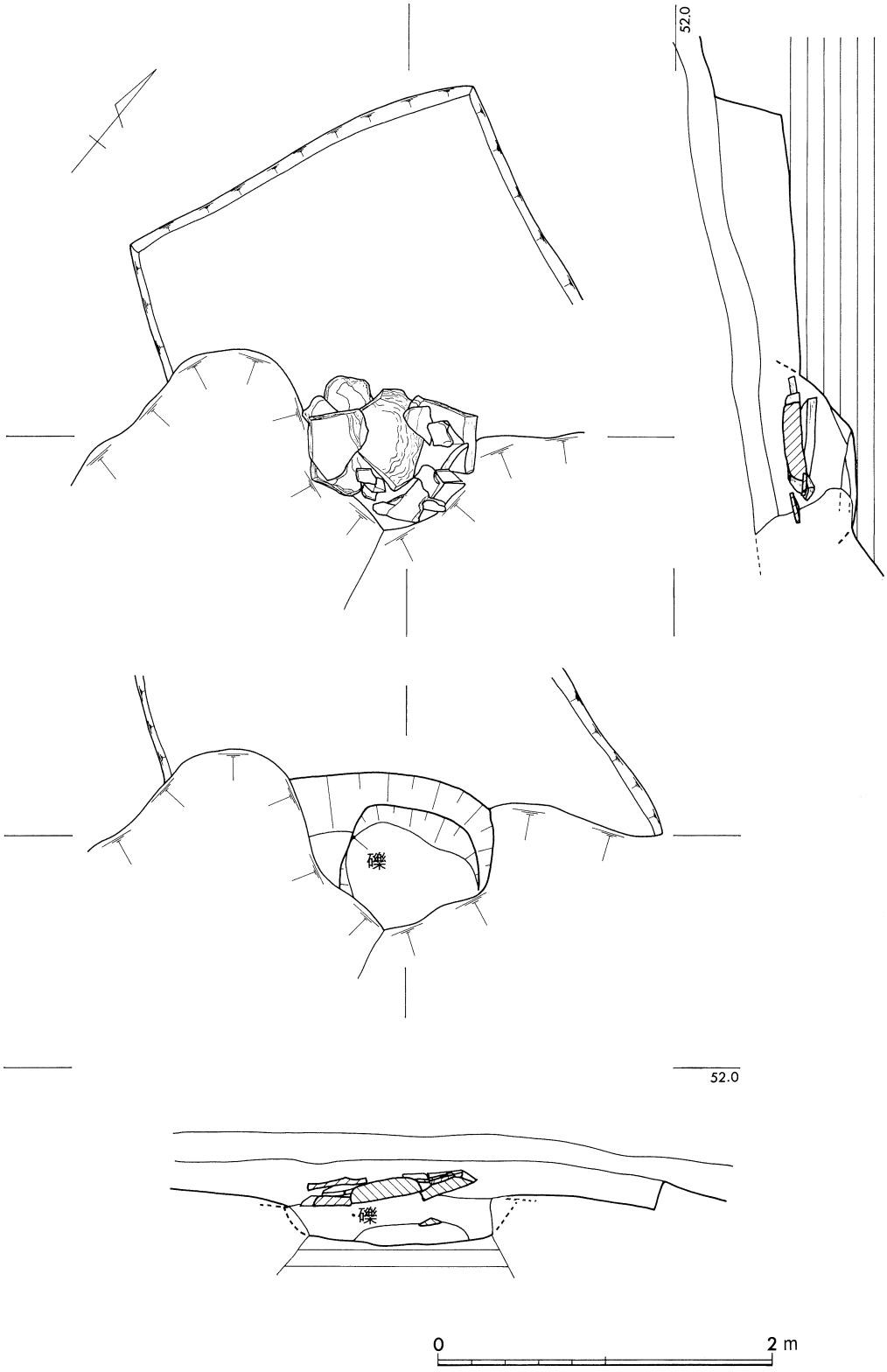
検出時の石蓋土壙は、箱式石棺に用いられているものと同様な大小の板状石材が整然と積み上げられているように見えた。この出土状態から推すと、主体部の石棺に使用された石材の余りをここに置いたというようなことも予想された。そこで、急遽調査区を拡張し、関連遺構の検出に努めたが他に遺構は認められなかったため、石材周辺に調査の主力を注ぐことにした。石材は大小計18個を数え、大きいものは40×50㎝、厚さ約5㎝を測り、小さいものは掌大のものであった。これらの石材を除去すると、下に深さ0.3mを測る土壙が穿たれており、石材はこの浅い土壙を覆う形で置かれていることが知られた。土壙は崖面に接しているため南東側の壁面の崩壊が著しく、かろうじて底面・北側壁面が残存している状態であった。

土壙はやや浅い鉢形を呈し、底は径0.8×0.7mを測る楕円形の平坦面となっており、北側壁面は緩やかに内湾しながら立ちあがり、中ほどでわずかに屈曲した後、外反して腐植土に至るものである。本来の土壙がどのような形態であったかは南東側壁面が崩壊しているため不明とせざるを得ないが、崖側の土壙の底面が立ちあがる直前とみられる曲線を認めることができ、この部分が底面と壁面の境線に近いことを推定させている。また、元の地形がこれ以上東側に突出ていたとは言い難いことを考え合わせると、それに制約され、長大なものはつくり得なかったと判断された。板状石材を除去した土壙内には茶褐色土が充満していた。この土中には副葬品等は認められなかったが、礫床等に使用されているものと同様な指頭大の礫1個が、底面から浮いた状態で出土した。

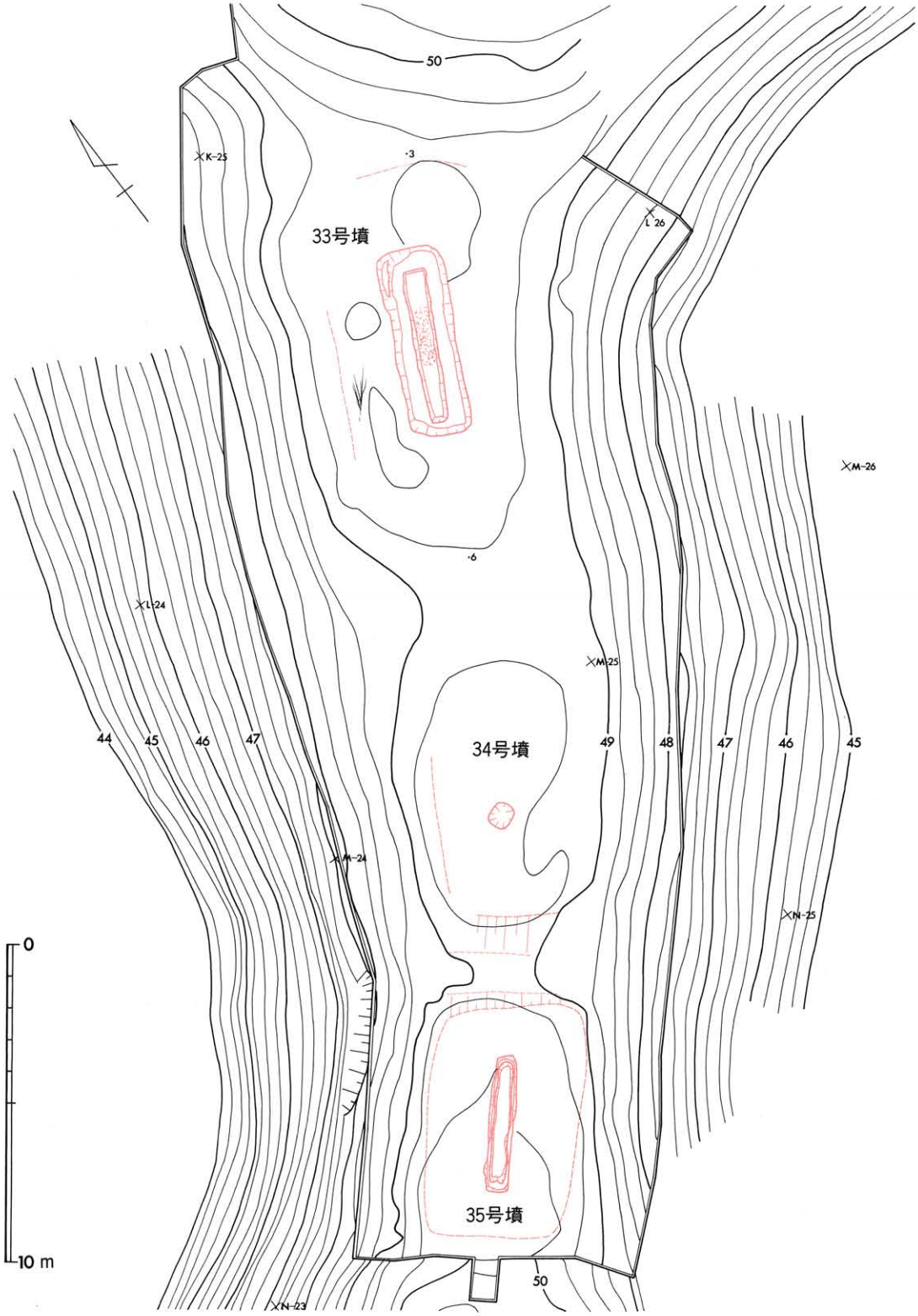
なお、崖下の獣の巣となっていたくぼみに、横穴の閉塞石と見まちがうような石材が認められたが、距離等から考えれば、本土壙上面に使用されていたものが崖面の崩壊によって落下したものであろう。

この土壙の性格については、確たる根拠はないが、埋葬にかかわる遺構であろうと推定される。本古墳群中における埋葬遺構は溝によって墓域を画すものが大半を占めているが、13号墳東側テラスで検出された壺棺墓、あるいは16号墳西側墳裾で検出された土壙墓等は溝を設けないものと認められ、この石蓋土壙もその1例を加えたものであるとしておきたい。

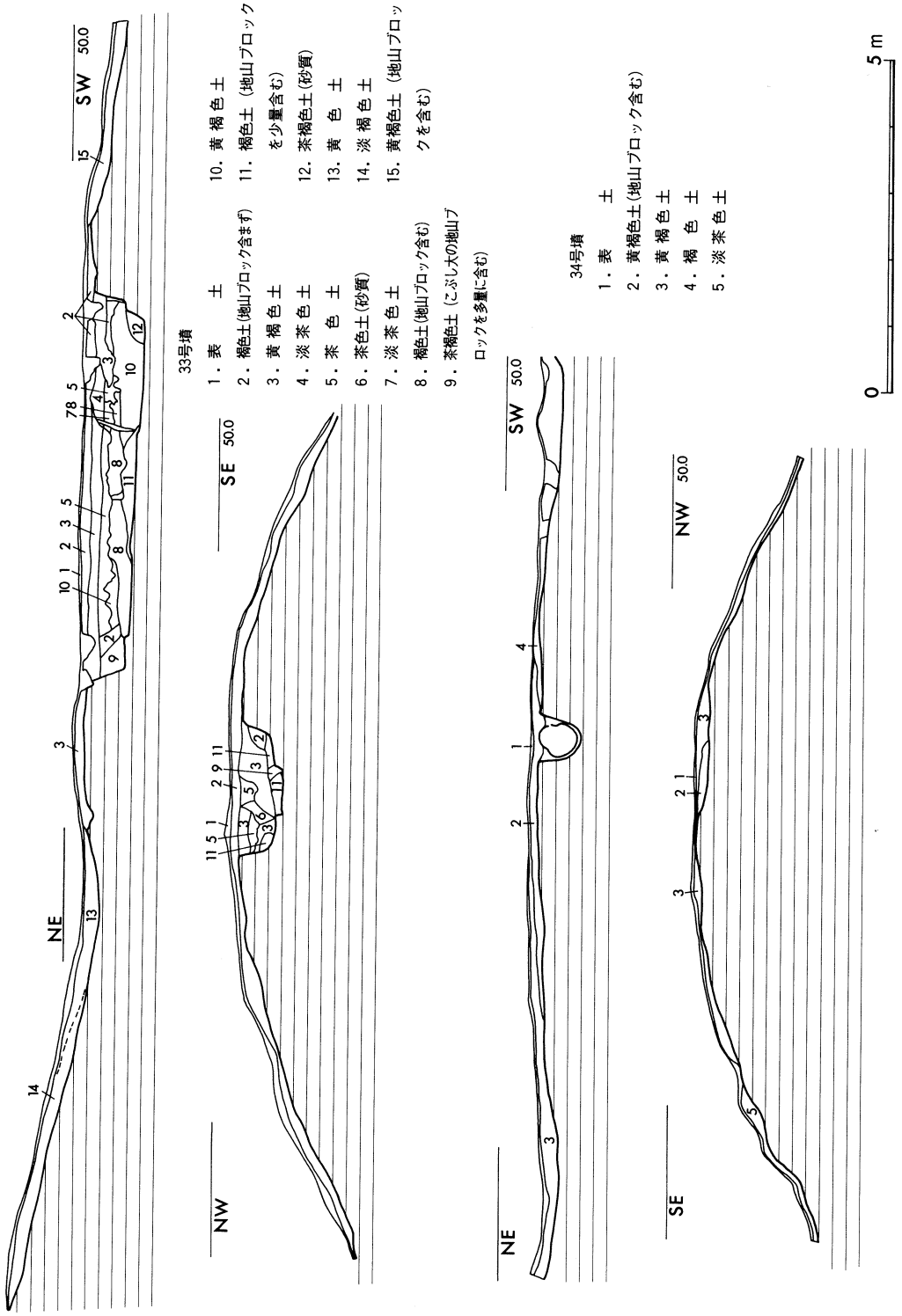
ところで、土壙内の土に礫が混入していたが、これは意図的に入れたものではなく14号墳墳頂部で散在していた礫が流入したものであろうと考えられる。したがって、石蓋土壙は、14号墳第1主体・第2主体のいずれかが埋葬された後に穿たれたものであろうと推定される。



第98図　石蓋土壙実測図



第99図　33・34・35号墳墳丘測量図



第100図　33 ・ 34 号 墳 土 層 図

(9) 33号墳

33～35号墳が営まれている馬背状の尾根は、14号墳と15・16号墳の鞍部に位置し、33号墳と14号墳との比高は調査前で約4.5mを測る。33号墳は14号墳の南に接する南北14m、東西6mを測る方墳で、第V支群のほぼ中央に位置し、標高は約50mである。主軸はN－28°－Eを測る。

調査は尾根筋中央とそれに直交する土層観察用畦を設定して実施した。表土を約25cm除去すると下は明褐色の地山となっており、尾根に直交する形で2本の溝が検出されたが、この溝はあまり明瞭ではない。北域を画す溝は幅約2.5m、深さ0.25mを測る。両溝の中央には尾根方向に長さ4.3m、幅約0.35mにわたって細長い落ち込みを思わせる土の変化が認められ、主体部の形態は狭長な木棺であることが予測された。

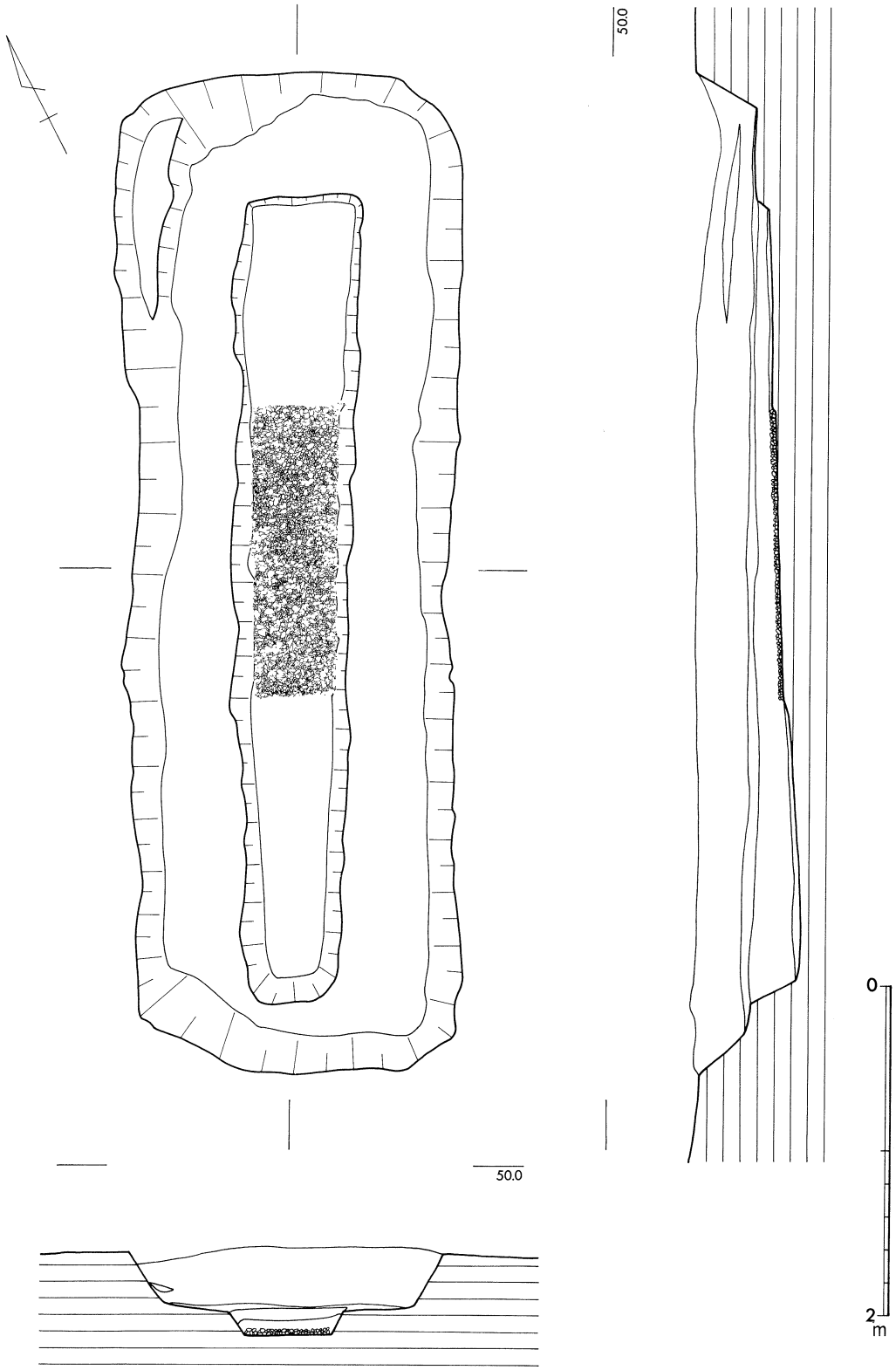
完掘した主体部は長さ6m、幅2m、深さ0.37mを測る墓壙を掘り、さらにその中央に長さ4.85m、幅0.60～0.75m、深さ0.12～0.22mの墓壙を設け、その中ほどに礫を敷きつめるものであった。墓壙内のテラスはほぼ水平に周っていた。木棺床面は北側がやや高く加工されており、また幅も北側が0.2m広いことから、被葬者は北を頭位として埋葬されたものと判断された。

墓壙中央に敷きつめられた礫は指頭大のもので、長さ1.75m、幅0.50m、厚さ0.04mを測り、被葬者はこの上に横たえられたものと考えられた。礫床も北側がやや高かった。

礫床の南北両端は一直線状になっており、乱れが認められないことから、礫に接して仕切り板が使用されていたものと考えられた。また、両側辺と墓壙壁との間には幅0.05m前後の溝状の隙間が認められ、これは棺の長手板の痕跡であろうと判断された。棺の両端部に仕組まれた妻板の痕跡は認められなかったが、前述した細長い土の変化は棺の蓋材が腐蝕したために上部にあった土が陥没したもので、埋葬当時は明らかに空間をなしていたものと考えられる。土の変化の範囲と完掘した墓壙の規模はほぼ一致し、棺の内法に近いものとして大過はないと思われる。これらを考え合わせると、この棺は長さ4.65mを測り、2枚の仕切り板によって北から内法約1.20m・1.75m・1.70mの長さの小室に分けられていたものと推定される。幅は北側で0.6m、南側で0.28mを測る。

この33号墳にともなう遺物は認められなかった。表土除去時に主体部上面で、棺内精査時に土壙内東側テラス中央部で、それぞれ数個の礫が出土したが、これらの礫はいずれも礫床の礫と同大同質のものであり、床面に敷きつめる際の取り落としであろうと考えられた。

以上のことから、埋葬にあたっては次のような方法がとられたものと思われる。①6×2mの土壙を掘る。②その中央に長さ4.85m、幅0.75mの土壙を掘る。③木棺板材を受ける溝を穿ち、この溝に合わせて仕切り板で三室に区切る狭長な木棺を設置する。④中央の部屋に礫を敷きつめる。⑤土壙内のテラスに土をつめる。⑥被葬者を中央の部屋に入棺し、木棺に木板で蓋をする。⑦上面にも土を埋め戻して埋葬作業は終了する。



第101図　33 号 墳 主 体 部 実 測 図

⑽　34号墳

33号墳の南に接して営まれているもので、本墳の北側溝は33号墳の南域を画す溝と、南側溝は35号墳の北域を画す溝をそれぞれ共有している。南北11m、東西８mを測る方形壇状を呈している。外見は33・35号墳と何ら変わることはないが、以下記すように、中央で検出された遺構が極めて特異なもので埋葬施設とは断定できないため、「墳」を記すことは躊躇されるところである。しかし、一応便宜的に当初の呼称方法をそのまま用いることとした。墳頂の標高は49.6mである。

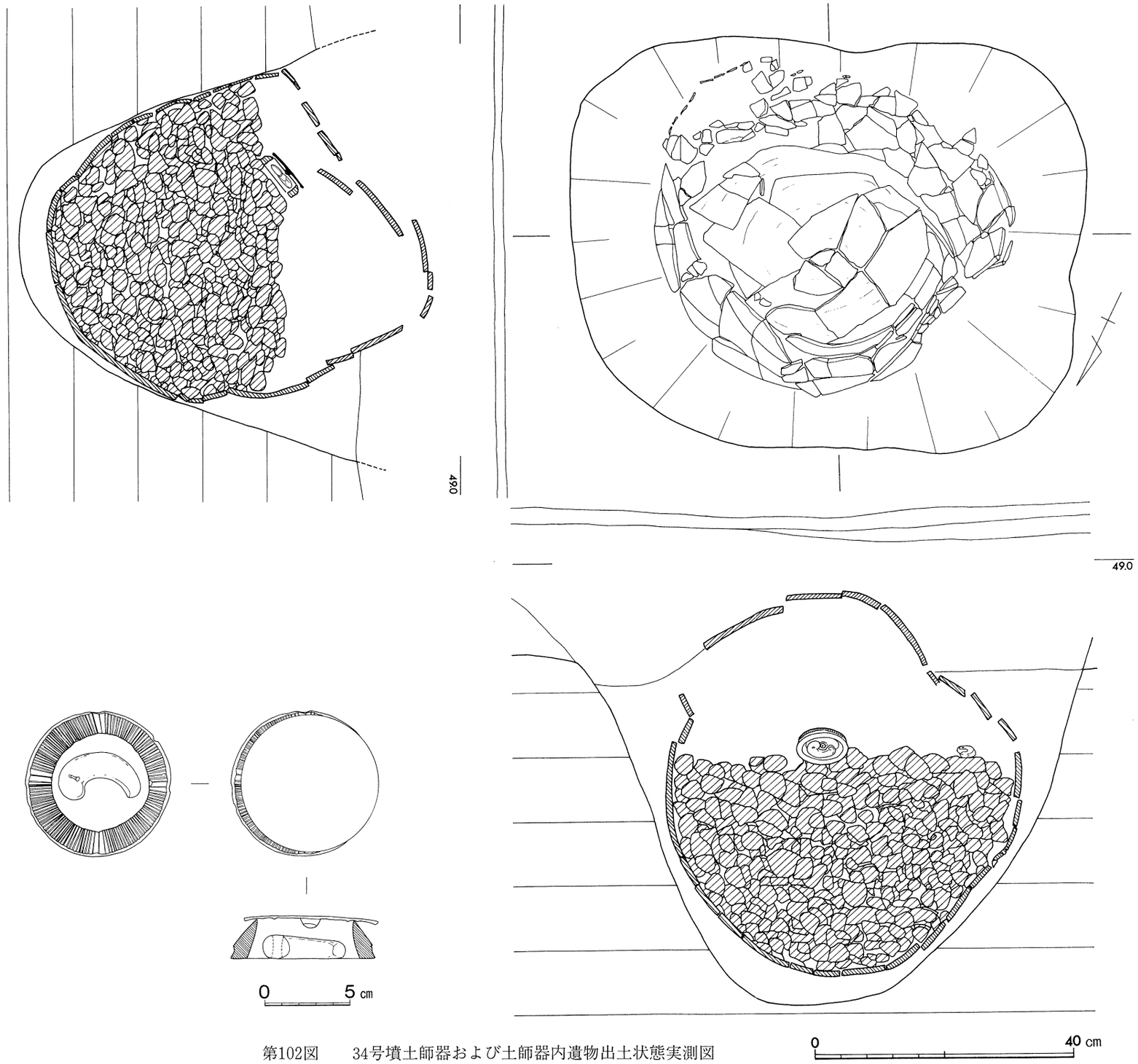
調査は尾根筋中央とそれに直交する土層観察用畦を設定して実施した。表土を除去すると下は赤褐色の地山となっており、墳丘のほぼ中央で、土師器壺を検出した。この壺は鉢を伏せたような状態で、底部を上にして出土した。土師器壺の出土から、本墳は、山陰地域に多く認められる土壙墓上面に各種土器を供献する類例に１例を加えるものと考え、土壙墓の掘り方を検索した。しかし、土師器の周囲を精査しても全面地山となっており、他に掘り込まれた遺構は認められなかった。そこで、先に検出した土師器を取り上げ、その後再精査を試みることとした。

土師器が埋置されていた土壙は、上面0.8×0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.27mを測る。当初上面で認められた鉢形土器の下には別の土師器壺が正位で埋置されており、先の鉢形土器は蓋として使用されていることが明らかになった。下部の壺は頸より上部は意図的に欠損され、内部には径５cm前後の礫が肩部まで詰めこまれていた。その上面には碧玉製とみられる石釧１の他、捩文鏡１、碧玉製勾玉１、琥珀製勾玉１が納められていた。碧玉製勾玉は礫上に直に置かれていたが、琥珀製勾玉は石釧の中に入れられ、その上は鏡面を上にした捩文鏡を蓋とするものであった。なお、詰め込まれた礫の上面のものには赤色顔料が、下部のものには黒色の付着物が認められた。

この土師器壺の埋納は次のような順序によって行なわれたものと推定される。①墳丘中央に隅丸方形の土壙を掘る。②土壙の中に上部を意図的に欠いた壺を据える。③壺の中に礫を詰める。（礫の上面に見られた赤色顔料が中ほどまで及んでいることから、礫を少量ずつ詰めながらその都度顔料を散布あるいは塗布したものと思われる。）④礫を肩部あたりまで詰めた時点で、壺の器壁に接する礫上に石釧を置き、その中に琥珀製とみられる勾玉１を納め、捩文鏡で蓋をする。またその対面の器壁付近に碧玉製勾玉１を置く。⑤焼成前に切断された壺の下半分と考える深鉢形を呈す土器をかぶせ、礫を詰めた壺の口を塞ぐ。⑥土を埋め戻し、壺の埋納は終了する。

調査時の土層の観察では、壺の上部に土を盛る行為は認められなかった。特に深鉢形を呈す土器の底部外面が下の土器の器表と比較すると、肌が異常に荒れていることが注意され、あるいはこの部分が埋置後風雨にさらされる機会があったのではないかと想像される。

なお、これらの遺物を取り上げた後、周辺にサブトレンチを設定して精査を実施したが、他の遺構は認められなかった。



第102図　34号墳土師器および土師器内遺物出土状態実測図

土師器壺　34号墳中央の土壙内において、壺２の上に壺１をかぶせた形で出している。

壺１は、壺２の上に乗った状態であったため破損が少なく、破片も大きく容易に完形に復することができた。壺２は、壺１の重みにより肩部から崩れ中に落ちこんだ状態にあり、側部も後世樹根により圧迫を受けたため破損し、全体的に細片化している。土圧等により個々の破片が小さく接合が困難な部分もあり、特に胴部中間の破片は未接合の個所が多い。

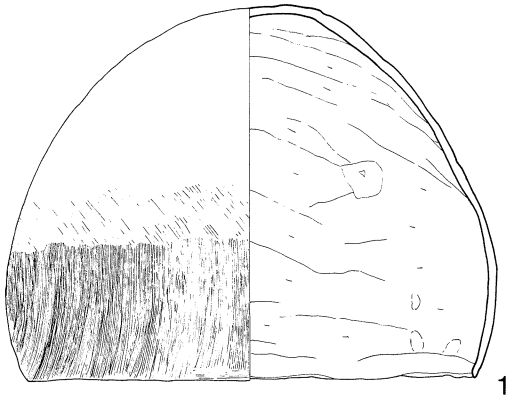
壺１（第103図１）は胴部より底部にかけての破片で頸部、口縁部を欠いている。底部より胴部下半外面は風化が著しく、調整痕等は残っていない。壺の埋置後一定期間風雨にさらされていたためと思われる。頸部より口縁部にかけては焼成前に切りとられており、端部はヘラ状工具により平坦に切られ、その後なめらかにナデ仕上げがなされている。胴部は肩がややなで肩で底部へ向け緩やかに続き、底部はやや平底気味である。外面の胴部中間に斜方向に粗めのハケメを施し、上半には細かいハケメを施している。胴部下半は、ハケメの後ナデて消している。内面は、下半が斜方向のヘラケズリ、上半は横方向へのヘラケズリを施し、その後に一部指頭圧痕が残っている。

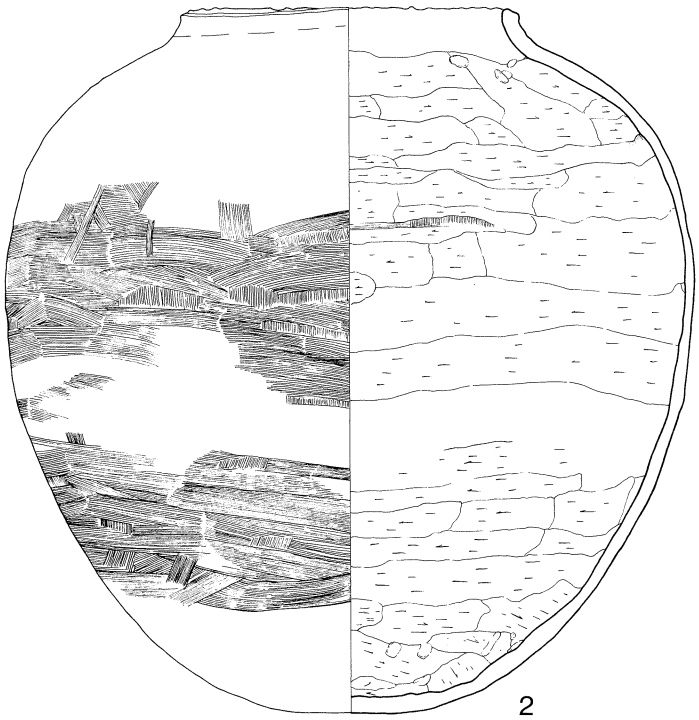
胴部下半には焼成後に穿孔が行なわれたようで、径0.5㎝の穴があいている。内面は一辺３㎝の方形に剥離しており、断面には赤色顔料が付着していることからも埋置前の穿孔と考えられるものである。

肩部の径は35.6㎝、胴部最大径39.0㎝、残存高30.0㎝を測る。器壁は薄く均一に作られており厚さ0.7㎝を測る。胎土は石英、長石を少量含み密で、焼成は良好、色調は外面の一部分が黒色、他が黄褐色を呈している。内面も黄褐色を呈している。

壺２（第103図２）は大形の壺で、頸部中間部分で焼成後打ち欠いている。壺１と合わせ口にするために、両方の壺とも頸部より上を欠いている。胴部と底部を別個に取り上げたために、胴部の中間は破片が細片となっていることもあり接合不可能な部分が多かった。しかし、一部だけ底部と胴部が接合したため器高を知ることができた。肩はややなで肩で胴部に丸味をもち、緩やかに底部へと続いている。底部は丸味をもった平底を呈している。頸部外面はヨコ方向のナデ調整を施し、胴部には縦方向のハケメの後に横方向のハケメを施し、ナデ調整により部分的にハケメを消している。底部外面はナデ調整を施し、ハケメを消している。内面頸部は指頭圧痕の後、ヨコ方向のナデ調整を施し、胴部下半は斜方向のヘラケズリ、上半は横方向のヘラケズリを施した後に一部指頭圧痕が残っている。

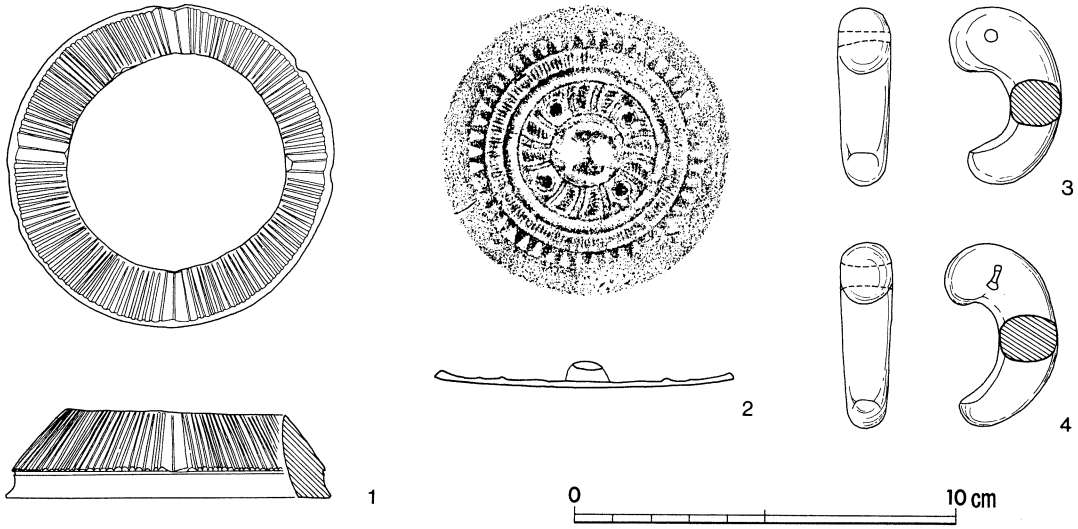
口径は26.8㎝、胴部最大径54.6㎝、残存高56.4㎝を測る。器壁は、頸部が厚く1.3㎝、胴部中間はややうすく0.6㎝、底部は1.3㎝と厚くなっている。胎土はやや大きめの砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。色調は赤褐色で外面は一部黄白色を呈している。内面頸部には黒色の付着物がかなり厚く付着している。胴部、底部の内面にはこの付着物は認められない。





0　20cm

第103図　34号墳土師器壺実測図　(1/6)



第104図　34号墳土師器壺内出土遺物実測図　(1／2)

土師器内出土遺物　石釧（第104図１）は淡緑色のいわゆる碧玉製で環状を呈している。上方から見ると、円周を四等分する位置に２条の幅広の刳り方を入れ、その間の四区画には各31条の細い刳り方を入れている。側面には１条の匙面取りがある。断面の下部は平坦面をなしている。外径8.5cm、内径5.7cm、高さ2.2～2.4cmである。

鏡（第104図２）は残存状態の良い完形の捩(ねじ)文鏡である。しかし鏡背は銹化が進み、緑色を呈している。面径は7.8cm、厚さは鈕の部分で0.15cm、縁の部分で0.2cmを測る。背面の文様は鈕から外方へ観ていくと、鈕、鈕座、捩文帯、圏線、櫛歯文帯、鋸歯文帯、平縁へと続いている。捩文帯には圏線をめぐらす乳座があり、乳を４個対角線上に配すことで内区を４等分している。その１区画を孤状の複線により２区画し、その中に櫛状の文様を連続し捩文をなしている。捩文は合計８個からなる。櫛歯文の幅は0.4cm、鋸歯文は中心から外へ向けて描かれており、幅0.4cmである。鈕の径は1.2cm、鈕座は２重の圏線をめぐらすもので、その径は1.9cmを測る。縁は平縁で幅0.6cm、反りは0.2cmを測る。

碧玉製勾玉（第104図３）は濃い緑色を呈し、頭部に丸味をもち、胴部・尾部に向けて次第に細くなっている。断面は楕円形で、側面は平坦面をなしている。長さ4.7cm、厚さは頭部で1.4cm、胴部で1.3cm、尾部で1.1cmを測る。孔は２方穿孔によるもので、孔径は0.4cmと0.3cmである。

琥珀製勾玉[42]（第104図４）は赤茶色を呈し、頭部から尾部へ向けて細くなっている。断面は楕円形で、側面は平坦面をなしている。長さ4.8cm、厚さは頭部で1.4cm、胴部で1.2cm、尾部で1.0cmを測る。孔は横長の細いもので、孔径は0.3×0.1cmである。

その他、図示できないが針状の鉄製品がある。

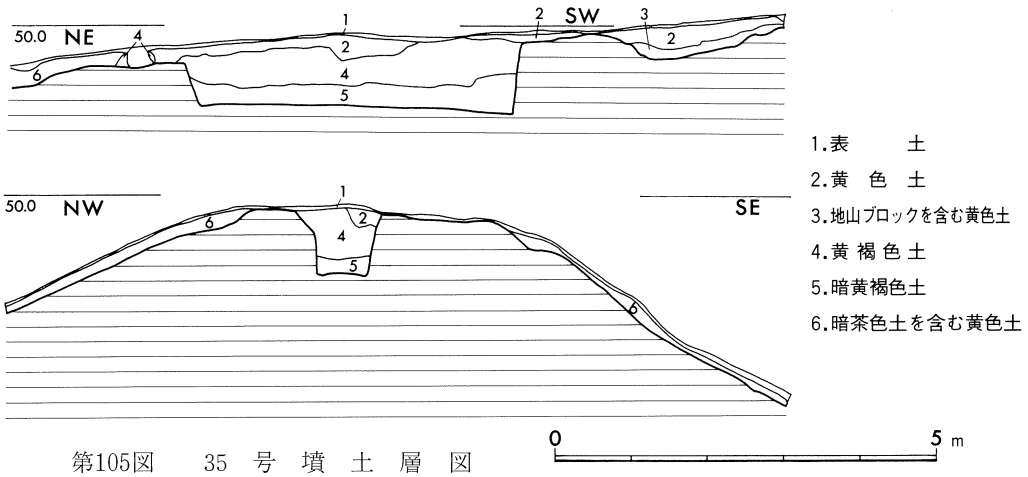
⑾　35号墳

第Ⅴ支群中の北東側から33・34・35号墳と続き、これらは同標高に位置している。33号墳の北東側へ向け丘陵がやや高くなっている。調査前の状況は、雑木が残っていたこともあり墳丘の高まりは際立ったものではなかったが、地形測量図により、墳形は長方形を呈し方墳であると判明した。尾根の両斜面には加工が認められず、墳裾線は不明であった。調査後、北西側の10号墳上から遠望すると、33～35号墳は尾根上に溝を切ってつくられた低墳丘の古墳であることが明瞭に確認できた。

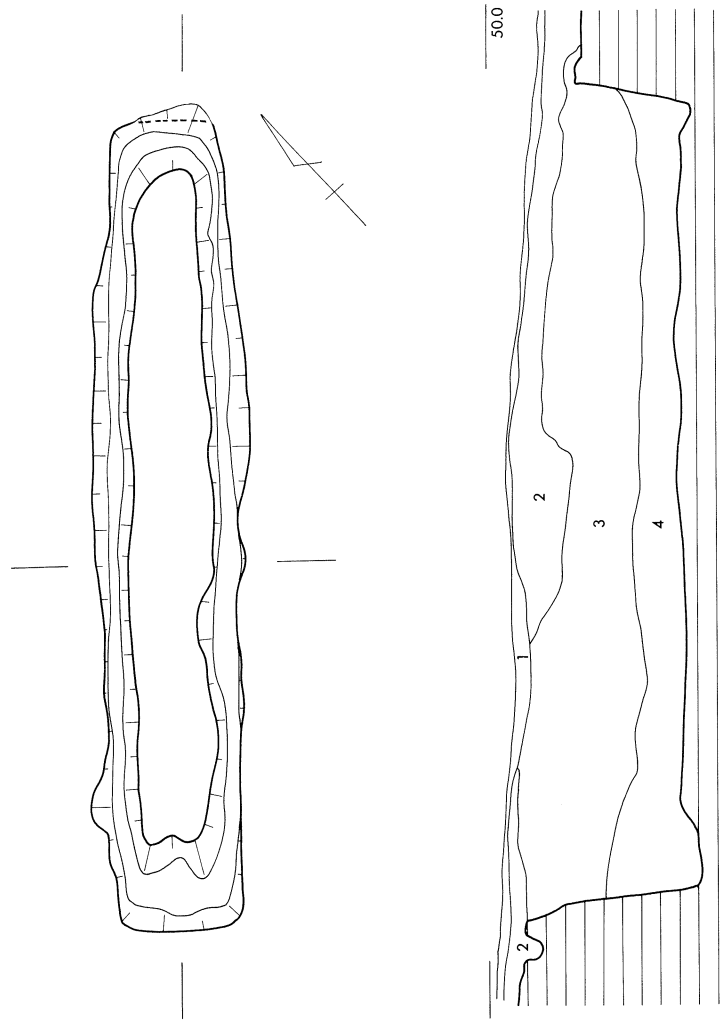
調査は、33号墳から35号墳まで１本のラインを通し、各区画の中心でそれと直交するラインを設けて行なった。墳丘は地山を方形に削り出しており、長辺10.0m、短辺8.0mで、北東側の周溝からの高さは0.4mを測る。墳丘が削り出された地山は、墳丘中央で土層が変化しており、北東側は赤色土層で、南西側は黄白色土層となっていた。

主体部は地山の上面より掘り込まれており、素掘りの土壙で極めて細長い長方形を呈している。主体部の主軸は墳丘の主軸と同一方向でN－42°－Eである。上端部での規模は長辺4.4m、短辺0.8m、南西部での深さは0.6mである。墳頂平坦面は7.5×5.0mで主体部の長さがかなりあり、墳頂平坦部を端まで使って穿っている。土壙の底面は周囲が深く掘り込まれており、中央部分には地山が高さ0.1mほど掘り残してある。土壙の各壁もほぼ垂直に近く立ち上がっており、底面の溝は箱形の木棺を組み合わせるためのものと思われる。土壙内の覆土は２層から成り、上層は黄白色のかなり硬い土で、周囲の地山とほぼ同様の土であった。下層は暗黄褐色のかなり柔らかい土であった。土壙を埋める際に、上層には地山を掘った土を入れたものと思われる。土壙の底面はほぼ水平で、土壙の上縁部も幅に大きな変化がないことより、頭位の推定は困難であった。

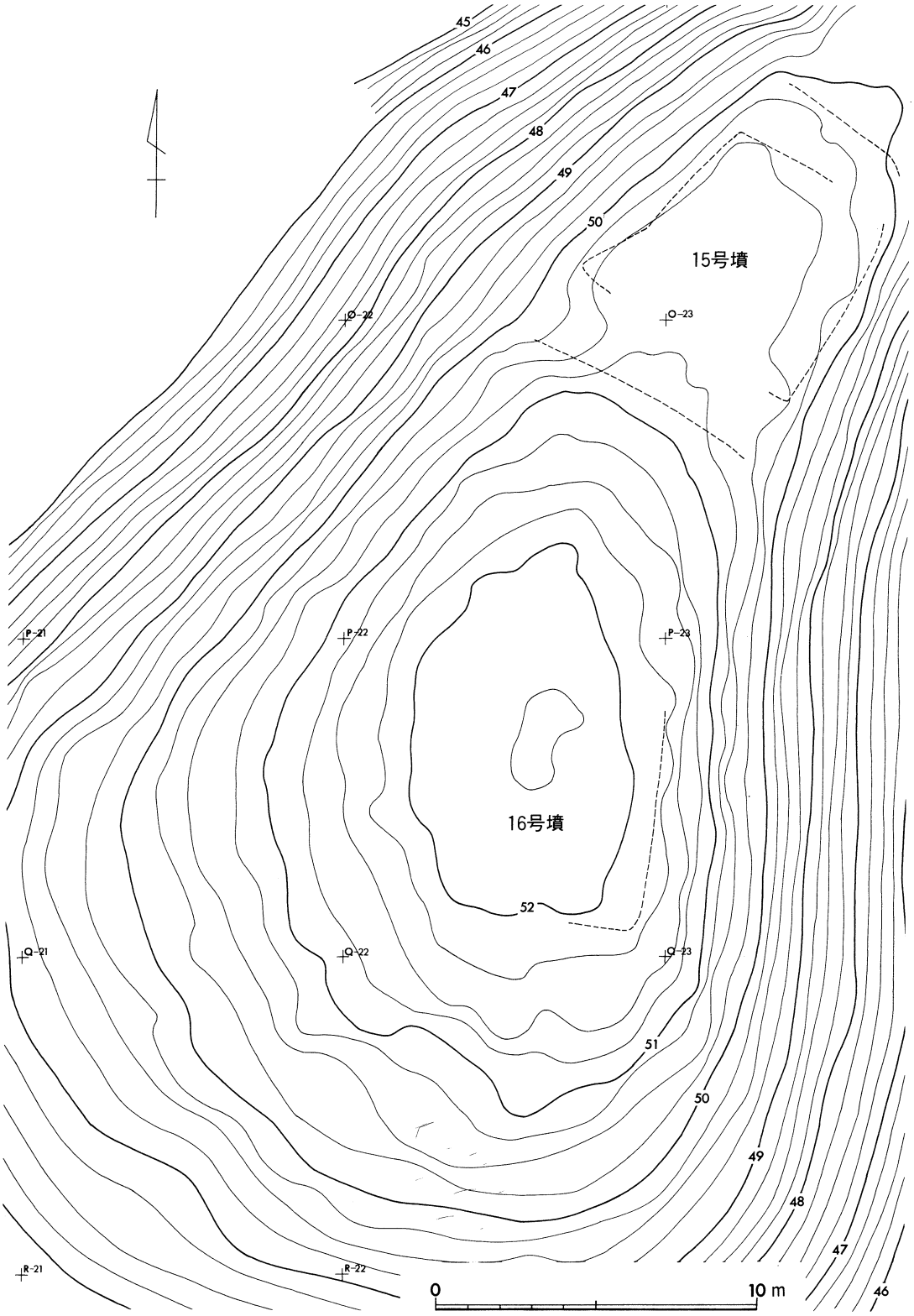
なお、主体部から遺物等は検出していない。



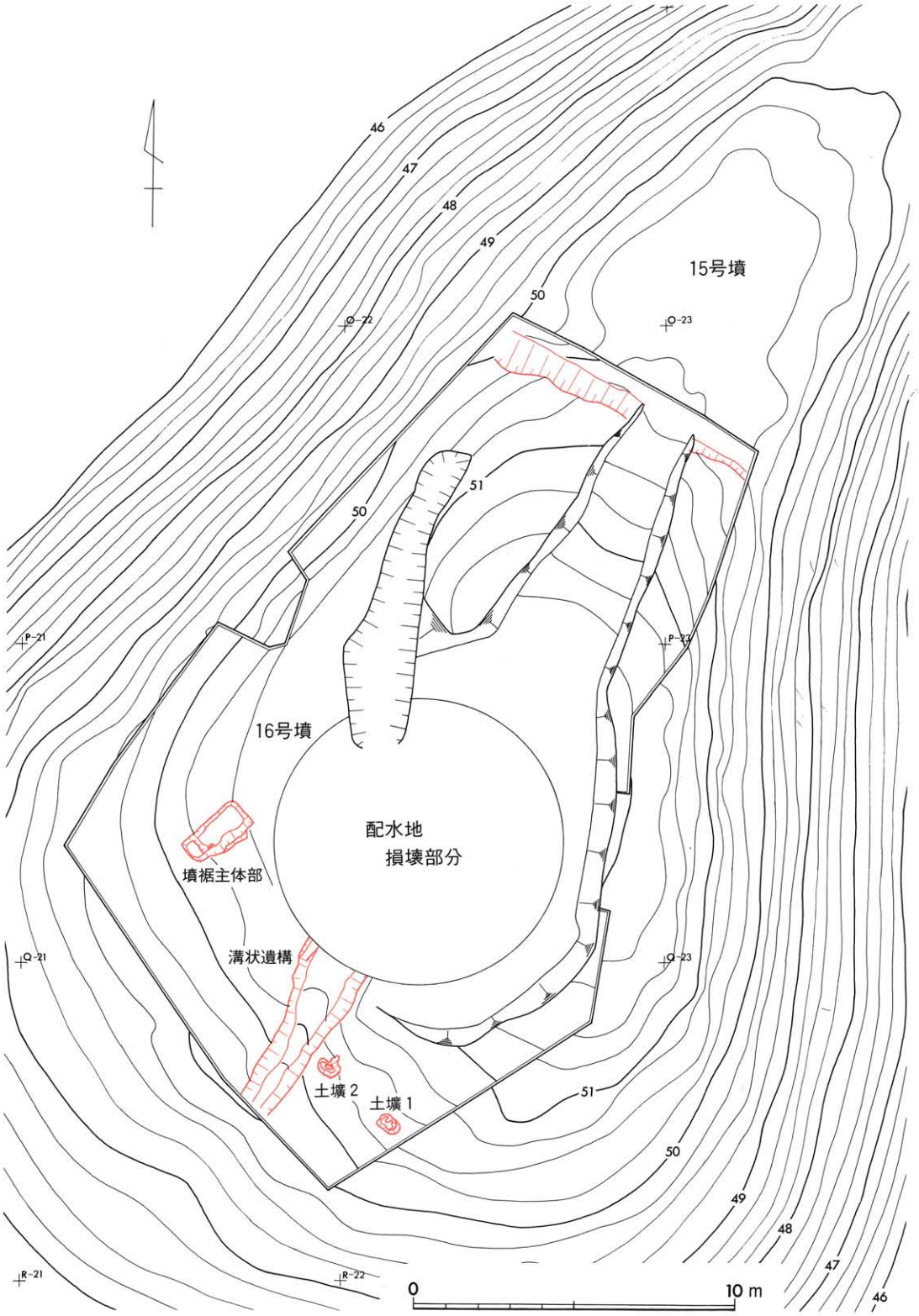
第105図　35 号 墳 土 層 図



第106図　35 号 墳 主 体 部 実 測 図



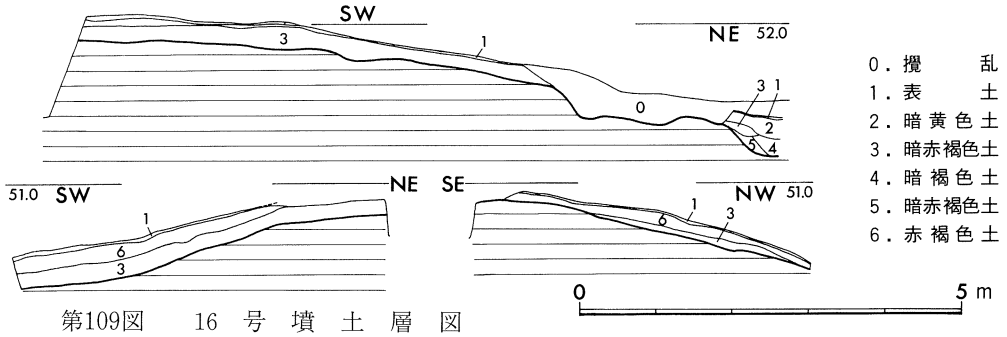
第107図　15・16号墳調査前墳丘測量図



第108図　16号墳調査終了時墳丘測量図

⑿　16号墳

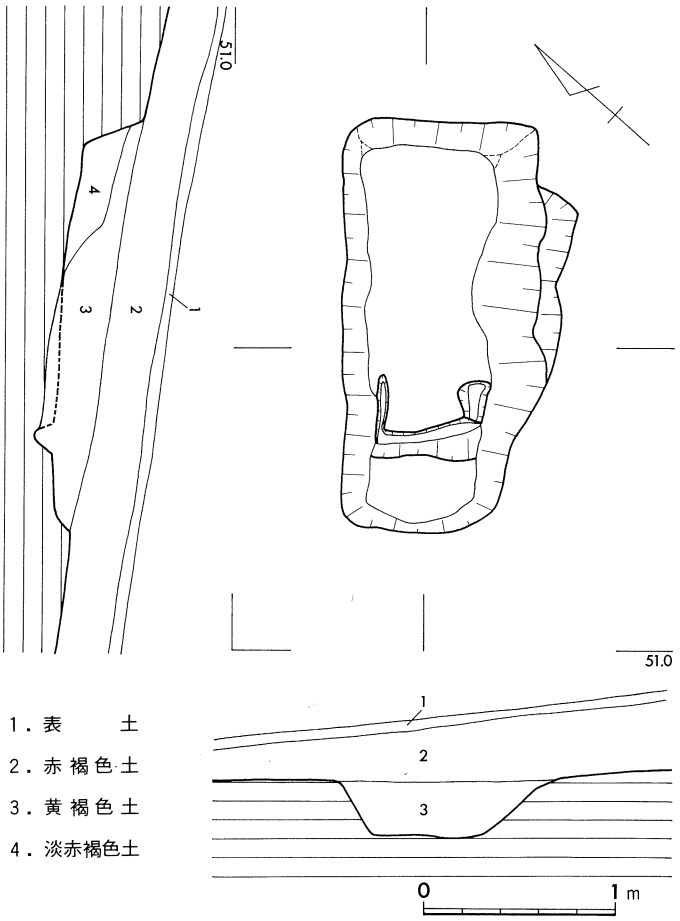
第Ⅴ支群の南西端、標高52mに位置する。当初本墳は緑地帯として保存される計画であったが、'83年6月、町教委に何の連絡もないまま墓域に重機が侵入、墳丘大部分を削平してしまった。調査は残存部分についてのみ行なわれたが、大部分が破壊されている上、東側は未買収地で調査区から外さざるを得なかった。本来は長辺約20m、短辺約15mの不整形な方墳であったと考えられる。



第109図　16号墳土層図

墳裾主体部　墳丘西側で素掘りの土壙が1基検出され、その位置から16号墳墳裾の埋葬施設と考えられる。主軸をN－49°－Eにとり、長辺2.2m、短辺1.0mを測る。緩やかな傾斜面に掘られているため、北東側では深さ0.3m、南西側では0.1mの掘方しか検出できなかったが、本来はさらに上層から掘り込んでいたものと考えられる。

墓壙は緩やかな傾斜をもち、黄褐色の覆土が充満しているが、北東側でのみ淡赤褐色土が

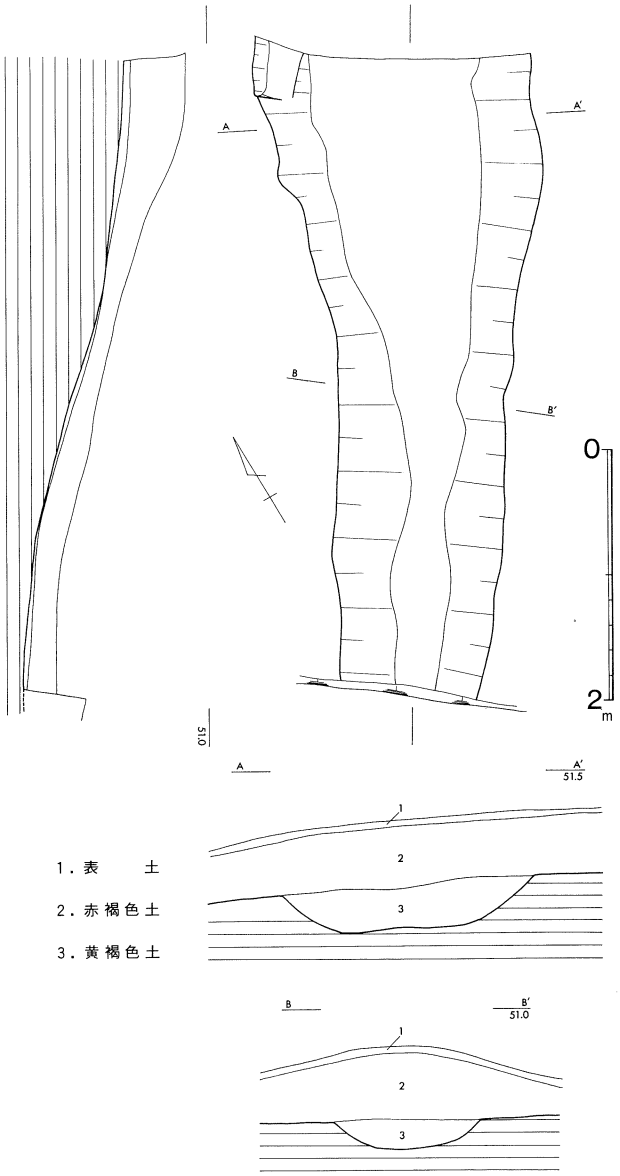


第110図　16号墳墳裾主体部実測図

含まれていた。墓壙底面は北東から南西にかけて緩やかに降り、両端部は0.15mの高低差があり、北東に頭位を有する墓壙と考えられる。壙底やや南西寄りに「コ」の字状の浅い溝が掘られている。主軸に直交する部分は壙底と長さがほぼ一致し、幅0.15m、深さ0.1mを測り、平行する部分は墓壙底両長辺沿いに短く検出されている。この溝は一部しか検出されなかったが、墓壙内に仕組まれた木棺の痕跡と考えられ、棺の長さは約1.5m程度のものと推定される。この溝から北東の壙底は検出時にやや掘り過ぎてしまったが、南西側とほぼ等しくなっていたものと考えられる。この墓壙からの出土遺物ははい。

溝状遺構　調査区内南西側の緩斜面に、下に降るに従って幅を減じるように掘られている。北東側は配水地用の穴によって破壊されているが、南西側は調査区外までさらに続いている。検出できたのは長さ約５mで、幅は北東側で2.2m、南西側で1.1mを測る。検出面からの深さは北東端付近が最も深く0.45m、南西端で0.25m、溝底両端の高低差は0.8mである。溝内には黄褐色土が堆積し、この土は粘性強く固くしまっている。溝底は平坦面で、この部分も溝上面と同様上方が広く、下方にゆくほど狭くなっている。

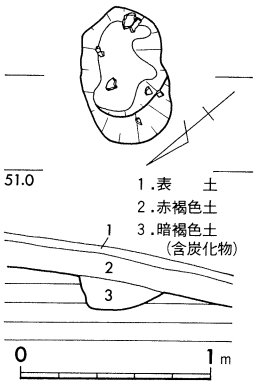
この溝状遺構は上半部分以上が墳丘の削平により破壊されており、その上16号墳も存在しない現在、16号墳にともなうものか否かという点も不明のままに終わってしまった。また、溝内からの出土遺物も見ていないので、時期についても定かではない。従って、奥才古墳群中に何例か確認されている階段状遺構と類似していることを指摘するにとどめたい。



第111図　16号墳溝状遺構実測図（1／60）

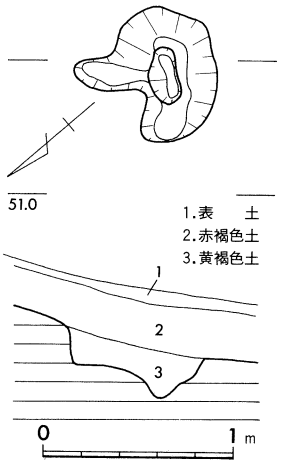
土壙１・２　16号墳調査区南隅で２基素掘りの土壙が検出されている。

土壙１は、長辺0.72m、短辺0.45mの楕円形の土壙で、検出面からの深さは約0.15mを測り、底部は比較的平坦である。覆土は暗褐色を呈し、炭化物、焼土を著しく含んでおり、この土壙で火を燃やすようなことがおこなわれたのは明らかである。また、覆土中には須恵器片も含まれており、この須恵器（第114図９）は、糸切り底を有するもので、この土壙は古墳群の築造よりもおくれて掘られたものと考えられる。類似の遺構は、13号墳北東のテラス上の土壙１、32号墳墳丘上の土壙など、墳丘各地点で見うけられている。



第112図　16号墳土壙１実測図

土壙２は、長辺0.72m、短辺0.52mの惰円形状を呈し、北東側がわずかに張り出している。検出面からの深さは約0.35mを測り、中央部は一段深くなっている。土壙覆土は黄褐色を呈し、土壙１とは異なり炭化物や遺物等は含まれていない。この覆土は、隣接する溝状遺構や、墳裾主体部のそれと類似しており、その時間的な近さを暗示するかもしれないが、断定するまでには至らない。



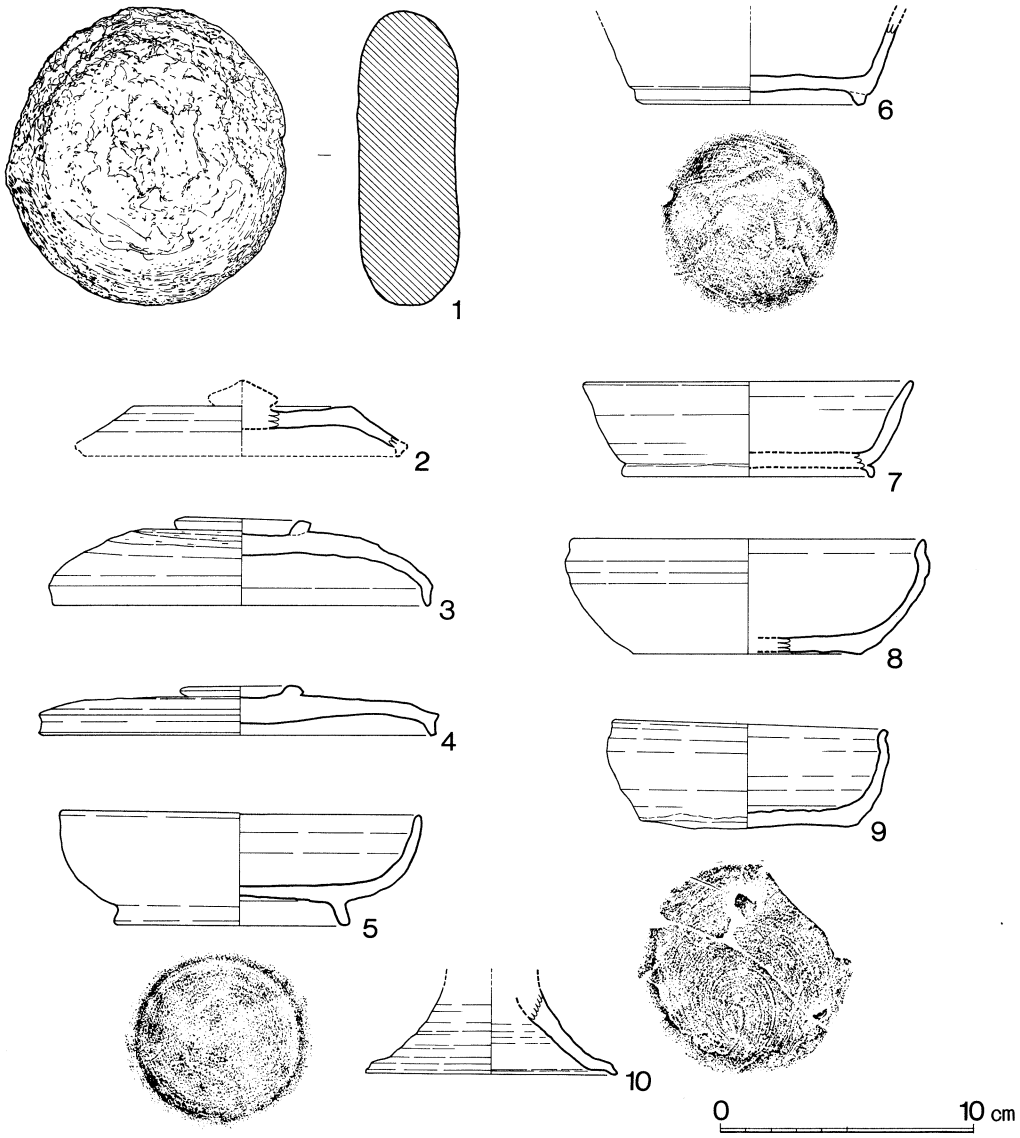
第113図　16号墳土壙２実測図

⑬　15号墳

16号墳の北側に位置する古墳で、緑地として現状のまま保存されることになっている。

墳丘は、13・14号墳から16号墳に至る丘陵鞍部に溝を共有して並んでいる33～35号墳と一連のものとして捉えることができる。北側の35号墳、南側の16号墳と相接しており、35号墳よりわずかに1.0m高い立地で、墳頂の標高は50.5mである。、小規模な方墳と考えられ、長辺10.5m、短辺約10m、高さ0.5m程度のものと考えられる。墳頂平坦部もかなり明瞭に残っており、長辺6.5m、短辺5.0mを測る。35号墳調査に際して、墳丘を区画する共通の溝が検出されている。また、16号墳の調査に際しても、約半分ではあるが、溝が検出されており、この溝は推定幅1.6m、深さ0.5mの狭いが深いもので、長さは8.8m以上になると考えられる。

小規模とはいえ、墳丘南北を整然と溝で区画し、34・35号墳より墳丘がやや大きく、33号墳と比肩しうる規模をもつ上に、これら３古墳よりはわずかに高い立地であり、注目される。



第114図　第Ⅴ支群出土遺物実測図(1)

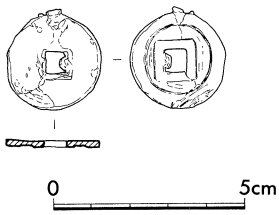
⒁　第Ⅴ支群出土遺物

遺物は、須恵器・石器で、支群中各地点からの出土である。(1)・(2)は14号墳周辺、(3)・(6)は33号墳周辺、(4)・(5)は13号墳南ガケ斜面、(7)は39号墳周辺、(8)・⑽は13号墳周辺、(9)は16号墳の土壙1の出土である。古銭状鉄器は14号墳南側斜面から出土した。

石器(1)は径11.8cm、厚さ3.9cmの平面円形の平らな石で、一方の表面中央が径4cmにわたって凹んでいる。

蓋(2)は口径12.2cm程度のもので、擬宝珠つまみをもつと考えられるものである。天井部はヘラおこしの後、つまみをはりつける。胎土は密、色調は外面灰味赤、内面明るい青味灰、焼成は良好である。蓋(3)は口径14.7cm、器高3.5cmを測る。しっかりした輪状つまみをもつもので、口縁端部の屈曲は長い。天井部は回転ヘラケズリの後、つまみを貼り付ける。胎土は砂粒多く、色調は灰色、焼成は良好である。蓋(4)は口径15.3cm、器高2.0cmを測る。低い輪状つまみをもつもので、口縁端部の屈曲はやや短いが、稜はシャープにつくる。天井部はヘラケズリの後に、つまみを貼り付ける。胎土は砂粒多いが密、色調は灰色、焼成は良好である。杯(5)は口径14.1cm、器高4.5cmを測る。高く外方にふんばる高台を有し、体部は内湾して丸くおさめる。底部は静止糸切りで切り離すと考えられ、高台を貼り付けてなでて糸切り痕を消している。胎土は粗、色調は灰色、焼成は良好である。この杯は(4)の蓋と一括出土したものである。杯(6)は高台径8.6cmを測るもので、高台は低い。体部は高台からわずかな屈曲を経て直線的に立ちあがるものである。底部は回転糸切りで切り離している。胎土は砂粒を少量含み、色調は灰色、焼成は良好である。杯(7)は口径12.7cm、器高3.8cmを測る。華奢な高台を有し、体部は直線的に立ちあがるが低い。胎土は密、色調は暗灰色、焼成は良好である。杯(8)は口径13.9cm、器高4.6cmを測る。体部は内湾して口縁部にいたり、口縁はくびれて外反する。底部は静止糸切りで切り離す。胎土は粗、色調は青灰色、焼成はやや不良である。杯(9)は口径10.5cm、器高4.2cmを測る。やや小ぶりの杯である。体部は内湾して口縁にいたり、口縁はくびれて外反する。底部は回転糸切りで切り離す。高杯(10)は脚部の破片で、脚径9.8cmを測る。ラッパ状にゆるやかに開くもので、端部でわずかにアクセントをもつ。

これらの遺物はその特徴から、(3)・(5)が出雲国庁編年[43]の第2形式、柳浦編年[44]の第2式、(4)が国庁第4形式、柳浦第3式、(2)・(6)・(7)・(8)・(9)が国庁第4形式、柳浦第4式と考えられる。(10)は時期不明である。



第115図　第Ⅴ支群出土遺物実測図(2)

第５節　第Ⅵ支群

第Ⅴ支群の南西端に位置する16号墳からさらに南西に降る尾根は、標高41.5ｍの鞍部を経て17号墳で再び44.5ｍのピークをむかえ、ここで西と南に分岐する。この高所に位置するのが17号墳であるが、そのほか遺構の存在が推定された丘陵尾根上にも調査区を設定した。それは、17号墳北東区、16・17号墳中間鞍部のＫ区、17号墳西側尾根上のＥ区、18号墳南側のＦ区である。

17号墳は径約20ｍの円墳で、礫床をともなう箱式石棺の第１主体、礫床をともなう箱式木棺の第２主体、素掘りの墓壙の第３主体が検出されている。

18号墳は17号墳の南に隣接する小円墳と考えられ、素掘りの墓壙の主体部１が検出された。この主体部からは臼玉36個の出土をみている。

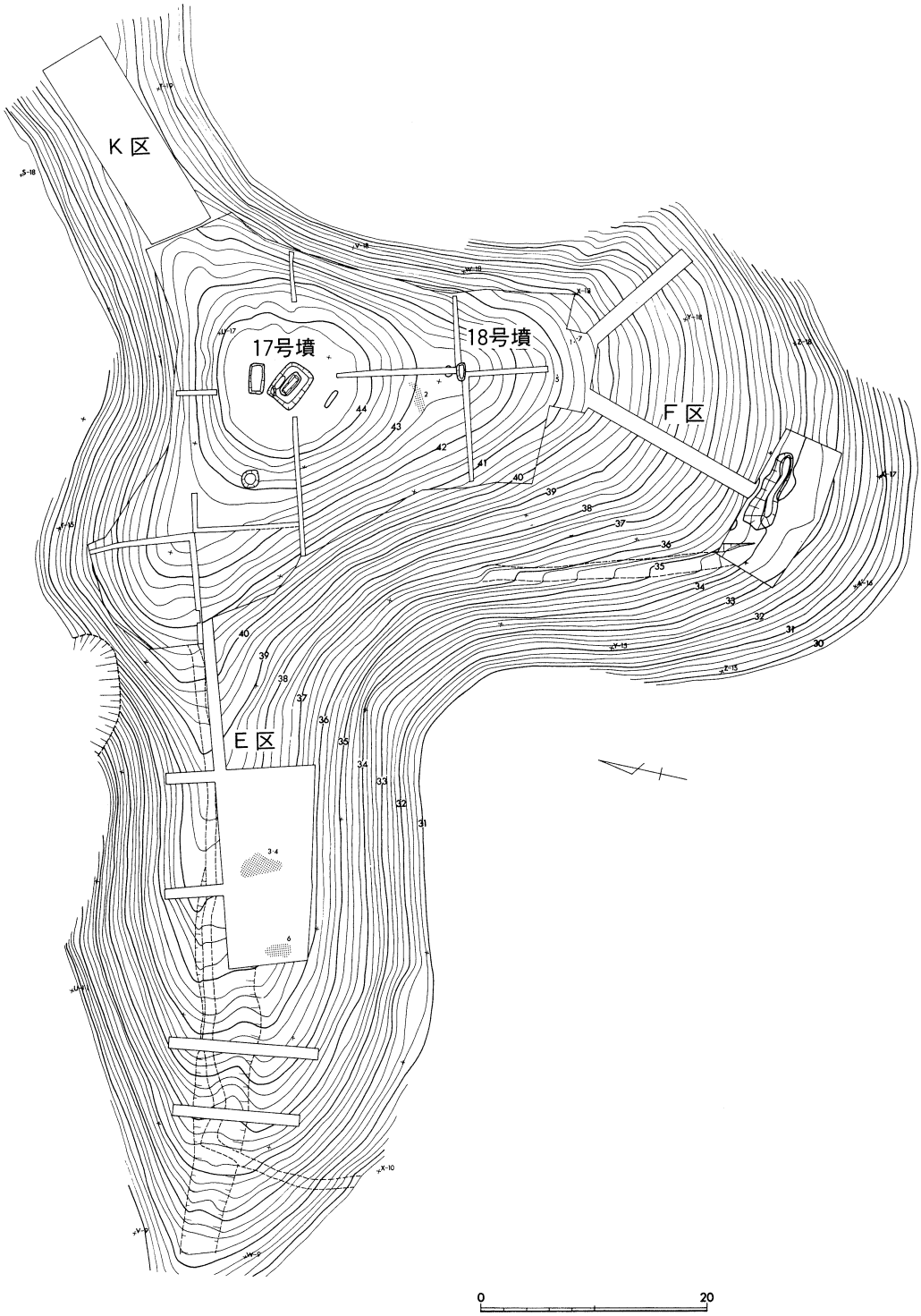
17号墳北東区では、17号墳裾以外遺構・遺物は検出されず、16・17号墳中間の鞍部平坦面に設定した18×６ｍのＫ区でも遺構・遺物は検出されなかった。

17号墳西側尾根上のＥ区では、尾根に直交して設けた４本のトレンチのうちの２本で須恵器片が検出されたため、調査区を拡大して調査を行なった。その結果、調査区中央および南西隅で須恵器細片多数と鉄斧１の出土をみた。これらの須恵器は蓋が宝珠状あるいは輪状のつまみ、杯が回転糸切り痕を有するもので、17・18号墳築造より後世のものと考えられる。鉄斧は銹化が著しい上に一部欠損もあるが、鉄板の両端を折り曲げて袋状の𨱗（ぼう）を造り出すものである。

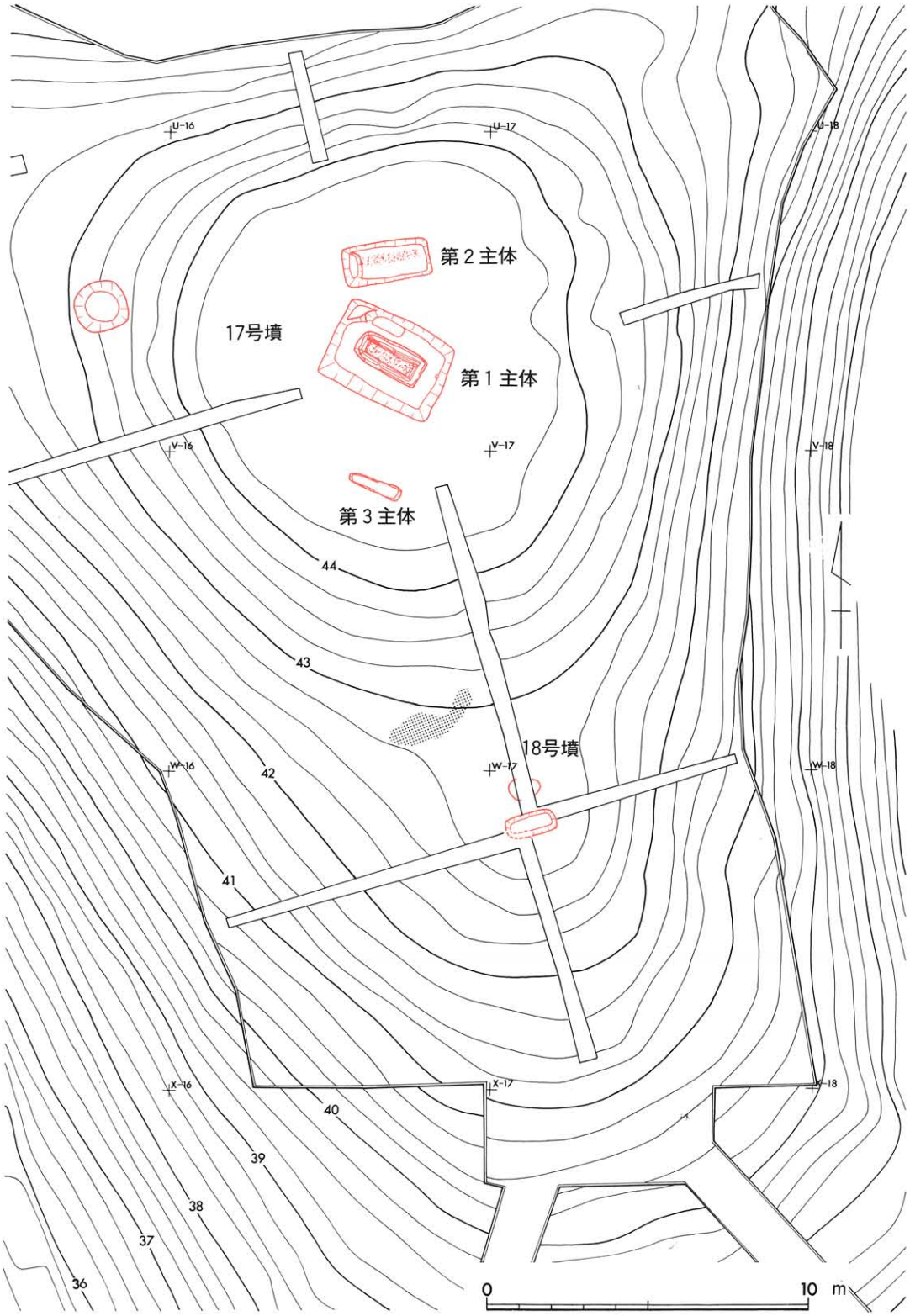
18号墳南側のＦ区は急傾斜の斜面となって降ってゆくが、その斜面中途で１箇所傾斜が緩やかになる部分が認められていたので、この地点に向けて１本（Ｆ－１）と、比較的緩やかな斜面に向けて１本（Ｆ－２）の計２本のトレンチを設定して調査した。その結果、Ｆ－１トレンチ先端断面で溝状遺構を確認できたため、この地点で調査区を拡大した。この溝状遺構は長さ7.5ｍ、幅2.5ｍ、深さ約0.5ｍを測るものであった。しかし、検出地点から他の遺構との関連がつかめない上に出土遺物もなく、遺構の性格は不明であった。また、Ｆ－２トレンチの基部、18号墳墳裾で須恵器片および棗（なつめ）玉１が検出されている。ここでも須恵器は古墳にともなうものとは考えられない。

そのほか、17・18号墳中間でも須恵器蓋１が細片になった状態で出土した。この部分では須恵器片は炭化物をともなっているが、遺構として検出することはできなかった。この蓋も、17・18号墳にともなうものではない。

以上のように、第Ⅵ支群中各調査区で須恵器片が多量に検出されているが、それらはいずれも遺構はともなわず、細片に破砕されたような状態での検出であった。これら遺物は奈良時代以後のものと考えられ、このような遺物の出土は奥才古墳群全域で認められるところであり、奈良時代以後に、尾根上で祭祀の行なわれたことが想定できるようである。



第116図　第 Ⅵ 支 群 地 形 測 量 図　(1／600)



第117図　17・18号墳墳丘測量図

(1) 17号墳

尾根が三方に分岐する地点に位置し、標高は42.5mから44.5mにかけてである。わずかに盛土を施してはいるが、墳丘のほとんどは地山を削り出すことによって造られている。地形に制約されて不整形ではあるが、径約20mの円墳と考えられる。高さは約2.0mである。墳頂には径約11mの平坦面が残っており、この面から礫床をもつ箱形石棺の第1主体、礫床を有する第2主体、素掘りの土壙の第3主体が検出されている。

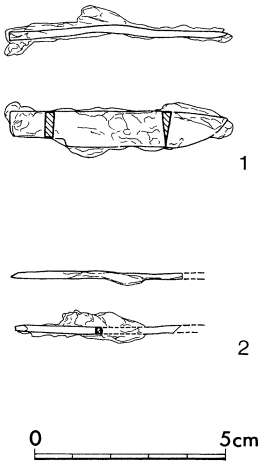
第1主体　墳頂平坦面に位置する墓壙内には礫床を有する箱形石箱を仕組んでいる。墓壙の長手板は3.8m、妻板は2.8m、検出面からの深さは約0.5mを測る。主軸はE－29°－Sにとる。壙内におりるためのものか、墓壙北西隅には階段状に2段のステップが削り残してある。さらに壙底には石棺側石を受ける溝が「ロ」字状にめぐっている。この溝は幅、壙底からの深さとも約0.2mを測る。

石棺は10枚の板石が使用され、北側3枚、南側2枚、東西各1枚、蓋石3枚で構成されている。石棺側石下端では石材を安定させ、石材接合部では継目をおおうように、石棺材と同様な石材片が検出されている。石材の継目は、わずかだが粘土で目ばりをしている。石棺内法は主軸方向に1.63m、幅は東側で0.49m、西側で0.41mとなっており、東側が若干広くなっている。蓋石は2枚の石材で石棺を覆い、その石材の継目をもう1枚の石材でふさいでいる。石棺南側長手板の石材には、合欠継の手法が認められ、長手板と妻板の組み合わせ部では長辺の石材をわずかに削る刳込みが見られる。また石材各所に、ノミによる加工痕が比較的良好に残存している。

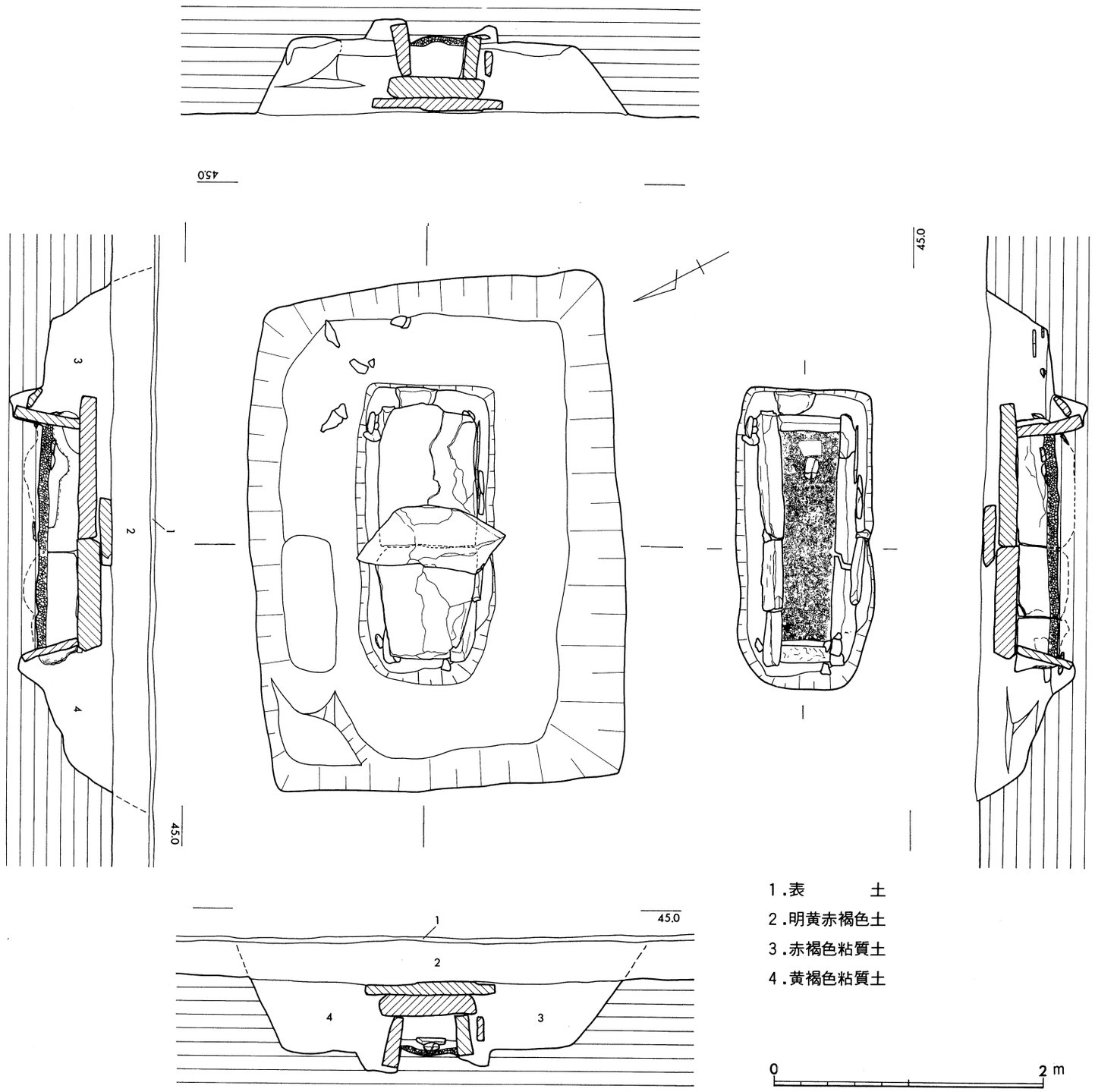
石棺床面には礫が敷きつめられており、この礫床は東側が西側より約0.06m高くなっている。礫床の厚さは0.03～0.08mで、床面がわずかにくぼんでいる。また礫床東側寄りには19×12cm、厚さ4cmの、枕に使用したと考えられる板石が置かれ、この石の西側で頭頂骨が検出され、頭位を東にとっていたことが知られた。

礫床上面、被葬者のほぼ胸に相当する付近南側から鉄器片2点が検出されている。その他の遺物は見当たらなかった。

第1主体出土遺物　検出された鉄器片は刀子と鉄針と考えられる。刀子（第118図1）は長さ5.7cmの小形のもので、刃部長4.2cm、茎長1.5cmを測る。身幅は1.0cm、断面は縦長の三角形である。装具などの痕跡は認められない。鉄針（第118図2）は一部折損があるが残存長4.4cmを測る。断面は一辺0.1cmの断面方形を呈し、先端は片刃状に尖る。



第118図　17号墳第1主体出土遺物実測図

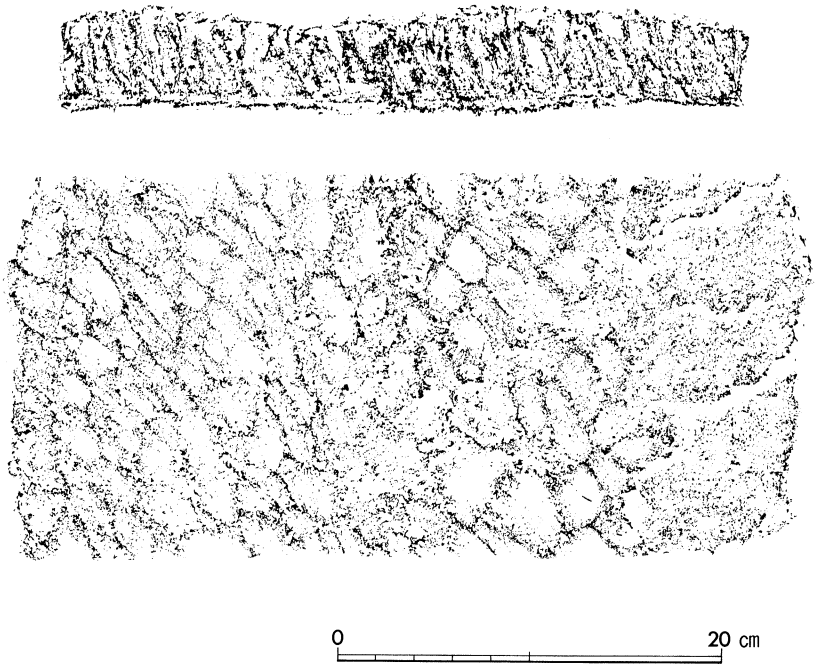


第119図　17 号 墳 第 1 主 体 実 測 図

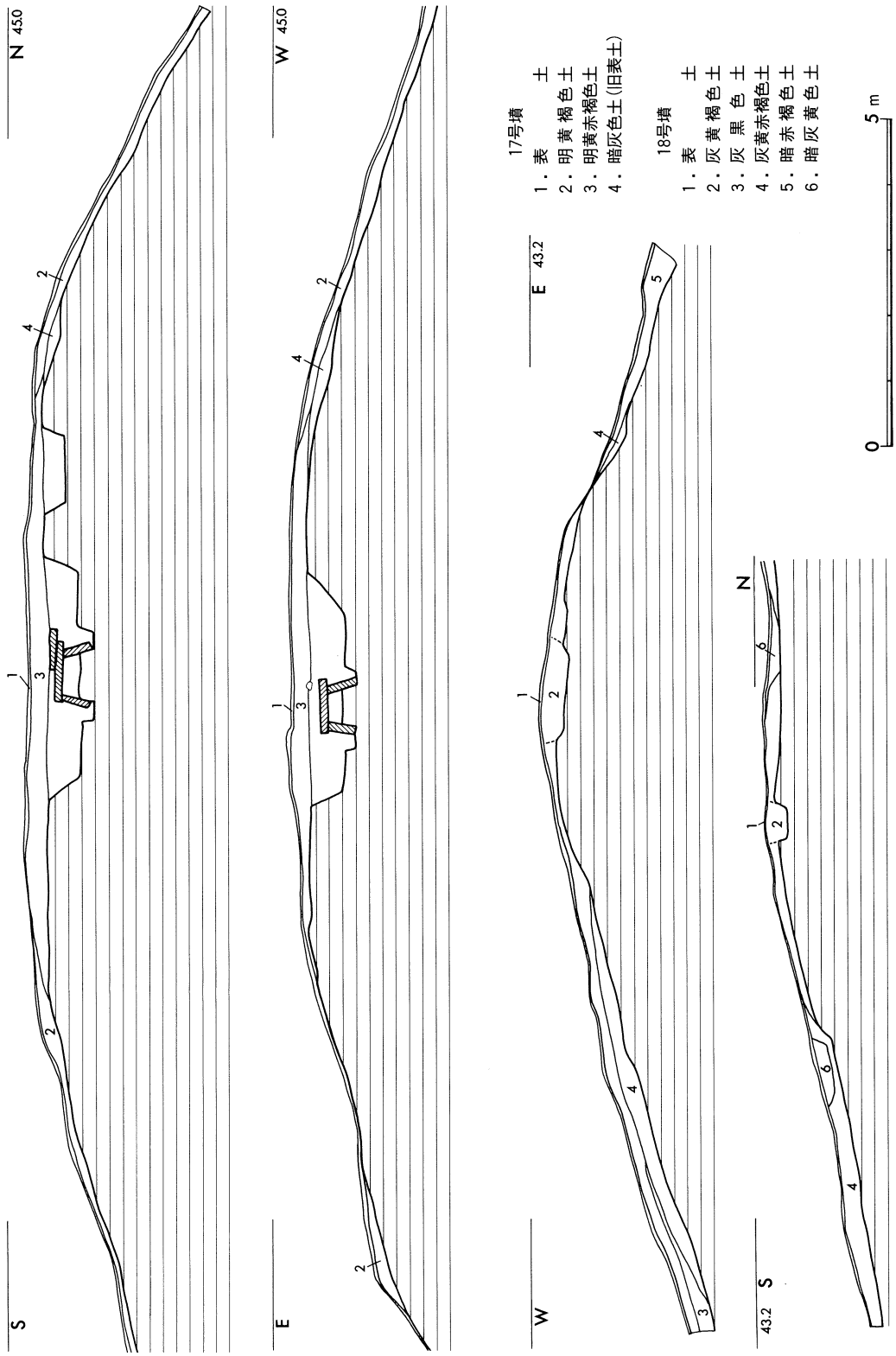
17号墳第１主体石棺材はいずれも刃のある工具による加工痕をとどめている。ここでは比較的良好にその痕跡を残す南側壁の１枚を紹介する。この石材は棺内に面して幅４㎝前後の浅いサジ面をなす痕跡をとどめ、これらはチョウナ削り[45]によるものと考えられる。この痕跡のうち、最も幅の広いもので約６㎝を測り、これがほぼ工具の幅を示すものであろう。この面での工具の動きは、右上り斜めの方向を基本とするが、進行方向は不明である。工具は１打で１～３㎝進んでいる。しかしこのサジ面は後述する32号墳石棺で認められたものほど連続しない。

棺身の上面となる面にもやはり工具痕が残っている。ここでは同様のチョウナによる加工と考えられるものの、その痕跡はいささか異なる。つまり、工具痕はサジ面をなさず、浅い線状の痕跡の連続として残っており、チョウナの刃部で削るのでなく、敲打するように使用している。この面の長軸方向に刃部を直交させ、長軸方向に連続する敲打をくりかえしたものと考えられる。

こういった加工痕は、32号墳石棺と工具の幅、加工の方法で類似しており、両古墳の時期的な近さを窺わせる。17・32号墳の石棺材の加工痕は、チョウナ削り技法によるものであり、13・14号墳石棺でみられたような最終的に敲打して仕上げるものとは技法を異にしている。



第120図　17号墳第１主体石棺材加工痕拓影図　(1／4)

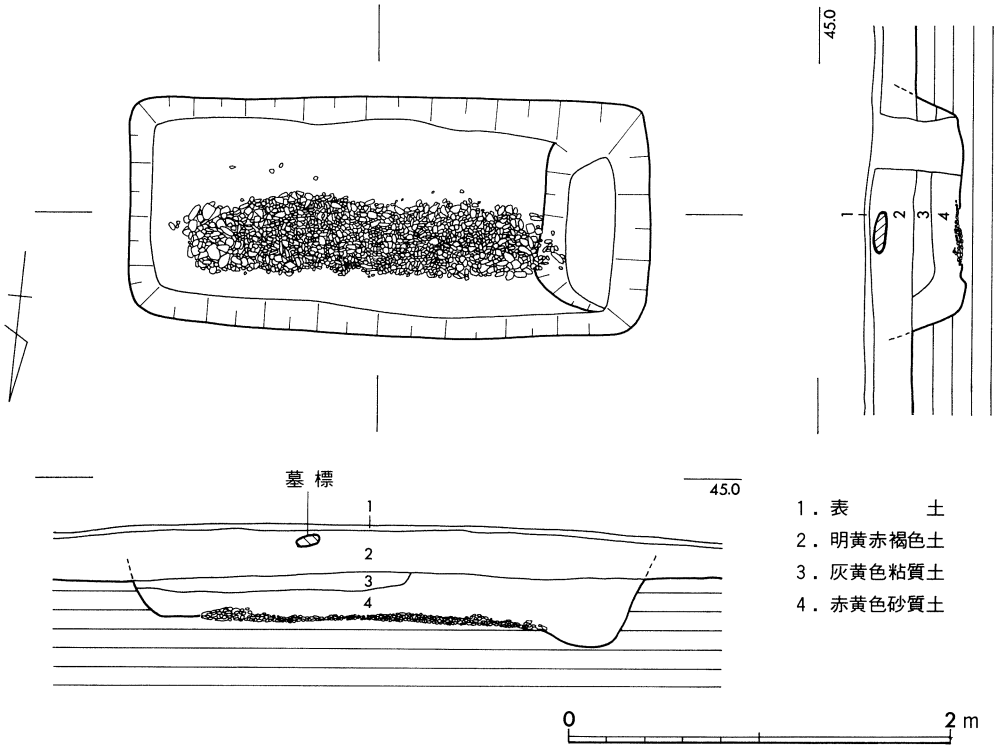


第121図　17・18号墳土層図

第２主体　墳丘平坦面上、第１主体北側に隣接する主体部で、主体部床面に礫床を有している。墓壙は素掘りのもので、壙底西隅はやや深い造りとなっている。墓壙上面で長辺2.7m、短辺1.2m、墓壙底面で長辺2.4m、短辺1.0mを測る。検出面からの深さは0.22mを測る。墓壙上面での標高は44.5mである。主軸はＥ－11°－Ｎとほぼ東西を向くもので、第１・第３主体と主軸を約40°異にしている。

墓壙覆土は２層からなり、上層は灰黄色土層、下層はほとんどやや砂質の赤黄色土層が堆積している。墓壙のほとんどは灰黄色土が充満している。

墓壙底面で棺の痕跡は検出できなかったが、礫の分布から、墓壙内に箱形木棺を組み、その床面に礫を敷いたものと考えられる。木棺は墓壙内北側長辺寄りにやや偏して据えられている。この礫床は長さ1.9m、幅0.4mの範囲内に分布していることから、これが木棺の内法に一致するものと考えられる。礫床の礫は全体に第１主体で使用されているものより大きく、なかでも東西両端部付近では大粒のものが使用されている。礫床下の地山のレベルは東側が西側よりも0.07m高くなっている。また礫床上面は東側でわずかに盛り上がり、この部分では西側より若干大粒の拳大の礫が使用されており、被葬者の枕にしたものであろう。地山の傾斜や枕状の盛り上がりから、第２主体は東



第122図　17号墳第２主体実測図

に頭位を向けるものと考えられる。主軸はやや異にするものの、第１主体とともに、おおむね東に頭位をとるものといえる。

墓壙内西側底面には、短辺に沿って落ちこみが検出された。幅は0.55m、墓壙底面からの深さは0.08mを測る。この部分でも墓壙内覆土と何ら異なることはない。

この主体部検出面より0.15m上で平らな石が検出されており、下部の墓壙との関係からこの主体部の標石と考えられる。この石は長さ26.7㎝、幅15.5㎝、厚さ６㎝のもので、表面はなめらかな河原石である。加工痕などは認められない。

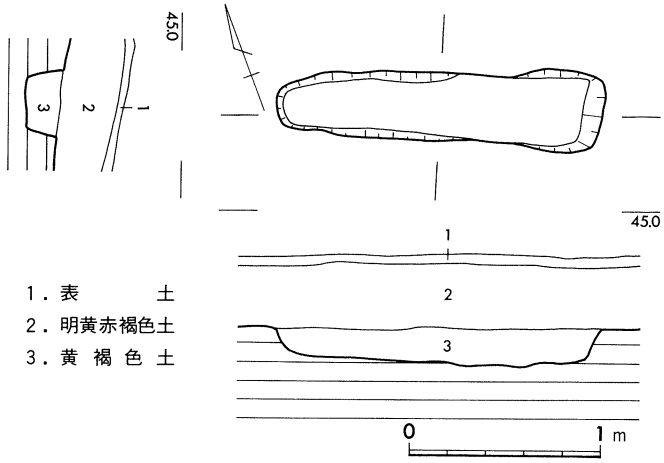
この第２主体からの出土遺物は認められなかった。

第３主体　墳頂平坦面上、第１主体南側約２ｍの地点に第１主体と平行するように検出されたもので、平坦面南隅に近い地点にある。墓壙は礫床などの施設は有さない素掘りのものである。規模は墓壙上面で長さ1.7m、幅は東側で0.4m、西側で0.3mで、下面では長さ1.55m、幅は東側で0.35m、西側で0.20mを測り、東側の幅を広くとっている。検出面からの深さは東側で0.17m、西側で0.14m、墓壙上面の標高は44.4mである。主体部の主軸はＥ－22°－Ｓと、ほぼ東西をむき、第１主体とほぼ平行となっている。

墓壙内には黄褐色土が充満している。この土層は若干粘性を有し、白色や桃白色の地山ブロックを含んでいる。

墓壙壁は垂直に近い傾斜をもって立ち上がっている。墓壙床面で棺の痕跡などは検出できなかった。この主体部の頭位方向は、平面形で見る限り第１・第２主体と同様東を向くものと考えられるが、墓壙底面では西側が東側より約0.05m高くなっており、墓壙平面形で得られた所見と矛盾する。しかし、第１主体とほぼ平行する点、平面形で東側の幅が明らかに広くなる点を重視して、頭位方向は東をとるものと考えておきたい。

この第３主体からの出土遺物もなかった。



第123図　　17 号 墳 第 3 主 体 実 測 図

(2) 18号墳

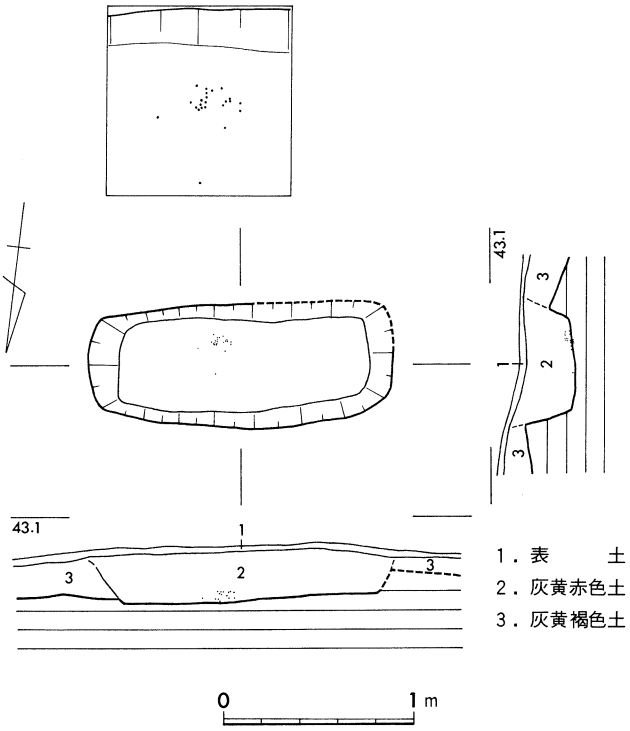
17号墳から南にのびる尾根上に、隣接するように存在する古墳である。墳丘は、わずかに施された盛土がほとんど流れているようで判然としないが、直径10mに満たない小規模な円墳と考えられる。墳頂は17号墳よりも1.7m低く標高は42.8mであり、17号墳墳裾とほぼ等しい。墳丘の高さは北側の17号墳との鞍部からは0.3mにも満たないが、東・西墳裾からは1.2～1.4mを測る。墳丘は17号墳墳裾のレベルで水平に地山を削って基盤を造った後、盛土を施したものと考えられる。残存する盛土は約20cmで、上層から灰黄赤色土層、灰黄褐色土層の2層からなっている。

墳頂中央で素掘りの墓壙1が検出されており、これがこの古墳唯一の主体部と考えられる。主体部は盛土中から掘り込まれ、下半は地山に掘り込まれている。規模は墓壙上面で長さ1.55m、幅0.65m、底面で長さ1.30m、幅0.50mを測るものである。検出面からの深さは0.20mで、墓壙上面での標高は42.9cmである。主軸はW－17°－Sとほぼ東西にとる。

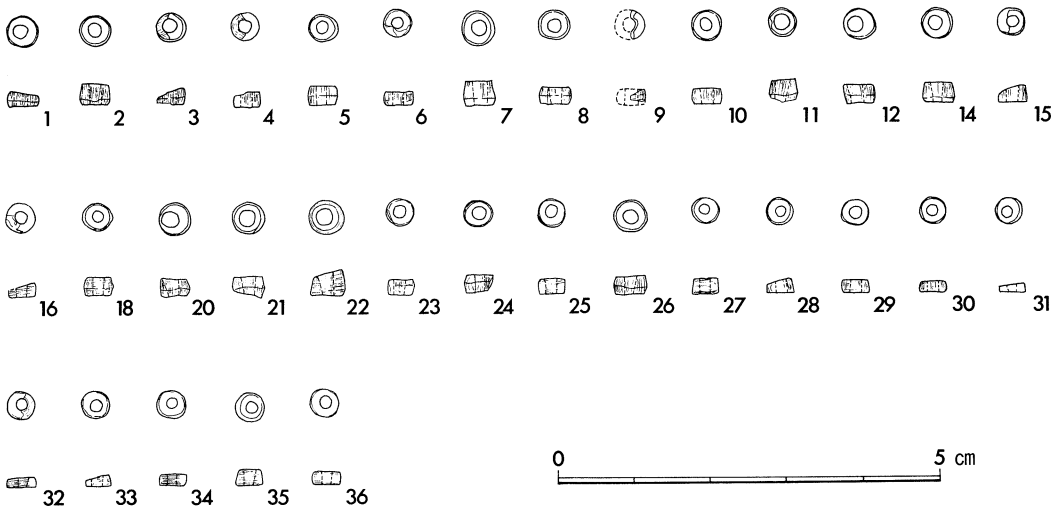
墓壙覆土は1層から成り、底面では木棺などの痕跡は検出できなかった。壁はかなり緩やかな傾斜で底にいたっている。この主体部の頭位方向は、平面形ではいずれとも決し難いが、墓壙底面では西側が東側より0.04m高くなっており、頭位は西を向くものの可能性もある。こう考えると隣接する17号墳各主体部頭位とは全く逆の方向をむくことになる。

墓壙内のほぼ中央部南寄りで臼玉36個が検出された。玉は床面に接して約0.2×0.2mの範囲内に分布していた。被葬者の頭位を決定することはできなかったが、東西いずれを頭位とするとしても、手首と考えられる部位での出土であり、腕輪として装着していたものと考えられる[46]。

17・18号墳鞍部で須恵器片が採集されているが、古墳にともなうものではない。



第124図　18号墳主体部実測図（枠内は1／16）



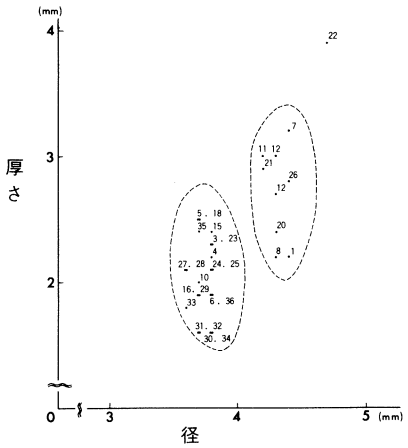
第125図　　18号墳主体部出土臼玉実測図　（原寸）

出土遺物　主体部から検出された臼玉は36個を数える。材質はいずれも緑色凝灰岩と考えられる。ただし、質感によって硬・軟２様に分類できそうである。

形態は平面円形を呈して扁平である。しかしそれぞれの玉で個体差が認められ、径・厚さにばらつきがある。また、外面に稜を有して算盤玉に近い形態のものもある。径と厚さでみると、径3.6～3.8㎜、厚さ1.6～2.5㎜のものと、径4.2～4.4㎜、厚さ2.2～3.2㎜の２群に比較的明確に分類できる。１例だけ例外として径4.5㎜、厚さ3.9㎜の大きな玉がある。

製作は、錐状の工具で穿孔を行なっており、いずれも一方穿孔と考えられる。外面は丁寧な研磨で平滑に仕上げられている。側面はタテ方向の研磨を主とするが、一部にヨコ方向の研磨で仕上げられるものもある。ヨコ方向の研磨をもつものは厚さが薄く、側面に稜をもたないものに多いようである。

色調は、緑色凝灰岩を材料とするため緑色系を呈するが、個体によって若干の差がある。数の上では灰味黄緑が最も多く、次いで緑味白、暗い緑、明るい緑味灰が少しある。



第126図　18号墳主体部出土臼玉法量分布図

第6表　18号墳出土臼玉計測表

No.	厚さ (mm)	径 (mm)			孔径(mm)		重さ (mg)	穿孔方法	色彩	備考
		最大	上	下	上	下				
1	2.2	4.4	3.9	4.2	2.0	1.5	63	一方	灰味黄緑	
2	3.0	4.3	3.9	4.0	2.0	1.6	81	〃	〃	
3	2.3	3.8	—	—	1.5	1.5	35	〃	〃	外径の上下は計測不可能
4	2.2	3.8	3.3	3.7	1.4	1.4	37	〃	緑味白	
5	2.5	3.7	3.5	3.6	1.4	1.2	59	〃	灰味黄緑	
6	1.9	3.8	3.5	3.4	1.4	1.2	35	〃	〃	
7	3.2	4.4	3.9	4.1	2.0	1.6	84	〃	〃	
8	2.4	4.3	3.8	3.7	1.8	1.8	53	〃	緑味白	
9	—	—	—	—	—	—	—	—	灰味黄緑	大部分破損
10	2.0	3.7	3.4	3.2	1.4	1.2	43	一方	〃	
11	3.0	4.2	3.6	3.9	1.8	1.4	65	〃	〃	
12	2.7	4.3	4.0	3.8	1.8	1.6	65	〃	緑味白	
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破損
14	3.1	4.4	3.5	4.2	1.9	1.6	79	一方	灰味黄緑	
15	2.4	3.8	3.3	3.4	1.3	1.5	47	〃	〃	
16	1.9	3.7	3.6	3.4	1.2	1.2	30	〃	緑味白	
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破損
18	2.5	3.7	3.3	3.4	1.5	1.4	46	一方	灰味黄緑	
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破損
20	2.4	4.3	3.6	3.7	1.6	2.1	59	一方	灰味黄緑	
21	2.9	4.2	3.7	3.8	2.0	1.5	64	〃	〃	
22	3.9	4.5	3.9	4.2	2.2	1.5	84	〃	〃	
23	2.3	3.8	3.1	3.2	1.5	1.2	44	〃	暗い緑	
24	2.1	3.8	3.4	3.3	1.5	1.4	40	〃	〃	
25	2.1	3.8	3.4	1.4	1.4	1.4	35	〃	灰味黄緑	
26	2.8	4.4	3.6	4.0	1.8	1.5	77	〃	〃	
27	2.1	3.6	3.1	3.4	1.2	1.3	39	〃	〃	
28	2.1	3.6	3.5	3.4	1.2	1.2	38	〃	明るい緑味灰	
29	1.9	3.7	3.4	3.4	1.4	1.3	38	〃	〃	
30	1.6	3.8	3.5	3.6	1.4	1.3	27	〃	灰味黄緑	
31	1.6	3.7	3.1	3.4	1.3	1.2	30	〃	暗い緑	
32	1.6	3.7	3.3	3.6	1.4	1.2	26	〃	緑味白	
33	1.8	3.6	3.4	3.4	1.3	1.2	24	〃	明るい緑味灰	
34	1.6	3.8	3.6	3.3	1.2	1.1	24	〃	緑味白	
35	2.4	3.7	3.7	3.2	1.3	1.2	40	〃	灰味黄緑	
36	1.9	3.8	3.7	3.6	1.3	1.3	43	〃	〃	

色彩はNIPPON SHIKISAI CO.,Ltd.「実用 today's COLOR／300」(商標登録　48－020856)による。

(3) 第Ⅵ支群出土遺物

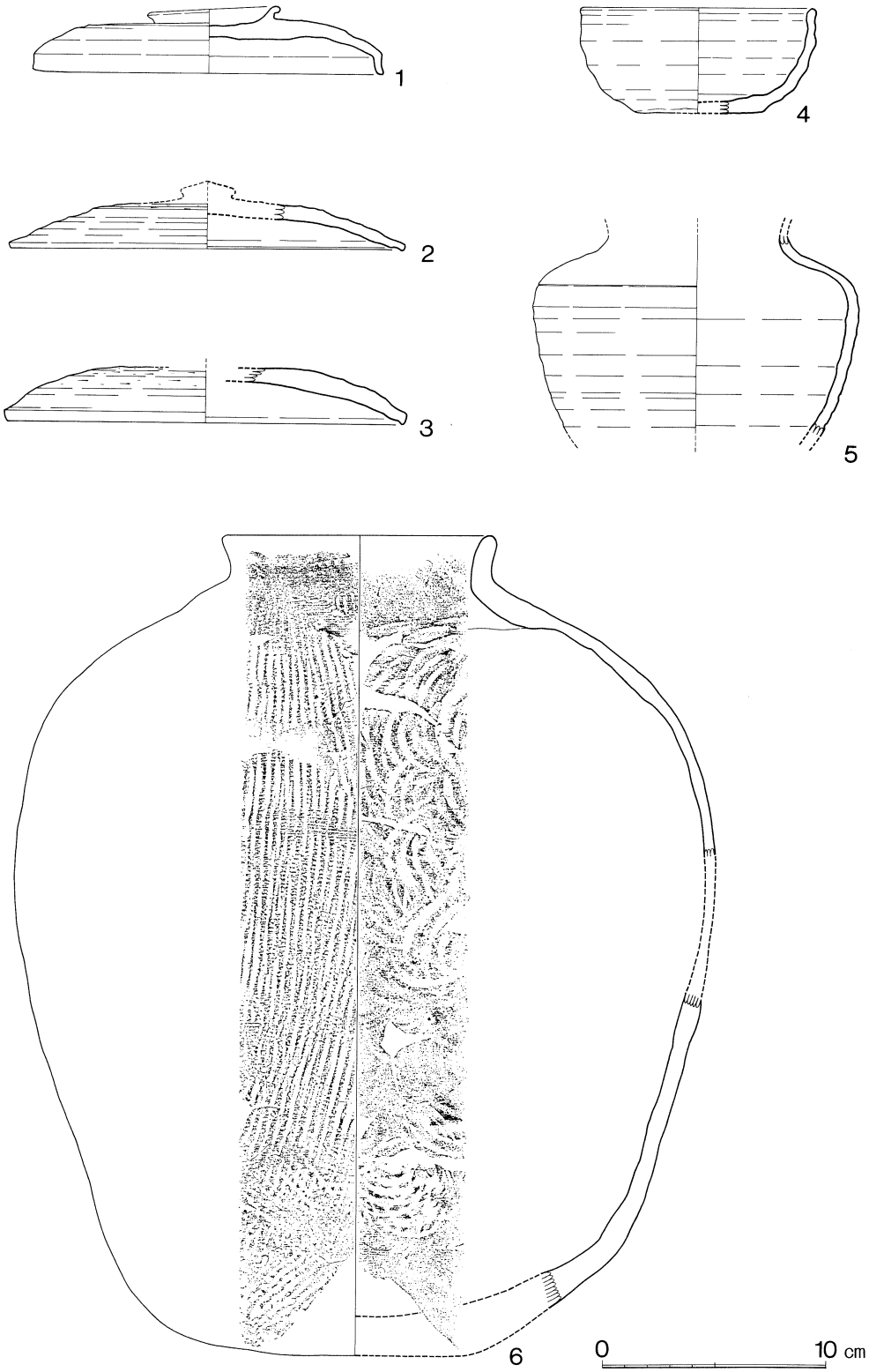
遺物は須恵器・棗玉・鉄斧である。(1)・(5)・(7)はＦ区、(3)・(4)・(6)・(8)はＥ区、(2)は17・18号墳中間の鞍部で検出された。

須恵器蓋(1)は口径15.7cm、器高3.0cmを測る。輪状つまみを有するもので、つまみは高く、端部は大きく外反する。口縁端部は直立し、わずかに外方に折れ曲がる。天井部は回転ヘラケズリの後に輪状つまみを貼付けている。胎土は粗で、焼成は良好で外面に自然釉がかかり、色調は灰褐色を呈している。蓋(2)は口径17.5cmを測る。擬宝珠状つまみがつくものと考えられる。器高は低く、口縁端部にアクセントをもつが屈曲はしない。天井部に回転ヘラケズリの痕跡を残す。胎土は砂粒がやや多いが密で、焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。蓋(3)は口径17.7cmを測る。擬宝珠状つまみがつくものと考えられ、全体に厚手である。口縁端部は断面三角形を呈するが、鋭いものではない。天井部には回転ヘラケズリの痕跡を残している。胎土は粗で、焼成は普通、色調は暗灰色を呈する。杯(4)は口径10.2cmを測り、器高は4.8cmとやや深い。内湾して立ち上がる体部は、端部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離している。胎土は粗で、焼成は良好、色調は黒灰色を呈する。壺(5)は小形のもので、肩部に最大径をもち、14.6cmを測る。内外面とも回転ナデの痕跡を残す。胎土は密で、焼成は良好、色調は一見備前焼風のえび茶色を呈する。壺(6)は短く小さい径の口縁部をもち、体部は丸味をもつやや長いもので、底部はわずかに平底状を呈し、この部分の器壁は厚い。口径11.8cm、推定器高37.5cm、体部最大径31.0cmを測る。体部内外面にはタタキメを残し、外面には縦方向の平行タタキメを施した後、かすかにカキメを施す。内面には同心円状のタタキが残っている。胎土は砂粒少なく黒色の粒子を含んでおり、焼成は良好で肩部に自然釉がかかる。色調は青灰色を呈している。

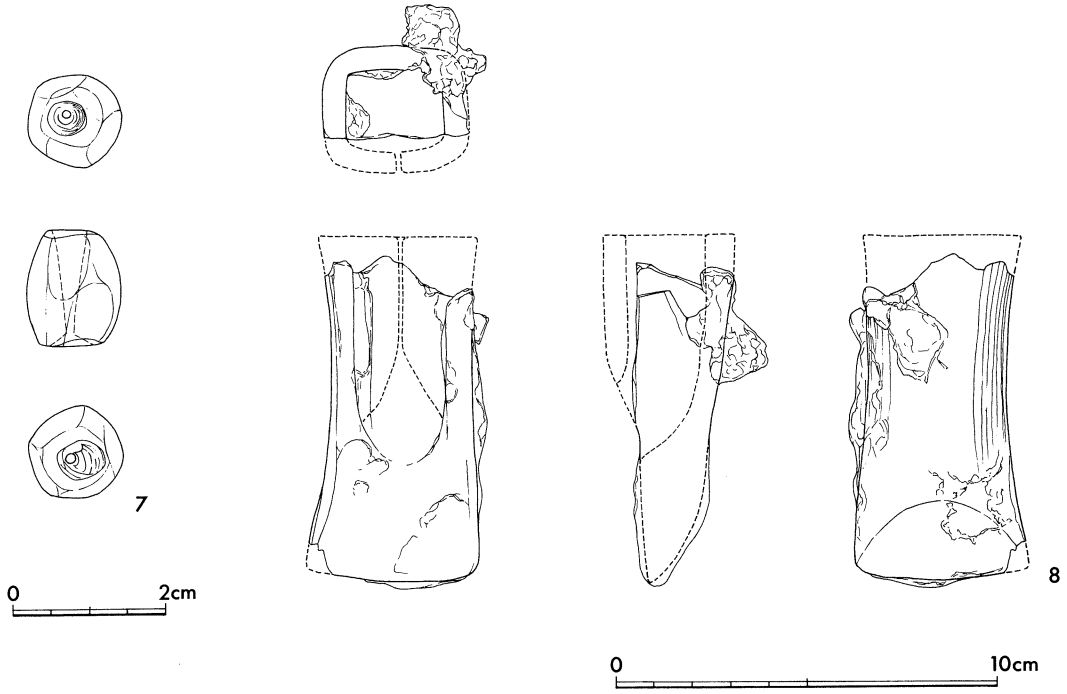
これらの遺物はその特徴から(1)が国庁編年[47]の第２形式、柳浦編年[48]第２式、(2)・(3)が国庁第４形式、柳浦第４式、(4)が国庁第３形式、柳浦第３式に属するものと考えられる。(5)・(6)の時期は不明である。

棗玉は良質の碧玉を使用するものと考えられ、暗い青緑色を呈する。全体に丸味を帯びた扁球形のもので、長さは1.36cm、径は最大で1.28cmを測る。穿孔は一方からのもので、穿孔側で孔径0.43cm、貫通側で0.12cmである。端部径は穿孔側で0.83cm、貫通側で0.89cmを測る。外面は丁寧に研磨され、筒部は縦方向の研磨、両端付近は横方向の研磨が施されている。

鉄斧は、袋部付近が欠失している上、全体に銹化が進んでいるが、袋状の𨱗(きょう)を有する鍛造無肩式のものである。全長は９cm程度のものと考えられ、刃部幅は残存長４cmである。袋部からゆるやかに開いて刃部にいたっている。刃部断面は片刃状となっており、あるいは手斧様の用途をもつものかと考えられる。



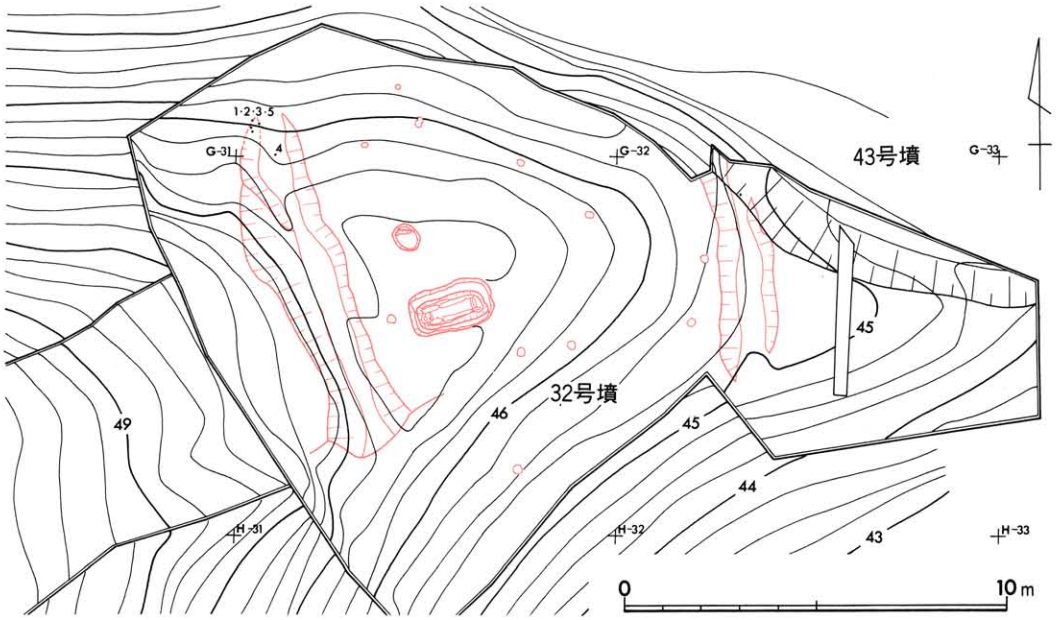
第127図　第Ⅵ支群出土遺物実測図(1)



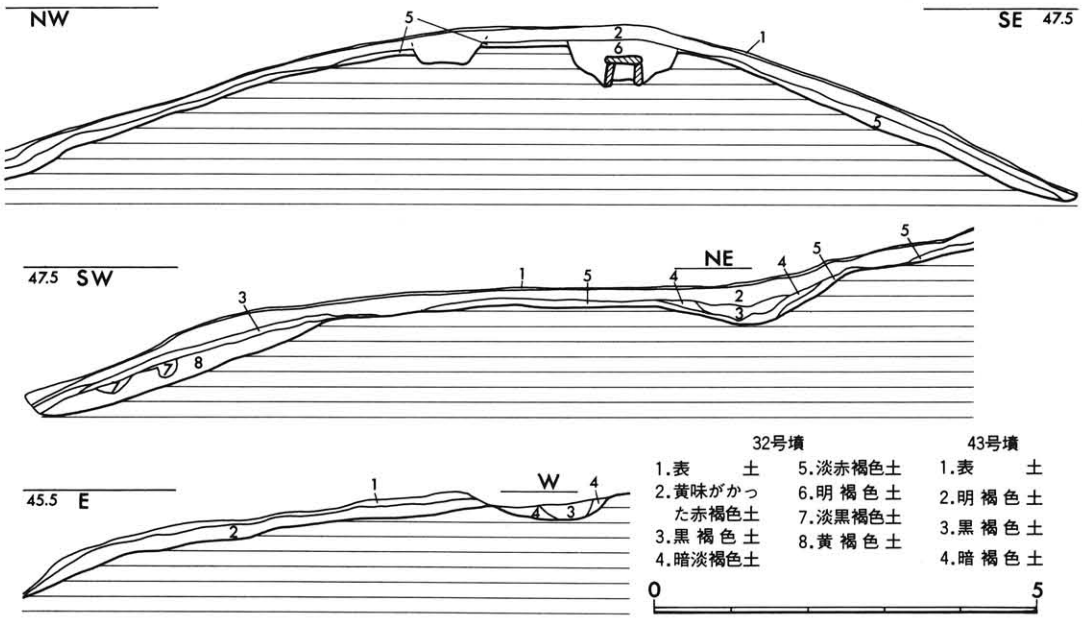
第128図　　第Ⅵ支群出土遺物実測図(2)　（7は原寸、8は1／2）

第6節　第Ⅶ支群

13・14号墳などの第Ⅴ支群から東へ延びる斜面から鞍部にかけて位置し、標高は44.0mから47.5mにかけてである。調査の対象は32・43号墳だが、さらに東の尾根にも古墳が数基分布している。



第129図　32・43号墳墳丘測量図



第130図　32・43号墳土層図

(1) 32号墳

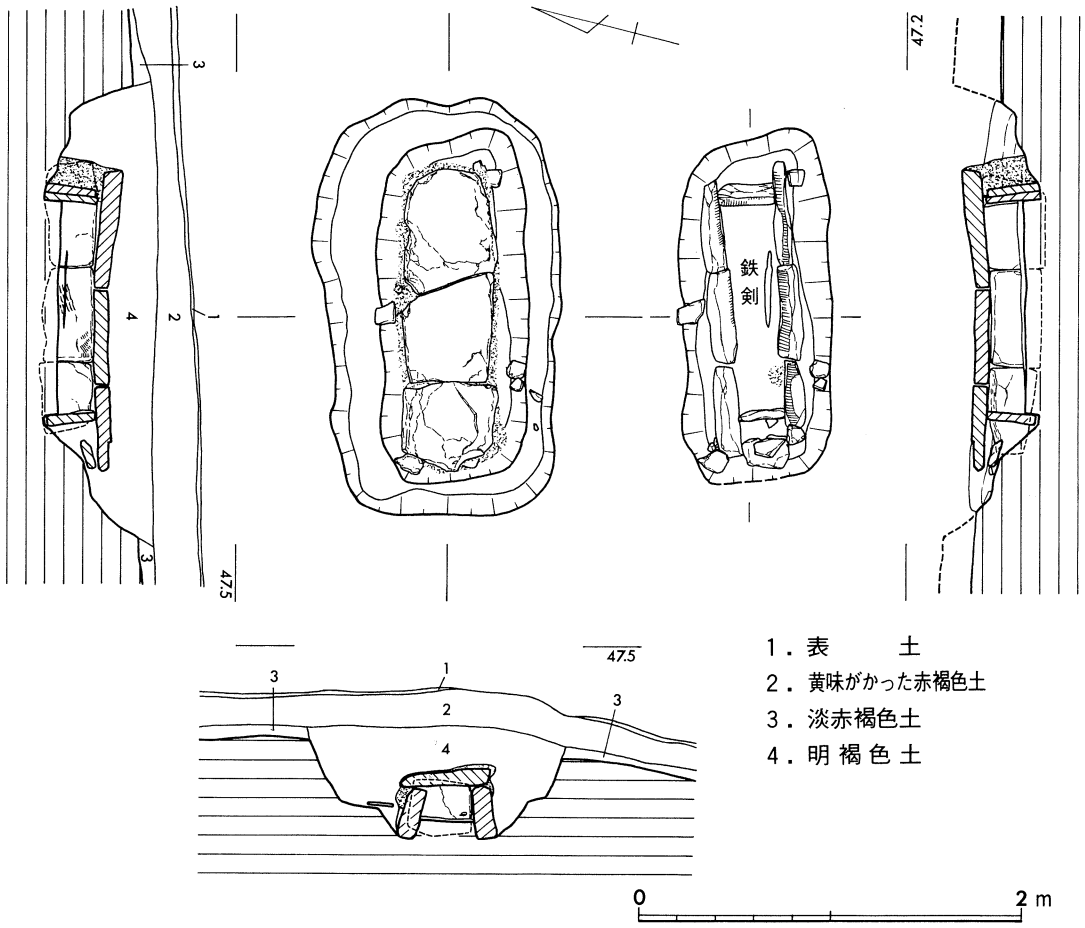
第Ⅴ支群から東へ降る尾根を横断するように溝を設けることによって墳丘を区画した古墳である。墳丘北側斜面を後世の道で削られており、墳形は判然としないが、溝は直線的に掘られたもので、当初は方墳を意図していたことが知られた。斜面に築かれた墳丘で規模なども明瞭ではないが、溝の長さが墳丘一辺の長さ9.5mの墳丘と考えられる。また斜面下方では地山の上層に約0.25mの盛土層が確認され、地山の切削だけでは墳丘を完成できなかったと考えられる。墳丘の高さは、墳頂での土砂の流失が著しいため不明だが、溝底と調査前の墳頂との比高は0.6mである。遺構検出面の標高は約47mを測る。また、墳丘に須恵器を伴う小土壙があったが、これは後世のものである。

墳頂平坦面のやや南寄りで箱式石棺1基を検出した。主軸はE－14°－Nとおおむね東西にとり、丘陵尾根方向と平行する。石棺は長辺2.2m、短辺1.2mの墓壙の中に組まれるもので、内法長1.11m、同短辺は東側で0.31m、西側で0.26m、深さ0.18mと小形のものである。底面は東側の方が西側よりも0.04m高くなっており、棺内法が東で広くなることと合わせて頭位は東にとるものであったことが知られる。この古墳群の他の石棺例と異なり床面には礫床がなく、削り出された地山が直接棺床となっており、床面南側側壁寄りで、切先を西に向けた状態で鉄剣1が検出された。この主体部は内法長1.1mという規模から、再葬の可能性がないとすれば、小児の埋葬のためのものと考えられる。

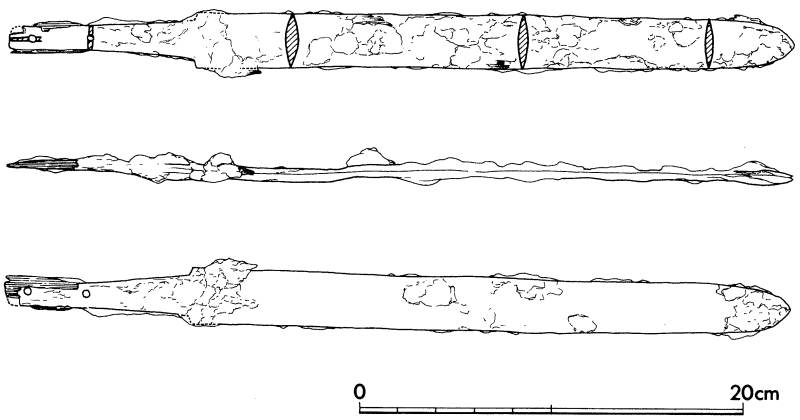
石材は、長辺に各3枚、短辺は西側では1枚、東側では2枚を重ねて使用している。蓋石は幅のほぼ等しい板材を3枚架けるものである。石材には、いずれもノミ状工具による加工痕が明瞭に残っており、幅は5㎝前後である。石棺は組み立てられた後を粘土で被覆しているが、13・14号墳の石棺と比較するとその使用量は少ない。石棺と墓壙壁の間には石棺材と同様の石材片が詰められており、石棺を組み立てる際に、このような石材で棺材の安定を図ったものと考えられる。

墳頂北側では、炭化物を含む土壙1が検出されている。平面形は不整形な楕円形を呈し、長辺0.80m、短辺0.64mを測る。この土壙上面から須恵器杯を浮いた状態で検出した。また、墳丘斜面をめぐるように、径0.2m前後の小土壙12を検出している。墳丘上面と斜面の土壙はいずれも炭化物を含む同様の覆土で、時期的に近いと考えられ、ともなう須恵器から古墳築造後の遺構と思われる。

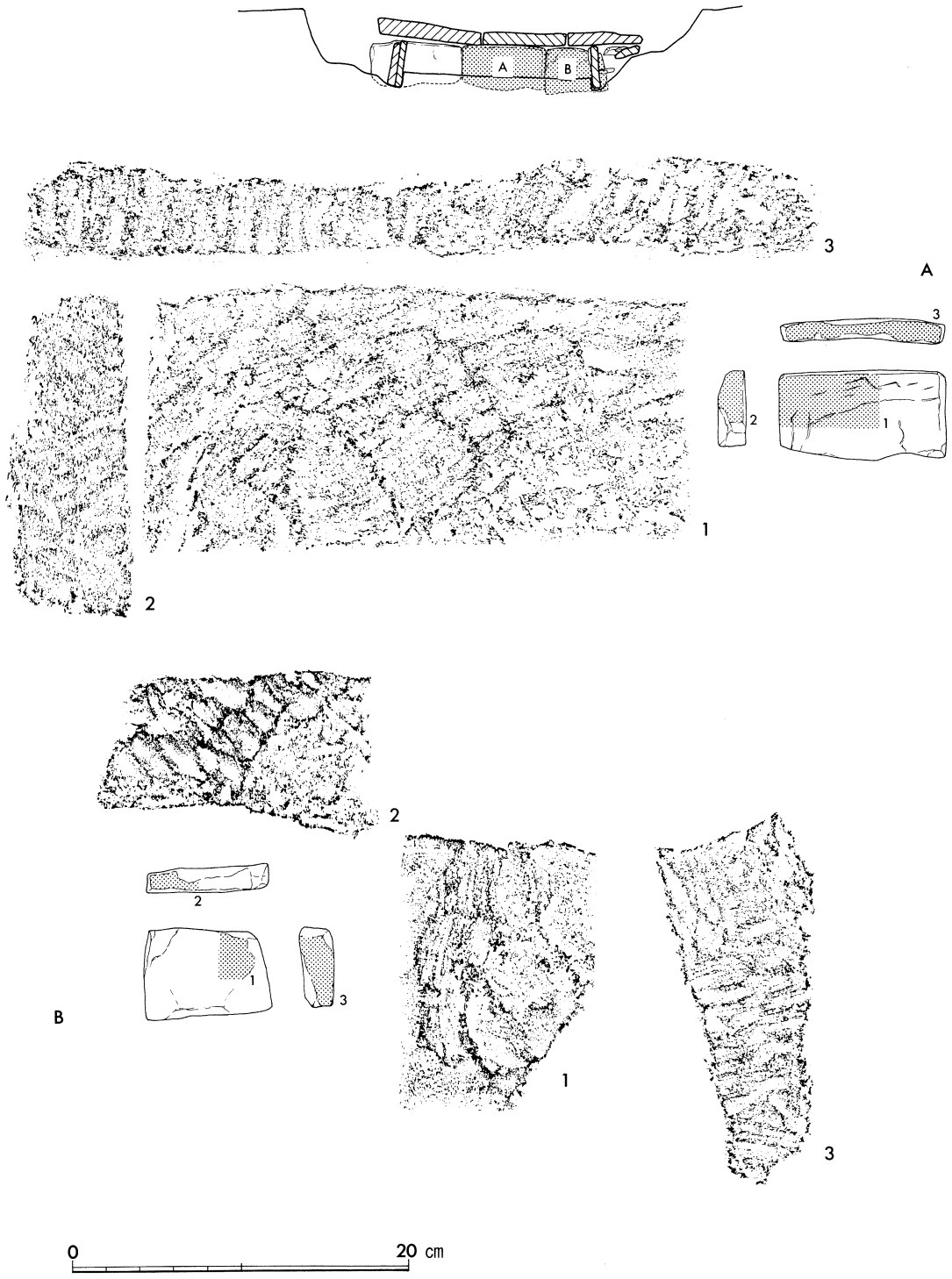
出土遺物　鉄剣（第132図）は、石棺内南側の側壁寄りで、切先を西に向けて検出された。全体に銹化が進んでいるが、全長41.0㎝、刃部31.2㎝、茎10.0㎝である。刃部の幅は切先近くで2.6㎝、茎近くで2.9㎝、厚さは銹のためややふくらんではいるが、0.4～0.7㎝を測る。茎の幅は刃部近くで2.1㎝、端部で1.3㎝、厚さは0.2～0.3㎝である。茎には2個の目釘穴があり、いずれも径0.4㎝である。刃部、茎部ともに木質の付着が認められ、埋納時には木製の装具をもっていたものと考え



第131図　32 号 墳 主 体 部 実 測 図



第132図　32 号 墳 主 体 部 出 土 遺 物 実 測 図　(1/4)



第133図　32号墳石棺材加工痕拓影図　(1/4)

られる。

32号墳石棺材はいずれも工具による加工痕を残しているが、ここでは比較的良好に工具痕を残す南側壁２枚を紹介する。石棺側板中央のものをＡ石材、その西側に隣接するものをＢ石材とする。

Ａ石材の石棺内に面するＡ－１面は、幅５㎝前後の工具痕が残るが、最も幅の広いもので６㎝を測り、これがほぼ工具の幅を示すものと考えられ、Ａ・Ｂ両石材ともに最終的な加工はチョウナ削り[49]によると考えられる。この面での工具の動きは左上がり斜めの方向を基本とするが、進行方向は不明である。工具は１打で１～２㎝進んでいる。Ａ－２面は東側の側板と接する面で、石棺組立て後は隠れてしまう面である。Ａ－１面と同様、幅５㎝前後の工具痕が残っている。工具の動きはこの面の長軸方向で、１打で１～２㎝進む。Ａ－３面は側板上面で、上面の平坦面は幅５㎝しかないため工具の幅は知り得ない。工具の動きは面の長軸方向で、１打で１～２㎝進んでいる。

Ｂ石材はＡ石材の西に隣接しており、各面に工具痕を残している。Ｂ－１面は石棺妻側の石材と接する部分で、右上がり斜めの方向が工具の動きである。工具痕は幅５㎝前後であるが、工具は１打で３～４㎝進んでおり、粗い工具痕となっている。この部分はわずかにくぼんでおり、妻側の石材を受けるかすかな溝をつくるために荒い加工を加えたものと考えられた。Ｂ－２面は側板の上面で、工具痕は幅２～３㎝、１打の動きで１～２㎝進んでおり、丁寧な仕上げになっている。工具の動きは、この面の長軸方向に対して斜めである。Ｂ－３面は棺外に露出する面で、工具痕は幅３～４㎝で２列に並んで残っている。工具の動きはこの面の長軸方向で、１打で1.0～1.5㎝進む。

Ａ・Ｂ両石材を通じて、棺の人目にふれる面と他の石材と接して見えなくなる面とでは、仕上げにそれほどの精粗は認められない。ただし、石棺長手板と妻板との接合部は、長手板側に荒い加工を施し、わずかにくぼめて妻板を受ける部分を設けている点は、他の部分と異なっている。

(2)　43号墳

32号墳の東側斜面下方で墳丘を区画する溝の検出によって確認された古墳である。しかし、墳丘や主体部は後世の道によって削りとられており、溝が残存するにすぎない。墳丘は明褐色土が１層堆積するのみで、精査したが遺構は検出できなかった。溝は直線的であり、この古墳は方墳であった可能性が強く、溝の残存長は5.8ｍ、幅1.4ｍ、検出面からの深さ0.3ｍを測る。溝覆土は黒褐色土、明褐色土２層が堆積していた。

遺物は、溝覆土中にわずかに須恵器小片を含んでいたに過ぎず、時期を考えうる資料はない。

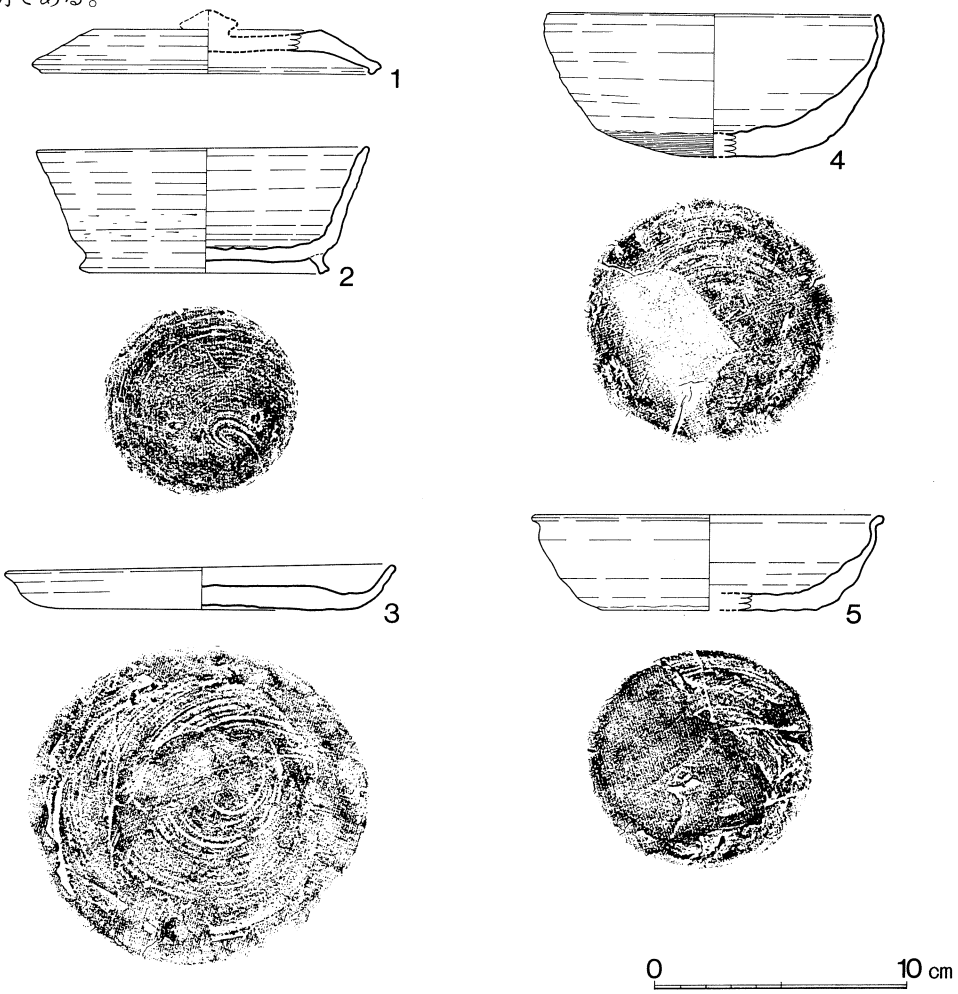
(3)　第Ⅶ支群出土遺物

遺物は全て須恵器で、(2)は32号墳墳丘上面の炭化物土壙、他は西側溝北端付近の出土である。

蓋(1)は径13.0㎝を測る。擬宝珠状のつまみがつくものと考えられ、口縁端部は断面三角形を呈する。天井部は回転糸切りで切り離した後丁寧になでる。胎土は粗、焼成は普通、色調は暗青灰色で

ある。杯(2)は口径13.0cm、器高5.0cmを測り、低い高台、直線的に立ちあがる体部を有する。底部は回転糸切りで切り離した後なでる。胎土は砂粒が多く焼成は普通、色調は淡青灰色である。皿(3)は口径15.2cm、器高1.8cmを測り、短い口縁部をもつ。底部は器壁厚く、回転糸切りで切り離した後なでる。胎土は全体に砂質で焼成はやや不良、色調は淡青灰色である。杯(4)は口径13.1cm、器高5.7cmを測る。全体に丸味を帯びた器形で端部は内側に折り曲げ、底部付近で器壁厚い。底部にはカキメ痕を残す。胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は褐色がかった灰色である。杯(5)は口径13.8cm、器高3.8cmを測る。やや浅い杯部は内湾して口縁部にいたり端部は外反する。底部は回転糸切りで切り離した後なでる。胎土は砂質で焼成はやや不良、色調は淡青灰色である。

これらの遺物はその特徴から、(1)が国庁編年[50]の第4形式、柳浦編年[51]の第4式、(2)が国庁第3形式、柳浦第3式、(3)が国庁第4形式、(5)が国庁第3形式、柳浦第4式のものと考えられる。(4)は時期不明である。



第134図　第Ⅶ支群出土遺物実測図

第7節　第Ⅰ支群

第Ⅰ支群は当初の開発計画の対象とはなっていないと思われたが、工事が進む過程で、同支群の西端にある19号墳も計画に含まれていることが明らかになった。そこで、工事によって損われる西側墳裾部分の調査を急遽実施することとなった。

ところで、各支群構成上の特徴として、丘面的に際立った墳墓と平面的に墓域を画すのみの墳墓とが1つのセットとして存在する点を掲げておいたが、この第Ⅰ支群もこの特徴を備えている。19号墳の一部が工事によって損われたとはいうものの、ほぼ無傷の状態で残存している支群は、本古墳群中この第Ⅰ支群が唯一となってしまった。そこで、19号墳の墳裾の調査結果を述べるに先立って、第Ⅰ支群の様相等についてふれておきたい。

第Ⅰ支群は本古墳群が営まれている丘陵の西側端部に位置している。支群は、西方に舌状に延びる尾根の端部に営まれている19号墳、その東方へ続く42・20・21号墳、そして北方へ続く22・23・24・25・26号墳の計9基から構成されている。中でも中央に位置する21号墳は尾根全幅を占める径26m、高さ4mを測る円墳で、本古墳群中最大規模のものである。

21号墳以外はほとんど盛土を施さない、平面的に墓域を画したものである。その顕著な例は、21号墳の北に連なる22～26号墳である。これら5基は、ほぼ南北に走る馬背状の尾根をそれに直交する数本の浅い溝によって墓域が画されている。これらの溝は発掘調査によらなくても確認できるほど明瞭で、21号墳の北側墳裾に沿って1本、22～26号墳の間に4本設けられている。各溝の両脇の古墳が互に共有する形となっている。但し支群の北側端部に位置する26号墳の北辺は丘陵の鞍部をそのまま利用し、支群境線と兼ねているように思われる。外観では明らかではないが、後述する19号墳西側墳裾の処理方法から推すと、深い溝を施さず墓域北辺の形を整える程度のものであろうと思われる。

溝で区画された22～26号墳の各墓域は、おおむね尾根幅を1辺とした正方形に近いものとなっている。これらは今回工事の対象とはならなかったため調査を実施しなかったが、このような支群の様相は第Ⅲ支群・第Ⅴ支群にも認められたことである。

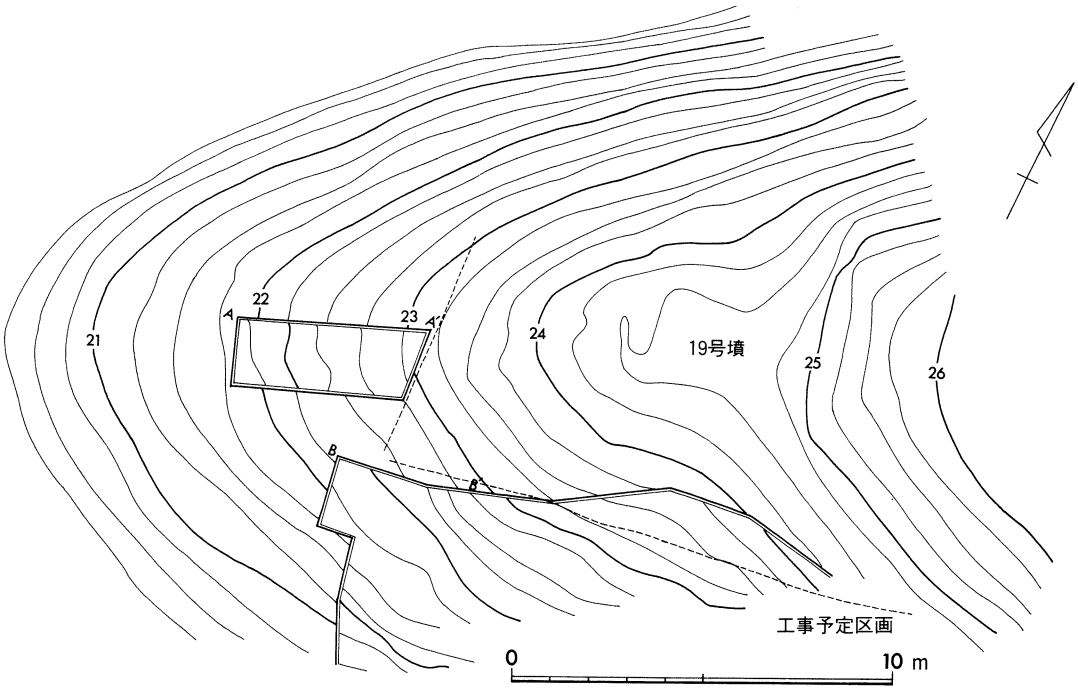
なお、19号墳・42号墳は見方によれば立面的に見えなくもないが、これは、傾斜する尾根に溝で墓域を画したため、結果的にそのように見えるに過ぎないと解される。同様な例は第Ⅳ支群の29・30・38号墳が顕著である。

このように、第Ⅰ支群は調査を経ていないものの、その内容は調査を実施した他の支群の資料からおおむね予想されるものである。しかし、21号墳が他支群の盟主的なものと比較した場合きわだって大きいことは、その内部構造・築造時期等とともに検討に値する内容といえよう。

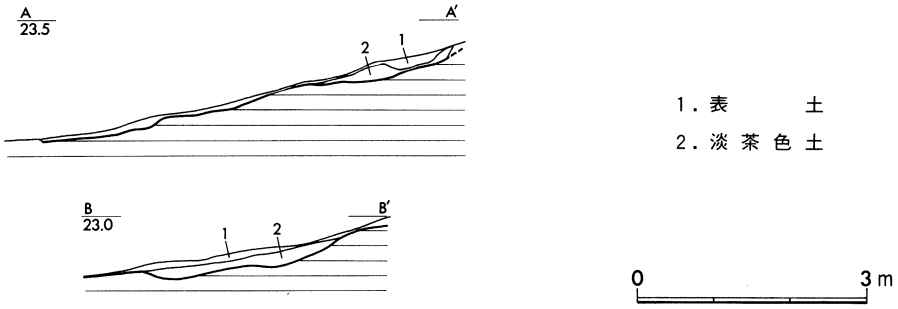
(1)　19号墳

本墳は第Ⅰ支群の中央に位置する21号墳から西に延びる舌状の尾根と、それと直交する２本の浅い溝によって方形墓域を画すもので、一辺10m、高さ1.5mを測る方墳である。

トレンチは掘削される南裾と西裾に各１箇所設定し、前者を第Ⅰトレンチ、後者を第Ⅱトレンチと呼称することとした。各トレンチとも、表土を厚さ10～15cm除去すると下は黄褐色の地山となっていた。第Ⅰトレンチでは人為的な加工は明らかにしえなかったが、第Ⅱトレンチでは幅2.0m、深さ0.2mを測り、ほぼ南北に走る浅い溝を検出した。この溝は本墳の西域を画すものであろうと判断された。



第135図　19 号 墳 墳 丘 測 量 図



第136図　19 号 墳 土 層 図

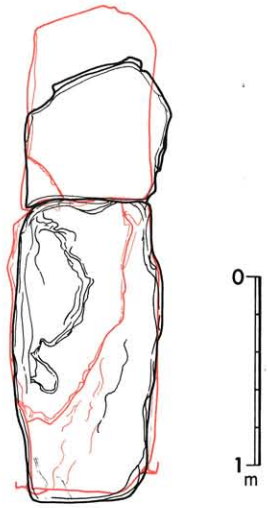
第5章　小　　結

奥才古墳群の調査では26基の古墳を発掘したが、これらについて若干まとめておくこととする。

群構成

奥才古墳群の所在する丘陵尾根には自然地形によって尾根が途切れる部分が何か所かある。この地形をめやすに古墳群を７つの支群に分けることが可能である。各支群にはそれぞれ盟主墳とでも称すべき、かなり大きな墳丘をもつものがあり、こうした立面的に目だつ古墳を中心として小形の古墳がこれにつき従うような格好で各支群は構成されている。この形が最も明瞭に認められるのが第Ⅰ支群で、盟主墳と考えられる径26m、高さ約４mの円墳である21号墳を中心に、一辺約10m前後の方墳が８基つき従っている。基本的には他の支群でも同様と考えられるが、盟主墳的な規模のものが複数あったり、盟主墳に準ずる規模のものがあったりして、やや複雑な様相を呈している。各支群毎に盟主墳と考えられるものを挙げておくと、第Ⅱ支群で27号墳、第Ⅲ支群で２・３号墳、第Ⅳ支群で12号墳、第Ⅴ支群で13・14号墳、第Ⅵ支群で17号墳、第Ⅶ支群では52号墳であろう。以上の盟主墳と考えられるもののうち、調査を行った第Ⅴ・Ⅵ支群の盟主墳である13・14・17号墳では主体部に箱式石棺を採用し、第Ⅳ支群の12号墳では、箱式木棺ではあるものの、大きな掘方をもつものであり、箱式石棺に準ずる主体部と考えられた。このように、支群の中心となる古墳は、墳丘だけでなく、主体部についてもその他のものを卓越する傾向がある。

各古墳間の新旧関係　遺構によって、古墳間での新旧関係が認められるものがあり、整理すると、墳丘の切合関係により、１号墳が２号墳を、38号墳が12号墳を、それぞれ前者の築造に際して後者の墳丘を削っており、明らかに前者よりも後者が古いことが判明している。また、39号墳の周溝は明らかに13号墳墳裾を意識して設けられており、39号墳を築造する際にはすでに13号墳が存在していたと考えられる。13号墳と14号墳の両墳丘の間に堆積した土層の観察によれば、13号墳覆土を切るようにして14号墳覆土が堆積しており、13号墳よりおくれて14号墳の築造がおこなわれたと考えられる。しかし、13号墳第２主体の箱式石棺蓋石の１枚と14号墳第１主体の蓋石が同一の母岩を２つ割りにしたものの可能性が高く、これが認められるならば、土層では14号墳が新しい



第137図　奥才13・14号墳蓋石比較図

ことを示しているものの、その時間差はさほどのものではないと考えるのが妥当である。

主体部の分類

26基の古墳について行った調査で明らかになった主体部は35基で、そのうち箱式石棺は6基、素掘りの土壙は15基を検出している。その他としては、竪穴式石室が1基、土師器の壺・甕を使用した埋葬施設が2基ある。素掘りの土壙の多くは、土壙底面で棺に使用した木棺の痕跡と考えられる溝が検出されているので、土壙内で木棺を仕組んだ箱式木棺とでも称すべき主体部であったのであろう。箱式石棺は1例を除いて、その棺底面に礫が敷かれていた。また、箱式木棺のうちでも礫床をなすものは8例が認められる。その他例外として、39号墳第1主体、34号墳がある。39号墳第1主体は、棺妻側にのみ板石を使用しており、石棺と木棺の折衷構造のものと考えられる。34号墳は、墳丘中央に掘った土壙内に頸部を切断した壺を埋納し、別個体の土器底部で蓋をしたものである。壺内には肩部まで礫がつまっており、この壺を棺として使用することは不可能と考えられ、礫とともに出土した石釧、碧玉製および琥珀製の勾玉各1とともに注目すべき遺構となっているが、果たしてこの施設が埋葬に伴なうものか否か明らかではない。今後類例を持って検討すべきものの一つであろう。

箱式石棺　箱式石棺は、いずれも板状に節理する石にさらに加工を加え、それらを組み合わせて棺としている。17号墳第1主体長手側の石材のように相欠きに組み合わせたり、13号墳第1主体蓋石のように棺身と接する部分を削って段とするなど、入念な造作を施した例がある。このうち、14号墳第1主体石棺は、頭部と足部で殆ど幅が異ならず、他地域のものを含めて考えると、複数埋葬の可能性[52]もあるが、全体に幅が狭く、断定するには至らない。

周辺部で箱式石棺の類例を求めると、出雲市西谷番外2号墓[53]、邑智郡瑞穂町御華山遺跡[54]、同町順庵原1号墳第1・2主体[55]など、弥生時代に遡る可能性のあるものもあるが、これらはいずれも出雲地方西部および石見地方のもので、出雲地方東部では、弥生時代にまで遡る例は現在までのところ知られておらず、本古墳群のような箱式石棺の祖型をこの地域内で求めることはできない。

下限については、古墳時代に入ってからの類例はかなり多く、須恵器を副葬するものも知られており、古墳時代後期にまではくだることが判明している。

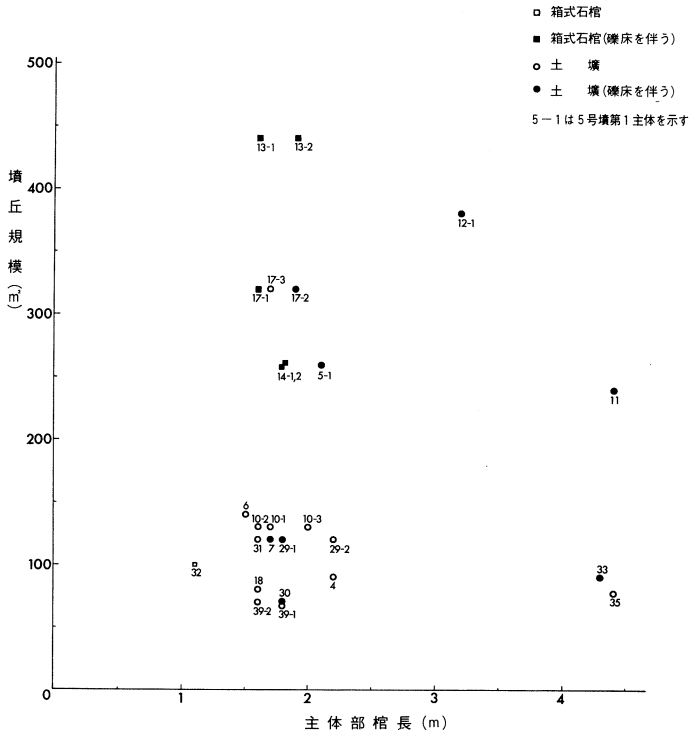
14号墳でみられたような整美な箱式石棺は他地域でもかなり認められ、兵庫県豊岡市カチヤ古墳[56]、鳥取県鳥取市生山29号墳[57]、京都府与謝郡加悦町作り山古墳[58]、広島県安佐郡高陽町上小田古墳[59]などを類例として挙げることができる。これらの箱式石棺は、板石を丁寧に加工し、棺長手板と妻板の組み合わせおよび、棺長と棺蓋の組み合わせに段あるいは、溝を掘り込む手法で、奥才古墳群の例と非常に似ている。

奥才古墳群で認められた箱式石棺6基の石材にはそれぞれ加工痕が残っている。13・14号墳では

刃のある工具の痕跡をとどめず、表面平滑に仕上げられているのは、加工痕を最終的に敲打具で敲きつぶしているためと考えられる。13号墳斜面で発見された棒状の石器（第88図）は、こういった用途に使用されたものの可能性がある。17・32号墳石棺石材には刃のある工具の痕跡が残っている。これはチョウナケズリによる痕跡と考えられる。

礫　床　石棺・木棺の床面に礫を敷きつめて礫床としたものは、13例を数える。これらは3～4mに及ぶ長いものと、2m前後のものとに二分することが可能である。これらの礫床も、その棺の構造に注目すると、ほとんどが単室の石棺や木棺の床面に礫を敷くものだが、33・11号墳では3室に区切った木棺の床面に礫を敷いたものである。また、これら礫床に敷かれる礫は、その径で大・中・小に分類することも可能である（第6章第3節参照）。礫床をもつ主体部は、比率からいえば、第Ⅳ・Ⅴ支群に多いが、これはⅣ・Ⅴ支群で支群を構成する古墳のほとんどを発掘していることによるためと思われる。

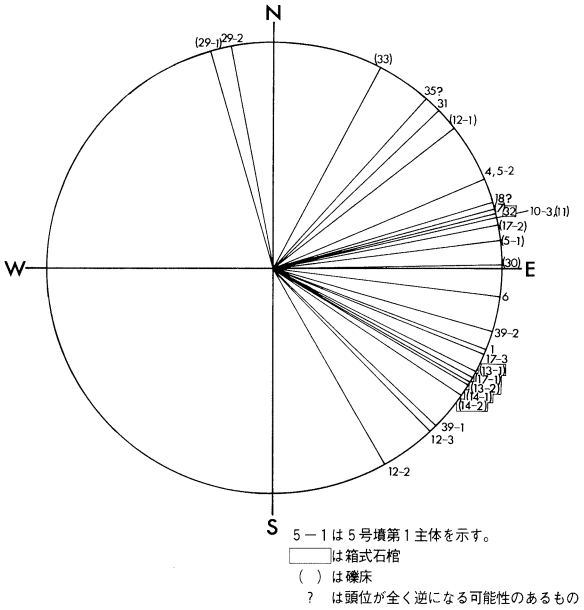
主体部と墳丘の関係　奥才古墳群の主体部をその墳丘の規模との相関関係で表わすと、下図のようになる。墳丘の規模を面積で表わすのは若干の問題があるが、一応の目安にはなるものと思う。この図によれば、墳丘基底面での面積が200m²以上の墳丘をもつ古墳の中心的な主体部には必ず礫床がしつらえられ、箱式石棺も32号墳を除くすべてが、この範囲内に納まっている。また、礫床をもつ木棺でも3m以上になる長いものをもつ古墳は、33号墳を除いて墳丘規模はこの範囲内に含まれる。このように、箱式石棺および長い木棺は、一定規模以上の墳丘に伴なうようである。このことは、無作為に主体部を設けるのではなく、墳丘・主体部両者はある規格のもとに造られていることを暗示する。



第138図　奥才古墳群墳丘・主体部相関図

主体部の頭位　主体部のうち頭位方向のわかるものについても、若干の例外はあるものの、

規則性を認めることができる。すなわち、主体部はおおむね東を頭位としようとしていること、また6基の石棺のうち5基までが東から30度南を指向していること、礫床を有する木棺も1例の例外を除けば、真東からその北65度のうちに納まってしまうことが指摘できる。特に石棺の設置にあたっては、被葬者の頭位に強い意図があったことを窺うことができる。



第139図　奥才古墳群主体部頭位一覧図

周辺部の様相　周辺部に目を転ずると、箱式石棺あるいは礫床をもつものは確実なものだけでも、かなり多くが知られている。鹿島町内でも礫床を有する箱式石棺では、狐堀古墳[60]、秋葉山3号墳[61]、臼畑古墳[62]などが知られている。このことは、島根半島部において板状に節理する緑色凝灰岩の露頭が随所に見られ、石棺に使用する石材が入手しやすかったことも一因と考えられる。礫床を有する箱式木棺では、松江市金崎6号墳[63]、月廻2・3・7・20号墳[64]、中竹矢SK27[65]などが知られており、ひとり奥才古墳群だけでなく、出雲地方東部の傾向として捉えることが可能である。

遺　物

奥才古墳群での遺物のうち、時期を判定しうる土器の出土は少ないが、12号墳、13号墳、34号墳から土師器壺、13号墳墳裾で連結甕として土師器甕、38号墳から土師器高杯・碗、須恵器蓋杯、1号墳から須恵器蓋杯の出土を見ている。また、古墳には伴なわないが、8～9世紀頃のものと考えられる須恵器が墳丘周辺でかなり採集されており、注意をひいた。

古墳群に伴なう土器は、その他の遺物も含めて考えると、13号墳出土の土師器壺が飯石郡三刀屋町松本1号墳[66]前方部出土の土師器壺に形態および細部の手法で類似しており、時期的な近さを窺わせる。松本1号墳からは小形丸底壺が出土しており、畿内布留式に併行することを示すが、脚はつくものの類似した小形丸底壺は奈良県桜井市メスリ山古墳[67]から出土している。メスリ山古墳から出土した遺物のうち、紡錘車形石製品、鉄槍、刀子などは、奥才14号墳第1主体出土の遺物と組成で非常に似かよっている。また、これらと同様の遺物の組成をなす古墳には、三重県上野市石山古墳[68]、東京都大田区田園調布宝来山古墳[69]などがある。

一方、12号墳出土の土師器１号壺は、13号墳出土のものに較べて、胴部の球形化の進行、底部の丸底化、複合口縁部の突出度の低下といった点で、やや後出的なものであるといえる。また、１号墳、38号墳では須恵器の出土を見ており、この遺物が本古墳群の示す最も新しい時期の遺物といえる。

碧玉製品　奥才14号墳第１主体出土紡錘車形石製品、34号墳出土石釧はいわゆる碧玉製品と称されるもので、県内における類例は、前者は安来市造山１号墳[70]出土のものが知られているが、後者については初見のものである。東接する鳥取県においても前者は最近、鳥取市生山29号墳例[71]が知られるのみで、後者は東伯郡羽合町馬ノ山４号墳[72]出土例があるにすぎない。いずれにしても山陰両県においては稀有な遺物といえよう。こうした碧玉製品については、かつて古墳時代前期の碧玉製腕飾類の分布として論じられたことがある。つまり「鍬形石・車輪石・石釧の３者の分布を比較すると、あたかもこの順に、すこしずつ、その分布はひろがっているといえる。しかも、そのひろがり方は、西の北九州地方においてよりも、東日本のばあいの方が境界線の振幅が大きい[73]。」との指摘がされている。そこで、それらの分布に、これまで知られている紡錘車形石製品39例を付加してみると、この石釧の分布とほぼ重なることが注意される。このことから紡錘車形石製品は石釧と同様な役割をもって配布された可能性がうかがえる。

埴　　輪　奥才１号墳で検出された埴輪は須恵質のもので、本古墳群では最も新しい時期になって初めて埴輪が採用されたことになる。それ以前の古墳には埴輪は全く使用されておらず、須恵質の埴輪以前のものの使用例に乏しい島根県下の状況に大約一致するものと思われる。１号墳の埴輪は窖窯で焼成されたもので、窯変が著しい。この埴輪のプロポーションや、タテハケを主体とする点、突出度の高いタガなどの特徴は、松江市岡田山１号墳[74]、鳥取県米子市陰田35号墳[75]出土のものに類似している。しかし、岡田山１号墳の埴輪は、２次調整としてのヨコハケをもつ個体がかなりあり、若干後出的な様相を示すものと考えられる。一方、陰田35号墳出土のものは、各部の寸法、調整の手法で酷似する個体がある上、本古墳群例のように著しく窯変したものもあり、同一の工人の手になるものの可能性がある。

古墳群形成の年代観

これまでみてきたように、13号墳土師器壺は、松本１号墳出土の壺に類似し、松本１号墳の小形丸底壺に類似した脚付小形丸底壺を出土しているメスリ山古墳の紡錘車形石製品、鉄槍、刀子は、その組成で14号墳の遺物に近い。これら遺物の示す時期は、古墳時代を３期区分した際の前期後半と考えられる。13号墳と14号墳は、13号墳第２主体と14号墳第１主体の蓋石が同一の母岩を２つ割りにしたものと考えられるので、ごく近い時期に造営されたものと判断できる。この両古墳は、出土遺物に乏しい本古墳群中にあっても一応最も古い様相を示す遺物を出土している上、立地におい

ても最も眺望に秀れた占地であり、この時期をもって本古墳群の上限と考えることが可能であろう。これにひき続いて尾根上に各古墳が築造されたものと考えられるが、こういったものの一つとして、13号墳土師器壺より若干新しい特徴をもつ12号墳の土師器壺を位置づけることができよう。

本古墳群の時期の下限については、1号墳から須恵器が出土しており、これが示す時期、すなわち山陰の須恵器編年Ⅱ期[76]、古墳時代後期初頭と考えることができる。なお、調査区域外の21号墳は墳丘の立ちあがりが急で高く、周辺の地形からは、墳丘のかなりの部分を盛土していると思われ、本古墳群で検出した主体部とは異なるものである可能性があることを付記しておく。

このようにみてくると、本古墳群は古墳時代を3期区分した際の前期後半に築造が始まり、少なくとも後期初頭までは築造が続いたものと考えられる。

主体部・遺物からみた被葬者の系譜と階層　本古墳群で検出された主体部のうち、箱式石棺は6基であるが、さきにもふれたように出雲地方東部では現在までのところ、奥才古墳群をさかのぼる時期の箱式石棺の例は知られていない。よって、この地域内でその祖型を求めることは困難であり、本古墳群で箱式石棺を採用するにあたっては、他地域の影響を受けている可能性がある。また、本古墳群でみられたような狭長な箱式木棺は、但馬、丹後地方などでも認められており、こうした類例も含めて今後検討する必要がある。

遺物については、14号墳出土の方格渦文鏡と同巧の鏡は九州に分布の中心があるが、紡錘車形石製品、石釧は畿内を中心とした配布が想定される遺物である。紡錘車形石製品は、安来市造山1号墳、石釧は鳥取県東伯郡羽合町馬ノ山4号墳に類例があり、さらに14号墳出土の素環頭大刀は、安来市大成古墳[77]、大原郡加茂町神原神社古墳[78]でも出土している。これらの類例がある古墳は、山陰でも屈指の前期大形古墳で、奥才古墳群の遺物は、こういった大形古墳被葬者を経由したものか、畿内の政治勢力からの直接的な配布を想定すべきかは現段階では明らかにできないが、こうした遺物について渡辺貞幸氏はすでに「これらのうち石製品（＝紡錘車形石製品、石釧；引用者）は、古墳時代前期の後半の時期に畿内の政治勢力の手によって作られ、地方首長に配布された宝器であり、鏡についても同様のことが言える。従って、鹿島町域の小首長がこの時期に直接畿内の政治勢力と結びついたことを示して[79]」いるという評価を下しておられる。

一方、奥才14号墳で検出されたような整美な箱式石棺は、他地域にも類例が求められ、広島県安佐郡高陽町上小田古墳、京都府与謝郡加悦町作り山古墳、兵庫県豊岡市カチヤ古墳、鳥取県鳥取市生山29号墳などをあげることができる。これらはいずれもその時期を前期末から中期前半に求めうるもので、礫床を伴ない、比較的豊富な副葬品を有する点で共通する。こうした各地での様相を勘案するならば、直接か間接かはわからないものの、畿内から配布された遺物をもつ整美な箱式石棺が、一地域をこえて広い分布を示すのは、ただ遺物のみの配布があったのではなく、箱式石棺とい

う墓制も同様にもたらされるものであったという可能性が指摘できる。こうした石棺の被葬者は、その有する遺物も内行花文鏡など小形の鏡や紡錘車形石製品、石釧などといったもので、同時期の竪穴式石室や粘土槨の被葬者の仿製三角縁神獣鏡や鍬形石、車輪石といった遺物には及ばないものの、地域の中では相対的に高い位置を占め、その基盤とする単位地域では卓越した階層の者であったと考えられる。

周辺の集落遺跡・古墳群との関係

現在知られている周辺の集落遺跡で、奥才古墳群と同時期に営まれているのが判明しているのは佐太前遺跡[80]のみであるが、奥才古墳群からの眺望はこの遺跡の方向には悪く、むしろ講武平野の方に秀れており、未確認であるが、丘陵の縁辺部や微高地に当時の集落が存在したものと考えられる。奥才古墳群が存在することから推測されるこうした集落は、少なくとも古墳時代前期後半までには、講武平野の水田化によって、かなりの生産力をもちうるまでになっていたのであろう。そして、奥才古墳群の築造が始まる前期後半には、直接もしくは間接に畿内勢力のもとに組みこまれたものと考えられる。しかし、遺物は採集されていないものの、古式の前方後方形を呈する名分丸山1号墳[81]、柄鏡形の前方後円墳である鵜灘山6号墳[82]などが知られており、これらが奥才古墳群に先行するものならば、これら集落群が畿内勢力に組みこまれた時期はもう少しさかのぼる可能性も残している。いずれにせよ、今後は集落遺跡の動向をふまえた古墳群の検討が大きな課題であろう。

その他

以上記してきた事実・展望以外に調査・整理中に注意されたことを列記しておくこととする。

○14号墳第1主体出土の内行花文鏡の鏡面に蛆の蛹が付着しており、被葬者を石棺内に葬ったのがこういった虫の成長する季節であったことが推測できる。同様に蛆の蛹の付着していた例として、岡山県勝田郡勝央町落山古墳の箱式石棺[83]、群馬県群馬郡箕郷町の天の宮古墳出土の桂甲[84]が知られており、特に後者では蛹から蝿の同定が行われ、埋葬の季節についても言及されている。

○38号墳周溝底で発見された須恵器蓋杯、土師器高杯、碗の出土状態は、他の調査例でもしばしば認められている。八束郡東出雲町寺床4号墳[85]、同八雲村増福寺2・23・24号墳[86]、鳥取県倉吉市上神西山1号墳[87]などが知られており、墳丘への土器の供献形態として指摘できるとともに、それぞれがごく近い時期のものであることも注意されてよい。

○第Ⅲ支群7号墳の南側斜面で検出された竪穴住居状遺構は、その覆土内に多くの炭化物を含んでいたにもかかわらず、全く遺物の出土を見ておらず、この遺構での生活の痕跡は稀薄である。遺物がないため、時期については不明であるが、あるいは、古墳群での埋葬にかかわる儀式を行った場である可能性も考慮される。

第７表　奥才古墳群遺構一覧表(1)

支群	名称	墳丘			埋葬施設			出土遺物（数量）	備考
		墳形	規模(m)	外部施設	構造	規模（m）	主軸		
第Ⅰ支群	19号墳	方	辺７	溝					一部調査
	42号墳	方							未調査
	20号墳	円	径11.5						
	21号墳	円	径26						
	22号墳	方	８×９						
	23号墳	方	8.5×９						
	24号墳	方	８×９						
	25号墳	方	７×９						
	26号墳	方	８×９						
第Ⅱ支群	27号墳	方	16.5×15						
	37号墳	方	10×７						
	40号墳	円？	12×11						
	41号墳	方	６×５						
	36号墳	方	８×5.5						
第Ⅲ支群	１号墳	円？	径10	溝	竪穴式石室	3.2×11	E－21°－S	石室内／須恵器蓋杯３対、管玉３、切子玉１、鉄刀１、刀子１ 墳丘／埴輪８個体以上、須恵器甕１	
	２号墳	方	17×11.5	テラス					未調査
	３号墳	前方後方	全長19m						
	４号墳	方	11×８	溝	墓　壙	2.2×1.2	E－23°－N		階段状遺構 西溝底土壙
	５号墳	方	16×16	溝	①箱式木棺（礫床）	2.1×0.6	E－７°－N	棺内／刀子１	階段状遺構
					②墓　壙		E－23°－N		
	６号墳	方	13×11	溝	箱式木棺	1.5×0.4	E－７°－S	棺内／鉄片１	
	７号墳	方	12×10	溝	箱式木棺（礫床）	1.7×0.5	E－15°－N		石枕（八の字）
	28号墳	方？	辺10m以下	溝					
	８号墳	方	12×10	溝	礫床か				
	９号墳	方	11×10	溝					墳裾から土師質土器
	10号墳	方	14×９	溝	①墓　壙	1.8×0.5	E－５°－N？		
					②墓　壙	2.0×0.7	E－７°－N？	鉄器片１	
					③墓壙（二段掘り）	2.4×1.1	E－13°－N		
					古　墓	1.2×0.8×0.5		五輪塔を伴う	
	竪穴住居状遺構		11×４						
第Ⅳ支群	11号墳	方	16×15	溝	箱式木棺（礫床、３室）	4.4×0.5	E－13°－N	棺内／刀子片２、鉄鏃片１	石枕（八の字） 階段状遺構
	29号墳	方	12×10	溝	①箱式木棺（礫床）	1.8×0.6	N－16°－W		階段状遺構
					②墓　壙	2.2×0.8	N－11°－W		
	30号墳	方	８×８	溝	箱式木棺？（礫床）	1.8×0.5	E－１°－N		石枕（八の字）
	38号墳	方	８×7.5	溝				周溝内／須恵器蓋杯１対、土師器高杯５、碗１	
	12号墳	方	21×18	溝	①箱式木棺（礫床）	3.2×0.4	E－38°－N	棺内／鉄鎌１、刀子片１	
					②墓壙（二段掘り）	2.4×1.8（残存）	S－30°－E		

第8表　奥才古墳群遺構一覧表(2)

支群	名称	墳丘			埋葬施設			出土遺物（数量）	備考
		墳形	規模(m)	外部施設	構造	規模（m）	主軸		
第Ⅳ支群	12号墳	方	21×18	溝	③箱式木棺	1.5×1.0（残存）	S−44°−E	棺内／珠文鏡1、管玉3 墳丘／土師器壺2	
	31号墳	方	12×10	溝	墓壙（二段掘り）	2.9×0.7	E−44°−N		
	44号墳	方？	6×5						未調査
	45号墳	方	15×15						
	46号墳	方	9×6						
第Ⅴ支群	39号墳	方	辺8	溝	①箱式木（石）棺	2.8×1.0	E−44°−S		木棺・石棺折衷 墓壙上面に石材破片
					②墓壙	1.6×0.5	E−16°−S		
	甕棺墓				土壙内で甕2を連結する				
	13号墳	方	23×19	溝	①箱式石棺、礫床	1.6×0.4×0.3	E−27°−S	墳丘／土師器壺	
					②箱式石棺、礫床	1.9×0.5×0.3	E−30°−S		墓壙上面に石材破片
	14号墳	円	径18	溝	①箱式石棺、礫床	1.8×0.5×0.3	E−30°−S	棺外/鉄剣1、素環頭大刀1、鉄槍1、鉄鏃1、鈍1、刀子1、用途不明鉄器1 棺内/内行花文鏡1、方格渦文鏡1、紡錘車形石製品1、歯牙、骨片 副室/刀子1	
					②箱式石棺、礫床	1.8×0.4×0.3	E−34°−S	棺内/鉄剣1、鉄鏃1、刀子1、鉄針3	墓壙上面に礫
	石蓋土壙					土壙0.8×0.7			14号墳墳裾
	33号墳	方	14×6	溝	箱式木棺（礫床、3室）	4.3×0.4	N−28°−E		
	34号墳	方	11×8	溝	土壙内に土師器壺を埋納する	0.8×0.6		土壙内/土師器壺2 壺内/石釧1、勾玉2、捩文鏡1、針	
	35号墳	方	10×8	溝	墓壙	4.4×0.8	N−42°−E？		
	15号墳	方	11×10	溝					未調査
	16号墳	方	20×15	溝	不明				溝状遺構
					墳裾、箱式木棺	2.2×10	E−41°−N		
第Ⅵ支群	17号墳	円	径20		①箱式石棺、礫床	1.6×0.5×0.2	E−29°−S	棺内／刀子1、鉄針1、頭頂骨	石枕
					②箱式木棺、礫床	1.9×0.4	E−11°−N		標石あり
					③墓壙	1.7×0.4	E−22°−S		
	18号墳	円	径10以下	溝	墓壙	1.6×0.7	W−17°−S	墓壙内／臼玉36	
第Ⅶ支群	32号墳	方？	9.5	溝	箱式石棺	1.1×0.3×0.2	E−14°−N	棺内／鉄剣1	
	43号墳	方？		溝					
	47号墳	方	辺12						未調査
	48号墳	円？	径6						
	49号墳	方	辺5						
	50号墳	方	辺5						
	51号墳	方	7×5						
	52号墳	方	16×10						

注

1）『センサス結果等から見た市町村の構造変化』　島根県農林統計協会　1982年
2）山本清「佐太講武貝塚」（『講武村誌』　講武村誌刊行会　1955年）
3）山本清「佐太前遺跡」（同上）
4）金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」（『日本考古学年報』16　1963年）
　金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」（『人類学雑誌』第69巻３・４号　1962年）
5）『志谷奥遺跡』　鹿島町教育委員会　1976年
6）『菅田考古』16　島根大学考古学研究会　1983年
7）『名分丸山古墳群測量調査報告書』　鹿島町教育委員会　1984年
8）山本清「山陰地方村落古墳の様相」（『島大論集』７　1959年）
9）注 8）に同じ。
10）『菅田考古』15　島根大学考古学研究会　1979年
11）注 10）に同じ。
12）1978年鹿島町教育委員会発掘調査。
13）注 6）に同じ。
14）加藤義成『校注出雲国風土記』　1965年
15）中澤四郎「講武村條里の研究」（『講武村誌』　講武村誌刊行会　1955年）
16）井上寛司「佐陀荘」（『島根県大百科辞典』　山陰中央新報社　1982年）
17）『氏穴遺跡発掘調査概報』　鹿島町教育委員会　1983年
18）香川正矩『陰徳太平記』　1712年
19）多久和文書。勝田勝年編『鹿島町史料』　鹿島町　1976年
20）「萩藩閥閲録、天正６年２月３日の条」　注（19）書。
21）『清原太兵衛』　清原太兵衛頌徳会　1948年
22）類例に京都府竹野郡網野町の岡２号墳がある。「岡第２号墳」（『京都府文化財調査報告』第22冊　京都府教育委員会　1960年）
23）山本清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収　1971年）
24）川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻２号　1978年）
25）注 24）に同じ。以下埴輪の調整方法も同氏の分類に準じている。
26）注 24）に同じ。
27）注 23）に同じ。
28）注 23）に同じ。
29）注 23）に同じ。
30）坪井清足、町田章「奈良時代の遺物」（『出雲国庁跡発掘調査概報』　松江市教育委員会　1970年）
31）柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」（『松江考古』３　1980年）
32）注 23）に同じ。
33）注 30）に同じ。
34）注 31）に同じ。
35）『松本古墳発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1963年　Ｐ22第12図１のものに類似点を認めることができる。
36）第３次学術調査隊『宗像沖の島』宗像大社復興期成会　1979年

37）松浦宥一郎「いわゆる仿製方格T字鏡について」（『小山市史研究』第5号　1983年）で集成がこころみられ、九州に出土例が多いことを根拠に「九州に同式鏡の製作地を求め得る可能性を示唆しているのではなかろうか」とされている。しかし、西田守夫、花谷浩両氏からは、中国製の可能性もあるとの教示をいただいた。西田氏には、東京国立文化財研究所の馬淵久夫氏の分析結果として、14号墳出土の方格渦文鏡は、中国華南の鉛を使用しており、中国製のものの可能性が高く、今後、種々の方法で分析する必要があろうとの教示をいただいている。

38）岩崎卓也「いわゆる碧玉製紡錘車について」（『木代修一先生喜寿記念論文集』3　1974年）

39）注 38）に同じ。

40）注 38）に同じ。

41）山本清・岩成博『新修島根県史　通史篇1』島根県　1968年　P87図版。

42）室賀照子氏の教示によれば、琥珀製とは速断しえないとのことで、今後の分析結果をまつこととしている。

43）注 30）に同じ。

44）注 31）に同じ。

45）和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」（『北陸の考古学』　石川考古学研究会会誌第26号　1983年）

46）白玉36個を連鎖したとしても7.5cmを測るにすぎず、腕をめぐらせることは不可能である。同様な事情は、岡山県総社市殿山古墳群でも認められ、「もしめぐらすとすれば紐ばかりが目立つことになる。」とし、石製玉類との間に竹製玉が存在したことを想定されている。（『殿山遺跡・殿山古墳群』　岡山県文化財保護協会　1982年）
瀬川芳則「竹珠考」（『古代学研究』94　1980年）

47）注 30）に同じ。

48）注 31）に同じ。

49）注 45）に同じ。

50）注 30）に同じ。

51）注 31）に同じ。

52）岡山県総社市殿山古墳21号墳第1主体部や鳥取県鳥取市糸谷3号墳2号石棺などでは、石棺内に複数の人骨が遺存していた。前者は『殿山遺跡・殿山古墳群』　岡山県文化財保護協会　1982年、後者は『糸谷古墳群　第2次発掘調査概報』　国府町教育委員会　1980年による。

53）門脇俊彦「西谷墳墓群」（『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』　島根県教育委員会　1980年）

54）『御華山弥生式墳墓調査概報』　瑞穂町教育委員会　1969年

55）門脇俊彦「順庵原1号墳について」（『島根県文化財報告』第7集　1971年）

56）『半坂峠古墳群・辻遺跡　兵庫県文化財調査報告』第18冊　兵庫県教育委員会　1983年

57）『生山古墳群発掘調査現地説明会資料』Ⅱ　鳥取市教育委員会　1984年　ただし、この例は竪穴式石室内に納められた箱式石棺である。

58）梅原末治「桑飼村蛭子山・作り山両古墳の調査（下）」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊　京都府教育委員会　1933年）

59）本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」（『広島考古研究』第2号　1960年）

60）注 6）に同じ。

61）『御津貝塚横穴群発掘調査報告書』Ⅰ　鹿島町教育委員会　1984年

62）注 6）に同じ。

63）『史跡金崎古墳群』　松江市教育委員会　1978年

64）松本岩雄「寺床1号墳関連資料一覧」（『松江考古』5　1983年）

65）『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　島根県教育委員会　1983年

66）注 35）に同じ。

67）「メスリ山古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第35冊）　橿原考古学研究所　1977年

68）注 38）に同じ。

69）穴沢咏光・西岡秀雄「田園調布宝来山古墳の研究」（『史誌』15号　1981年）

70）注 41）に同じ。

71）注 57）に同じ。

72）『山陰の前期古墳文化の研究』Ⅰ　山陰考古学研究所　1978年

73）小林行雄「古墳文化とその伝幡」（『帝塚山考古学』№1　1968年）

74）注 24）に同じ。

75）陰田35号墳出土の埴輪については、米子市教育委員会杉谷愛象氏の御好意により、実見させていただいた。

76）注 23）に同じ。

77）小林行雄『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』　福岡県教育委員会　1952年

78）蓮岡法暲「第２編　加茂町の古代」（『加茂町誌』　加茂町　1984年）

79）渡辺貞幸「寺床１号墳の諸問題」（『松江考古』５　1983年）

80）注 3）に同じ。

81）注 7）に同じ。

82）注 6）に同じ。

83）『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会　1983年

84）小林晴治郎・上田宏範「上野箕輪天の宮古墳出土の蛹について」（『古代学研究』６　1952年）

85）『寺床遺跡　発掘調査の概要－Ａ地区－』　東出雲町教育委員会　1982年

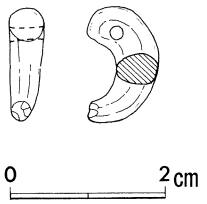
86）『昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う　増福寺古墳群発掘調査報告書』　八雲村教育委員会　1982年

87）倉吉市教育委員会森下哲哉氏の御教示による。

増刷補注

1. 報告書刊行後、34号墳出土遺物の琥珀製勾玉の産地と土師器壺内に付着していた赤色顔料について化学的分析を行った。結果、琥珀製勾玉は岩手県久慈市産の琥珀と同定され、土師器壺内の赤色顔料はベンガラで、遺物の周辺には少量の水銀朱が散布された可能性が指摘されている。詳しくは、赤沢秀則・西山要一・室賀照子・竹中　亨・安田博幸・土井礼子「島根県鹿島町奥才34号墳出土遺物の化学的分析」（『島根考古学会誌』第３集 1986年）を参照いただきたい。

2. やはり報告書刊行後実施した奥才古墳群主体部礫の水洗選別作業において、29号墳第１主体部礫中から下図の勾玉が出土したので掲載する。勾玉はわずかに緑色を帯びた灰色を呈し、碧玉製と考えられる。頭部にわずかに丸味をもち、胴部・尾部に向けて次第に細くなっており、尾部の先端を欠く。断面は楕円形である。長さ1.52cm、厚さは頭部で0.47cm、胴部で0.45cm、尾部で0.31cmを測る。孔は２方穿孔によるもので、孔径は0.17cmと0.18cmである。



29号墳第１主体部出土勾玉(1／1)

第6章　特別寄稿

第1節　出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室助教授　井　上　晃　孝

(1)　14号墳第1主体部　残存骨

残存骨をみると、骨盤（仙骨）と四肢骨があり、骨の大きさ、厚さから大腿骨と上腕骨の一部（いずれも左右の別不明）と歯牙片が少数ある。一般的には、鏡の付近には埋葬者の頭部がきて、下方に四肢骨が残存して異例である。

被葬者は、石棺内に死後間もなく伸展位で埋葬されたものであるならば、保存の良否は別として骨は骨格順に一定の長さと間隔をもって散在する。残存骨の配置具合から、恐らく、死後ある場所で一定期間「殯（もがり）」の後で、残存骨をこの石棺内に再埋葬した疑いがある。

残存骨

1．四肢骨　1）　大腿骨の一部（左右不明）

　　2）　上腕骨の一部（左右不明）

2．骨盤（仙骨）の一部

3．歯牙片　少数

歯牙は定形のものは1個もなく、破損した歯牙片が少数あるが、部位は同定できない。これらの歯牙はすべて永久歯である。破損した歯牙片の特徴から、ある程度判明するのを列記すると、次の通りである。

上下顎	歯牙名	左右別	部　　位	歯牙の咬耗度
上	大臼歯	左	第1か第2の大臼歯	咬頭はなく歯冠部は水平化
不明	大臼歯	不明	不　　明	〃
上	小臼歯	不明	不　　明	咬頭の摩耗は軽度
下	小臼歯	不明	不　　明	〃

1．性　別

性的特徴を示す部位が残存していないので、全く不明である。

2．年　齢

年齢推定は頭蓋冠の縫合、下顎骨の縫合、歯牙の萠出とその咬耗（摩耗）度、恥骨結合面の年

齢的変化らを総合的に加味してなされる。本資料は、破損した歯牙片しかない。

これらの残存歯牙の歯冠部の咬耗度をみると、大臼歯の咬頭はすべて摩耗して水平化しているが、小臼歯では咬頭の摩耗は極めて軽度である。一般に、加齢について歯牙は全般的に摩耗していくものであるが、本資料の大臼歯はかなり摩耗しているが、小臼歯では摩耗が極めて軽度であることから、ある程度の個体差を考慮しても、高齢者ではなく壮年者が推定される。

3．身　長

完形の四肢骨（上肢骨、下肢骨）が、全くないので不明である。

4．血液型

完形の歯牙がなく、破損した歯牙片のみであり、また残存骨も風化が著しく、脆弱化してもろく、かかる資料は血液型活性の消失がみられるので、血液型検査には不適であるため割愛する。

5．その他

特記すべき事項はない。

以上から、次のように鑑定する。

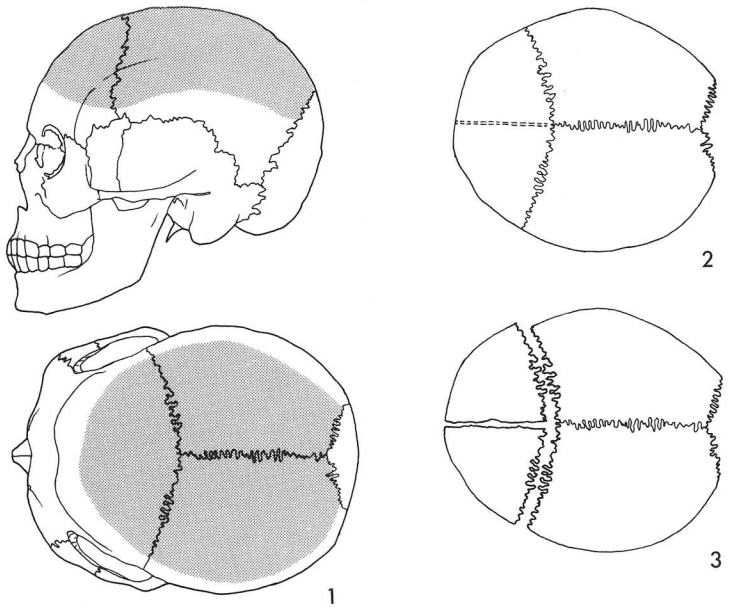
性別は不明、年齢は壮年者が推定される。身長、血液型は不明である。

(2) 17号墳第１主体部　残存骨

石棺内には４個の骨と多数の歯牙が残存していた。残存骨は頭蓋骨の一部で、残存歯牙はすべて永久歯であるが破損したものが多い、骨質はかなり厚いが、風化のため脆弱化しており、骨の海綿組織内には植物の毛細根毛が無数浸潤している。歯牙は歯冠部のみ残存するが、かなり破損、消失して部位の不明のものが多い。骨の色調は黄褐色～茶褐色調を呈し、歯牙は茶褐色調を呈し、きわめてもろい。

被葬者は石棺内に伸展位の状態で埋葬されたことが推察され、残存骨の位置と石棺の大きさ、さらに残存歯牙に重複した歯牙がみられないことから、恐らくは１体が埋葬されたものと考えられる。

残存骨は第140図１に示す部位に相当し、第140図２に示す前頭部の正中部が破線の所で左右２つに破損して、第140図３のようになったものである。頭頂部の矢状縫合が離開しており、頭頂部からの左右の側頭部、後頭部にかけての部位を示している。また、前頭部の冠状縫合面のきれこみがはっきりしないが、ここで前頭部と頭頂部が大きく離開した状態になっている。頭蓋骨の前頭部から左右の側頭部にかけて、植物の毛細根毛が無数付着し、頭蓋骨の外面と内面の海綿組織にも毛細根毛が一杯浸潤している。頭蓋骨の厚さは0.4～0.6cmである。矢状縫合面の距離（前頭部の冠状縫合との交叉点から後頭部の人字縫合との交叉点までの距離）は9.2cmである。



第140図　　17号墳第１主体部出土頭蓋骨図

1．性　別

資料の頭蓋骨と歯牙は、肝心の性的特徴を示す部位が残存していないので不明である。

2．年齢

本資料には完形の骨、歯牙がないが、検討することにする。

1）頭蓋冠の大きさ、厚さ

頭蓋冠の厚さは0.4～0.6cmであり、厚さは充分あるが、全体的にみて残存頭蓋冠の大きさは小さく、年少者のものと推定される。

2）頭蓋冠縫合

とくに頭頂部の矢状縫合は離開しかけているが、その縫合面の切れこみが鋭く、年少者のものと推定される。矢状縫合面の距離は、成人では約11cm前後であるのに、本資料骨では9.2cmと短く、年少者のものと推定される。

3）歯牙の萠出からの年齢推定

残存歯牙は破損歯牙が多く、特に歯根部はほとんど消失しており、歯冠部が残存していて部位のはっきりしているのをあげると、第9表に示した通りで、すべて永久歯である。生後5～6年で乳歯と交代して永久歯が萠出し始め、乳歯は脱落していく。12～15才ですべて永久歯となる。しかし、第三大臼歯（智歯）は通常18～25才位までに萠出するが、中には欠如することもありうる。第三大臼歯の萠出があれば一応成人域と見なされる。本資料で確認できたのは第二大臼歯の萠出までであり、この萠出時期は平均13～14才（10～14才）とされている。残存歯牙の咬耗（摩耗）はほとんどみられない。これは永久歯が生えかわってまもないことを意味する。

第9表　残存歯牙とその歯列

歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	上顎	1	2	3	4	5	6	7	8
	第三大臼歯	第二大臼歯	第一大臼歯	第二小臼歯	第一小臼歯	犬歯	側切歯	中切歯	右側 左側	中切歯	側切歯	犬歯	第一小臼歯	第二小臼歯	第一大臼歯	第二大臼歯	第三大臼歯
	8	7	6	5	4	3	2	1	下顎	1	2	3	4	5	6	7	8

さらにこれを番号だけにすると，

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8

右　上　顎　左

8	⑦	⑥	5	④	3	2	1	1	2	③	4	5	⑥	⑦	8
8	7	⑥	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	⑥	7	8

右　下　顎　左

○：部位が明確な歯牙

以上、頭蓋冠から年少者が推定され、歯牙からは永久歯の生えかわった時期に相当し（第三大臼歯は未だ萠出せず）、推定年齢は13～14才位である。

3．身　長

完形の四肢骨が１つでも残存していればその骨の性別・左右別の一定の係数を乗じて身長推定は可能であるが、本資料からは不可能である。しかし、先に年齢推定の項で歯牙の萠出程度から13～14才位と推定したので、これから身長を推定することにする。

年齢と身長とは一定の相関関係がある。古墳時代人の小児の年齢と身長に関する文献がないので、参考までに、現代人の小児の年齢と身長を列記して検討することにする。

被葬者は13～14才と推定したので、現代人の小児では平均で、13才の男子155.3㎝、女子150.6㎝、14才の男子161.9㎝、女子152.6㎝である。初葬者が、死後まもなく伸展位で埋葬されたと仮定すれば、石棺の大きさ（内径、長径）155㎝に入る程度の身長を有する者となる。伸展位の場合、上下にある程度の余裕を考慮すると、一応、155－（10～15）とすると、140㎝前後となる。

第10表　性別・年令別の身長　（㎝）

才	男	女	才	男	女
1	80.8	79.1	9	131.0	130.6
2	89.3	88.5	10	137.5	137.3
3	96.0	95.2	11	141.2	141.0
4	102.7	102.5	12	148.0	146.7
5	108.7	107.4	13	155.3	150.6
6	114.6	114.2	14	161.9	152.6
7	120.9	119.2	15	166.3	153.8
8	125.8	125.0	20	167.7	153.5

（厚生統計〔25(9)：昭和53年〕による）

身長は時代によってかなりの差がみられる。古墳時代人は縄文時代人よりも高く、先史時代、歴史時代を通じて一番大きい身長をもつ（平木　1972年）といわれ、現代人とほぼ同程度か、それよりも少し低い程度である。小児の場合文献がないが、ほぼ同じ傾向がみられるものと考えられる。しかし、戦後の小児の身長は著しく増加しているが、古墳時代人の小児の場合、発育環境は決してよいとは考えられず、同年齢の場合でも、現代人の小児の身長よりもさらに１～２才低くみた方が妥当かも知れない。

こう考えると、被葬者は現代人の小児の11～12才に相当し、身長は140㎝代（程度）になる。この場合、石棺内に伸展葬の場合でもある程度の余裕をもって安置できるし、石棺の大きさから検討しても矛盾しないように思われる。

4．血液型

陳旧資料の場合、硬組織の骨、歯牙から血液型の判定がなされるが、特に歯牙は堅く骨よりも一般的に保存がよく、型判定が可能なことが多い、本資料の頭蓋骨と歯牙は風化が著しく脆弱し

ており、歯牙は歯冠部と歯根部が離断しており指圧にて容易にこわれる位もろい。かかる資料では経験上、血液型資料が消失していることが多く、血液型判定には全く不適当であるので割愛する。

5．発光分光分析による朱の分析

石棺壁、骨等に朱の付着の有無を検査するために、石棺内外の資料（№1～13）について検討した。結果は第11表に示すように、朱の主成分として考えられる水銀・鉛・鉄のうち、水銀・鉛は全く検出されず、鉄はいずれの資料からも検出されたが含量が少なく、特に有意の差は認められない。結論として、有意の差は認めたいが、風化による朱（酸化鉄・ベンガラ）の消失をある程度示唆する成績が得られたにとどまる。

第11表　発光分光分析による多元素同時測定

	Hg（水銀）	Cr（クロム）	Al（アルミニウム）	Ca（カルシウム）	Ni（ニッケル）	K（カリウム）	Co（コバルト）	Ti（チタン）	Zn（亜鉛）	Na（ナトリウム）	Sn（スズ）	Cd（カドミウム）	Ag（銀）	Cu（銅）	V（バナジウム）	Pb（鉛）	Mg（マグネシウム）	Fe（鉄）	Mo（モリブデン）	Mn（マンガン）	Sb（アンチモン）	P（リン）	Si（ケイ素）	B（ホウ素）	As（ヒ素）
1）第一主体 石棺内礫床の土	－	－	＋	tr	－	tr	－	－	－	tr	tr	－	－	＋	－	－	＋	＋	－	＋	－	＋	＋＋＋	＋	－
2）第一主体 石棺内礫床の土	－	－	＋＋	tr	－	－	－	－	tr	＋	－	－	－	＋	－	－	＋	＋	tr	＋	＋	－	＋＋＋	＋	－
3）第一主体 石棺内礫床の土	－	－	＋＋	＋	－	tr	－	tr	－	＋	＋	－	－	＋	tr	－	＋	＋	tr	tr	－	＋	＋＋＋	＋	－
4）第一主体 石棺壁面	－	－	＋＋	tr	－	－	－	tr	＋	tr	－	－	－	tr	－	－	＋	＋	－	＋	－	tr	＋＋＋	＋	－
5）第一主体 石棺壁面	－	－	＋＋	－	－	tr	－	－	tr	＋	tr	－	－	＋	－	－	tr	＋	＋	＋	＋	－	＋＋＋	＋	tr
6）第一主体 石棺壁面	－	－	＋＋	＋	－	＋	－	tr	tr	tr	－	－	－	tr	－	－	＋	＋	tr	＋	－	＋	＋＋＋	＋	－
7）第一主体 石棺周囲の土	－	－	＋＋	tr	－	－	－	－	－	＋	tr	－	－	tr	－	－	＋	＋	＋	＋	－	＋	＋＋＋	＋	－
8）第一主体 石棺主体部周囲の土	－	－	＋＋	－	－	tr	－	－	＋	tr	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－	tr	－	＋	＋＋＋	＋	－
9）第一主体 石棺内頭蓋骨表面（頭頂骨部）	－	－	＋＋	－	－	－	－	－	＋	＋	＋	－	tr	tr	－	－	＋	＋	tr	＋	＋	＋	＋＋＋	＋	－
10）第一主体 石棺内頭蓋骨内面（頭頂骨部）	－	－	＋	＋＋＋	－	tr	－	tr	tr	tr	－	－	－	＋	－	－	＋	＋	－	＋	－	＋	＋＋＋	＋	－
11）第二主体 礫床の土	－	－	＋＋	＋＋＋	－	－	－	－	tr	＋	＋	－	－	＋	tr	－	＋	＋	－	＋	－	＋	＋＋＋	＋	－
12）第二主体 礫床の土	－	－	＋＋	－	－	tr	－	tr	＋	＋	－	－	－	tr	－	－	＋	＋	－	＋	－	tr	＋＋＋	tr	－
13）第二主体 拡内の土	－	－	＋＋	＋	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	＋	－	－	＋	＋	tr	＋	－	＋	＋＋＋	＋	tr
教室保管の和光純薬酸化第二鉄 Fe_2O_3	－	－	＋＋	－	－	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	－	－	＋＋＋	－	tr	－	tr	＋＋＋	＋	－

(注)：表中、含有量の多いものから「＋＋＋」「＋＋」「＋」「＋」の順で「tr」は痕跡的に認められるもの、「－」は全く検出されないものを示す。

以上から、次のように鑑定する。

性別、血液型は不明、年齢は13～14才位と推定される。身長は不明であるが、あえて推定すれば140cm程度となる。

第２節　出土鏡の非破壊分析

奈良国立文化財研究所　遺物処理研究室　沢　田　正　昭

青銅鏡を非破壊的方法で分析する場合には、表面を覆う緑青サビを通して測定することになり、さびていない地金部分だけを測定することは容易ではない。したがって、非破壊分析といえば、青銅鏡の表面サビの分析を意味し、それは遺物本来の組成を示すとは限らない。しかし、青銅鏡表面のサビの特性を事前に検討することによって、かなり信頼できる測定値が得られる[1)2)]。

奥才古墳群出土の青銅鏡は、12号墳第３主体から出土した①珠文鏡、14号墳第１主体出土の②内行花文鏡、③方格渦文鏡、34号墳出土の④捩文鏡の４面である。これらの青銅鏡を覆っているサビは、大きく次の２つのタイプに分けられる。ひとつは、塩基性の炭酸銅を主体とするサビで、青銅鏡表面を被覆している。他のひとつは、非晶質のサビで青銅鏡の主要成分となる銅、鉛、そして錫を含んでいる。この種のサビ部分では、銅成分が外表面に溶出して含有量が低くなっている。そのため、銅に対する鉛や錫の相対量は多くなってあらわれる。実際には、錫の含有量が20％であった青銅鏡でも、サビの周辺では40～50％などと高い数値を示すことになる。銅のほかに、鉛・錫成分も含まれる後者のタイプのサビでは、錫の含有量が極端に多くなってあらわれるものの、それは青銅鏡本来の組成の特長を表現し得ることがわかっている[1)]。

奥才古墳群出土の青銅鏡にみられるサビには、鉛や錫をほとんど含まないタイプのサビもみられるが、それらは比較的少なく、青銅鏡表面をうすく覆っているにすぎない。そのため、大半の測定箇所は鉛・錫成分を含んだサビ部分や腐食があまり進展していない部分である。したがって、本試料の場合、螢光Ｘ線分析法によって青銅鏡本来の組成成分の特長を知ることができると判断した。

測定の方法は、青銅鏡表面に直径20㎜の円形窓の付いたチタン製の板を密着させてＸ線の照射範囲を一定に保つようにした。また、各試料については複数箇所を任意に選んで測定した（第13表参照）。なお、螢光Ｘ線分析の測定条件は次のとおりである。

印加電圧－電流：40kＶ－20mA

Ｘ線管球：タングステン対陰極

検 出 器：シンチレーションカウンター

分光結晶：フッ化リチウム

走査速度：１°／min

螢光Ｘ線分析では、銅（CuKβ線、87.44°２θ）、鉛（PbLγ線、24.07°２θ）、そして錫(SnKα線、14.03°２θ）のＸ線相対強度比を求め、試料相互を比較検討した。第12表は、青銅鏡試料②内行花文鏡における11箇所からの測定値を示している。また、11箇所の鉛－錫成分の測定値をＸ－Ｙ座標

に描くと、第141図のようになる。測定点はほぼ比例的な関係を示している。この回帰直線（すべての測定点からの距離の和が最小になるような原点を通る直線 $y=ax$）を求め、その勾配 a（回帰係数）を得た。それは、青銅鏡の主要成分のうちの鉛に対する錫の含有量比を表現し得る数値に近い。

各試料におけるすべての測定値について、試料②内行花文鏡の場合と同じように回帰直線を求め、第13表に示した。表には、各々の試料について測定された箇所の数、螢光X線分析による鉛成分（PbLγ／CuKβ）と錫成分（SnKα／CuKβ）の全測定値の平均、および、第141図に示すような回帰直線の勾配 a 値を示している。第13表によれば、青銅鏡試料①、③は勾配 a 値が大きく、鉛に比して錫の含有量がかなり多いことを示している。勾配 a 値が最も低いのは試料②の場合で、錫の含有量が他の試料にくらべて少ないことがわかる。このように、勾配 a 値から、試料の組成成分を相対的に比較することができる。

なお、第12表における測定値に近い値を持つ青銅鏡を参考資料として取りあげた。第14表には、京都府出土のⒶ捩文鏡とⒷ獣首鏡についての螢光X線分析の測定結果を示している。これらの資料は原子吸光分析法による定量分析もおこなわれている。Ⓐ捩文鏡の場合には、11箇所の測定値から算出した回帰直線の勾配 a 値が3.14であった。鉛－錫成分を示すX線強度の全測定値の平均は、1.41－3.61である。また、同試料の原子吸光分光分析法による組成成分は、銅：61.6％、鉛：5.1％、錫：21％である。これと近似の螢光X線分析結果を示す青銅鏡は①珠文鏡と③方格渦文鏡で、これらの錫含有量はかなり多いことが推測される。また、参考資料Ⓑに近い測定値を示したのは、②内行花文鏡、④捩文鏡であり、これらの試料に含まれる錫の量は他の試料にくらべてかなり低いことがわかる。

以上のように、非破壊的手法による分析でも、ある程度まではその材質的特長を推定することが可能である。青銅鏡の表面にあるサビの種類やその腐食の度合などを考慮に入れて、さらに、測定試料数を増やして統計的な処理をおこなえば、非破壊分析の精度も増し、信頼性もいちだんと高めることができる。

測定箇所	鉛成分（PbLγ／CuKβ）	錫成分（SnKα／CuKβ）
1	0．70	0．40
2	0．28	0．19
3	0．34	0．20
4	0．64	0．56
5	0．37	0．22
6	0．24	0．16
7	0．38	0．25
8	0．41	0．28
9	0．63	0．42
10	0．30	0．18
11	0．19	0．11

第12表　内行花文鏡のX線分析

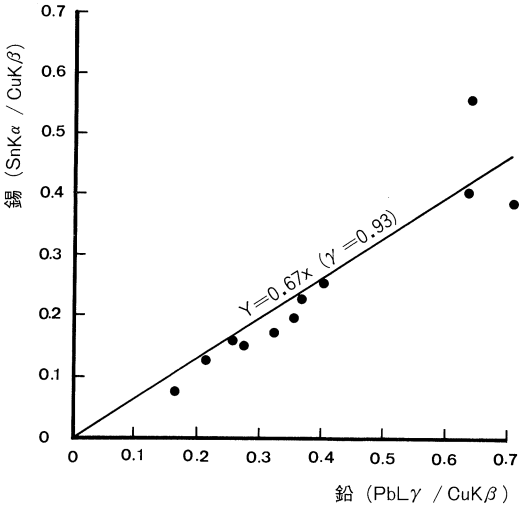
但し、PbLγ、CuKβのフルスケール 1×10^3C.P.S.
SnKαのフルスケール 2×10^4C.P.S.

試料名	測定箇所（n）	鉛成分平均値（PbLγ／CuKβ）	錫成分平均値（SnKα／CuKβ）	回帰直線Y＝ax（勾配a値）
① 珠　文　鏡	6	1．62	5．23	3．31
② 内行花文鏡	11	0．41	0．27	0．67
③ 方格渦文鏡	13	0．39	1．76	4．47
④ 捩　文　鏡	9	0．31	0．61	1．89

第13表　X線強度比と回帰直線

試料	組成成分（%）			蛍光X線分析			
	（銅）	（鉛）	（錫）	測定箇所(n)	鉛成分(PbLγ/CuKβ)	錫成分(SnKα/CuKβ)	勾配(a)
捩文鏡	61.6	5.1	21.0	11	1.14	3.61	3.14
獣首鏡	73.2	5.3	11.7	13	3.73	6.14	1.65

第14表　参考資料2面の組成とX線分析値



第141図　内行花文鏡のX線分析

注

1）沢田正昭「青銅遺物の組成とサビ　－サビ層と地金層における主要成分の変動－」（『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1983年）

2）沢田正昭「青銅鏡にみられるサビの構造と組成」（『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』－総括報告書－　1984年）

第３節　奥才古墳群の石材について

島根県立松江北高等学校教諭　三　島　欣　二

１．１号墳竪穴式石室の石材

サンプルは、下記に示す５点についてであるが、ほとんどが凝灰質砂岩でしめられていることから、石質を構成する石材もほぼこれによると考えられる。この凝灰質砂岩は、島根半島一帯に広く分布する堆積岩で新生代新第三紀（約1,000万年前）に海底火山活動によって噴出した火山灰を主体にして、軽石や火砕物が混じるいわゆる緑色凝灰岩（グリーンタフ）の一部である。この石材は、やや砂粒が多く含まれるので凝灰質砂岩とした。この種の岩石は柔らかくて加工しやすく、成形したときにきれいに仕上がる。ただし、風化作用に弱いので変色（白～灰色）したり、表面からぼろぼろと崩れる欠点をもっている。

第15表　１号墳石室石材一覧表

サンプル番号	岩　　石	特　　徴
1	凝灰質砂岩	転石、黒色頁岩礫を含む。硬い。
2	頁　　岩	灰色で硬い。
3	凝灰質砂岩	
4	〃	粗粒で部分的には礫岩状、風化が著しい。
5	〃	細粒である。風化が著しく赤褐色。

２．箱式石棺の石材

13号墳、14号墳、17号墳、32号墳の５基の古墳に納められた７基の石棺より取られたサンプルについて調査した。前述の１号墳石室を構成する石材と同一の緑色凝灰岩（グリーンタフ）が用いられている。石棺によって若干の差異が認められるのは、石材が切り出された場所の違い、また同じ場所でも岩体の部分による違いから生じたものであり、本質的には同一とみなしてよい。

第16表　箱式石棺石材一覧表(1)

古　墳	石棺番号	石棺部位	岩　　石	特　　徴
13号墳	1	蓋　石	凝灰質砂岩	硬いが変色が進んでいる。
〃	〃	棺　身	〃	細粒で緑色をしている。
〃	〃	〃	〃	細粒で層理が明瞭である。表面は風化が進んでいる。

第17表　箱式石棺石材一覧表(2)

古　墳	石棺番号	石棺部位	岩　　石	特　　徴
13号墳	2	蓋　石	凝灰質砂岩	やや風化が進む。
〃	〃	棺　身	〃	軽石・礫を含む。
14号墳	1	蓋　石	〃	細粒で層理が明瞭。
〃	〃	棺　身	〃	
〃	2	蓋石･棺身	〃	
〃	〃	棺　身	細粒硬砂岩	頁岩の熱変成による。
17号墳	―	棺　身	凝灰質砂岩	細粒で軽石を含む。
32号墳	―	棺　身	凝　灰　岩	風化が進んでいる。
39号墳	―	棺　身	凝灰質砂岩	細　　粒

3．主体部床面の円礫

主体部に円礫が敷かれていたのは、10基の古墳に納められた13の主体部である。この礫についての特徴は、1～2㎝程度の小礫を中心とする主体部、径2～3㎝程度の中礫を中心とする主体部、径4～5㎝の大礫からなる主体部の3グループに大別できる。

次に礫を構成する岩石は、黒色頁岩が主体をなし、全体の70％強を占める。次いで流紋岩で約20％、その他は玄武岩や不明のものである。この礫質からみると、島根半島の海岸で拾い集められたものであることは間違いない。

第18表　主体部床面の円礫一覧表

区　分	礫の直径	特　　徴	古　　墳（主体部番号）
小	1～2㎝	円摩がよくて丸い。	5号墳(1)、13号墳(1)・(2)、14号墳(1)・(2)、17号墳(1)、33号墳
中	2～3㎝	円礫に円板状のものが混じる。	12号墳(1)、17号墳(2)、29号墳、30号墳
大	4～5㎝	厚さ1㎝程度の円板状のものが中心となる。	7号墳、8号墳、11号墳

4．34号墳の土師器壺中の礫

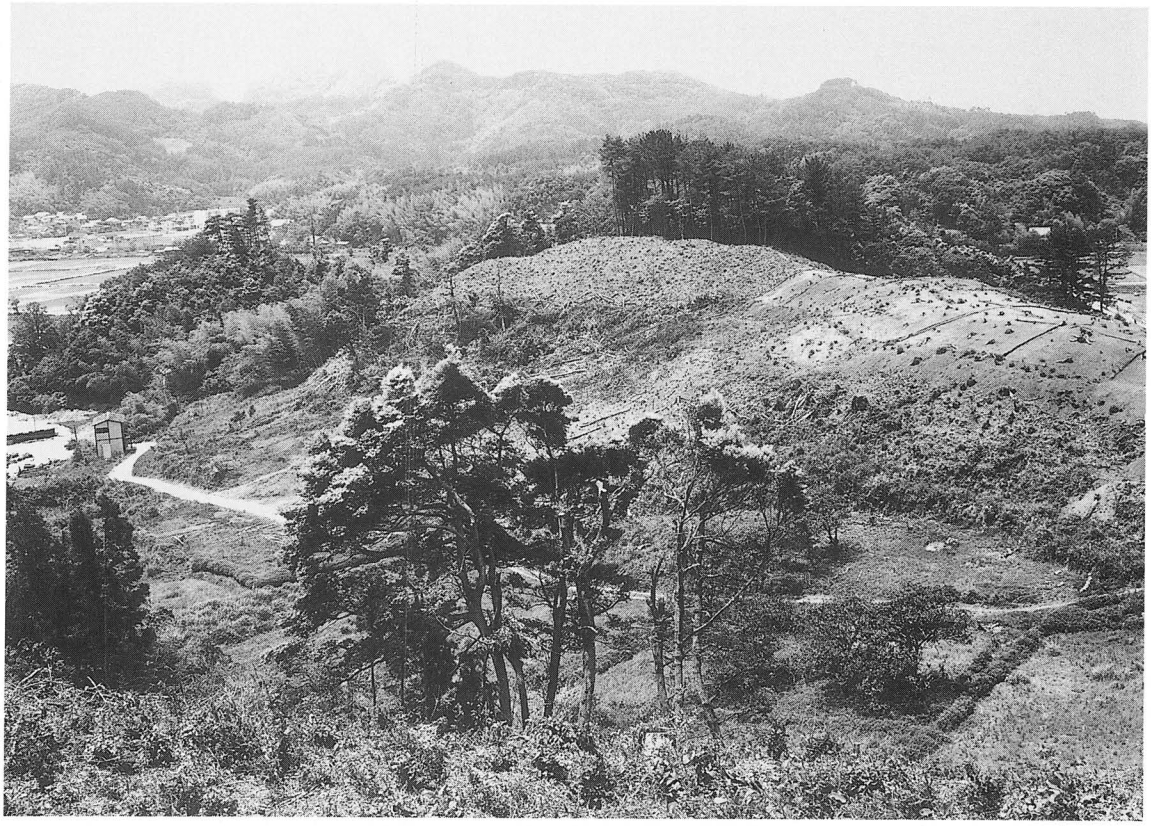
礫は角礫が主体であり、石棺・土壙底面の円礫とはその様相を異にする。礫質は、流紋岩、緑色凝灰岩、細粒砂岩、黒色頁岩等であり、主体は流紋岩である。粒径は2～3㎝程度から5～7㎝程度のものまで混じる。

第19表　34号墳土師器壺中の礫質一覧表

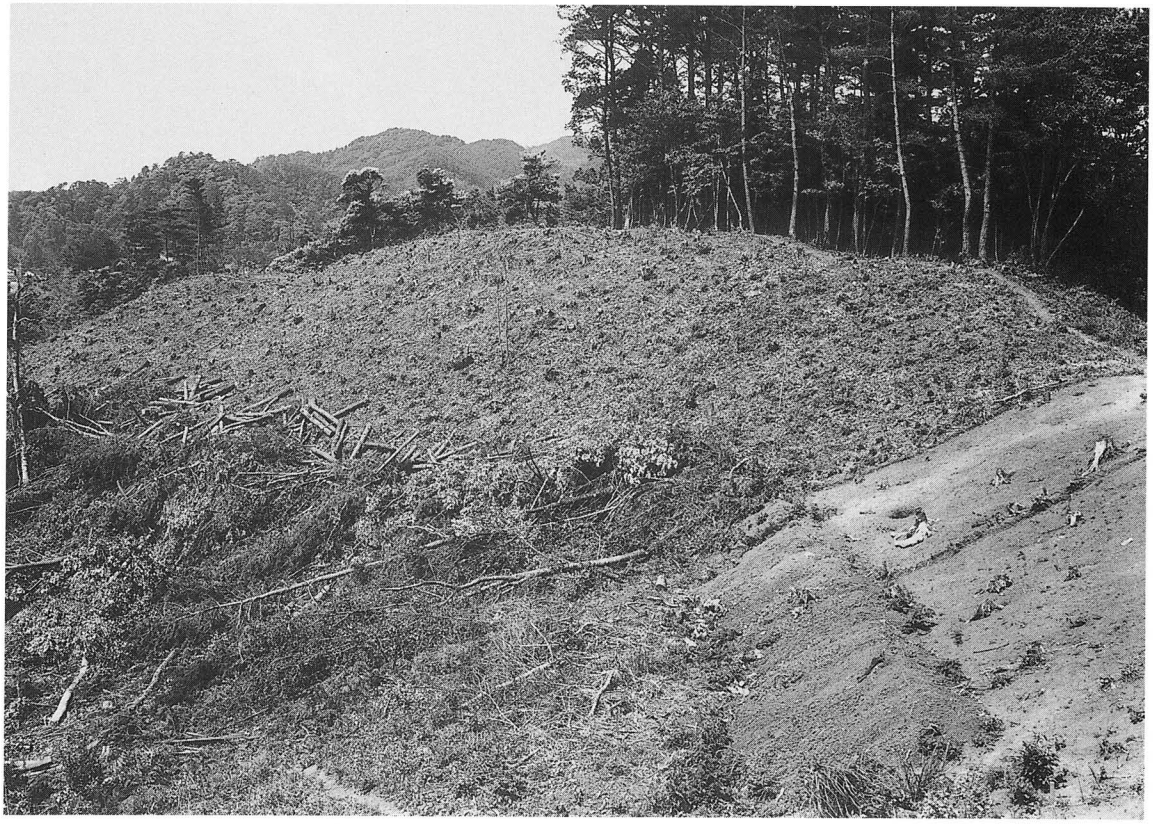
礫　　質	体積比(%)	特　　徴
流　　絞　　岩	約 60	比較的角がとれて円摩のすすんだものがみられる。優白色で表面の凹んだ部分は褐色のものが付着。
緑 色 凝 灰 岩	約 15	風化がすすんでいるが、凝灰岩の特徴が少し残っている。ほとんどが角礫である。
細　粒　砂　岩	約 15	優黒色であるが表面は風化している。硬い。
黒　色　頁　岩	約 8	黒色頁岩の特徴がよくみられる。表面は新鮮である。

図　　版

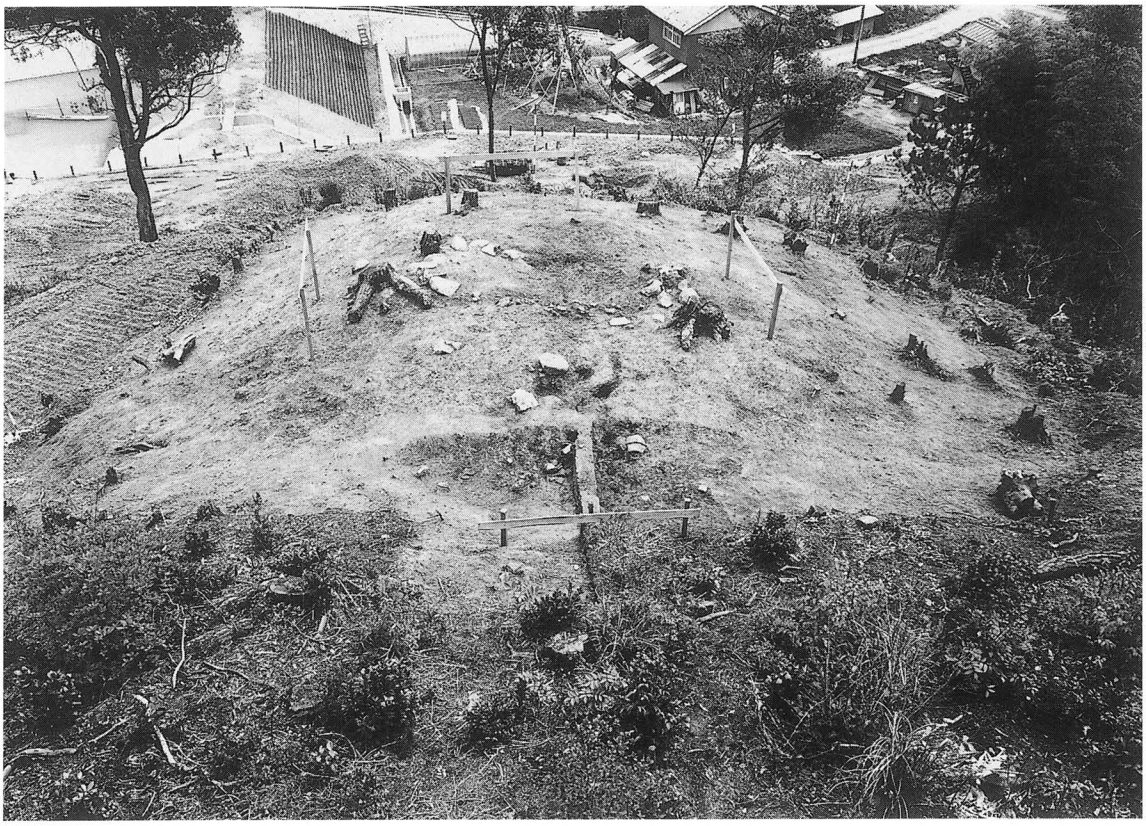
航空写真　奥才古墳群周辺



1・2・3・4・5・6・7・8・28号墳遠景



1・2・3号墳近景

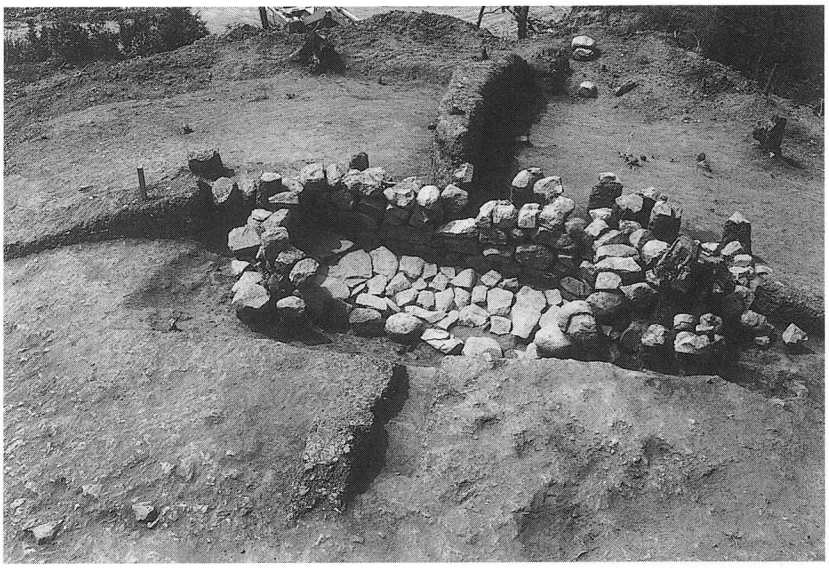


1号墳全景　北より

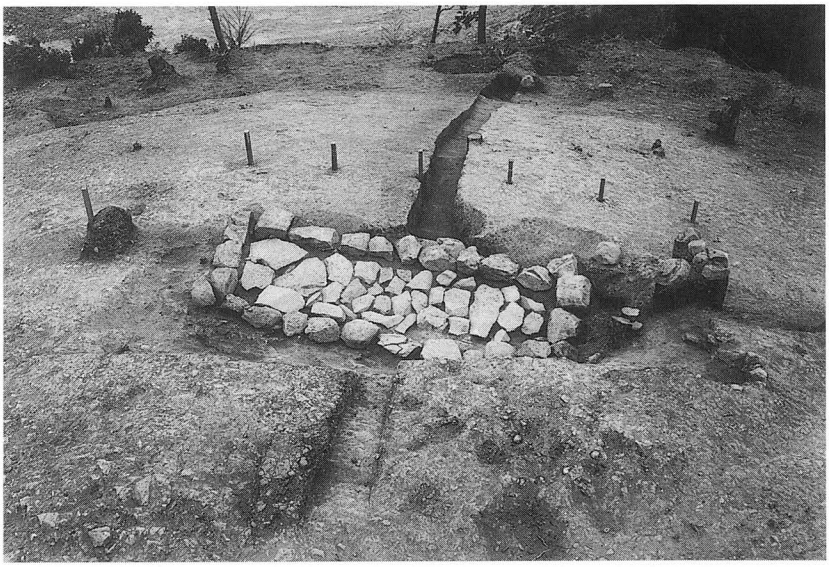
1号墳周溝内須恵器出土状態

1号墳竪穴式石室　西より

1号墳竪穴式石室内遺物出土状態



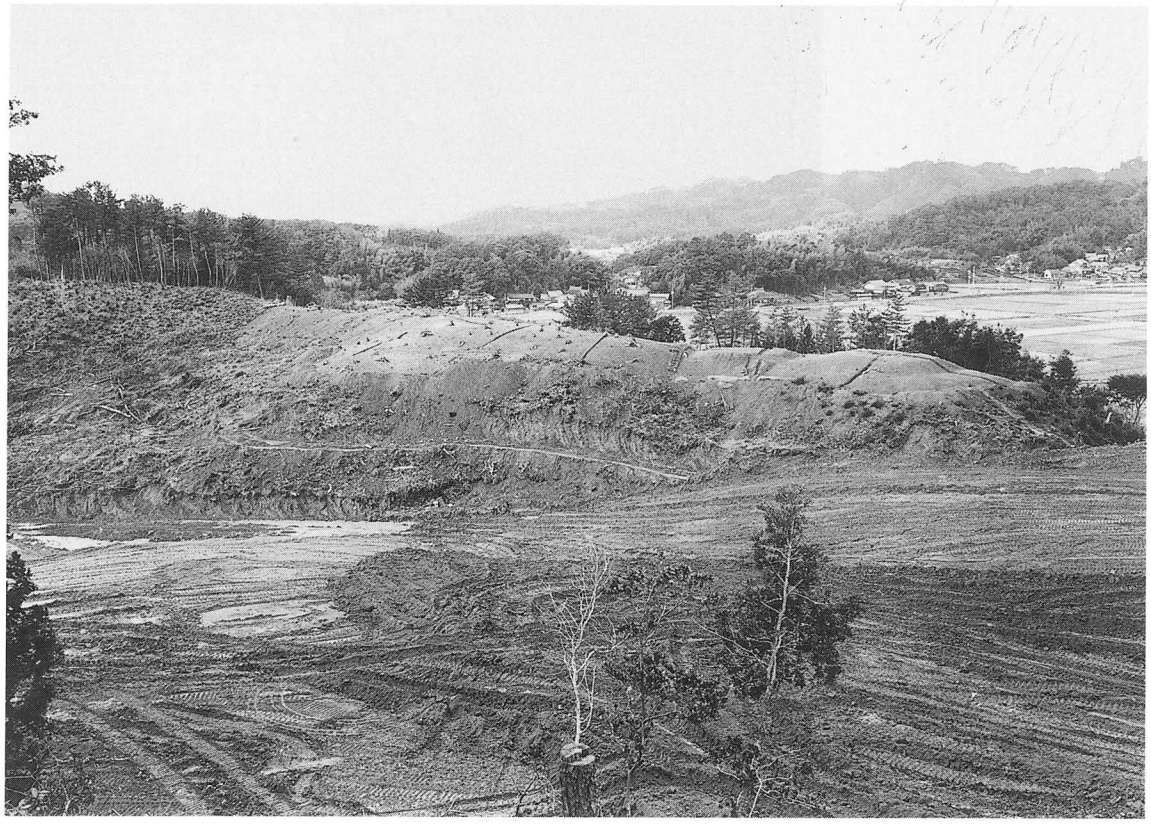
1号墳竪穴式石室構築状態①



②

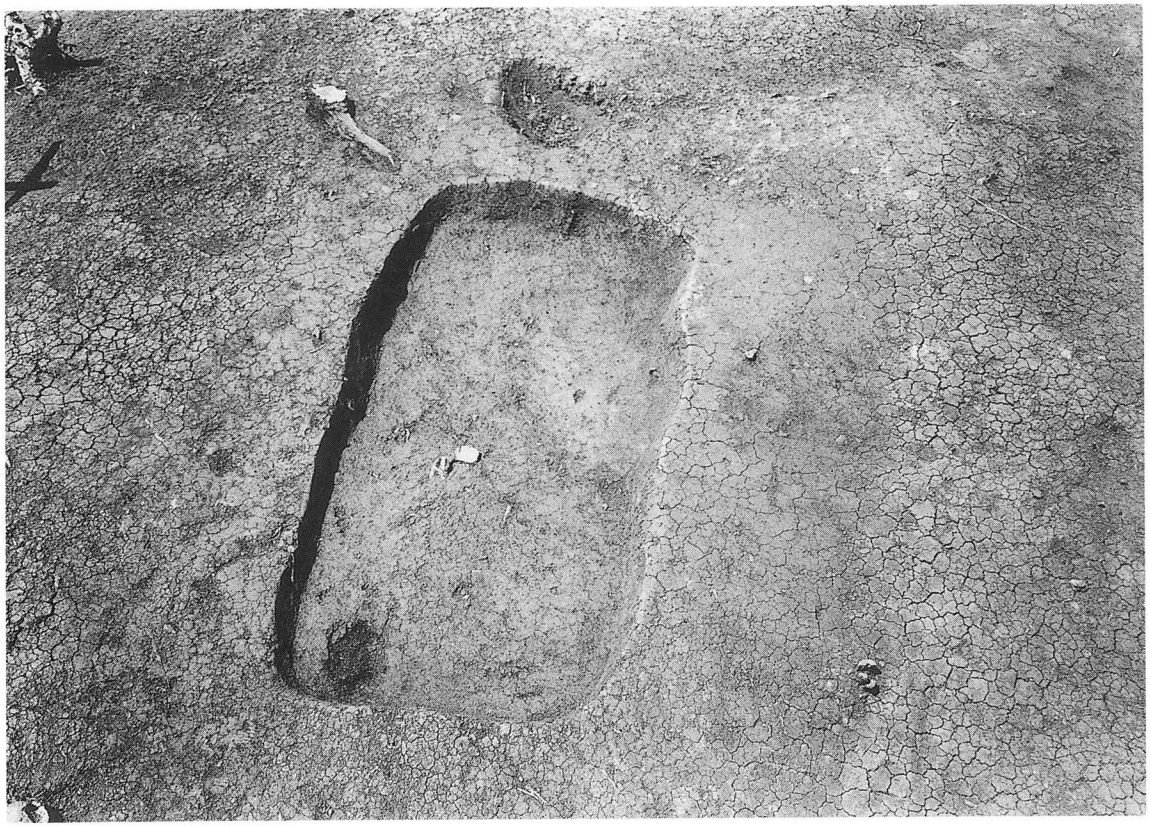
③

4・5・6・7・8・28号墳遠景　調査前

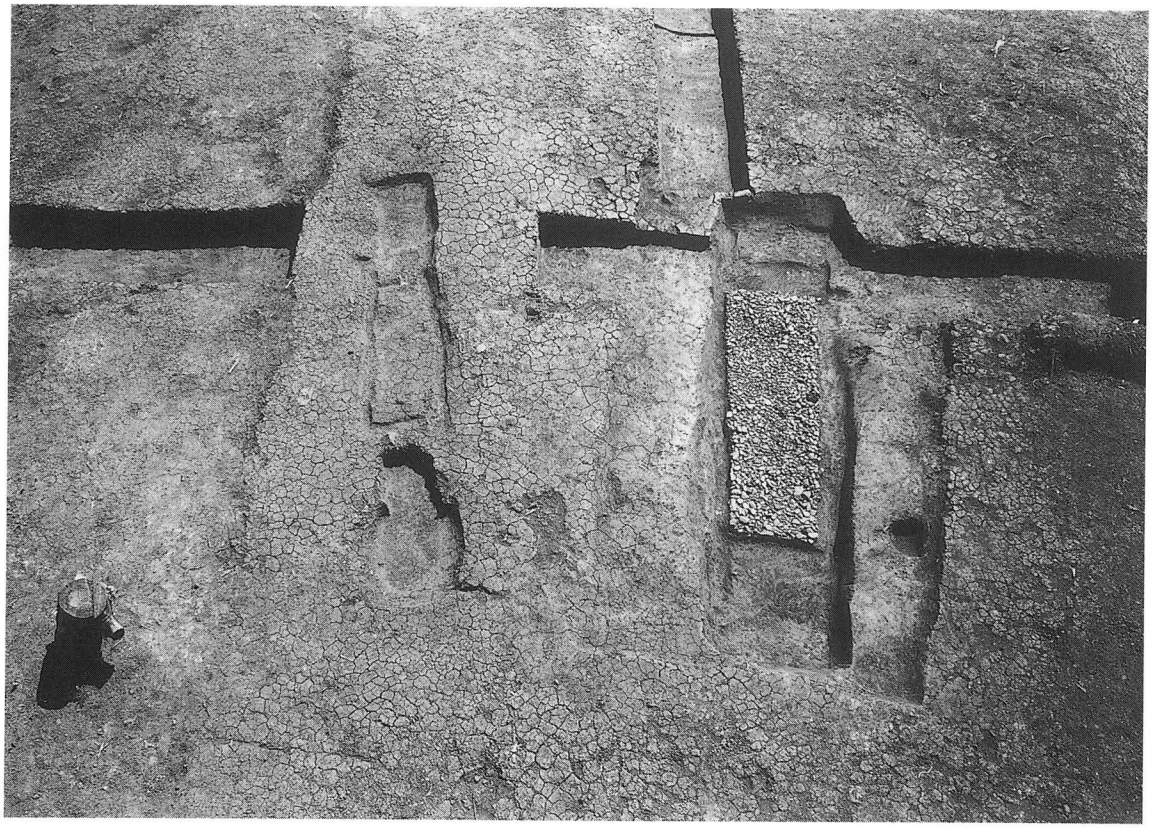


4・5・6・7・8・9・10・28号墳遠景　調査後

4号墳全景　東より



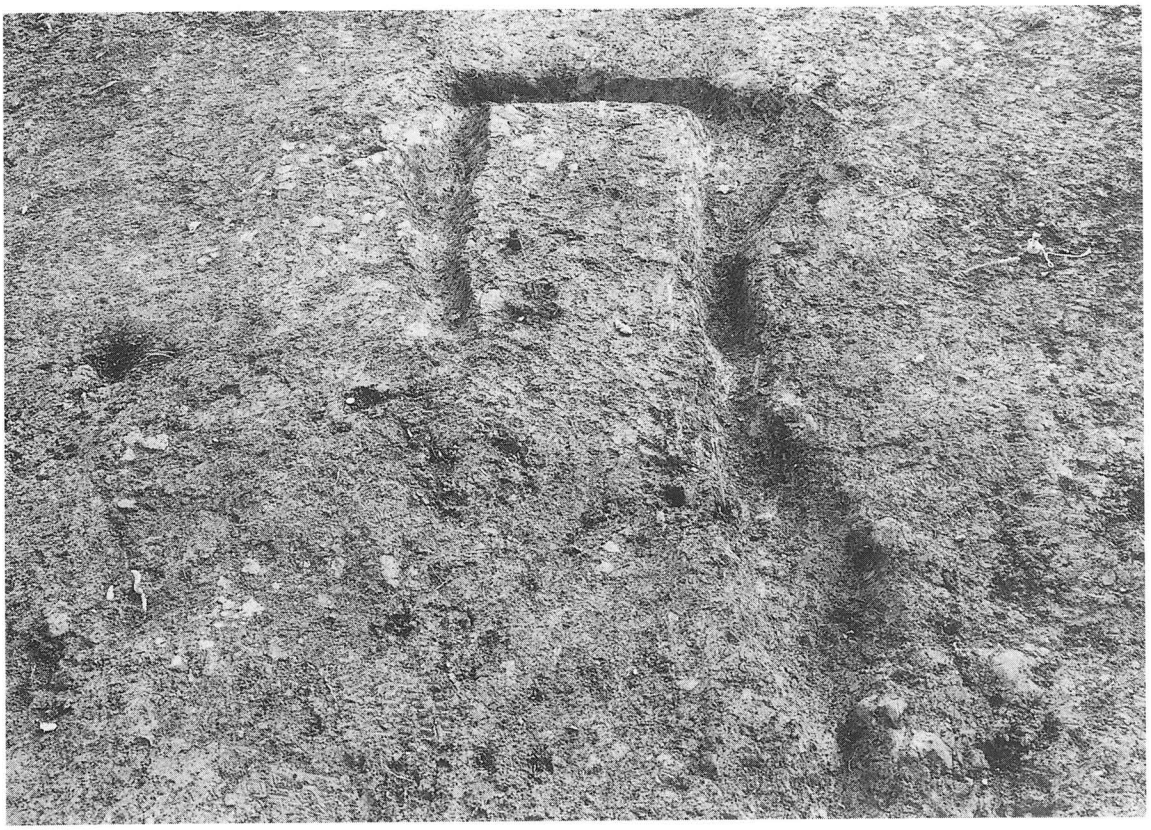
4号墳主体部



5号墳第1・第2主体部

階段状遺構

6号墳墳丘土層断面



6号墳主体部